

HAKA TA
博 多 47

—第64次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第396集

1995

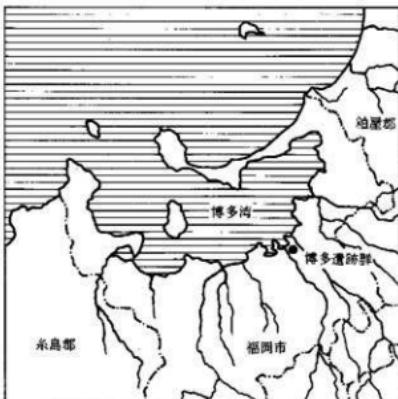
福岡市教育委員会

HAKA
博

TA
多

47

第64次調査報告一
福岡市埋蔵文化財調査報告書第396集



遺跡略号 調査番号
HKT-64 8976
HKT-35 8648

1995

福岡市教育委員会

序

JR博多駅から博多湾にかけての市街地の地下には古代以来、大陸との貿易拠点として栄えた中世都市「博多」が包蔵されています。

近年、この地区は都市基盤整備が進み、高層ビル化が進んでおり、これらの再開発事業に伴い、約100ヶ所の発掘調査を実施しています。

本書は博多駅前一丁目の第64次調査の発掘調査報告書です。調査においては、古墳時代から近世初期の墓や井戸などの遺構を検出し、弥生時代から近世の多種多様の遺物を得ることができました。特に14世紀前後の面で検出した道路は、中世都市「博多」のメインストリートと考えられ、「博多」市街地の町割り、拡がりを知るうえで貴重な知見となりました。

発掘調査から資料整理、本書発行まで費用負担をはじめ、多くのご協力を賜わった住友生命保険相互会社をはじめとする関係者各位に対し、心から感謝の意を表します。

最後に、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

例　　言

1. 本書は、博多区博多駅前一丁目101の住友生命保険相互会社による商業ビル建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1989年2月から7月にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第64次調査の報告書である。
2. 本書には、本調査で検出した道路の北側延長部の調査である博多遺跡群第35次調査出土遺物を付録とし、収録した。
3. 本書使用の遺構実測図は、山口謙治、牟田裕二（故）、星山洋、大塚恵治、石本恭二、岡煥、清川朝和、泉明美、森俊雅、石田晴美、井手かすみ、尾崎君枝、甲斐田嘉子、板井昭美、品川伊津子、立山都子、星子輝美、山口朱美、星崎美枝子、吉野佳子が作成した。
4. 本書使用の遺物実測図は、陶磁器を亀井明徳、その他の遺物は平川敬治がおもに作成し、一部を山口謙治、井上加代子、星野明子が行なった。
5. 本書使用の写真は、遺構を山口謙治、牟田裕二が、遺物を平川敬治が撮影した。
6. 本書使用の図面の整図は、山口朱美が行なった。
7. 本書使用の方位は磁北である。
8. 本調査地出土の陶磁器について亀井明徳氏に、出土人骨については中橋孝博氏に現地で指導を得、分析調査を依頼し、出土陶磁器については本書に収録した。
9. 本書の執筆は、出土陶磁器について亀井明徳が行ない、他の執筆・編集は山口謙治が行なった。なお、付録の執筆は加藤良彦が行なった。
10. 本調査出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第1章 序説

1.はじめ	1
2.調査体制	1
3.遺跡の位置と立地	3

第2章 調査の記録

1.調査概要	5
2.第1・2面の調査	5
1) 第1面検出遺構と出土遺物	8
2) 第1面検出柱穴および検出時出土遺物	15
3) 第2面検出遺構と出土遺物	25
4) 第2面検出柱穴および検出時出土遺物	52
3.第3・4面の調査	57
1) 第3面検出遺構と出土遺物	57
2) 検出道路と出土遺物	93
3) 第3面検出柱穴および検出時出土遺物	99
4) 第4面検出遺構と出土遺物	112
5) 第4面検出溝状遺構と出土遺物	126
6) 第4面検出時出土遺物	161
4.中世以前の出土遺物	166
第3章 結章	
1.博多遺跡第64次調査出土陶磁器	167
2.博多遺跡群第64次調査から	175
付編一博多遺跡群第35次調査出土遺物	177

挿 図 目 次

Fig. 1	博多遺跡調査地点位置図	2
Fig. 2	博多遺跡第64次調査地点地形実測図	4
Fig. 3	第1面遺構配置図	6
Fig. 4	第1・2号井戸(SE-01・02)実測図	8
Fig. 5	第3・5号土壤(SK-03・05)実測図	10
Fig. 6	第3・5号土壤出土遺物実測図	11
Fig. 7	第4号溝出土遺物実測図	13
Fig. 8	第1面各遺構出土土師器・瓦類実測図	14
Fig. 9	第1・2面各遺構および検出時出土石鍋・石製品実測図	17
Fig. 10	第1面各遺構および検出時出土金属器・鉄滓実測図	19
Fig. 11	第1面各柱穴出土遺物実測図	21
Fig. 12	第1面検出時出土遺物実測図	22
Fig. 13	第17号土壤(SK-17)実測図	25
Fig. 14	第2面遺構配置図	26
Fig. 15	第18・20号土壤(SK-18・20)実測図	28
Fig. 16	第18・20・21号土壤出土遺物実測図	30
Fig. 17	第24号土壤(SK-24)実測図	32
Fig. 18	第22・24・26号土壤および第29号井戸出土遺物実測図	33
Fig. 19	第21・25号土壤(SK-21・25)・第29・36号井戸(SE-29・36)実測図	34
Fig. 20	第30・44号土壤(SK-30・44)実測図	36
Fig. 21	第2面各土壤出土磁器・土師器実測図	38
Fig. 22	第2面検出時出土土師器実測図	40
Fig. 23	第38~41号土壤墓(SK-38~41)実測図	42
Fig. 24	第30・31・45号土壤出土遺物実測図	46
Fig. 25	第2面検出時出土陶器実測図	46
Fig. 26	第2面各柱穴出土遺物実測図	48
Fig. 27	第2面各遺構および検出時出土石製品・土製品実測図	50
Fig. 28	第2面各遺構出土金属器・鉄滓実測図	52
Fig. 29	第2面検出時出土鉄器・鉄滓実測図	53
Fig. 30	第1・2面各遺構および検出時出土銅錢拓影(1)	54
Fig. 31	第2面各遺構および検出時出土銅錢拓影(2)	56
Fig. 32	第56号土壤(SK-56)実測図	57
Fig. 33	第3面遺構配置図	58
Fig. 34	第47・58・67・68号土壤(SK-47・58・67・68)実測図	59
Fig. 35	第57・60・65・66・72号井戸(SE-57・60・65・66・72)実測図	61
Fig. 36	第3面各遺構出土遺物実測図	63
Fig. 37	第61・67・69・71号土壤出土土師器実測図	66

Fig.38	第65・72号井戸出土遺物実測図	67
Fig.39	第80・81・120・129号土壙出土遺物実測図	69
Fig.40	第3面各遺構および検出時出土石鍋・滑石製品・硯実測図	72
Fig.41	第3面各遺構および検出時出土鐵器実測図	74
Fig.42	第3面各柱穴出土土師器実測図	77
Fig.43	第74号溝出土遺物実測図	77
Fig.44	第32号溝（SD-32）土層断面図	78
Fig.45	第32号溝出土陶磁器実測図	81
Fig.46	第32号溝出土土師器実測図(1)	83
Fig.47	第32号溝出土擂鉢・土鍋実測図	84
Fig.48	第32号溝出土土師器実測図(2)	86
Fig.49	第32号溝出土土師器実測図(3)	87
Fig.50	第32号溝出土土師器実測図(4)	88
Fig.51	第32号溝出土土師器実測図(5)	90
Fig.52	第32号溝出土土師器実測図(6)	91
Fig.53	第32号溝出土鐵器・石製品・土製品実測図	92
Fig.54	第37号土壙出土遺物実測図(1)	94
Fig.55	第37号土壙出土遺物実測図(2)	96
Fig.56	本調査地出土鐵絵盤実測図	98
Fig.57	本調査地出土鐵絵壺実測図	99
Fig.58	第3面検出時出土擂鉢・土鍋実測図	102
Fig.59	第3面検出時出土土師器実測図(1)	103
Fig.60	第3面検出時出土土師器実測図(2)	104
Fig.61	第3・4面検出時出土石製品・轔・鐵滓実測図	105
Fig.62	第3面各遺構および検出時出土銅錢拓影(1)	106
Fig.63	第3面検出時出土銅錢拓影(2)	108
Fig.64	第3面検出時出土銅錢拓影(3)	109
Fig.65	第3面検出時出土銅錢拓影(4)	111
Fig.66	第3・4面各遺構および検出時出土銅錢拓影	112
Fig.67	第4面遺構配置図	113
Fig.68	第84号土器棺墓・第100号石蓋土壙墓（SK-84・100）実測図	115
Fig.69	第4面各遺構出土遺物実測図(1)	117
Fig.70	第4面各遺構出土遺物実測図(2)	118
Fig.71	第111号土壙墓（SK-111）実測図	119
Fig.72	第111号土壙墓出土鐵器実測図	119
Fig.73	第85号溝土層断面図	121
Fig.74	第85・89・128号溝出土遺物実測図	123
Fig.75	拡張区および第136号溝土層堆積断面図	125
Fig.76	第76号溝土層断面図	127
Fig.77	第76号溝上・中層出土陶磁器実測図	129

Fig.78	第76号溝中層および中・下層出土陶磁器実測図	131
Fig.79	第76号溝下層出土陶磁器実測図	132
Fig.80	第76号溝最下層出土陶磁器実測図	138
Fig.81	第76号溝出土擂鉢等実測図	140
Fig.82	第76号溝出土土鍋等実測図	143
Fig.83	第76号溝出土土師器実測図(1)	144
Fig.84	第76号溝出土土師器実測図(2)	145
Fig.85	第76号溝出土土師器実測図(3)	146
Fig.86	第76号溝出土土師器実測図(4)	148
Fig.87	第76号溝出土石製品・土製品・鉄滓実測図	151
Fig.88	第76号溝出土金属器実測図	152
Fig.89	第76号溝出土銅錢拓影	155
Fig.90	第4面各遺構および検出時出土石鏃・石製品実測図	156
Fig.91	第4面各遺構および検出時出土鐵器実測図	158
Fig.92	第4面検出時出土遺物実測図	160
Fig.93	第76号溝出土弦生式土器実測図	164
Fig.94	本調査地出土弦生式土器・須恵器・土師器実測図	165
Fig.95	第76号溝出土陶磁器実測図	171
Fig.96	中世後半期検出道路分布図	176

図版目次

Ph. 1	第1面遺構分布状況	7
Ph. 2	第1面各遺構検出状況	9
Ph. 3	第3号上層および出土遺物	12
Ph. 4	第1面各遺構および検出時出土陶磁器	15
Ph. 5	第1面各遺構出土土師器・瓦	16
Ph. 6	第1面各遺構および検出時出土石鍋・石製品・甌	18
Ph. 7	第1面各遺構および検出時出土鐵器・土製品・石製品・鐵滓	20
Ph. 8	第1面各柱穴出土遺物	21
Ph. 9	第1面検出時出土陶磁器(1)	23
Ph. 10	第1面検出時出土陶磁器(2)	24
Ph. 11	第2面遺構分布状況	27
Ph. 12	第2面各遺構検出状況(1)	29
Ph. 13	第2面各遺構出土陶磁器(1)	31
Ph. 14	第2面各遺構出土陶器・土師器	35
Ph. 15	第2面各遺構検出状況(2)	37
Ph. 16	第2面各遺構および検出時出土陶磁器(2)	39
Ph. 17	第2面各遺構および検出時出土土師器	41
Ph. 18	土壤層検出状況	43
Ph. 19	第2面検出時出土陶磁器(3)	44
Ph. 20	第2面各遺構および検出時出土石鍋・石製品	45
Ph. 21	第2面各遺構および検出時出土瓦・土製品・鐵滓	49
Ph. 22	第2面各遺構および検出時出土鐵器	51
Ph. 23	第1・2面各遺構および検出時出土銅錢	55
Ph. 24	第3面井戸検出状況	60
Ph. 25	第3面各遺構検出状況	62
Ph. 26	第3面各遺構出土陶磁器(1)	64
Ph. 27	第3面各遺構出土土師器	65
Ph. 28	第3面各遺構出土陶磁器(2)	68
Ph. 29	第3面各遺構および検出時出土土師器	70
Ph. 30	第3面各遺構および検出時出土土鍋・擂鉢	71
Ph. 31	第3面各遺構および検出時出土石鍋・石製品	73
Ph. 32	第3面各遺構および検出時出土鐵器	75
Ph. 33	第3・4面各遺構および検出時出土轍・鐵滓・瓦類	76
Ph. 34	第32号溝土層堆積状態	79
Ph. 35	道路検出状況	80
Ph. 36	第32号溝出土陶磁器	82
Ph. 37	第32号溝出土土師器・擂鉢・土鍋	85

Ph.38	第32号溝出土土師器皿・坏	89
Ph.39	第32号溝出土遺物	93
Ph.40	第37号土壤出土遺物(1)	95
Ph.41	第37号土壤出土遺物(2)	97
Ph.42	本調査地出土鉄絵盤	98
Ph.43	本調査地出土鉄絵壺	100
Ph.44	第3面検出時出土陶磁器	101
Ph.45	第3面各遺構および検出時出土銅錢	107
Ph.46	第3・4面各遺構および検出時出土銅錢	110
Ph.47	第4面遺構分布状況	114
Ph.48	第84号土器棺墓	116
Ph.49	第100号土壤墓	117
Ph.50	第111号土壤と出土遺物	120
Ph.51	第85・136号溝上層堆積状態	122
Ph.52	第85号溝出土陶磁器	124
Ph.53	第76号溝土層堆積状態	128
Ph.54	第76号溝出土陶磁器(1)	130
Ph.55	第76号溝出土陶磁器(2)	133
Ph.56	第76号溝出土陶磁器(3)	134
Ph.57	第76号溝出土陶磁器(4)	135
Ph.58	第76号溝出土陶磁器(5)	136
Ph.59	第76号溝出土陶磁器(6)	137
Ph.60	第76号溝出土陶磁器(7)	139
Ph.61	第76号溝出土擂鉢等	141
Ph.62	第76号溝出土土鍋等	142
Ph.63	第76号溝出土土師器	147
Ph.64	第76号溝出土石鍋・石製品	149
Ph.65	第76号溝出土石製品・土製品・鐵滓	150
Ph.66	第76号溝出土金属器(1)	153
Ph.67	第76号溝出土金属器(2)	154
Ph.68	第76号溝出土銅錢	154
Ph.69	第4面各遺構および検出時出土鉄器・鐵滓	157
Ph.70	第4面各遺構および検出時出土陶磁器	159
Ph.71	第4面各遺構および検出時出土遺物	161
Ph.72	第4面各遺構および検出時出土遺物	162
Ph.73	第4面各遺構および検出時出土石鍋・石製品	163

第1章 序 説

1. はじめに

博多区博多駅前一丁目の承天寺と出来町公園との間の一画に、住友生命保険相互会社によって商業ビル建設が計画された。この地周辺は、博多遺跡群の南東部に位置している。ビル建設の計画者である住友生命保険相互会社から埋蔵文化財事前調査願いが提出された(埋蔵文化財事前調査番号 6-2-19)。福岡市教育委員会埋蔵文化財課(以下、埋文課とする)は、ビル計画地が博多遺跡群内に入っていることから、遺構遺存状態を確認するため試掘調査を実施することを決定した。

平成元年5月2日に、対象地の西側と東側に南北方向の幅1mで14mと6mの試掘溝を設定し、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、西側は現地表下1.7m、東側は2.3mで地山である黄色砂層となり、旧地形は東方向に傾斜していることが確認された。また、現地表下80cmから地山上にかけて、中世から古代の土壌、井戸、溝などの遺構が検出され、3枚の文化層の所在が確認された。試掘調査の結果および周辺地の発掘調査の成果から、埋文課は、ビル設計計画地の全域に古代から中世にかけての遺構が遺存しており、商業ビルがRC造であり、遺構を破壊することから全面的な発掘調査が必要であると決定した。

以上の発掘調査実施決定を受け、住友生命保険相互会社と埋文課は、調査時期、調査費用、調査期間、出土遺物の扱いなどについての協議を重ね、合意事項を積み上げそれぞれ契約事項がととのい、調査契約が成立した。

本調査は、調査事務所用プレハブの設置、電気・水道の引き込み、表土層のすき取りなど条件整備完了後、古代から中世にかけての各時代・時期の様相把握を目的とし、約5ヶ月にわたって実施した。

遺跡調査番号	8976	遺跡略号	HKT-64	分布地図番号	036-A-1
調査地地籍	博多区博多駅前一丁目101		調査実施面積	620m ² (4面)	
調査期間	1990年2月26日～1990年7月31日				

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分な体制を組むことはできませんでしたが、住友生命保険相互会社をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査は順調に進行いたしました。

整理報告作業は調査担当者である山口の業務繁多により、1990年度の調査にもかかわらず1993・1994年度で実施いたしました。住友生命保険相互会社をはじめとする関係各位にこの場をお借りしあざび申し上げるとともに、ご協力に謝意を表します。

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第二係

教育長 佐藤善郎(前) 尾花剛

前文化部長 川崎賢治 文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 柳山純孝(前) 折尾学

第二係長 柳沢一男(前) 山崎純男

調査担当 山口譲治

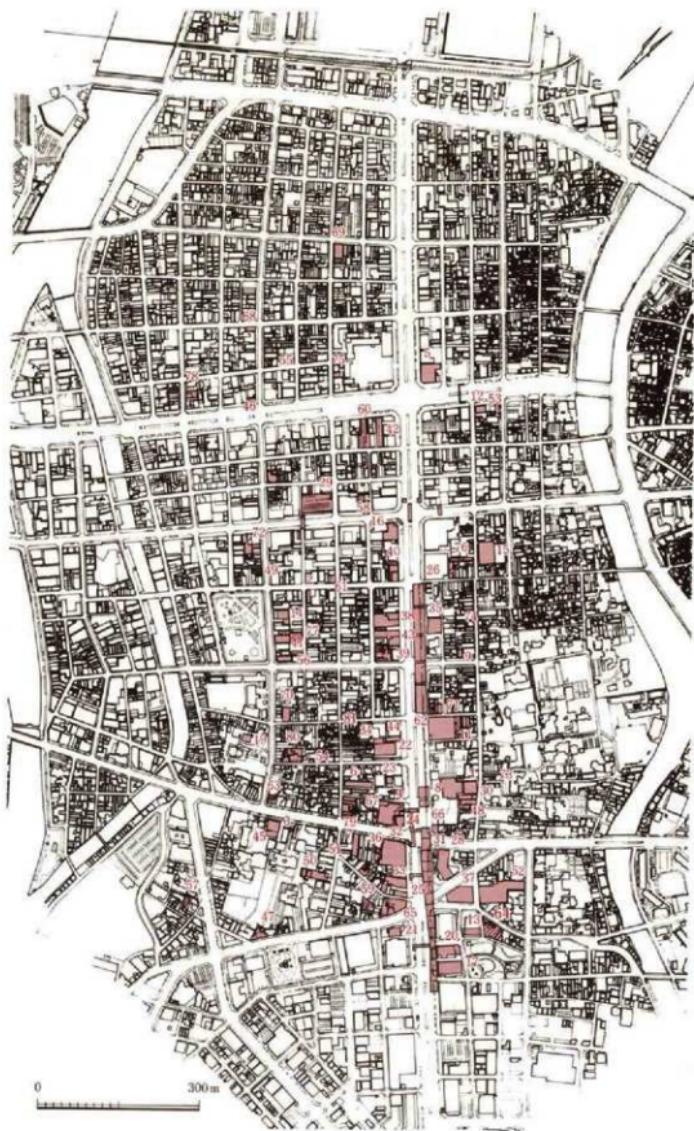


Fig. 1 博多遺跡調査地点位置図

試掘調査担当 横山邦雄(主任文化財主事) 常松幹雄
事務担当 松延好文・吉田麻由美(前) 西田結香
調査指導員 亀井明徳(専修大学文学部) 中橋孝博(九州大学医学部)
調査・整理調査員 故牟田裕二・平川敬治・犬九陽子・井上加代子・山口朱美
調査・整理協力者 屋山洋(現理文課文化財主事) 大塚恵治(現八女市教育委員会)・石本恭二・岡崇
清川朋和・泉明美・森優雅(以上、福岡大学歴史研究部) 石田晴美・井手かす
み・尾崎君枝・甲斐田嘉子・坂井昭美・品川伊津子・立山郁子・藤本由香・星子
輝美・星野明子・山崎美枝子

なお、調査および整理作業のなかで陶磁器についての調査を亀井明徳氏に、土壌墓出土の人骨の分析について中橋孝博氏にそれぞれ依頼し、前者については本書に収録し、後者については、次年度以降の博多の報告書に収録する。

3. 遺跡の位置と立地

福岡市の博多湾岸には0.3~2km前後の幅をもつ砂丘が形成されており、砂丘は東から多々良川・御笠川・那珂川・桶井川・宝見川など北流して海に注ぐ河川によって切られている。博多湾岸の砂丘上には、南北軸が広いほど古い時期からの人遺跡が所在している。博多遺跡群は、博多湾岸中央部の御笠川、那珂川に挟まれた砂丘上に位置している。博多遺跡群は、大きく海側の「息の浜」と内陸側の「博多浜」両砂丘上とその間に所在している。現在、この地域は都市基盤整備が進み、商業地域として市街化し、標高4~5m前後の平坦な地形をなしている。

本調査地は承天寺と出来町公園の間、東西方向でみていくと石堂川と大博通りの間の博多駅前一丁目に位置している。博多遺跡群のなかでみていくと南東部にあたり、「博多浜」砂丘の東南部斜面に位置し、現在、標高は4.7m前後である。国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から16.9cm、東から15cmの位置にあたる。

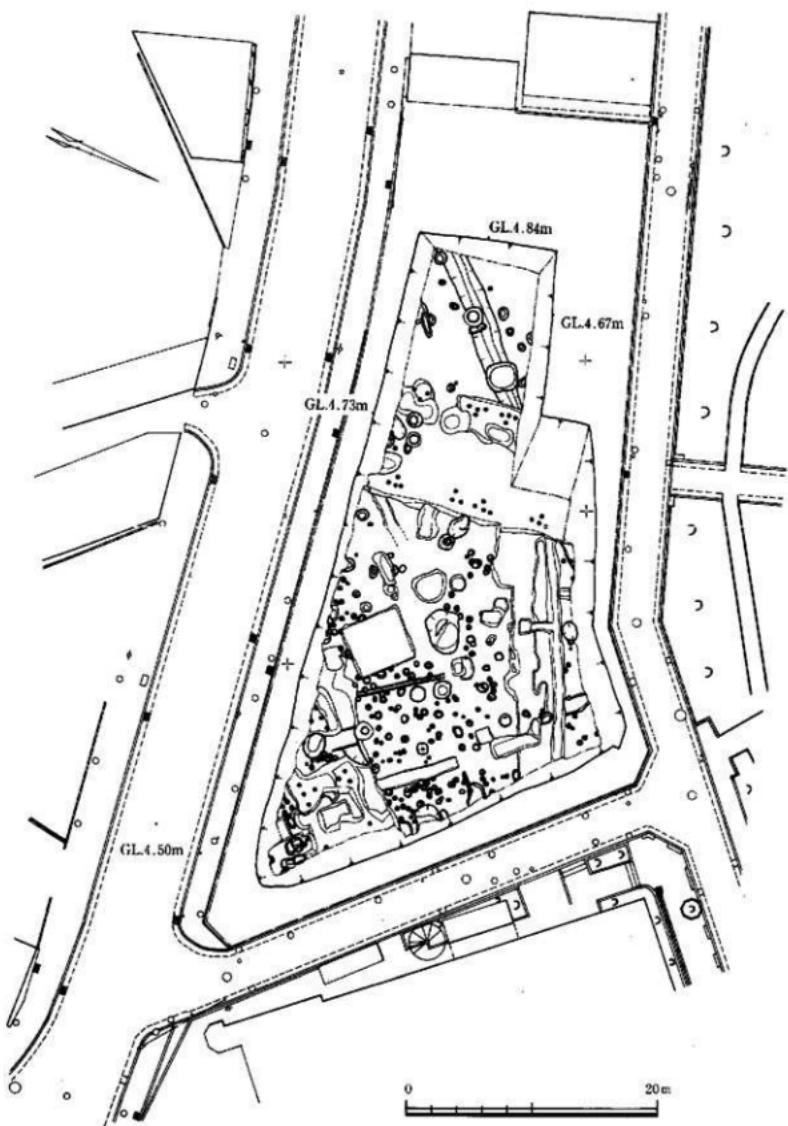


Fig. 2 博多遺跡第64次調査地点地形実測図

第2章 調査の記録

1. 調査概要 (Fig. 1・2)

商業ビル建設予定地は、旧博多市街地を南北方向に縦断している大博通りの祇園六差路の東150mに位置し、北側は幅12m、西側、南側は幅4mの道路に面し、西側は民有地と接し台形を呈している。試掘調査の結果、西側が地形的に高く、遺構の遺存状態も良く、東側は遺構が稀薄であることがわかった。この結果を受け、建設予定地の東側に民有地に接する形で調査事務所用プレハブを設置し、西側をおもに調査対象とすることにした。北側、西側は道路と接し外柵があるため2m前後の引きを取り、南側は道路境界にフェンスがあるため1mの引きを取り、まず建設予定地の西側半分に台形の調査区を設定した。この西側調査区の調査終了後、東側の状況把握のため南北方向11m、東西19mの拡張区を設定し、調査を実施した。

調査対象地は、アスファルト舗装が行なわれており90cm前後の現代の整地があるため、整地を含む表土層(95cm前後)のすき取りを行なっていただいた。調査は、すき取り後、現代の擾乱、整地層が残存していたのでこれらを重機で除去することから始めた。現代の整地層を除去した標高3.75m前後の黒褐色から暗茶灰色の粘質土・シルト～砂の面で遺構を検出できたので、これを第1面として調査を実施した。以下、25cm前後下の標高3.50m前後の面を第2面、一部で地山の黄色砂層がみられる標高3.30m前後の面を第3面、標高3m前後の地山の黄色～黄白色砂層の面を第4面として調査を実施した。なお、拡張区については現地表下1.95m前後で、西側調査区と接するところでは地山砂層もみられる標高2.75m前後の面から調査を行ない、この面検出遺構を第1～3面相当のものとした。その下の溝群からなる遺構を第4面のものとした。

第1・2面では中世後半期から近世にかけての井戸・土壙・土壤墓・柱穴・溝など多数の遺構を検出し、陶磁器・土師器・銅錢等金属器など多種多様の遺物が出土した。第3面では中世の道路・井戸・土壙・溝・柱穴など多数の遺構を検出し、輸入陶磁器・土師器・鉄器など多種多様の遺物が出土した。第4面では7世紀末から8世紀初期の土器棺墓、古代から中世の井戸・土壙・溝などの遺構を検出し、同時期の各種の多様な遺物が出土したほか、弥生時代中期の土器棺墓に使用されたと考えられる人形甕が一定量出土した。弥生時代の遺構は未検出であるが、本調査区周辺に弥生時代の墓地の所在が想定できる。

検出遺構については、井戸をSE、土壙(土壤墓を含む)をSK、溝をSD、性格不明遺構をSXと遺構記号を使用し、検出順に通し番号を付した(例 SE-01…SK-03・SD-04…SX-37…)。なお、柱穴はSPの遺構記号を使用し、検出順に4桁の通し番号を付した。また、本書中では、遺構名、遺構記号を併記して使用する。

出土遺物については、鉄製品、銅製品(銅錢を含む)など金属器および鉄洋を897600001から、弥生土器・須恵器・土師器・陶磁器および瓦類を897602001から、土鍬・繩など土製品を897604001から、硯・石鍬・板秤など石製品を897605001から通し番号を付し、登録番号とした。なお、本書中では遺跡登録番号の8976を取り、4桁で明記していく。

2. 第1・2面の調査 (Fig. 3・14, Ph. 1・11)

第1面は、現代の整地層を除去した標高3.75m前後の黒褐色から暗茶灰色の粘質土・シルト～砂の面で、SE-01・02・143の3基の井戸、SK-03・05・07～16・140～142の14基の土壙、SD-04・06・147

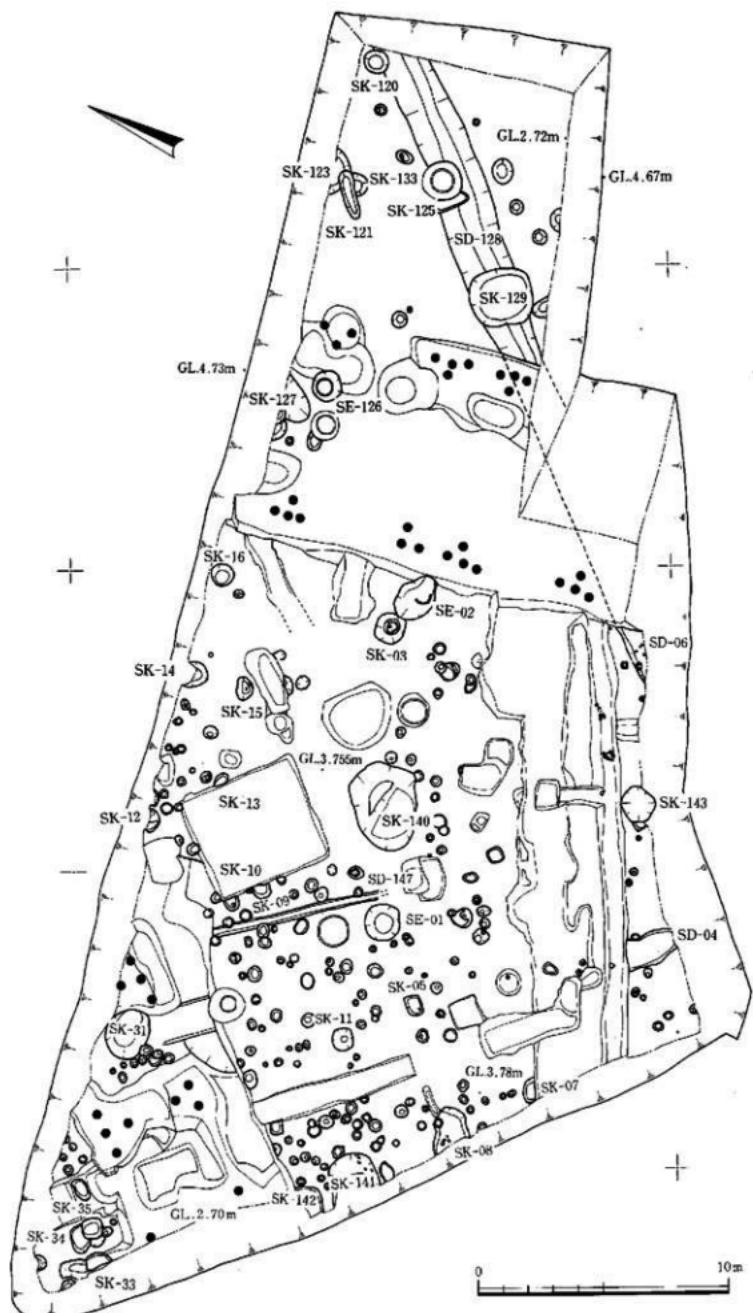


Fig. 3 第1面造構配図



1) 第1面遺構分布状況(東から)



2) 第1面遺構分布状況(西から)

Ph. 1 第1面遺構分布状況

の3条の溝を検出した。

第2面は第1面から25cm前後下の標高3.50m前後の暗茶灰色のシルト～砂の面で、SE-29・36の2基の井戸、SK-17～27・30・31・33～35・38～42・44・45・144～146・150の27基の土壙、SD-28・43の2条の溝を検出した。

拡張区では標高2.72～2.82mの黄灰色砂の面で、SE-126の井戸1基、SK-120～123・125・127・129・133の8基の土壙、SD-128の溝1条を検出した。なお、SD-128は覆土および溝の断面形、出土遺物からSD-06と同一遺構であることがわかった。

第2面は第1面の25cm前後下であり、柱穴などは連続しており、近世の遺構が遺存しており、一面を第1・2面に分けて調査を行なったので、第2面検出遺構は第1面検出遺構に引き続き、ここで詳述する。拡張区についても近世の遺構があり、第1面相当とする。

1) 第1面検出遺構と出土遺物

SE-01 (Fig. 4・8・10, Ph. 2・4・7)

本井戸は、西側調査区（以下、本調査区とする）のはば中央で検出した。検出面の径2m強で、深さ2mの鉢形をなす掘り方をもち、ほぼ中央に径80cm弱の井筒がある。井筒底面の標高は94.5m。

本井戸からは、白磁碗（3171）、黒釉碗（3172）と土師器など小片と、横断面隅丸方形の鉄釘（0279～0281）などの鉄器が出土した。

SE-02 (Fig. 4・8, Ph. 2)

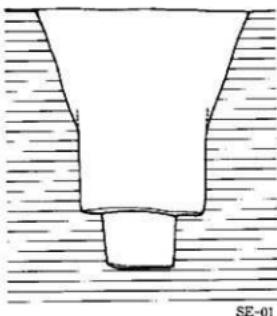
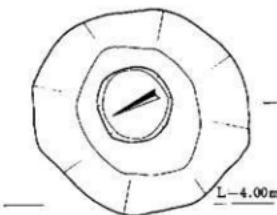
本井戸は本調査区の東部中央に位置し、SK-03を切り、北から東については破壊されている。検出面径1.6m前後で深さ1.6mの鉢形をなす掘り方をもち、掘り方のやや南寄りに径60cm前後の井筒がある。井筒は、長さ24.5cm、幅18～19.5cmの瓦を巡らし積み上げている。

本井戸からは近世の陶磁器に混入して、土師器・輸入陶磁器・瓦類などの小片が出土した。2299は表面は格子目叩き、内面に布压痕がみられる丸瓦片である。

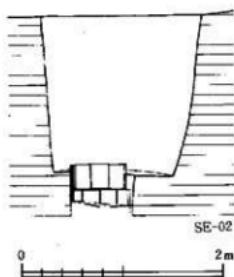
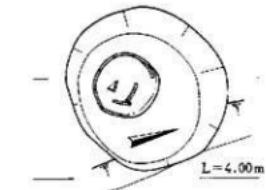
SK-03 (Fig. 5・6・10, Ph. 2・3・7)

本土壙は本調査区の東部中央に位置し、SE-02に切られている。径1.2mで、深さ90cm弱のポール状をなす掘り方をもち、中央に備前焼の大甕を埋置している。蓋は確認できなかった。貯蔵用か。

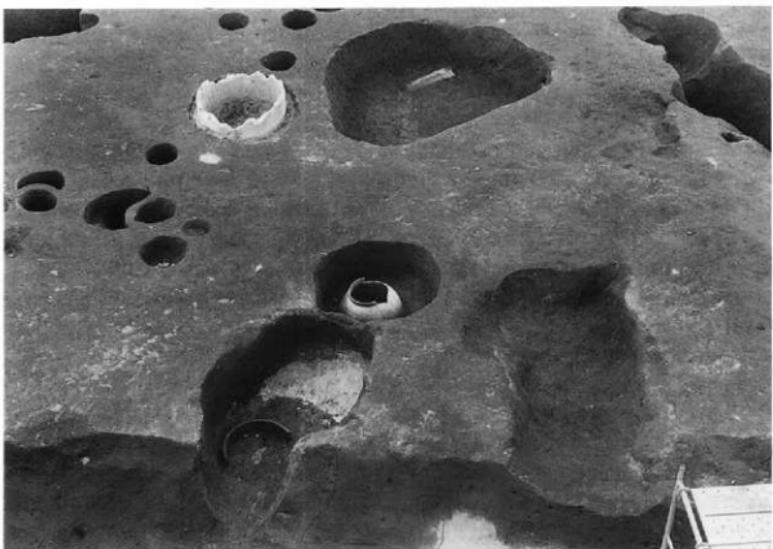
2310は埋置大甕で、口径37cm、底径30.4cm、器高67.4cm、Fig. 4 第1・2号井戸 (SE-01・02) 実測図



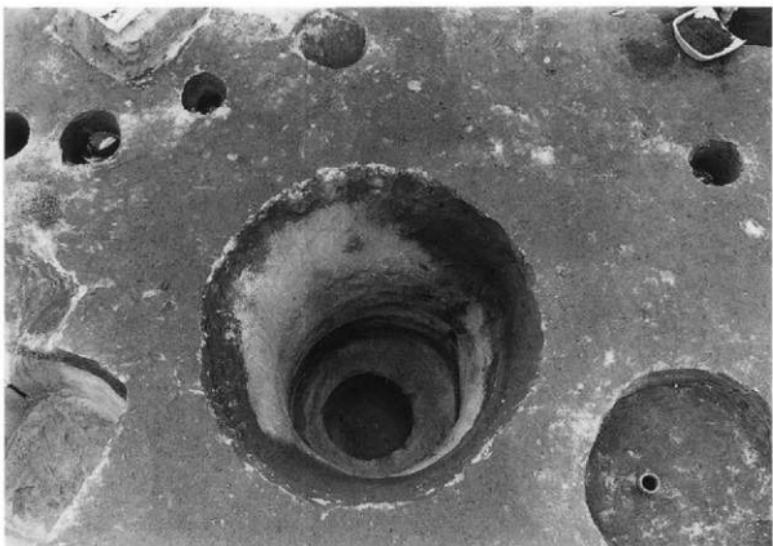
SE-01



SE-02



1) 第2号井戸・第3号土壤検出状況(東から)



2) 第1号井戸完掘状況

Ph. 2 第1面各遺構検出状況

最大径は胴にあり60.7cmを測る。3209は大甕の底に伏せた状態で出土した黒釉碗である。なお、掘り方からは少量の土器片等の遺物が出土した。3214は耳付きの陶器壺、0290・0291は横断面隅丸方形の鉄釘で、0292は鉄滓である。0290はほぼ完形で、長さ(10cm)を測る。

以上から、本土壙は備前焼大甕を用いた貯蔵用甕埋置土壙で、中世末のものといえよう。
SD-04 (Fig. 7, Ph. 5)

本溝は本調査区の南西部で検出し、北西方向に延びているが攪乱に切られ、南は調査区外に延びている。幅80~125cmで、2m前後遺存し横断面は逆台形を呈している。溝としたが、土壙か。

本溝からは少量の土器などの遺物が出土した。2001は須恵器の鉢で、内面はハケ目調整が施されている。2002は糸切り底の土器皿で、口径8.2cm、器高1.1cm、底径6.8cmを測り、外底には板状压痕もみられる。2003・2004は糸切り底の土器器環で、前者は口径14cm、器高2.9cm、底径9.9cmを測る。2005は土器器土鍋で、口径22.2cmを測り、内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後ナデを加えており煤が付着している。

以上から、本溝（土壙？）は中世末前後のものといえよう。
SK-05 (Fig. 5・6・9, Ph. 5・6)

本土壙は、本調査区の中央部よりやや西寄りで検出した。長軸1m弱、短軸70cm弱の平面形隅丸方形を呈し、20cm強遺存している。床はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。

本土壙からは少量の遺物が出土した。2311は糸切り底の土器器皿で、口径8cm、器高1.2cm、底径6.5cmを測る。2312・2313は糸切り底の土器器環で、口径12.4cm、14.6cm、器高2.8cm、3.4cm、底径7.2cm、9.1cmを測る。以上3点の外底には板状压痕がみられる。5050・5051は滑石製石鍋再利用品で、5050は平面形方形に整形し、片側から径7.5mmの穿孔を行なっており、鍤か。重さは47g強。5051は5010と接合する。内面に線刻記号があり、割符として使用されたか。

以上から、本土壙は第1面検出遺構中では比較的古く、中世後半期から中世末（16世紀）のものといえよう。

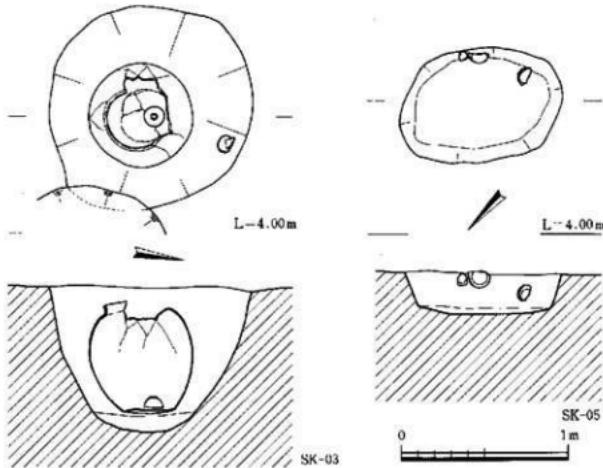


Fig. 5 第3・5号土壙(SK-03・05)実測図

SD-06 (Fig. 41・74, Ph. 27・32)

本溝は本調査区の東南端で検出し、拡張区検出のSD-128と同一溝であることがわかった。N-45°-Eの主軸方位をとり、南西から北東方向に延びており、SK-125・129・120に切られている。幅1.6~2.1mで、50cm前後遺存し、底はほぼ平坦で、壁は大きく広がりながら立ち上がっている。横断面形は逆台形を呈し、粘土を含む灰色シルト～砂、炭化物を含む青灰色シルト～砂を覆土としている。

本溝からは土師器など少量の遺物が出土した。2296~2298はいずれも糸切り底の土師器壺(皿)で、口径は12cm、12.4cm、13cm、器高2.5cm、2.8cm、2.8cm、底径7.8cm、8.6cm、9.5cmを測る。0273~0276は横断面形隅丸方形の鉄釘である。

以上から、本溝はN-45°-Eの方位をとる逆台形の溝で、中世末のものといえよう。

SK-07 (Fig. 8・9, Ph. 4~6)

本土壤は、本調査区の南西部で検出した。東西方向1m、南北50cmを確認したが、南側は擾乱によつて切られている。平面形は隅丸方形を呈すると考えられ、20cm前後遺存し、底面はほぼ平坦で壁はやや開き気味に立ち上がっている。

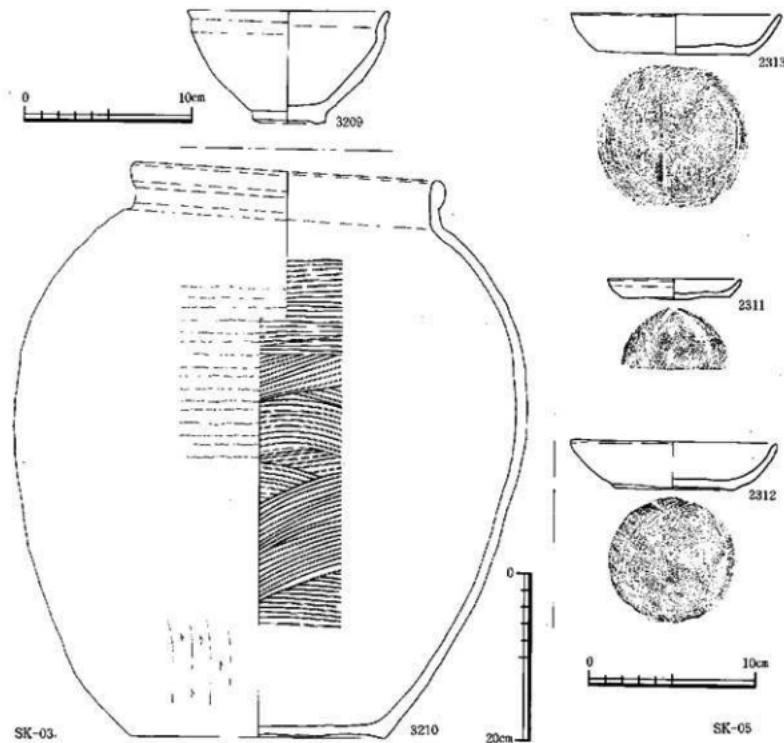


Fig. 6 第3・5号七塹出土遺物実測図



1) 第3号土壤埋甕検出状態



2) 第3号土壤使用甕および出土遺物

Ph. 3 第3号土壤および出土遺物

本土壙からは少量であるが、各種の遺物が出土した。3210は青磁皿、3212は青磁碗、3211は朝鮮陶磁碗。2314は口径24.8cmを測る土師器土鍋、2315は平瓦、2316は丸瓦、2317は軒丸瓦であるが文様は欠損のため不明である。5053は口径15.6cm、器高8.3cm、底径13.1cmの小形の滑石製石鍋で、口縁直下にコの字形の削り出しの縦を巡らしている。器壁は1.2cm前後で底は0.4cm前後と薄く仕上げている。5052は滑石製石鍋の再利用品で、石鍤として使用されたか。器長4.7cm、厚さ1.7cm、重量49g。

以上から、本土壙は中世末前後のものか。

SK-08 (Fig. 8, Ph. 5)

本土壙は本調査区西側中央で検出し、一部柱穴に切られており。南北方向1.4m、東西1.9mを確認したが、西側の調査区外に延びている。平面形は精円形か。20cm前後遺存している。

本土壙には角礫などが埋土中に入っているが、少量の遺物が出土した。2318は口径23.5cmを測る束播条拂鉢で、2319はコの字形の縦を巡らした釜か。2点とも瓦器質である。2320は丸瓦片。

SK-11 (Fig. 8, Ph. 5)

本土壙は本調査区中央部より西寄りに位置し、径80cmを測る平面形隅丸方形を呈し、50cm前後遺存している。柱穴の可能性もあるが、第1面では径50~60cm前後の柱穴が多く、ここでは土壙としておく。

本土壙からはほぼ完形の土師器3点が出土した。2321・2322は小皿、2323は壺。いずれも糸切り底で、口径は8cm、7.8cm、13cm、器高は1.4cm、1.3cm、3.1cm、底径は5.5cm、5.4cm、9.3cmを測る。

SK-14 (Fig. 8, Ph. 5)

本土壙は本調査区の北東部に位置し、径1m前後を測り、一部は調査区外に延びている。60cm強遺存しており、柱痕跡がなく、SE-115の井筒直上に位置していることから、井戸廃棄後の最終埋土の可能性もある。

本井戸からは少量の土師器等の細片が出土した。2324は糸切り底の土師器壺で、口径11.8cm、器高2.5cm、底径8.7cmを測る。

SK-15 (Fig. 8・10, Ph. 4・5・7)

本土壙は本調査区の北東部に位置し、長径95cm、短径65cmを測る平面形不正形で、40cm遺存している。床面は凸凹し、壁は開きながら立ち上がっている。

本土壙からは少量の土師器・瓦類・鐵器が出土した。2325~2327は糸切り底の土師器皿で、2326・2327の外底には板状圧痕があり、口径6.8cm、8cm、9cm、器高1.5cm、1.3cm、1.7cm、底径5cm、6cm、7.1cmを測る。2328・2329は糸切り底の土師器壺で、後者の外底には板状圧痕がみられ、口径12cm、14cm、器高2.7cm、2.8cm、底径8cm、10cmを測る。0293・0294は横断面隅丸方形の鐵釘で、前者

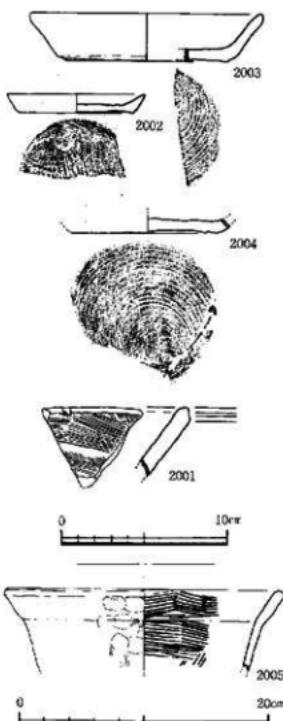


Fig. 7 第4号溝出土遺物実測図

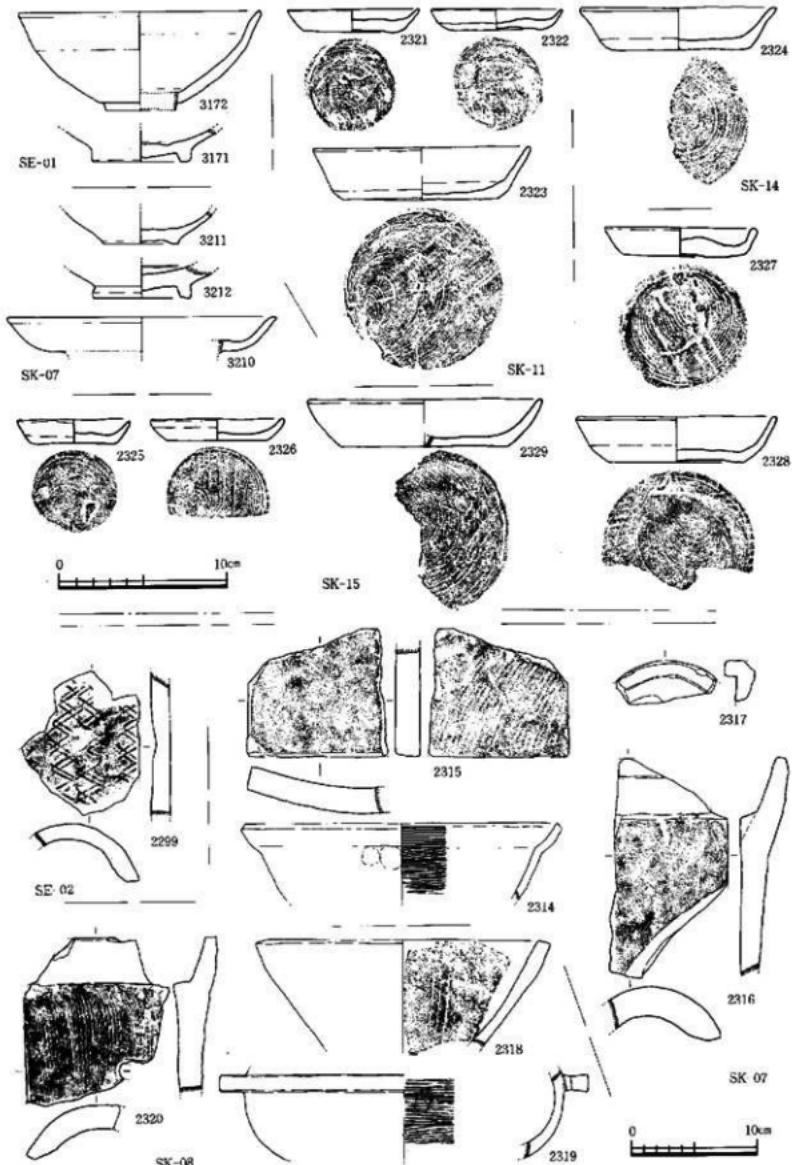


Fig. 8 第1面各遺構出土土師器・瓦類実測図

は器長7.2cmを測る。

2) 第1面検出柱穴および検出時出土遺物 (Fig. 9 ~ 12・30, Ph. 4・6 ~ 10・23)

第1面検出の154個の柱穴および近世の遺構、現代の搅乱や第1面遺構検出作業中、各種の多量の遺物が出土した。ここでその一部を紹介しておく。

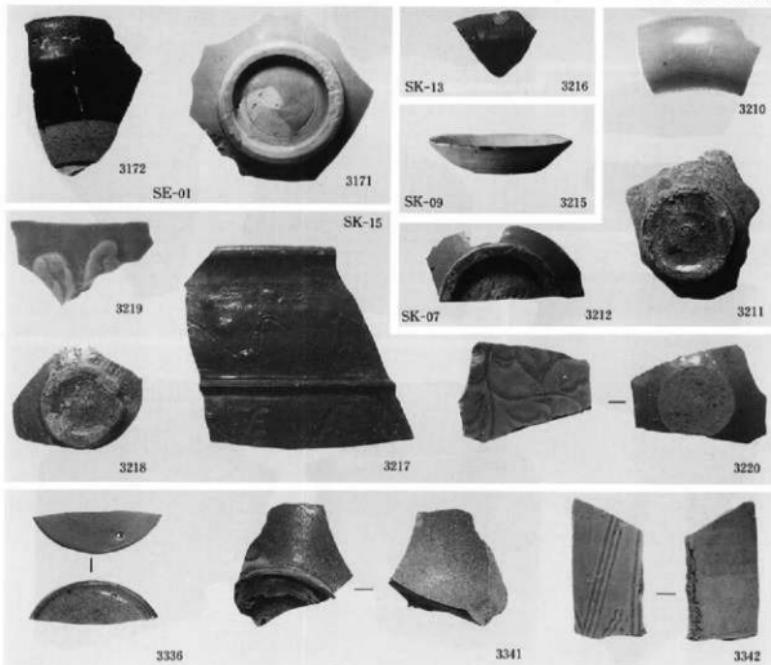
もっとも出土量が多いのは糸切り底の土師器皿・环で、そのほか土師器土鍋、国産・輸入陶磁器、鉄釘・銅鋳などの金属器、石鍋や石鍋再利用の石製品、土製品、瓦類などがある。

金属器からみていくと、0201は銅製金具で最大径3.7cm。0202は銅製の环で口径5.3cm、器高2cm、底径2.5cmを測る。0344は柱穴出土の鉄製刀子。横断面隅丸方形の鉄釘がもっとも多い。0426~0428は鉄滓。

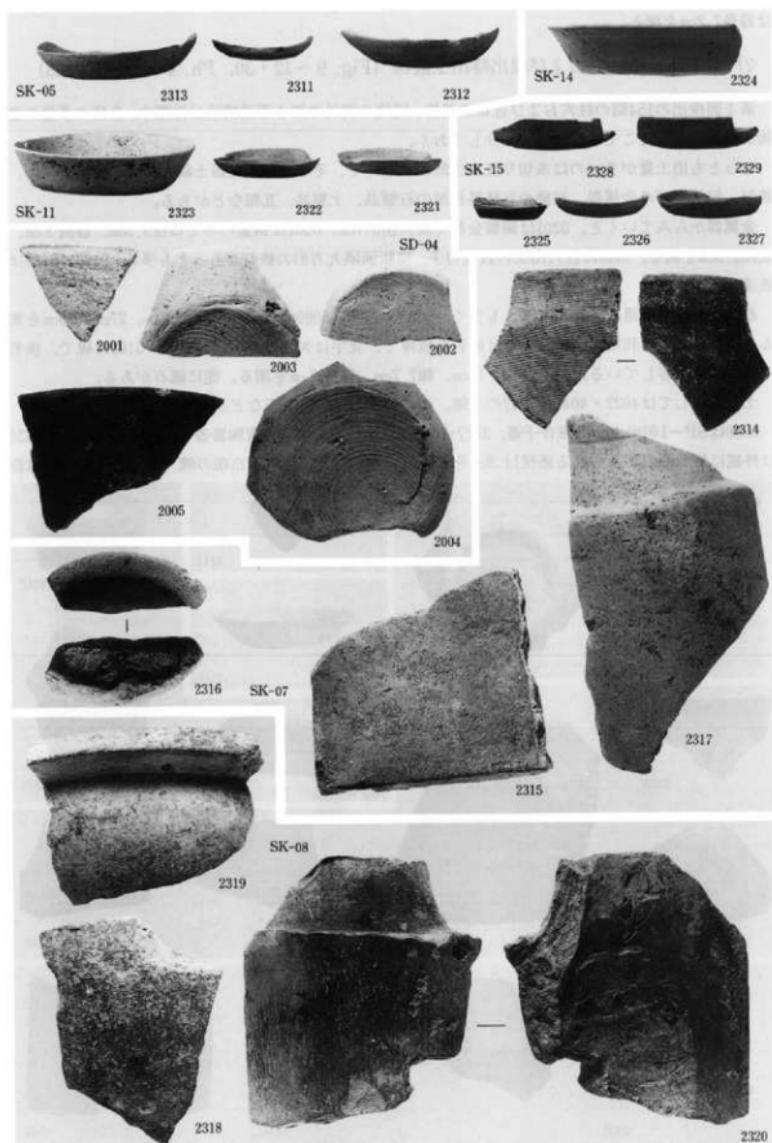
石製品としては滑石製品がもっとも多く、5095・5096・5099は石鍋で、口径32cm、27cm、20cmを測る。5100は石鍋再利用の石鍤。5092は砂岩製板碑で、梵字は欠失している。5101・5102は硯で、後者は陸部のみ遺存している。前者は長さ14cm、幅7.7cm、厚さ2cmを測る。他に砥石がある。

土製品としては4022・4040~4042の土鍤、4043の輪の羽口、瓦玉などがある。

3250はSP-140出土の白磁合子蓋、2517・2641は火舎、2640は須恵質陶器壺で口径29cmを測る。2634は外底に板状压痕がみられる底径11.8cmを測る鉢。そのほか、青磁、白磁の碗・皿などの輸入陶磁器、



Ph. 4 第1面各遺構および検出時出土陶磁器



Ph. 5 第1面各遺構出土土器・瓦

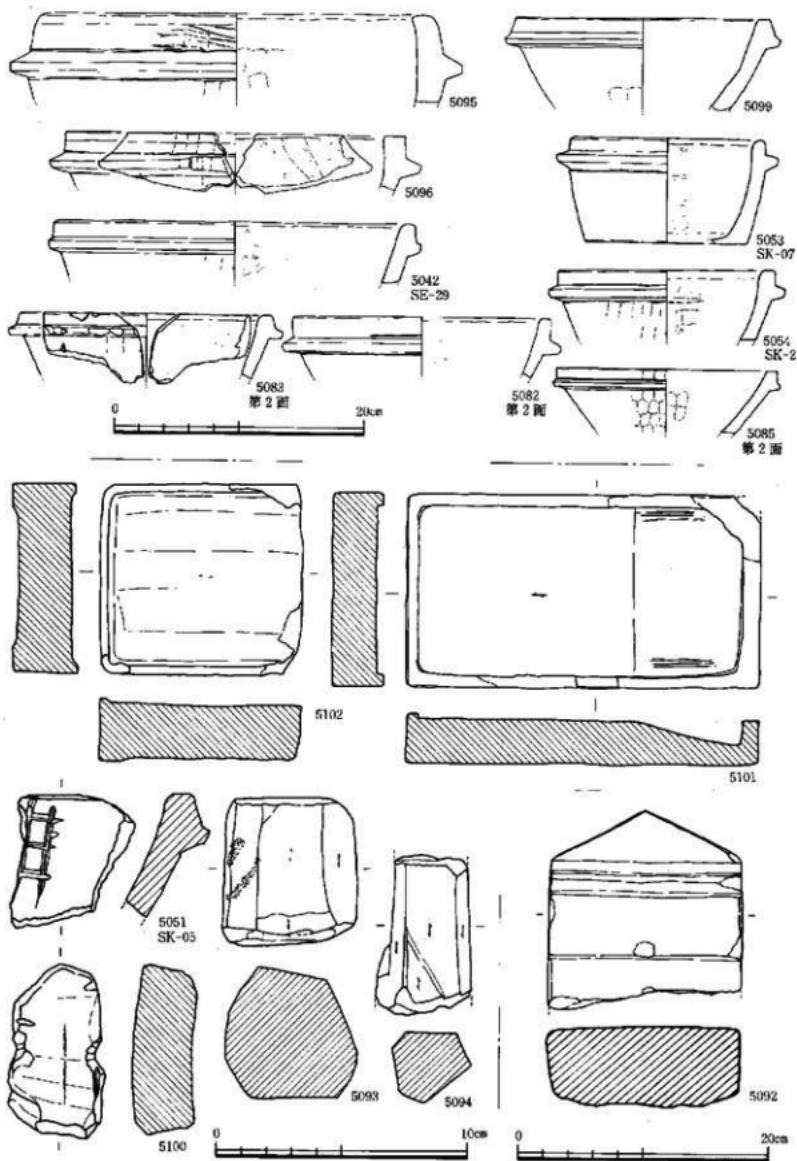
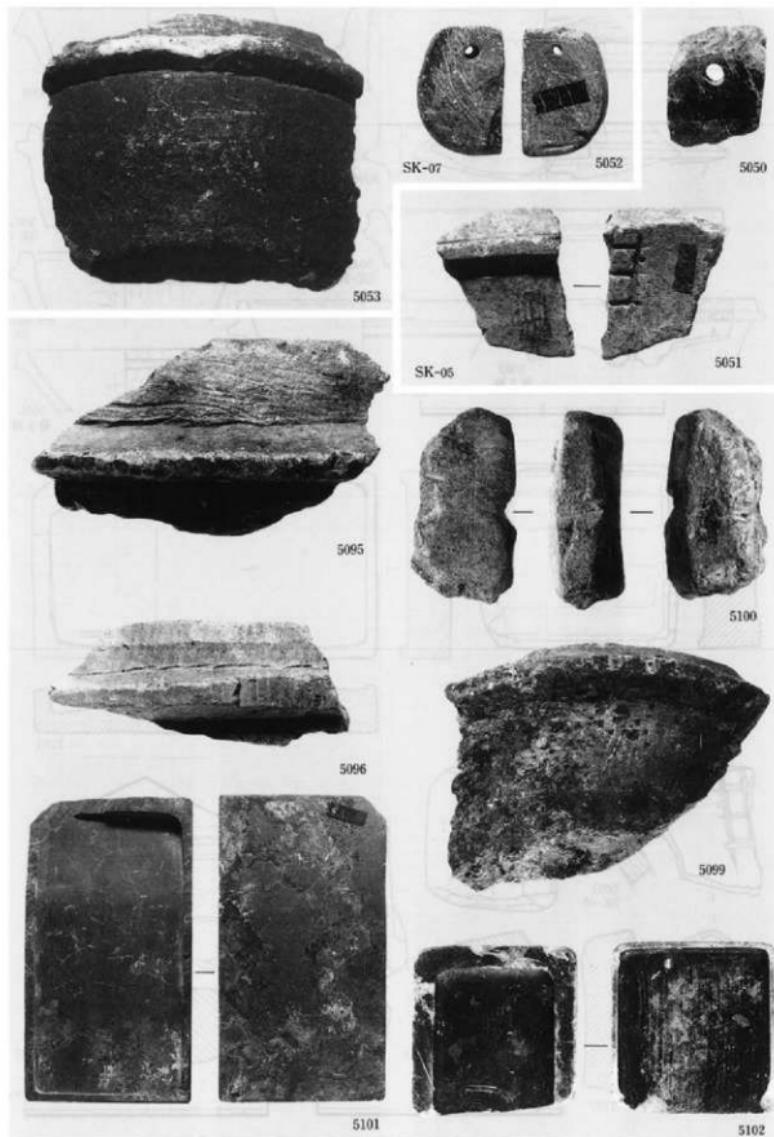


Fig. 9 第1・2面各造構および検出時出土石鏃・石製品実測図



Ph. 6 第1面各遺構および検出時出土石鍋・石製品・硯

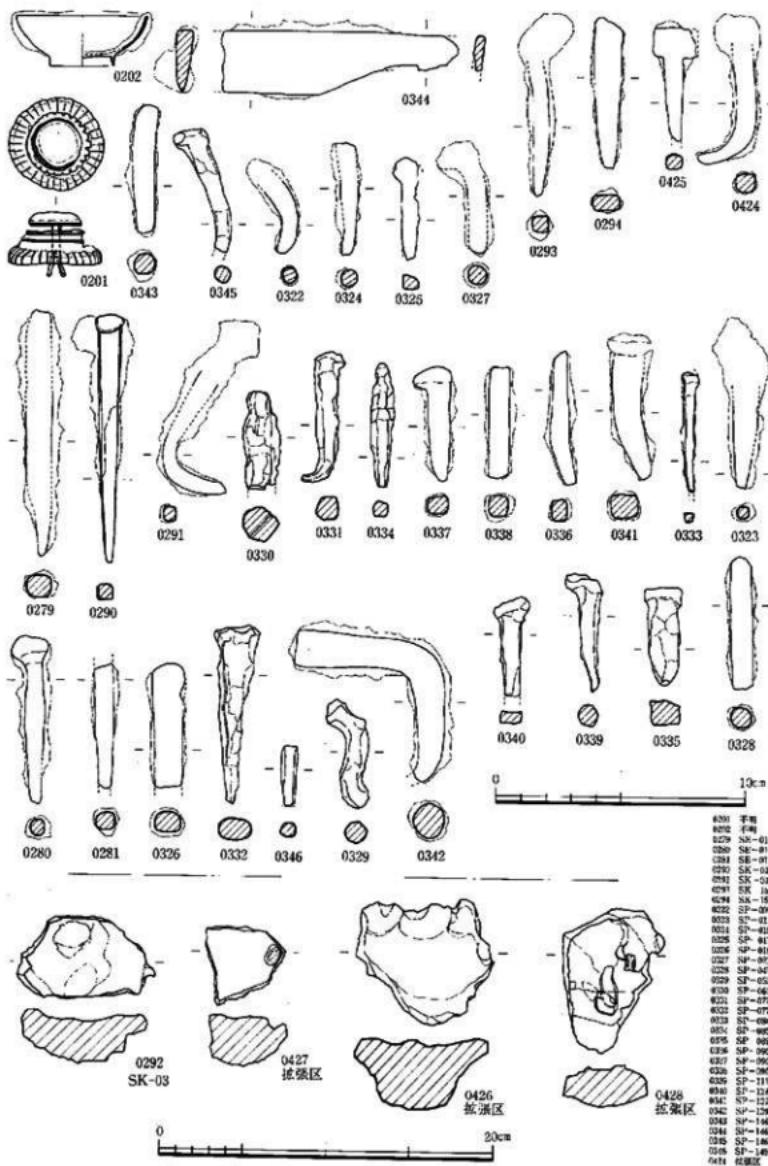
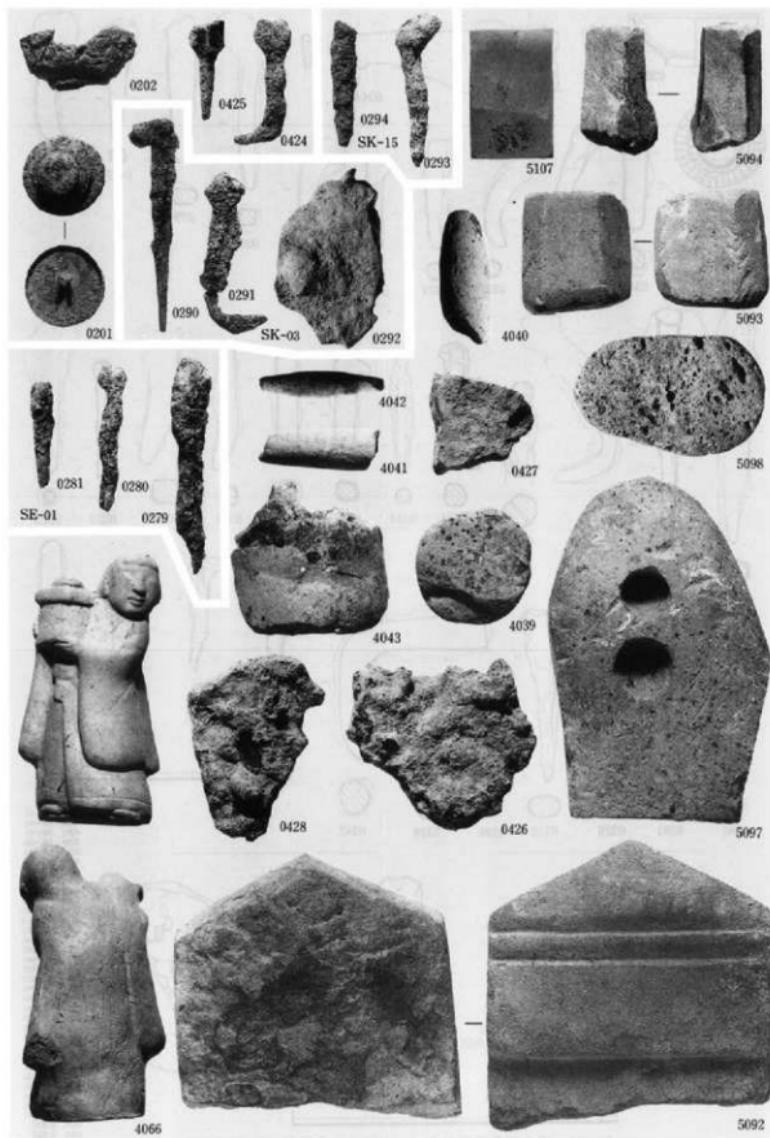


Fig.10 第1面各造構および検出時出土金属器・鉄滓実測図



Ph. 7 第1面各遺構および検出時出土鐵器・土製品・石製品・鉄滓

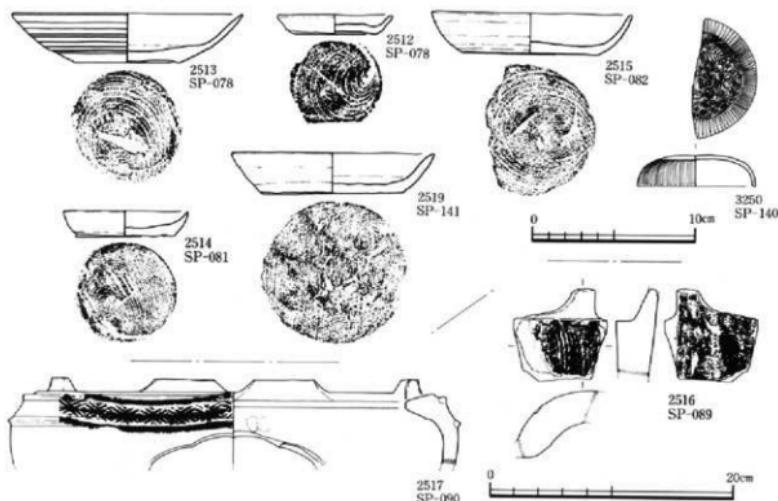
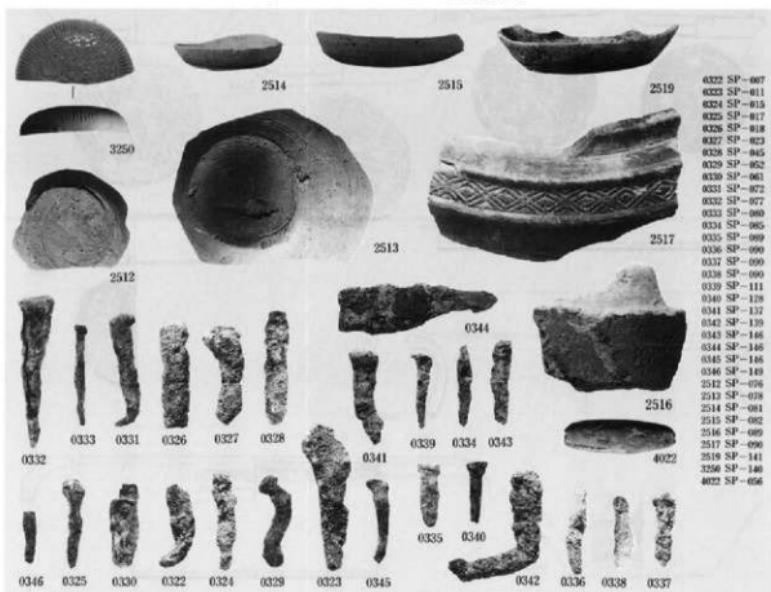


Fig.11 第1面各柱穴出土遺物実測図



Ph. 8 第1面各柱穴出土遺物

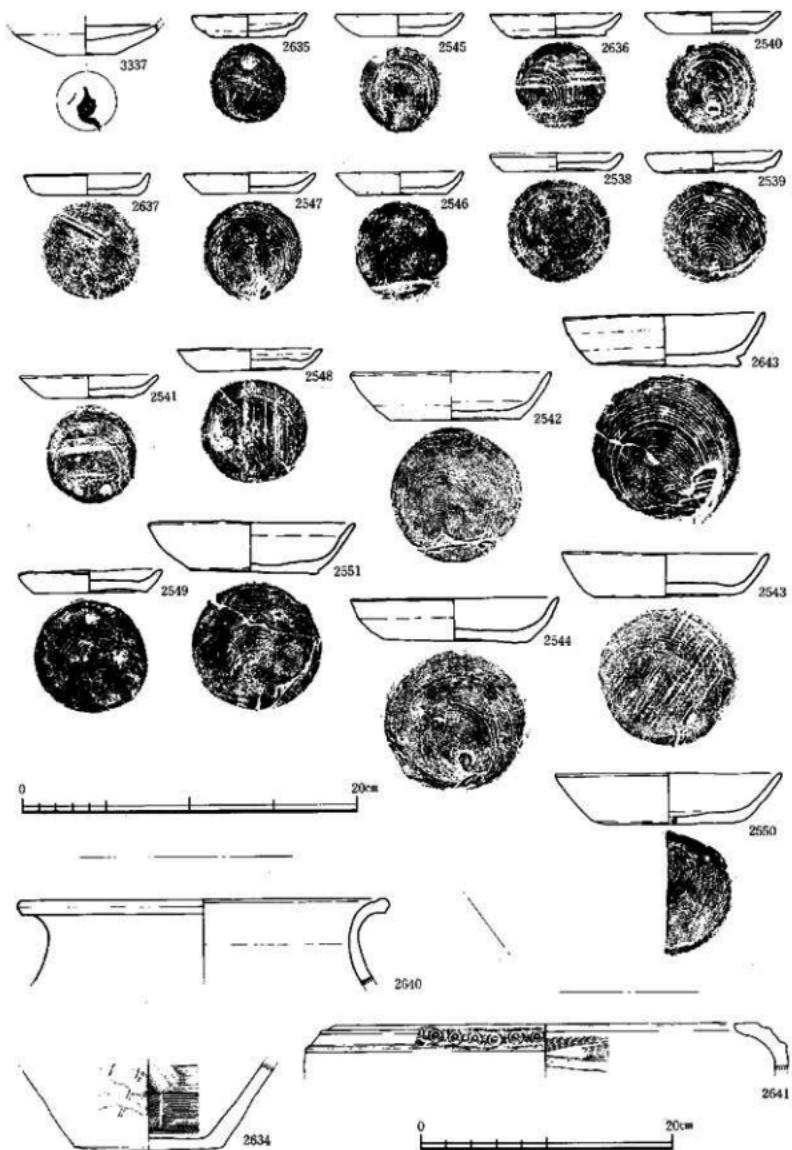
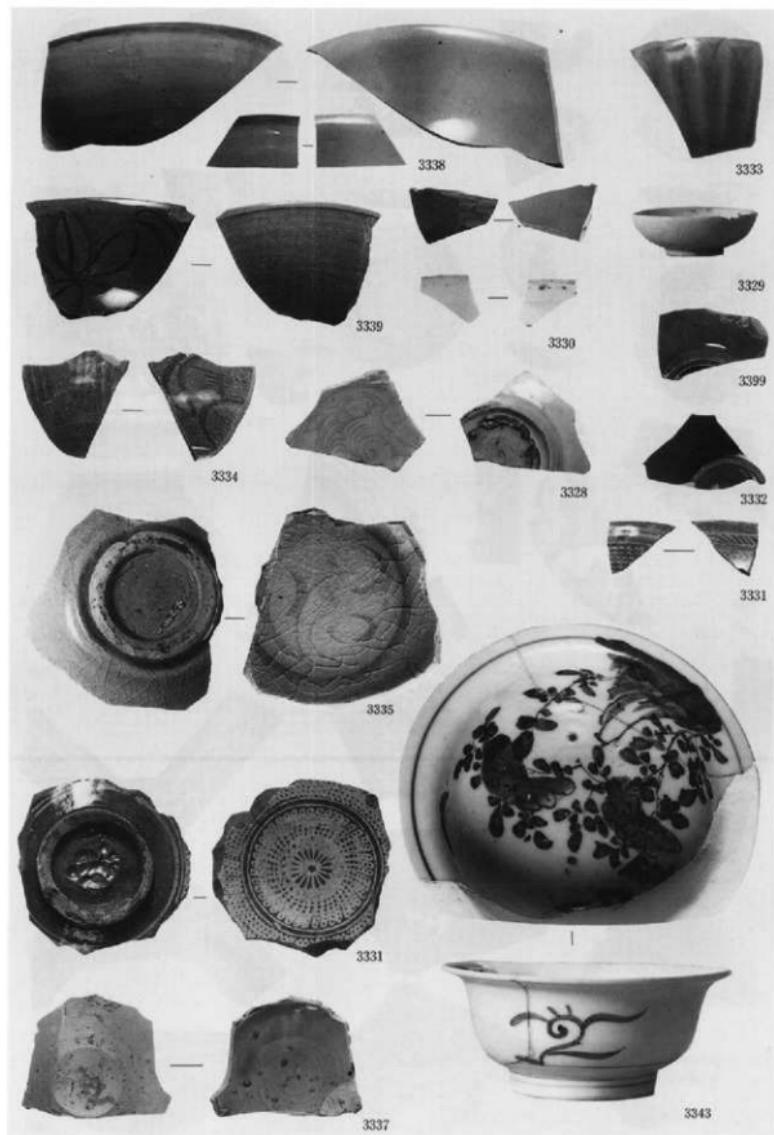


Fig.12 第1面検出時出土遺物実測図



Ph. 9 第1面検出時出土陶磁器(I)



Ph.10 第1面検出時出土陶磁器(2)

糸切り底の土師器皿・壺などがあり、2541・2543などの外底には板状圧痕がみられる。

3) 第2面検出遺構と出土遺物

SK-17 (Fig.13, Ph.12・13)

本土壙は本調査区の中央部よりやや南東寄りに位置し、東側の一部を擾乱によって切られている。南北方向3.1m、東西2.5mを測る方形を呈し、80cm弱遺存している。床面はほぼ平坦で、径25~40cmで5~20cmの深さをもつ小穴がある。壁はやや開き気味に立ち上がりっている。褐色~暗褐色、暗灰褐色のシルト~砂を覆土とし、焼土・炭化物が含まれているが、遺物としては少量の土師器片があるのみである。3221は、本土壙出土の完形品青花文磁器碗。

本土壙はSK-21・25と等間隔で分布しており、平面形は方形・隅丸方形・長方形と異なるが、同様の性格をもつと考えられ、穴倉か。いずれの土壙も出土遺物が少なく時期限定はできないが、中世末前後のものであろう。

SK-18 (Fig.15・16・30, Ph.12・13・17)

本土壙は本調査区東側の中央に位置し、径80cmの平面形円形を呈し、40cm遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がり鉢状をなしている。

本土壙中からは、角礫に混入した形で比較的まとまった土師器が出土した。2330~2337はいずれも糸切り底の土師器で、2336が皿、他は壺。2330~2333の外底には板状圧痕がみられる。2330~2333の口径は12cm、11.4cm、12.6cm、12cm、器高は2.6cm、2.5cm、2.5cm、2.3cm、底径7.6cm、7.2cm、8.2cm、7.7cm。2334~2337の口径は12cm、12cm、7.8cm、11cm、器高は2.4cm、2.6cm、2cm、2.2cm、底径8cm、7.8cm、5.5cm、7cm。

以上から、本土壙は14世紀頃のものといえよう。

SK-19 (Ph.17)

本土壙は、本調査区の北東部で検出した。長軸90cm、短軸74cmを測る平面形横円形を呈し、20cm前後遺存している。

本土壙からは、角礫に混入した形で糸切り底の土師器が少量出土した。2338・2339は皿、2340~2343は壺で、2341・2342は外底には板状圧痕がみられる。2338・2339の口径は7.4cm、8cm、器高は1.2cm、1.3cm、底径6.4cm、5.8cm。2340~2343の口径は11.8cm、12cm、13cm、11.6cm、器高は2.7cm、2.2cm、2.9cm、3cm、底径7.8cm、7.1cm、8.7cm、7.7cm。

SK-20 (Fig.15・16・28・31, Ph.12・14・21~23)

本土壙は、本調査区中央部よりやや北西寄りに位置している。径1.7mを測る平面形円形を呈し、

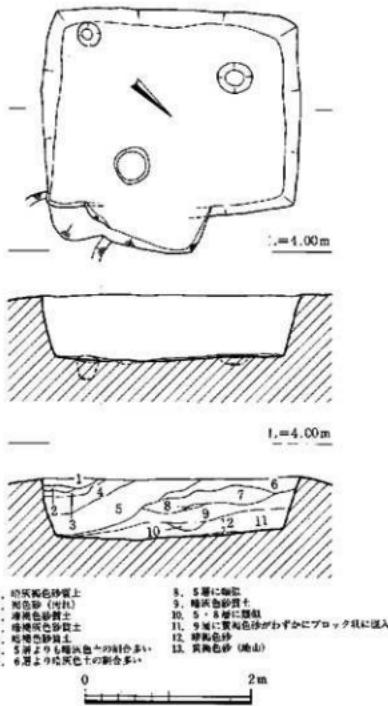


Fig.13 第17号土壙(SK-17)実測図

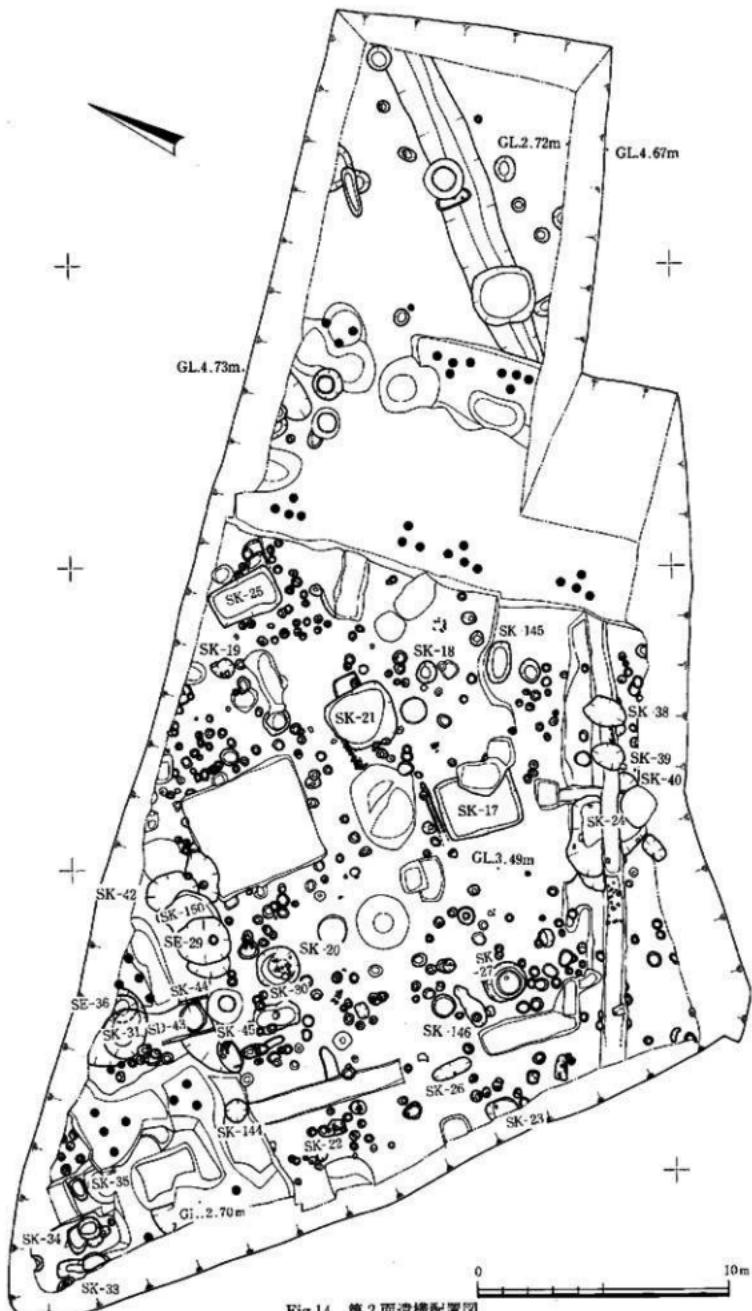


Fig.14 第2面造構配置図



1) 北東から



2) 南西から

Ph.11 第2面遺構分布状況

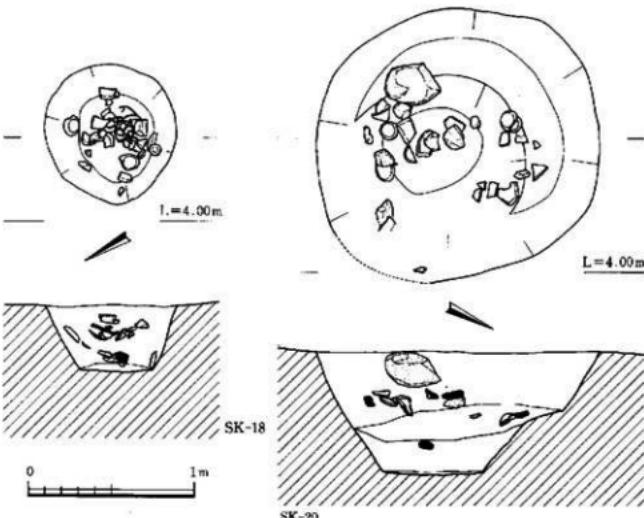


Fig.15 第18・20号土壙(SK-18・20)実測図

70cm遺存している。床面はほぼ平坦で開きながら立ち上がり、西側に棚が造り出されている。

本土壙からは、人頭大の円錐・角礫に混入した形で各種の遺物が出土した。2344~2347は糸切り底の土師器で、前2者は皿、後者は壺である。2344・2345の口径は11cm、10.8cm、器高は2cm、2.2cm、底径は7cm、7cm。2346・2347の口径は11.5cm、12cm、器高は2.6cm、2.3cm、底径8.2cm、9.6cm。2348も糸切り底の土師器壺で、外底に板状圧痕がみられ、器内外面は強いヨコナデ調整が施されており、器面は水引き状をなしている。口径13.7cm、器高3.2cm、底径6.9cm。2349は土師質の擂鉢で、内面は使用痕が顕著である。口径28cm、器高12.7cm、底径13.4cm。2350・2351は丸瓦。0295は鉄製刀子で、刃部は消失している。残存長5.9cm。0296は幅10.5cmを測る鉄津。

以上から、本土壙は中世後半から末にかけてのものといえよう。

SK-21 (Fig. 9・16・19・28, Ph.12・13・20・23)

本土壙は本調査区中央部より東寄りに位置し、柱穴等に切られている。南北方向・東西2.3mを測る隅丸方形を呈し、1m遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。床面中央に2個の深さ5~10cmの小穴があり、北西隅に床から20cm前後の高さの棚と30cm弱の柱穴がある。

本土壙からは、少量の土師器に混入して青磁等の遺物が出土した。3224は青磁碗、5054は口径17.4cmを測る滑石製石鍋、0297は鉄製鋤。

SK-22 (Fig. 18, Ph.14)

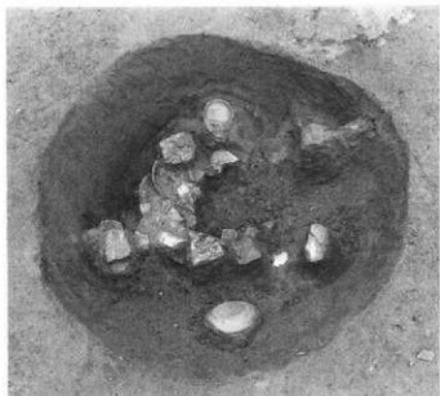
本土壙は本調査区の西側中央に位置し、南北方向1.1m、東西65cmを測る平面形不正形の土壙で20cm前後遺存している。

本土壙からは角礫に混入した形で、土師器等の遺物が出土した。2352・2353は糸切り底の土師器で、前者は皿、後者は壺である。口径8.2cm、12.8cm、器高1.5cm、2.8cm、底径6.4cm、8.3cm。

本土壙は土壙としたが、不正形であり、床面が不安定なこと、出土遺物などからSD-32の覆土か。



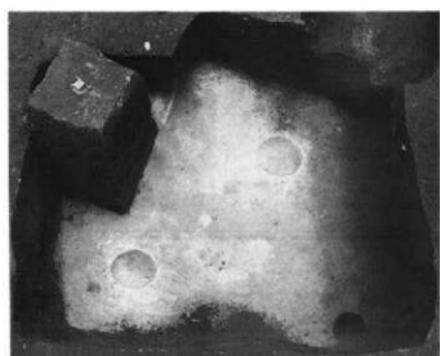
1) 第29号井戸完掘状況



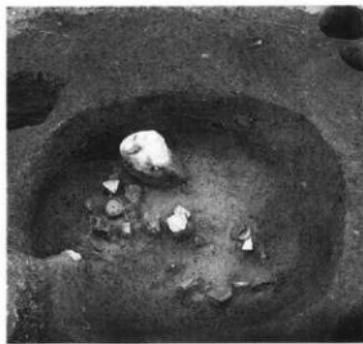
3) 第18号土壤遺物出土状態



2) 第36号井戸完掘状況



4) 第17号土壤完掘状況



5) 第20号土壤遺物出土状態



6) 第21号土壤完掘状況

Ph.12 第2面各遺構検出状況(1)

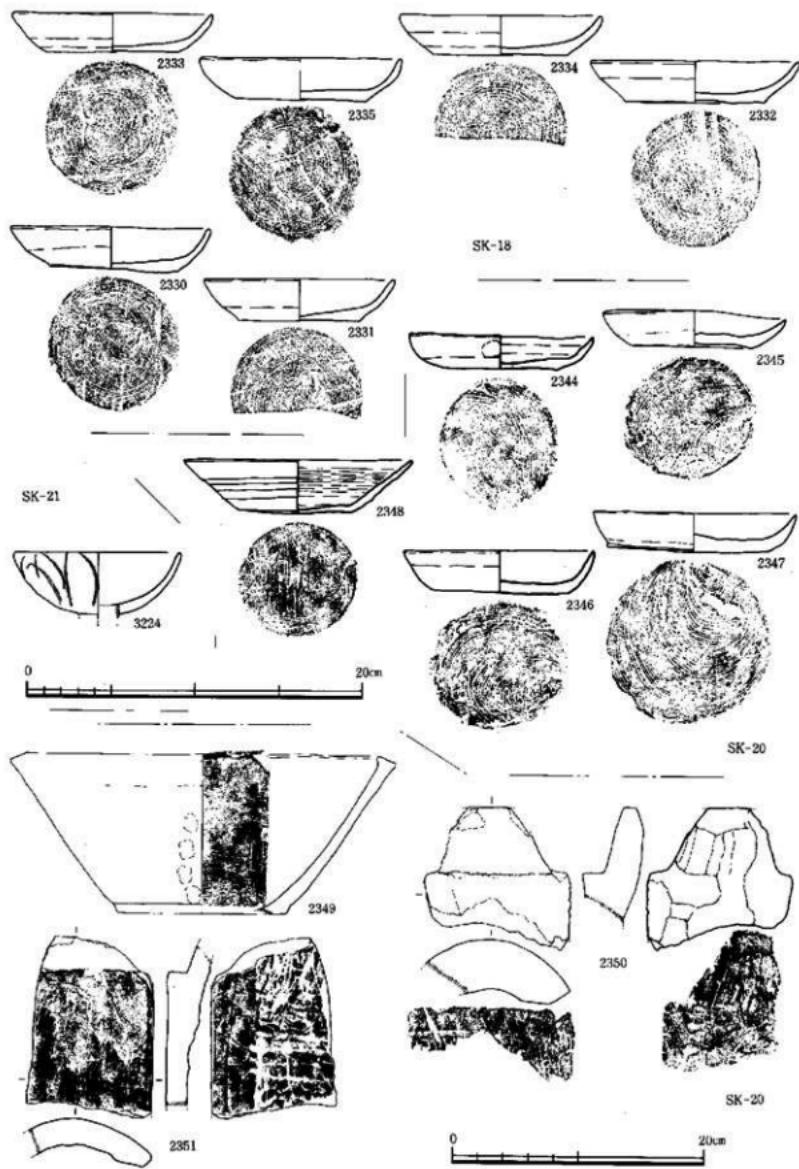
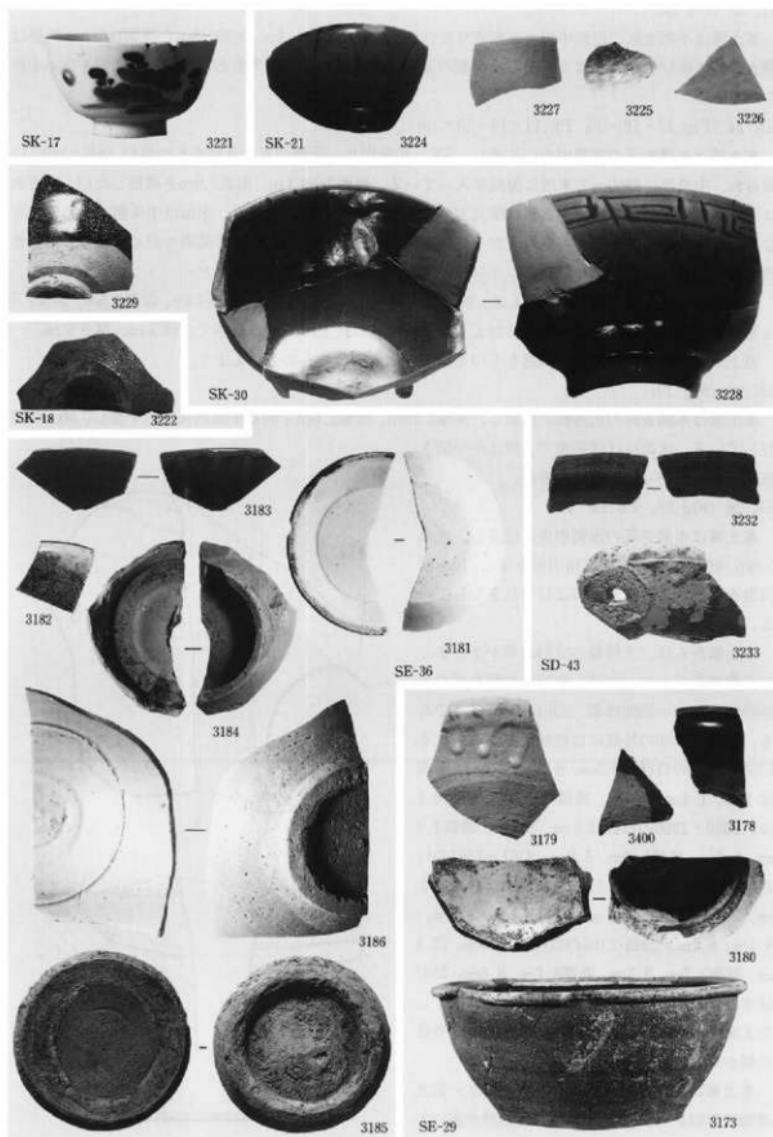


Fig.16 第18・20・21号土壤出土遺物実測図



Ph.13 第2面各遺構出土陶磁器(I)

SK-23 (Ph.15)

本土壙は本調査区の西側中央より南寄りに位置し、南北方向1.3m、東西0.8mを確認したが、西側は調査区外に延びている。本土壙からは少量の遺物が礫に混入した形で出土したが、固化できない小片のみである。

SK-24 (Fig.17・18・30, Ph.14・15・20・23)

本土壙は本調査区の南部中央に位置し、SK-40を切り、近世の瓦絆井筒をもつ井戸 (SE-143) に切られ、中央部に幅60cmで東西に擾乱が入っている。東西方向3m、南北2.9mを確認したが、南方向は調査区外に延びている。平面形は隅丸方形を呈し、60cm遺存している。床面は中央部が凹む皿状をなし、壁は大きく開きながら立ち上がっている。SK-17・21・25とはば等間隔で並んでおり、同じ性格をもつ穴倉か。

本土壙からは少量の遺物が出土した。2355は糸切り底の土師器環で、口径13cm、器高2.5cm、底径7.5cmを測る。5055は砂岩製で、面取り加工を加え円球状に仕上げている右球で、径3cm、厚さ2cm。

以上から、本土壙は穴倉の用途をもつ土壙で中世末前後のものといえよう。

SK-25 (Fig.19)

本土壙は本調査区の北西部に位置し、長軸2.75m、短軸1.6mを測る平面形長方形を呈し、50cm強遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。穴倉か。

SK-26 (Fig.18, Ph.14・17)

本土壙は本調査区の西側中央に位置し、長軸1.6m、短軸0.6mの平面形楕円形を呈し、10cm前後遺存している。横断面形はU字状をなしていない。

本土壙からは、土師器の完形品等がまとまった状態で出土した。2356～2366は糸切り底の土師器で、2356～2360は皿、2361～2366は環である。2362～2366の外底には板状圧痕がみられる。2356～2358の口径は8.5cm、8.2cm、8.4cm、器高は1cm、1.4cm、1.3cm、底径7.1cm、5.9cm、6.1cm。2359～2360の口径は8cm、8.2cm、器高1.5cm、1.7cm、底径5.8cm、5.9cm。2361～2364の口径は11.4cm、12.2cm、13cm、12.4cm、器高は3cm、2.8cm、2.8cm、3cm、底径7.4cm、8.5cm、8.1cm、8.1cm。2365～2366の口径は12.6cm、12.8cm、器高2.7cm、3.5cm、底径8.7cm、8.6cm。2367はボール状をなす肩から屈曲して開き口縁とした土鍋で、口径25.2cmを測り、器外面には多量の煤が付着している。

本土壙は溝状をなしていること、覆土・出土遺物の類似からSD-32の覆土の可能性が高いといえよう。

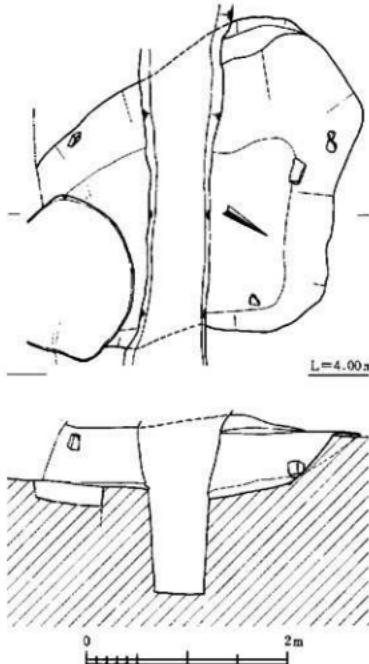


Fig.17 第24号土壙(SK-24)実測図

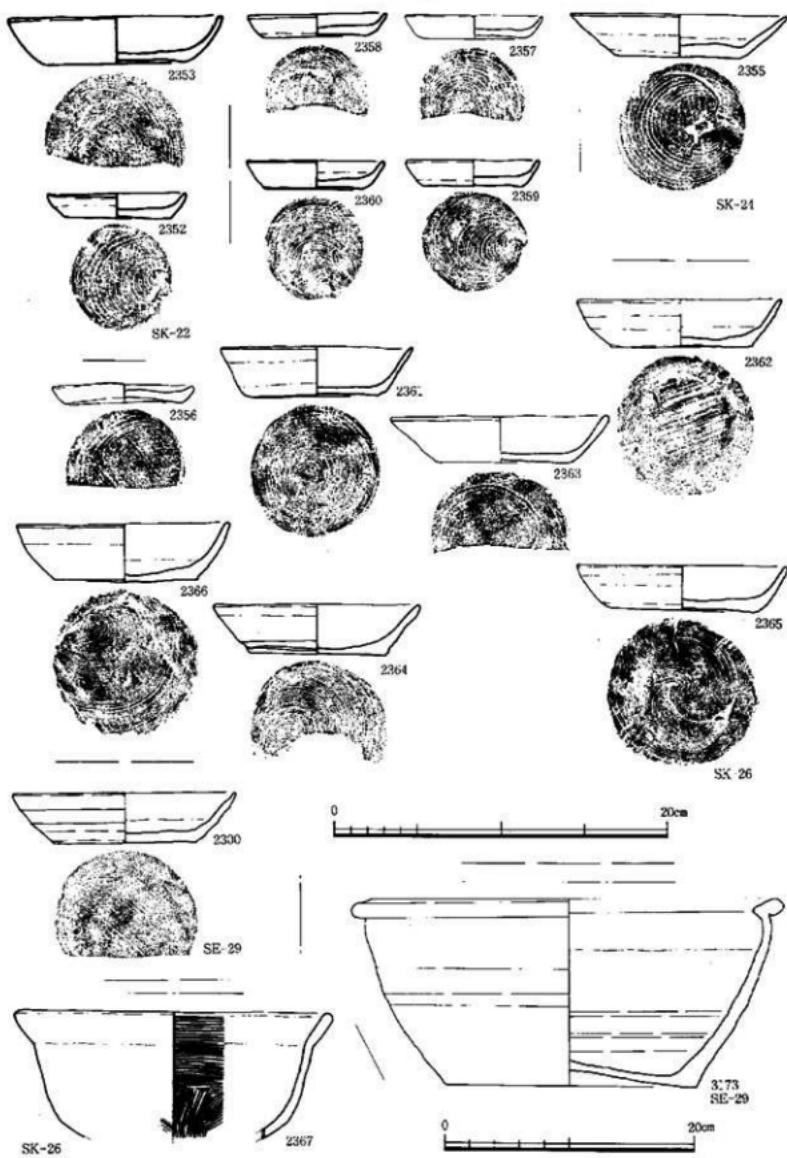


Fig.18 第22・24・26号土壙および第29号井戸出土遺物実測図

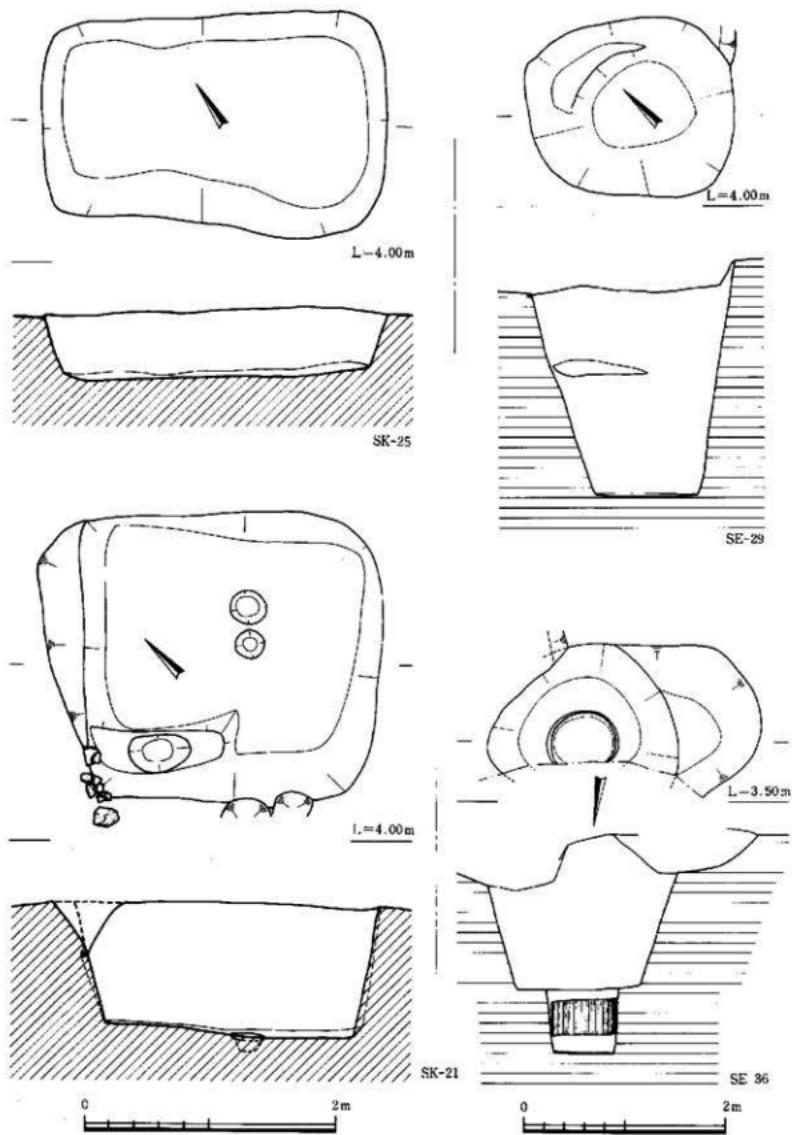
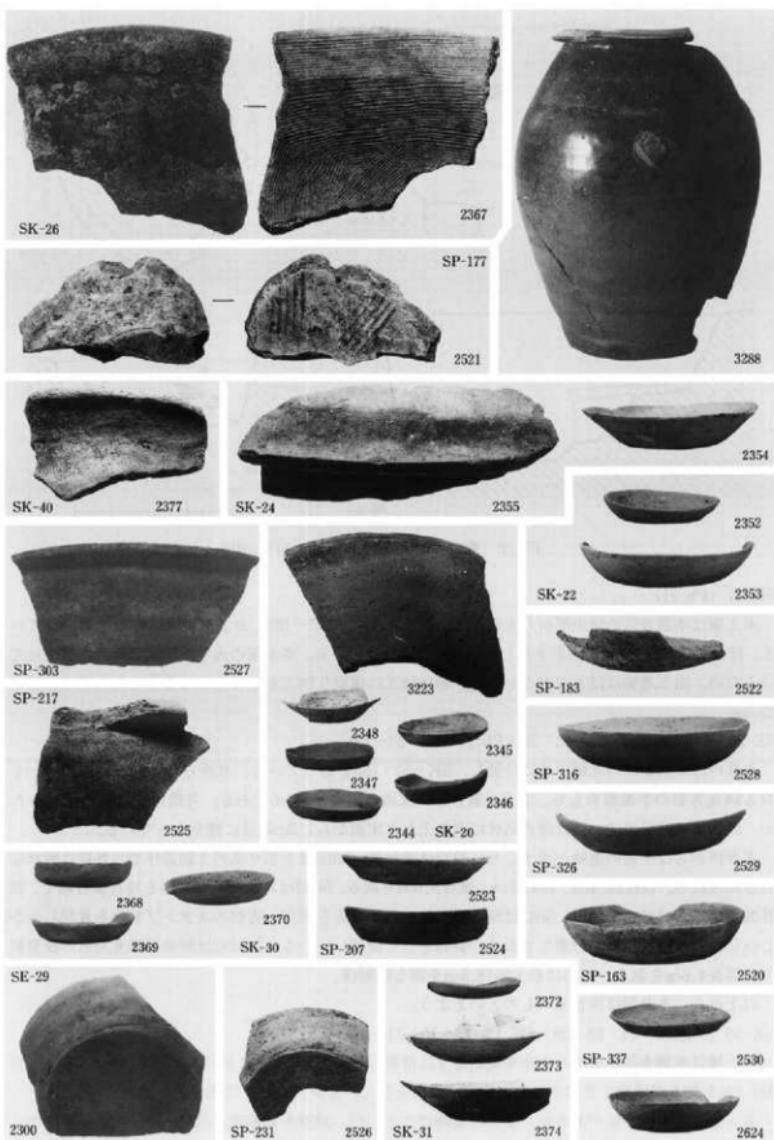


Fig.19 第21・25号土壤(SK-21・25)・第29・36号井戸(SE-29・36)実測図



Ph.14 第2面各遺構出土陶器・土師器

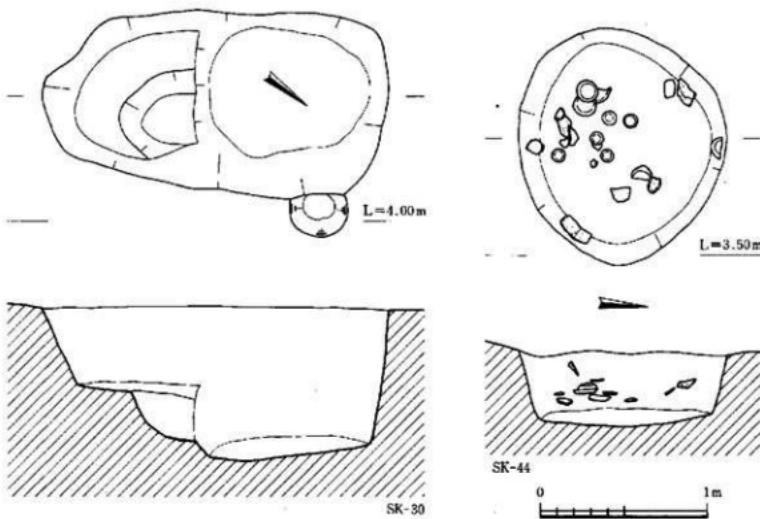


Fig.20 第30・44号土壙(SK-30・44)実測図

SK-27 (Ph.21)

本土壙は本調査区の中央部から南寄りに位置し、柱穴 (SP-162) および現代の井戸に切られている。径1.6m前後の平面形円形を呈し、60cm前後遺存している。本土壙の大半が現代の井戸と重なっているため、出土遺物はほとんどなかった。4018は瓦に面取り加工を加え球状に整形した土球で、重さ33.5g。

SE-29 (Fig.18・19・27・28・30, Ph.12~14・20~23)

本井戸は本調査区の北側中央に位置し、SK-52・150を切っている。東西方向2m強、南北1.8mを測る隅丸方形の平面形をもち、2.35m遺存し、床面の標高は1.1mである。井筒は検出できなかつたが、床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がり床面から1.3m前後に棚をもつていて。

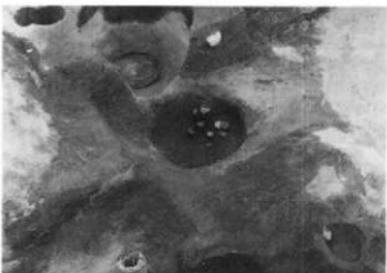
本井戸からは少量の遺物が出土した。3173は黄釉鉢、2300は糸切り底の土師器坏で、外底に板状压痕がみられる。口径13.4cm、器高3cm、底径8.6cmを測る。5042は口径29cm弱を測る滑石製石鍋で、器外面には煤が付着している。5043は滑石製石鍋の口縁付近を利用し方形のスタンプ製作を意図したが、しかし、器外面には煤が付着しており、製品として使用していない。0282は断面形隅丸方形の鉄製釘で、器長4.6cmを測る。0283は最大幅18.5cmを測る碗形沖。

以上から、本井戸は中世末のものといえよう。

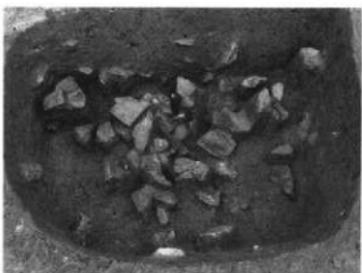
SK-30 (Fig.20・21・24・28・31, Ph.13~15・21~22)

本土壙は本調査区中央部からやや北西寄りに位置し、SP-233などに切られている。長軸2m強、短軸1.1mを測る平面形不正形を呈し、床面は直状をなし、床から40cm上に棚をもつていて。

本土壙からは、少量であるが、各種の遺物が出土した。3228は青磁碗、2368・2369は糸切り底の土師皿で、口径6.4cm、6.9cm、器高1.6cm、1.5cm、底径4.8cm、4.6cmを測る。2370は糸切り底の耳皿で、



1) 第44号土壌遺物出土状態



3) 第23号土壌遺物出土状態



2) 第24号土壌完掘状況



4) 第30号土壌完掘状況

Ph.15 第2面各遺構検出状況(2)

口径6.8~7cm、器高1.6cm、底径5cmを測る。2371は丸瓦。0200は銅製飾板、0199は銅製キセル、0298・0299は鉄製品で前者は盤?、後者は断面形隔丸方形の釘、0300は碗形棒。

以上から、本土壙は中世末前期のものといえよう。

SK-31 (Fig.21・24, Ph.14・16・21)

本土壙は本調査区の北側中央よりやや西寄りに位置し、SE-36を切り、柱穴に切られている。長軸2m弱、短軸1.7m強を測る平面形楕円形を呈し、60cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がっている。

本土壙からは、少量であるが各種の遺物が出土した。3396は鉄絵盤、2372~2374は糸切り底で板状圧痕がみられる土師器である。2372は皿、他は壺。2372~2374の口径は7.2cm、12cm、14.2cm、器高は1.3cm、2.7cm、3.2cm、底径4.7cm、5.4cm、6cm。2375は丸瓦。

以上から、本土壙は中世末のものといえよう。

SE-36 (Fig.19・28, Ph.12・13・22)

本井戸は本調査区北側中央部よりやや西寄りに位置し、SK-31に切られている。径1.9mで1.55m遺存する鉢状をなす掘り方をもち、掘り方の中央に径70cmの井筒がある。井筒は幅6~8cm、長さ35cm、厚さ1cmの杉板を巡らしている。井戸底の標高1mである。

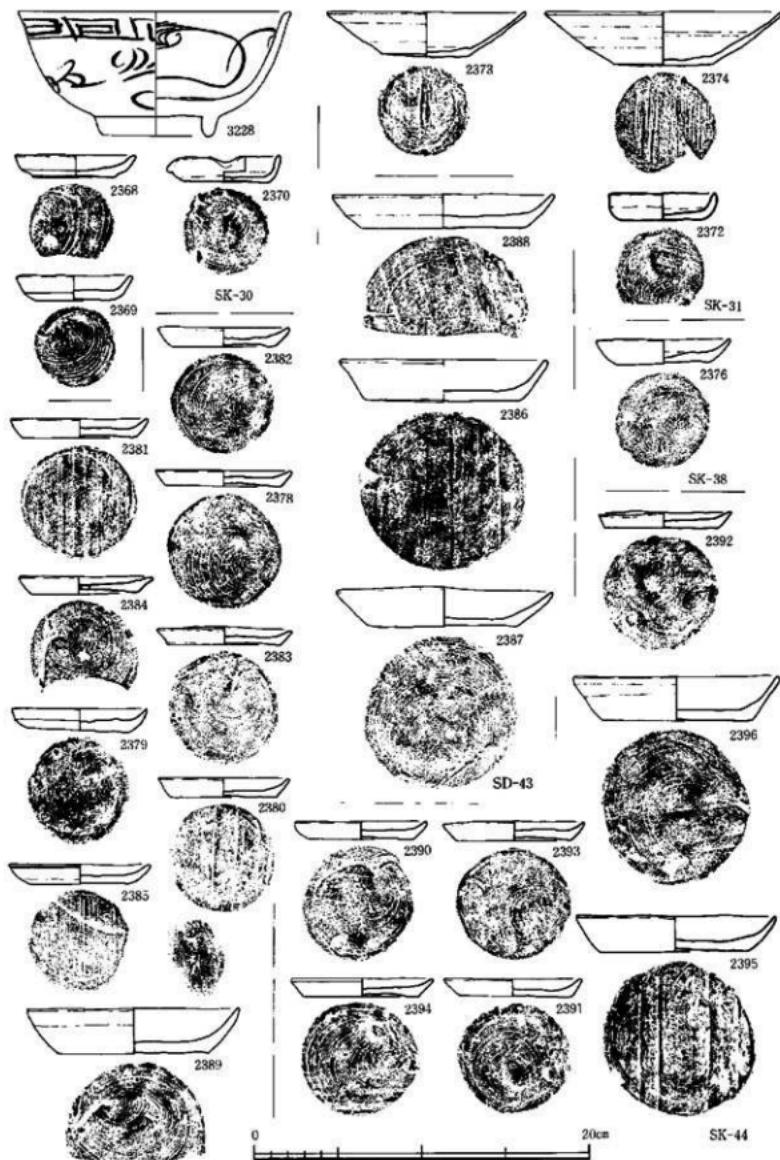
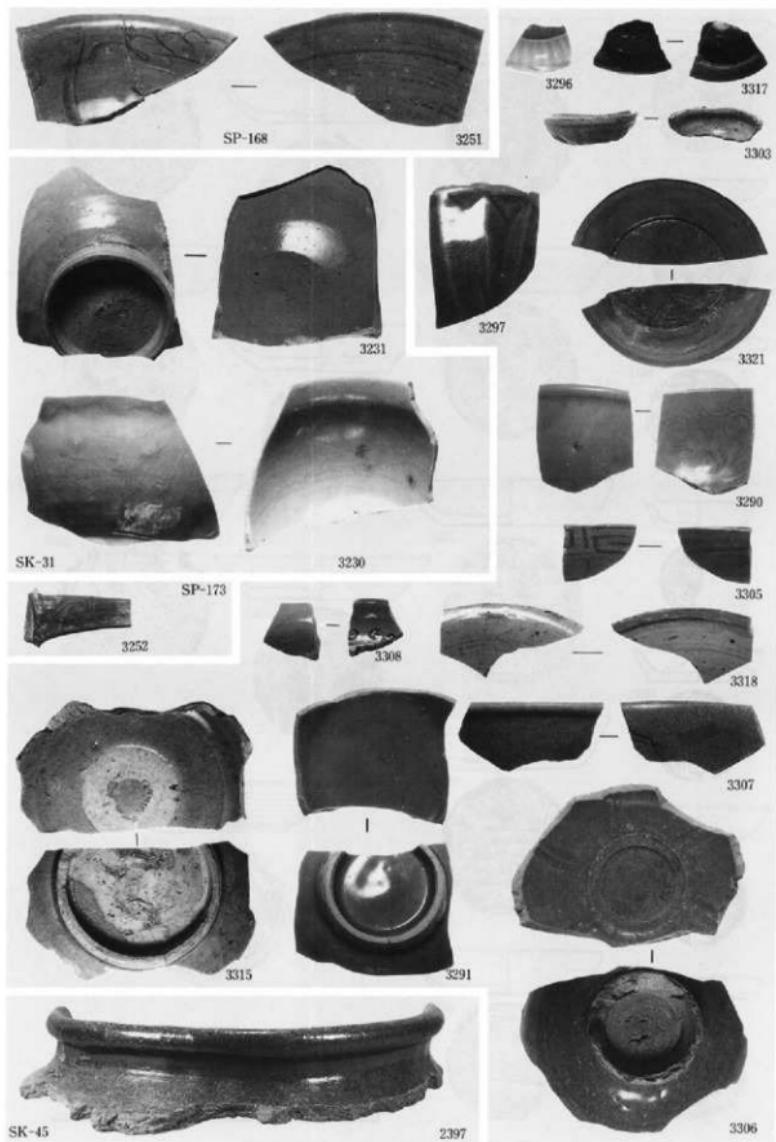


Fig.21 第2面各土壙山七種器・土師器実測図



Ph.16 第2面各遺構および検出時出土陶磁器(2)

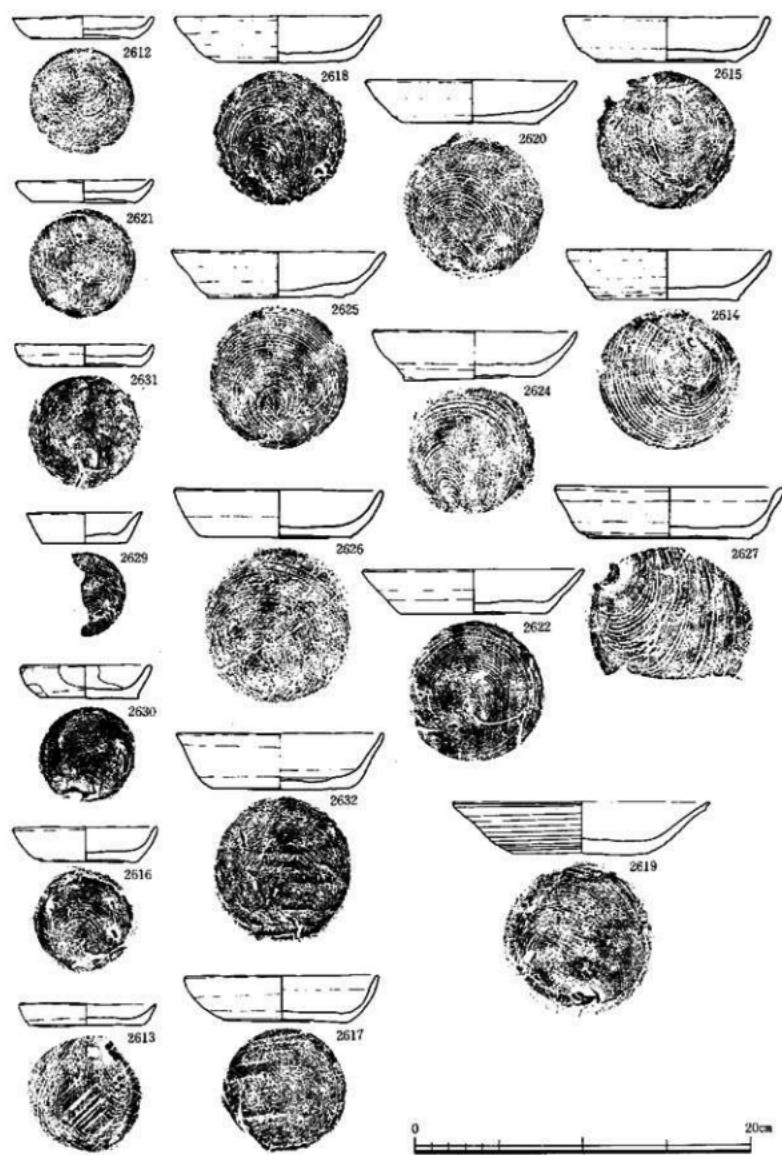
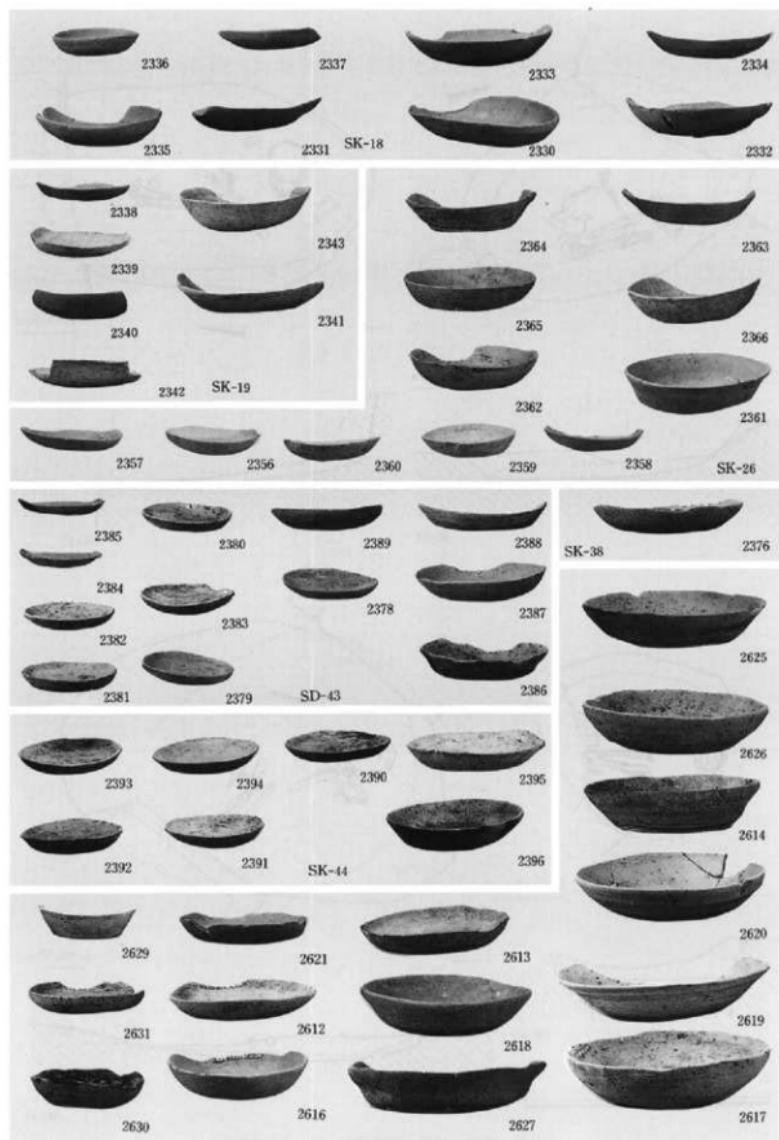


Fig.22 第2回検出時出土土器実測図



Ph.17 第2面各造構および検出時出土土器

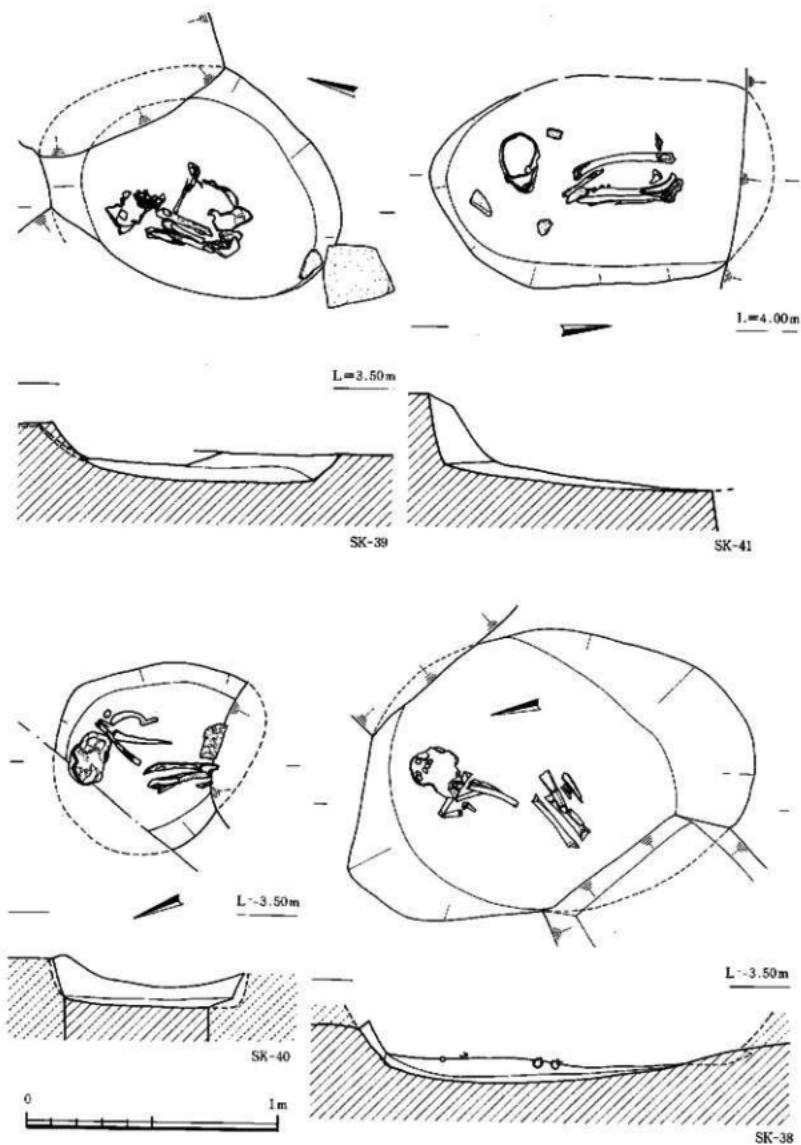
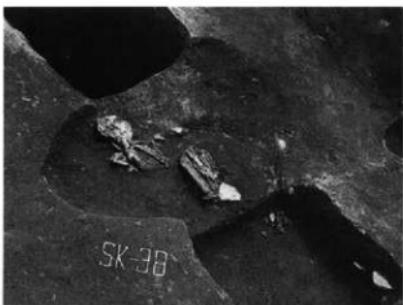


Fig.23 第38~41号七堵墓(SK-38~41)実測図



1) 土壌墓分布状況



2) 第38号土壌墓



3) 第40号土壌墓



4) 第39号土壌墓人骨遺存状態

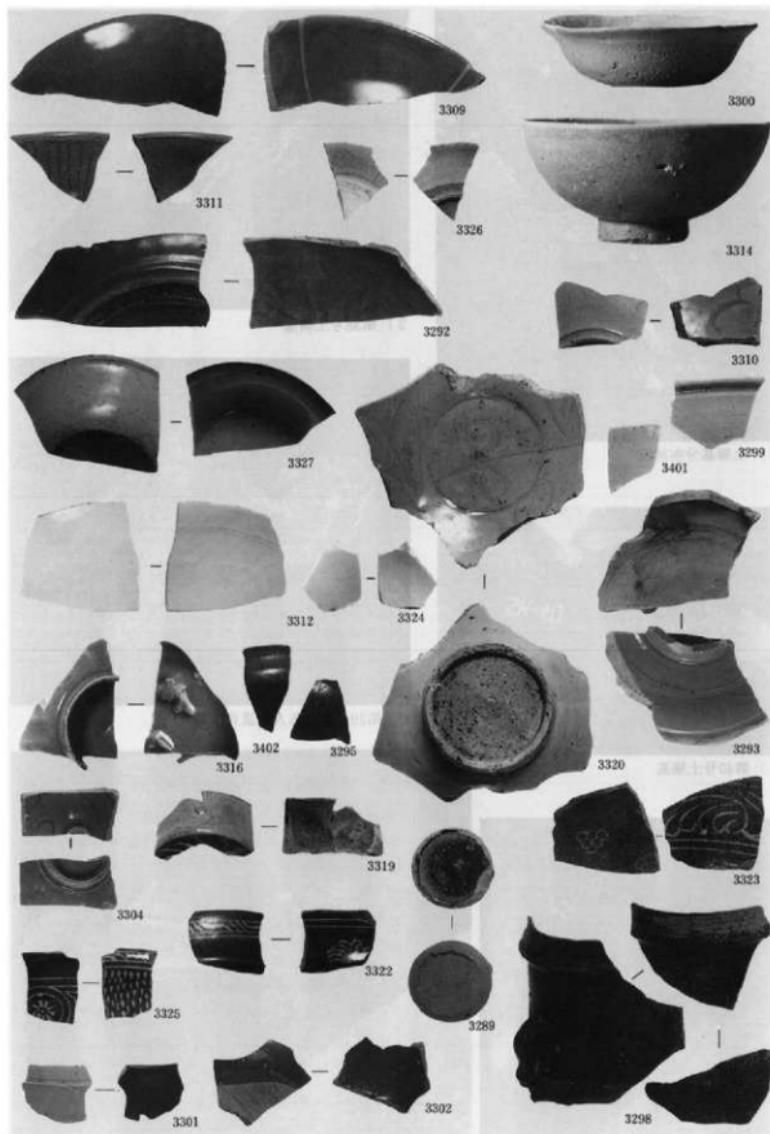


5) 第41号土壌墓検出状況

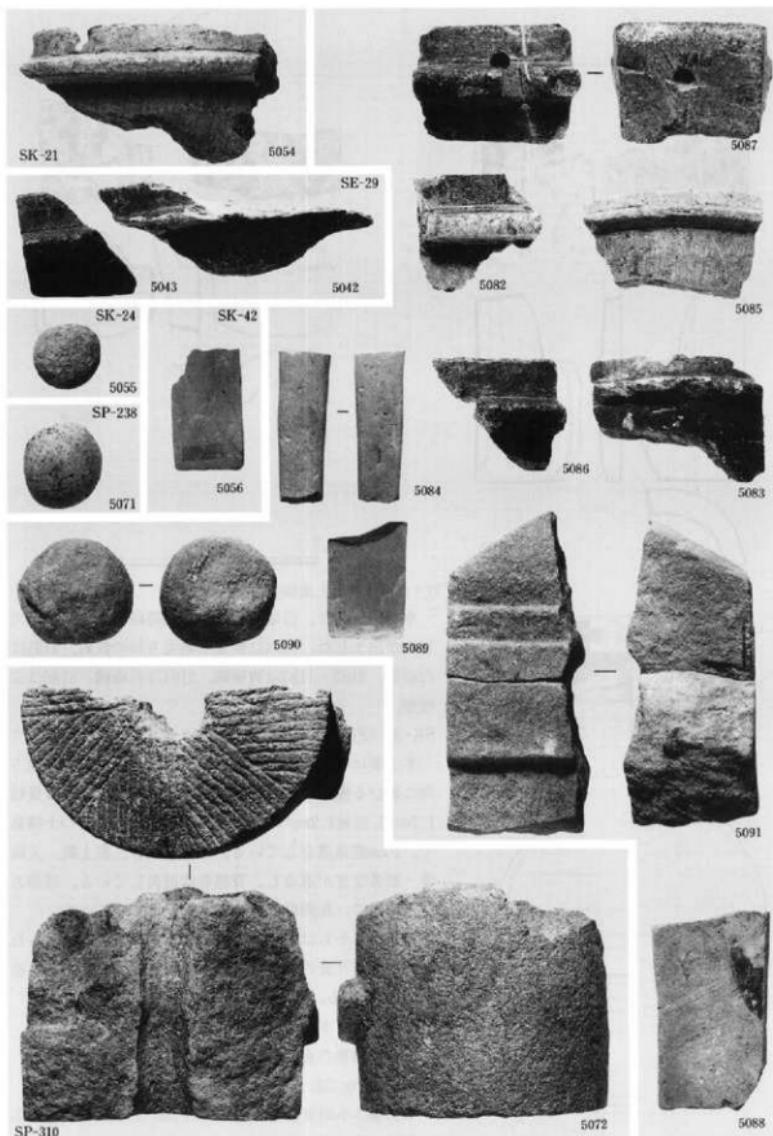


Ph.18 土壌墓検出状況

6) 第41号土壌墓遺存状態



Ph.19 第2面検出時出土陶磁器(3)



Ph.20 第2面各遺構および検出時出土石鏃・石製品

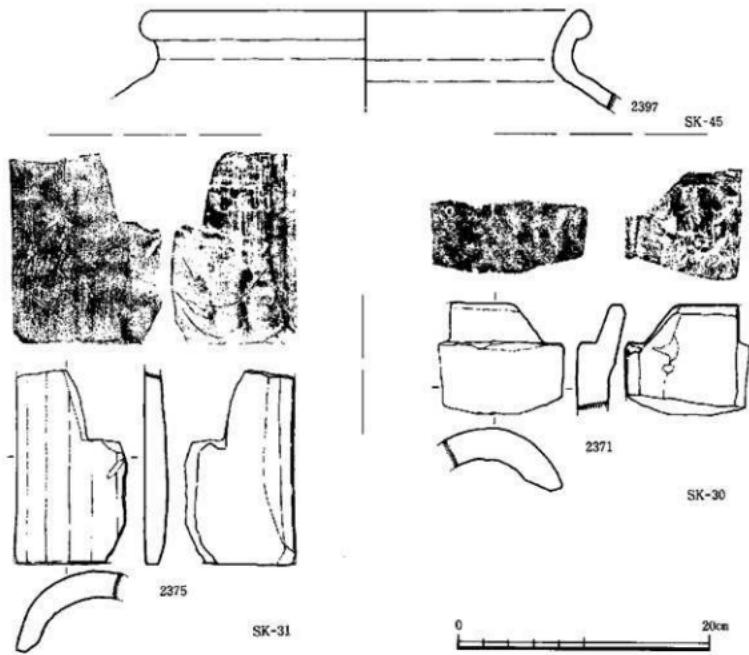


Fig.24 第30・31・45号土壙出土遺物実測図

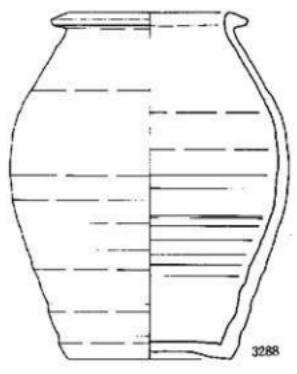


Fig.25 第2面検出時出土陶器実測図

本井戸からは、白磁・青磁等輸入陶磁器を含む少量の遺物が出土した。0284は断面形隅丸方形の鉄釘。3181は白磁皿、3182・3183は青磁碗、3184は白磁碗、3186は白磁壺。

SK-38 (Fig.21・23・31, Ph.17・18・23)

本土壙は本調査区の南東部に位置し、中央部を東西方向に延びる擾乱によって切られている。検出面では長軸1.7m弱、短軸1.2mの平面形楕円形の掘り方をもつ土壙墓で、20cm前後遺存している。人骨は頭骨、左上腕、大腿骨・脛骨などが遺存し、脊椎骨は消失している。埋葬方位は北頭で、左側臥屈葬の埋葬形態をとっている。

本土壙墓からは、土師器皿など少量の遺物が出土した。2376は糸切り底の土師器皿で、口径8cm、器高1.5cm、底径5.6cmを測る。

以上から、本土壙墓は加葬の北枕で埋置したもので、近世初期前後のものといえよう。

SK-39 (Fig.23, Ph.18)

本土壙は本調査区南東部のSK-38の西側で検出した土壙墓で、中央部を擾乱によって破壊されている。検出面

では長軸1.2m、短軸90cmの平面形楕円形の掘り方をもち、25cm遺存している。人骨は頭骨、右大腿骨、骨盤、背骨が遺存し、北頭で右側臥屈葬の埋葬形態をとっている。

本土墳墓は北枕で埋置したもので、出土遺物はないが、SK-38等とほぼ同時期の近世初期前後のものといえよう。

SK-40 (Fig.23, Ph.14・18)

本土墳は本調査区南側中央で検出し、SK-24・SE-143に切られ、擾乱によって破壊されている。検出面では長軸1m弱、短軸75cmの平面形楕円形の掘り方をもち、20cm弱遺存している土墳墓である。人骨は頭骨・右上腕骨・左大腿骨・骨盤が遺存し、右側臥屈葬の埋葬形態をとり北頭で埋置されている。

本土墳墓は北枕で屈葬の形態をとり、女性?を埋置したもので、近世初期前後のものといえよう。

SK-41 (Fig.23, Ph.18)

本土墳は本調査区南側中央に位置し、SK-24に切られている。検出面では長軸(1.4m)、短軸80cmの平面形楕円形の掘り方をもち、30cm遺存している土墳墓である。人骨は頭骨・大腿骨が遺存し、南頭で屈葬の形態をとり埋置されている。

本土墳墓も南枕と埋葬方位はSK-38~40と異なるが、同様の埋葬形態をとっており、SK-38~41まで並んで埋置されていることから同一時期の土墳墓群といえよう。

SK-42 (Fig.27, Ph.20)

本土墳は本調査区北側の中央に位置し、SK-47を切り、SK-150に切られている。長軸2.1m、短軸1.5mを測る平面形楕円形を呈し、皿状をなし20cm弱遺存している。5056は凝灰岩製の砥石で、仕上げ用か。

SD-43 (Fig.21, Ph.13・17)

本溝は、本調査区の北側中央からやや西寄りに位置している。擾乱のなかでの検出のため幅1.4m強、長さ2.2mを確認し、10cm前後遺存している。床面が平坦であり、北西・南東方向への延長部が確認できないことから、土壌の可能性が高いといえよう。

本溝からは比較的まとまった土師器が出土した。2378~2385は糸切り底の土師器皿で、2380・2381・2385の外底には板状圧痕がみられる。口径は8cm前後で、2380が7.8cmと小さく、2385が8.4cmと大きい。器高は1.15cm前後で、2379が1.4cmと高い。底径は6.4cm前後で、2378の7cmが大きく、2385の5.7cmが小さい。2386~2389は糸切り底の土師器壺で、2386・2388の外底には板状圧痕がみられる。2386・2387の口径は12.5cm、13cm、器高は2.5cm、2.4cm、底径9.4cm、8.9cm。2388・2389の口径は13.2cm、12.6cm、器高は2cm、2.7cm、底径9.9cm、9cm。

以上から、本溝は長方形の平面形をもつ上腹と考えられ、出土土師器から中世後半から中世末のものといえよう。

SK-44 (Fig.20・21, Ph.15・17)

本土墳は本調査区北側の中央よりやや西寄りで検出し、SD-43に切られている。径1.25mを測る円形の平面形をもち、40cm強遺存している。床面は皿状をなし、壁はやや聞き気味に立ち上がっている。

本土墳からは比較的まとまった土師器が出土した。2390~2396は糸切り底の土師器で、2390~2394は皿、2395・2396は壺である。2390~2394の口径は8.18cm前後で、2394が大きく、器高は1.1cm弱前後、底径は6.7cm弱前後で、2390の6.4cmが小さい。2395・2396の口径は12cm、12.4cm、器高は2.3cm、2.6cm、底径は8.7cm、9cm。2393・2395の外底には板状圧痕がみられる。

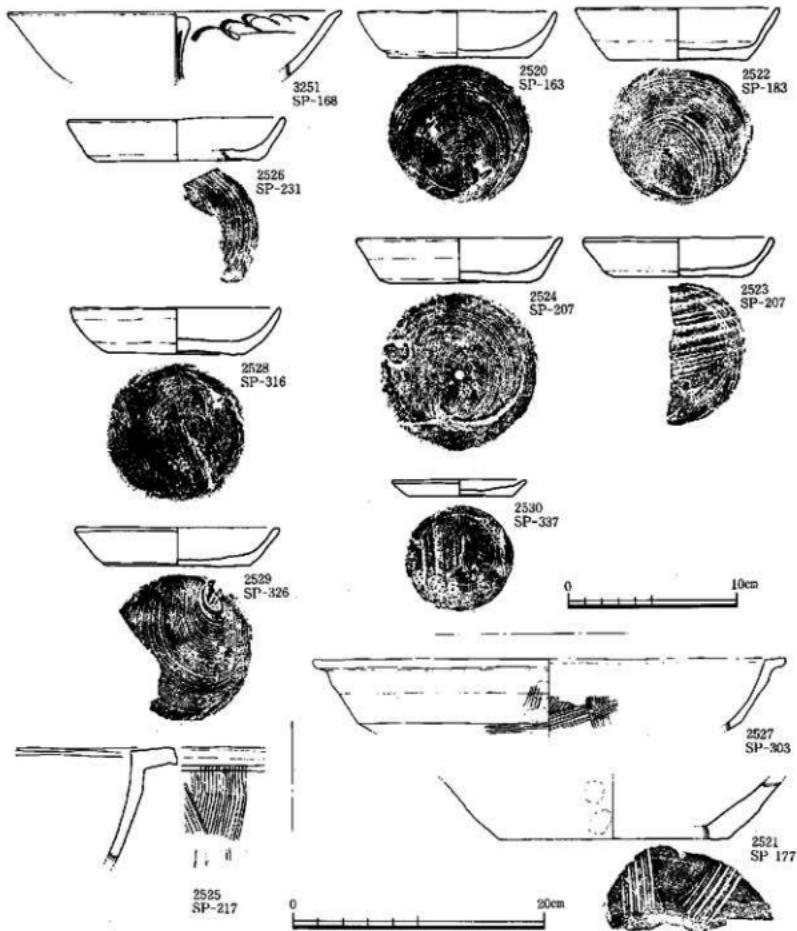
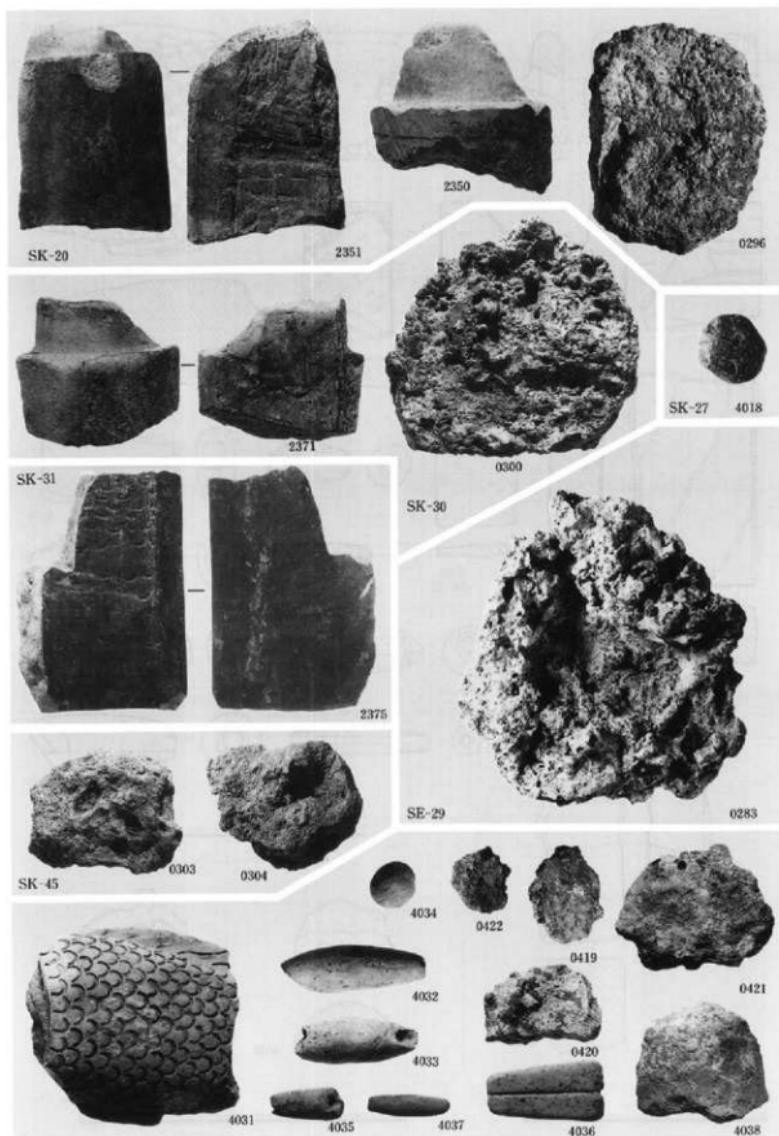


Fig.26 第2面各柱穴出土遺物実測図

SK-45 (Fig. 24・28, Ph. 16・21・22)

本土塙は本調査区北側中央からやや西寄りに位置し、擾乱によって切られている。検出面では長軸1.55m、短軸85cmを測る平面形橢円形を呈し、50cm前後遺存している。

本土塙からは、少量であるが各種の遺物が出土した。2397は口径33.2cmの備前焼の大甕、0301・0302は横断面形方形の鉄釘、0303・0304は鉄滓。



Ph.21 第2面各造構および検出時出土瓦・土製品・鐵滓

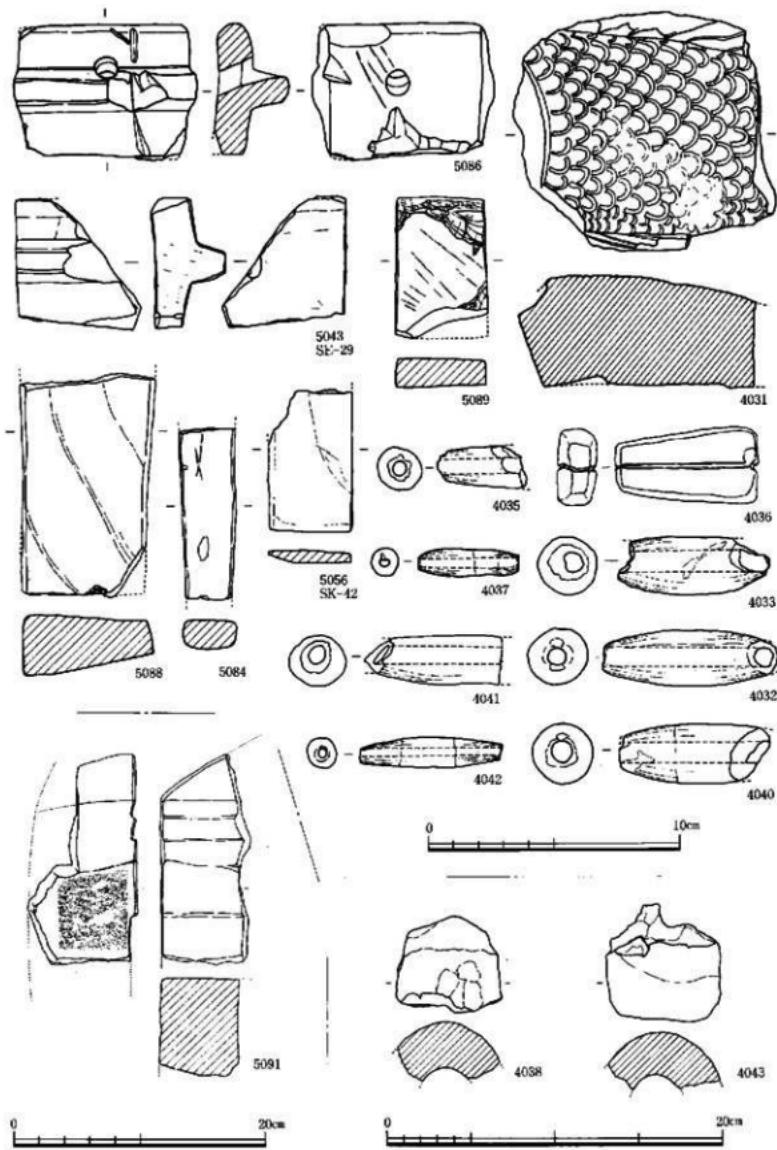
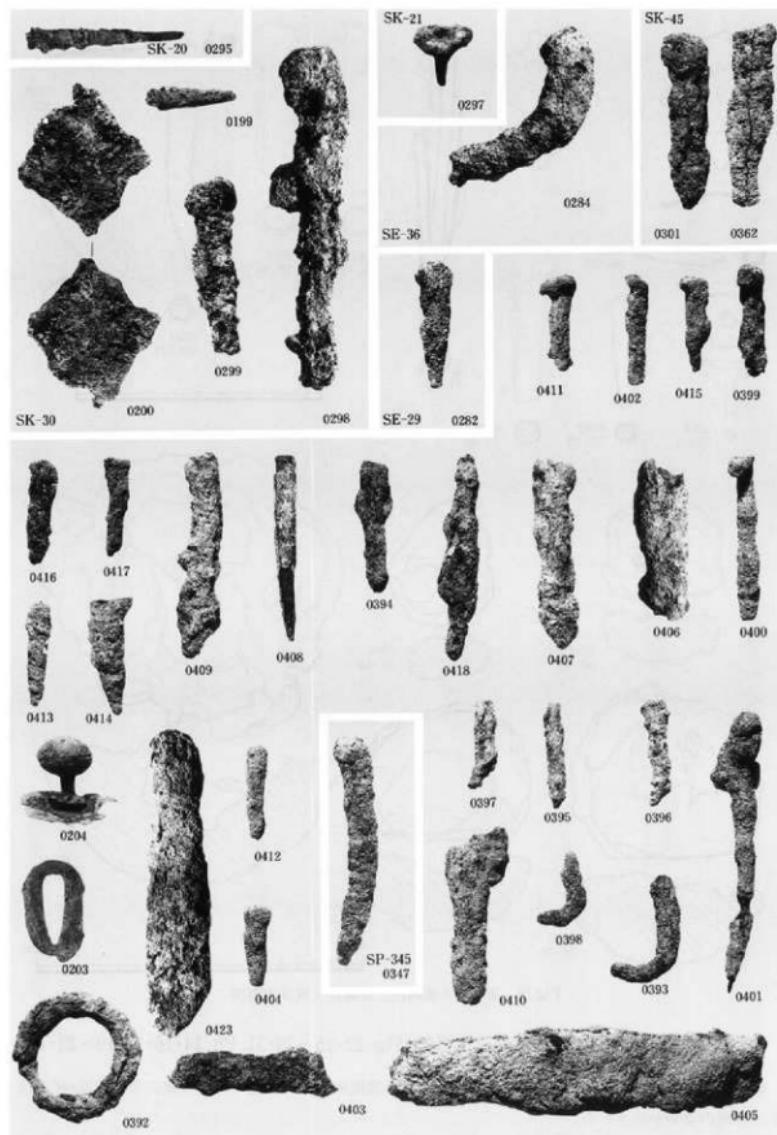


Fig.27 第2面各造構および検出時出土石製品・土製品実測図



Ph.22 第2面各遺構および検出時出土鉄器

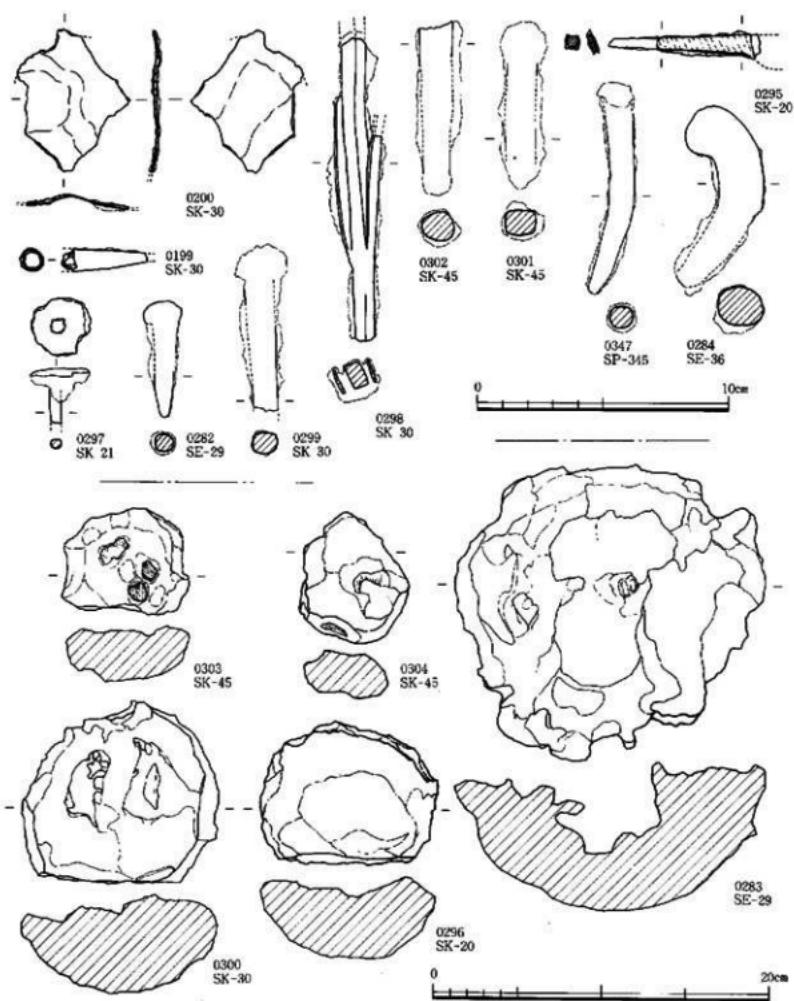


Fig.28 第2面各遺構出土金属器・鉄津実洞図

4) 第2面検出柱穴および検出時出土遺物 (Fig. 22・25~29・31, Ph. 14・16・17・19~23・41)

第2面検出の212個の柱穴 (SP-155~367) や第2面検出時には多量の糸切り底の土師器皿・壺のか、各種の遺物が出土した。

3288は口径11.6cm、器高20.7cm、底径9.6cmの褐釉壺。2628は口径28cm、器高11.8cmの片口の瓦器質

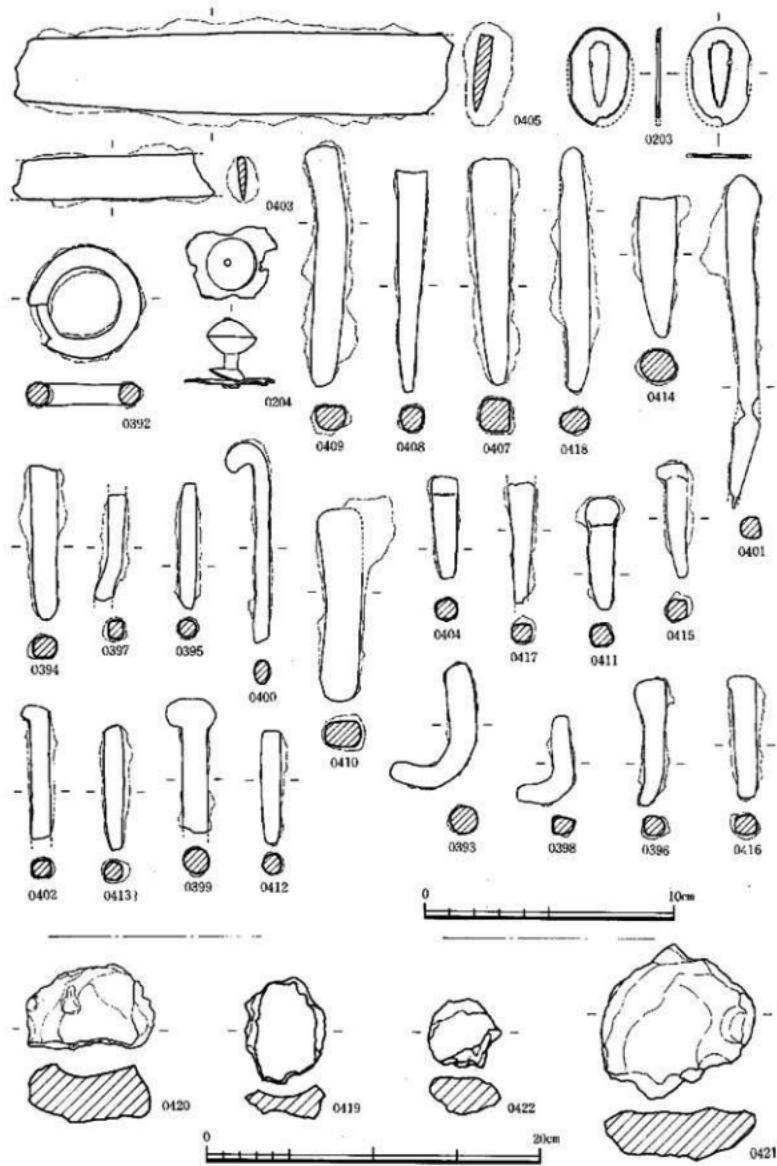


Fig.29 第2面検出時出土鉄器・鉄滓実測図

喜祐通寶 (1056)	元豐通寶 (1078)	□二元寶	不 明	第1面
SP-131	SP-145			
□□□	寛永通寶 (1636)	皇宋通寶?	□□□	開元通寶 (966)
第1面				
崇禎通寶 (1628)	□□□□	元祐通寶 (1086)	至道元寶 (995)	祥符通寶 (1002)
第1面	SE-29	SK-18	SK-24	
開元通寶 (943)			大曆通寶 (1018)	皇宋通寶 (1039)
SK-24				
嘉祐通寶 (1057)	治平通寶 (1064)	元豐通寶 (1078)		紹聖元寶 (1094)
SK-24				
大觀通寶 (1107)	政和通寶 (1111)	至元通寶 (1285)	嘉定通寶 (1208)	
SK-24				

Fig.30 第1・2面各造構および検出時出上銅錢拓影(1)



Ph.23 第1・2面各造構および検出時出土銅錢

□□□□	□□元寶	□□□□	元豐通寶(1078)	皇宋通寶		
SK-20	SK-21	SK-30	SK-37	SK-38		
治平元寶(1064)	開元通寶(621)	淳化元寶(990)	皇宋通寶(1039)	□□□□		
SP-261	第2面検出時					
嘉祐通寶(1056)	元豐通寶(1078)	元祐通寶(1093)	紹聖元寶(1094)	□□□□		
第2面検出時						
□□□□	熙寧元寶(1068)	聖宋元寶(1101)	50銭			
第2面検出時						
	第2面					
開禧通寶(1201)	第2面					
	第2面					
崇寧元寶(1068)						

Fig.31 第2面各造構および検出時出土銅錢折影(2)

擂鉢。2527は口徑37.6cmを測る土師器土鍋。5072は挽臼の上臼で、径19cmを測る。5082・5083・5085は滑石製石鍋で、口徑20.6cm、20cm、17.6cmを測り、前2者の外面には煤が付着している。5086・5087は石鍋再利用品。5091は砂岩製板碑。0203は銅製の刀留具、0204は銅製飾り金具、0403・0405などは鉄刀。他に銅鏡、刀子、釘がある。石製品・土製品としては、石鍤・土鍤や輪などがある。

3. 第3・4面の調査

第3面は、第2面から20cm前後下の標高3.45m～3.10mの黄色～黄白色砂（地山）および褐色～暗褐色～暗灰褐色のシルト～砂の面で、西北部は地山の面となる。この面では、井戸10基（SE-50・52等）、土壌29基（SK-46～49・83・148・151等）と溝4条（SD-32・74・51とSX-37は溝と考えられるので）と柱穴多数を検出した。なお、SD-32・74、SX-37は道路の測溝に当たることが確認できた。

第4面は、標高3.10m～2.50m前後の黄色～黄白色砂の地山面で、井戸7基（SE-87・154～156等）、土壌41基（SK-84・116～118・157～165等）、溝8条（SD-76・85等）を検出した。

第4面の遺構の中にはSK-84など古い時期のものもあるが、14世紀前後のものも含まれ、第3面の遺構は13～16世紀のものがある。ここでは第3面検出遺構、第3面検出道路、第3面検出柱穴および検出時出土遺物、第4面検出遺構、第4面検出溝状遺構、第4面検出時出土遺物に分けてみていくことにする。

1) 第3面検出遺構と出土遺物

SK-47 (Fig. 34, Ph. 25・26)

本土壌は本調査区の北側中央で検出し、長軸2.3m、短軸1m強を測る平面形長方形を呈しており、1m弱遺存している。断面形は鉢状をなし、棚があり、棚部から上に角礫の集石がみられる。

SE-52 (Fig. 36・40, Ph. 27・31)

本井戸は本調査区の北側中央からやや西寄りで検出し、SE-60を切っている。検出面では径3mを測り、1m遺存の鉢形をなす掘り方をもち、掘り方の中央に径1.4mの井筒があるがSE-29によって破壊されており、もともとは径80cm前後か。本井戸からは石錐（5057）や糸切り底土師器坏（2398）などが少量出土した。

SK-56 (Fig. 32・36, Ph. 25・27)

本土壌は本調査区の中央部からやや北西寄りに位置し、SD-74を切っている。本土壌は径70cm強を測る平面形円形を呈し、25cm前後遺存している。本土壌の上部に3～10cmの層をなして残飯と考えら

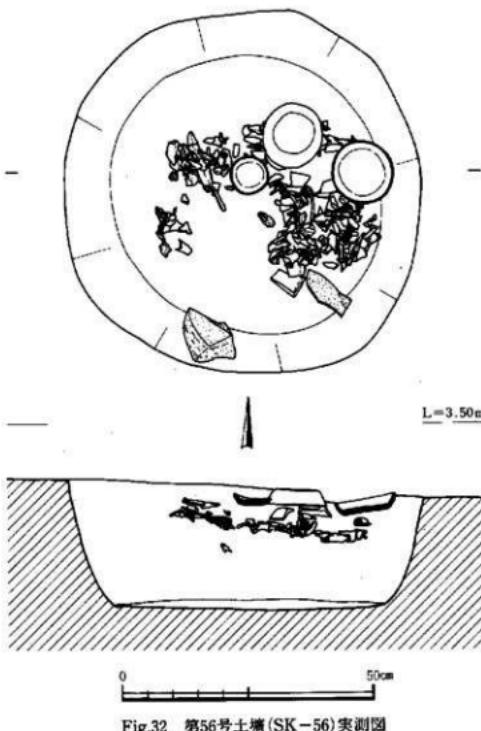


Fig.32 第56号土壌（SK-56）実測図

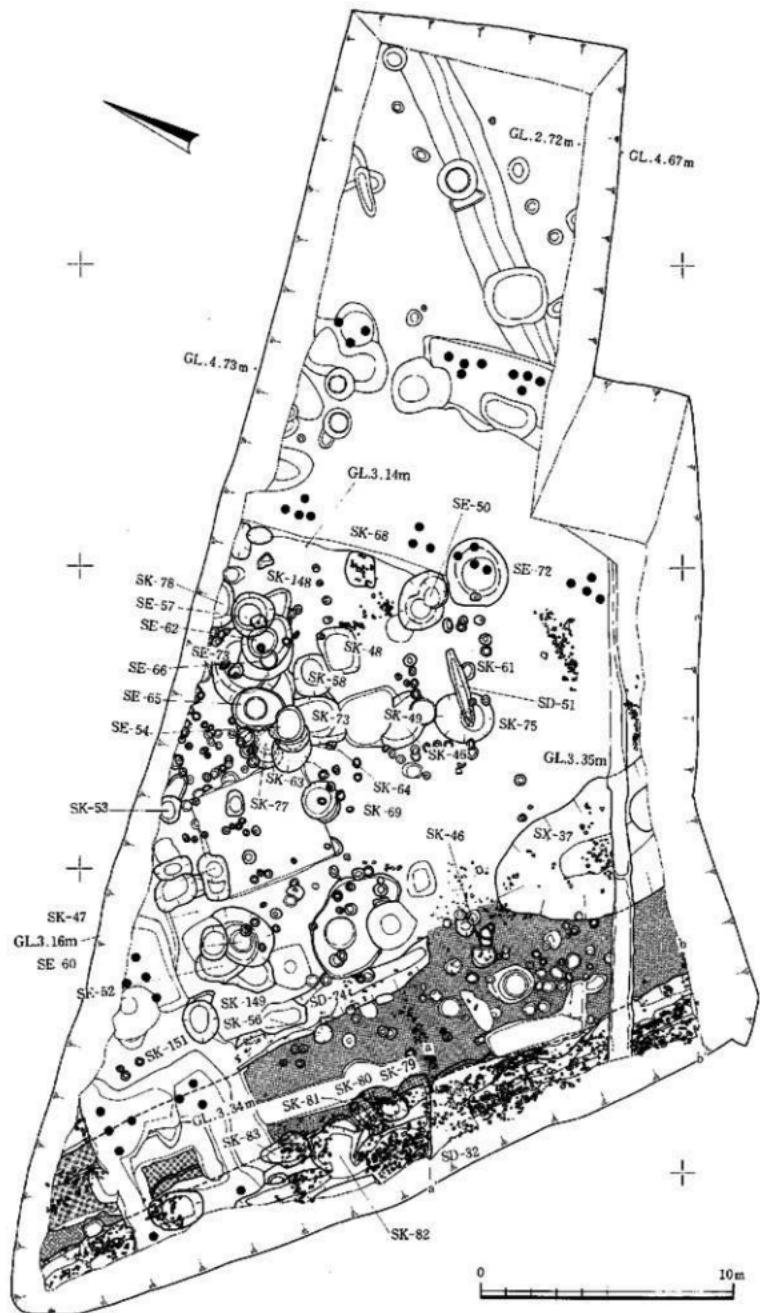


Fig.33 第3面造構配置図

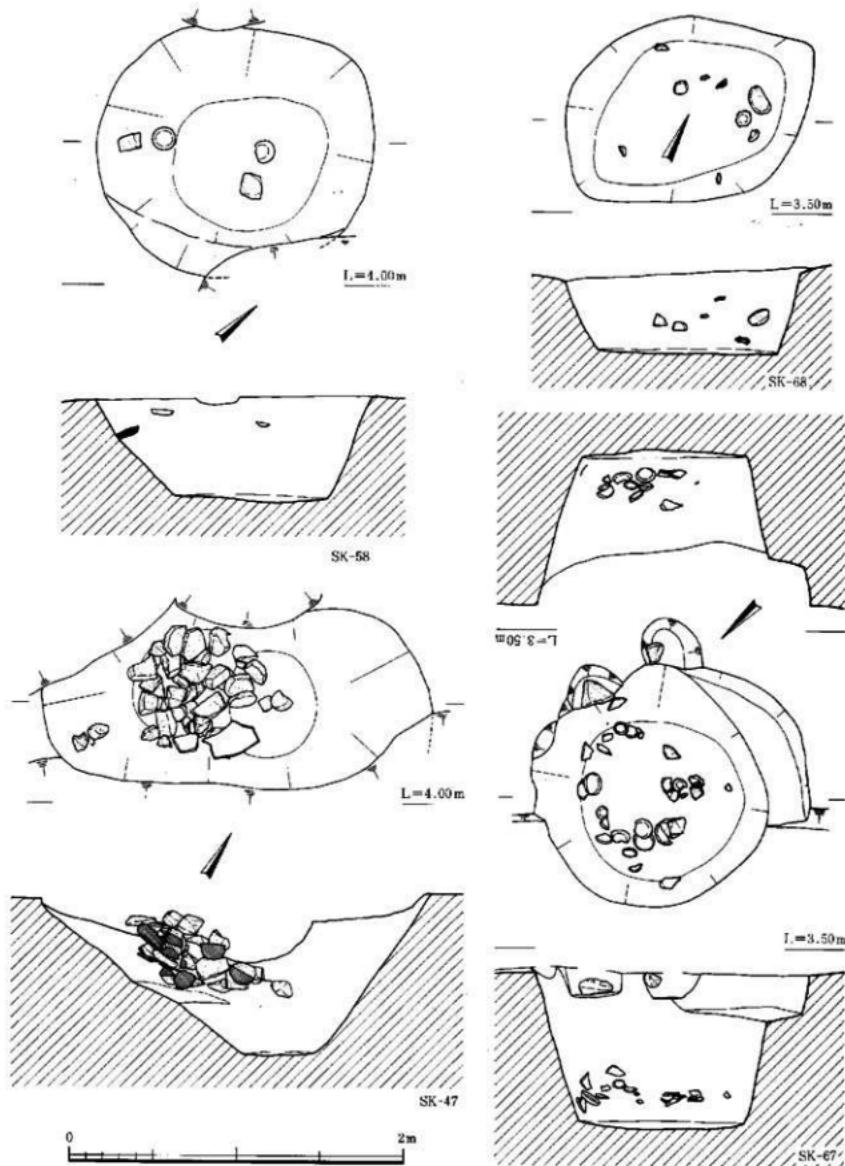


Fig.34 第47・58・67・68号上段(SK-47・58・67・68)実測図



1) 井戸群切り合ひ状況



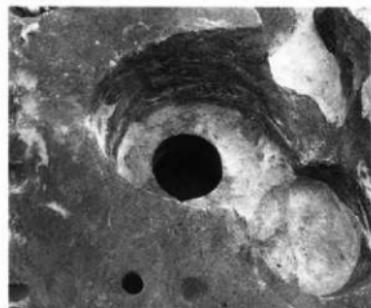
2) 第57号井戸完掘状況



3) 第60号井戸完掘状況



4) 第66号井戸完掘状況



5) 第65号井戸完掘状況



6) 第72号井戸完掘状況

Ph.24 第3面井戸検出状況

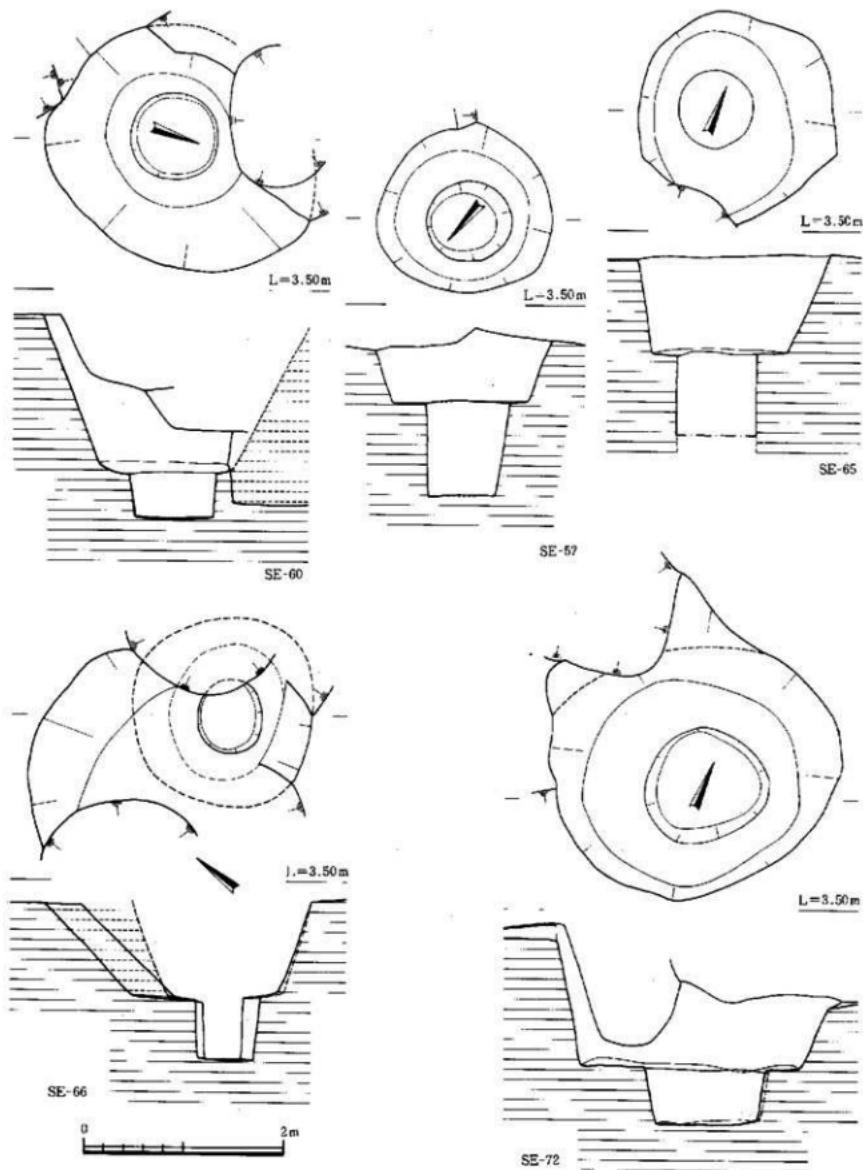
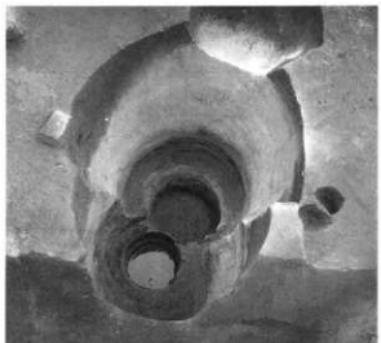


Fig.35 第57・60・65・66・72号井戸(SE-57・60・65・66・72)実測図



1) 第50号井戸完掘状況



2) 第47号土壤遺物出土状態



3) 第67号土壤遺物出土状態



4) 第56号土壤魚骨・土師皿出土状態

Ph.25 第3面各遺構検出状況

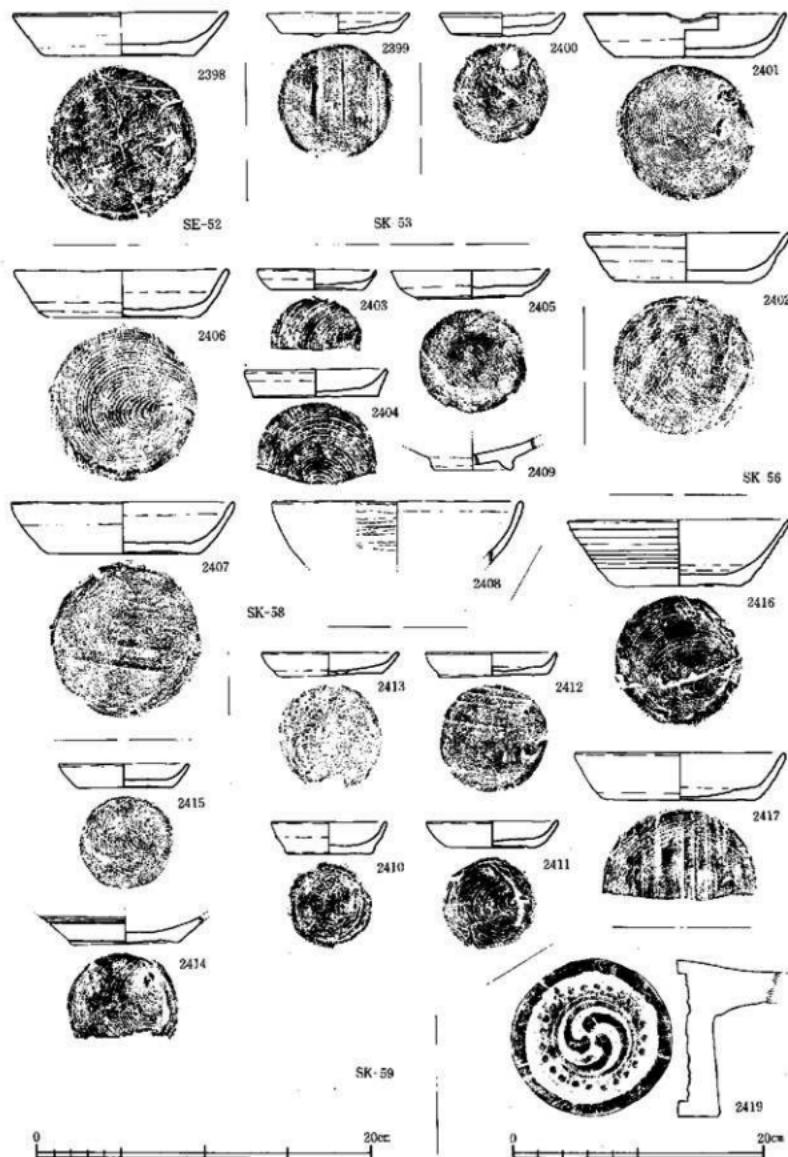
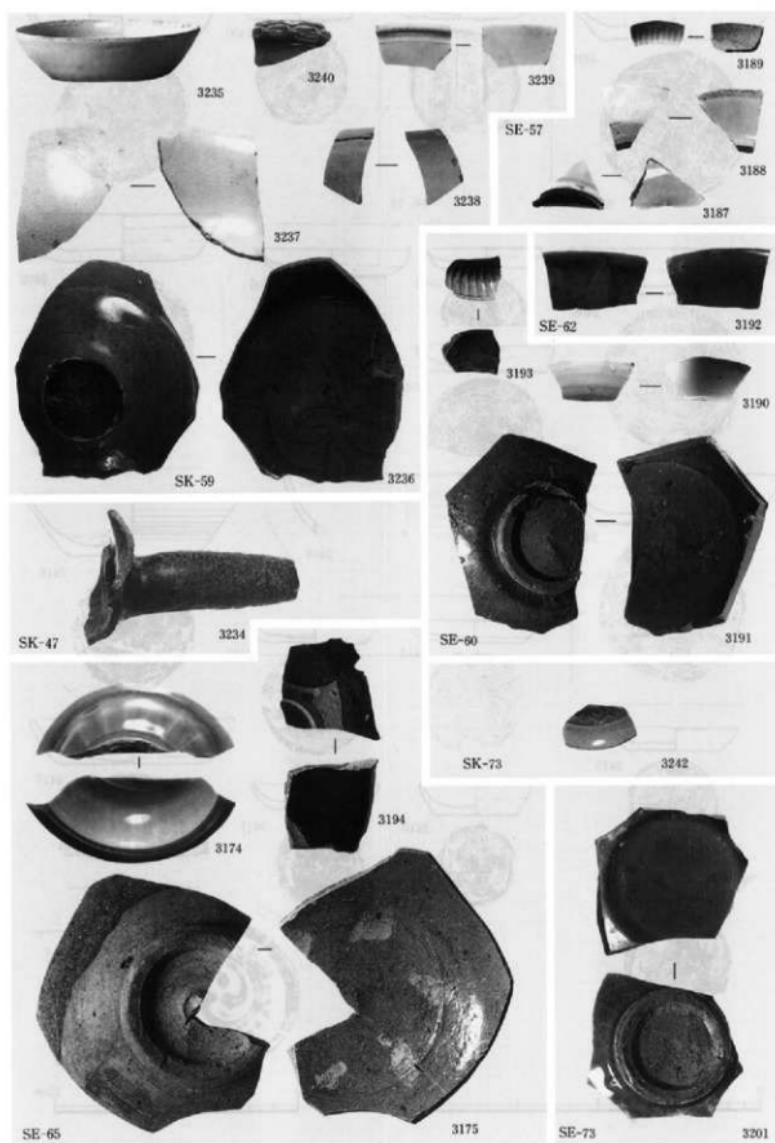
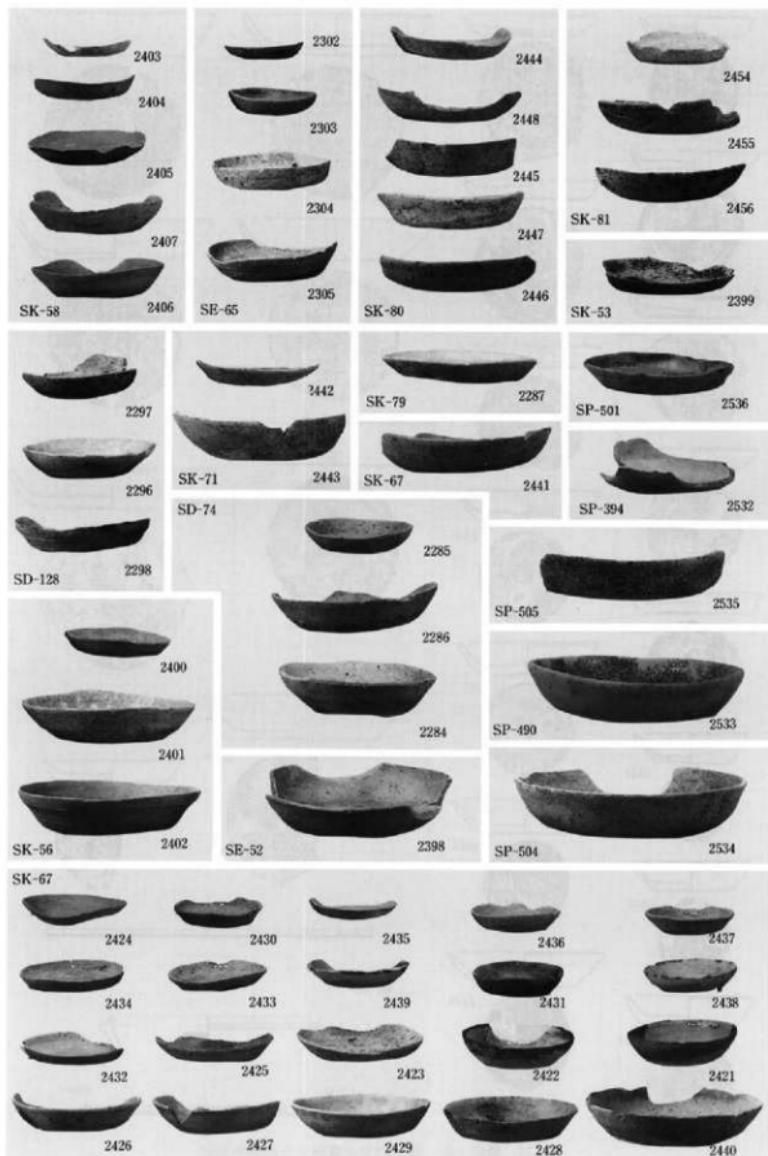


Fig.36 第3面各遺構出土遺物実測図



Ph.26 第3面各遺構出土陶磁器(1)



Ph.27 第3面各遺構出土土器

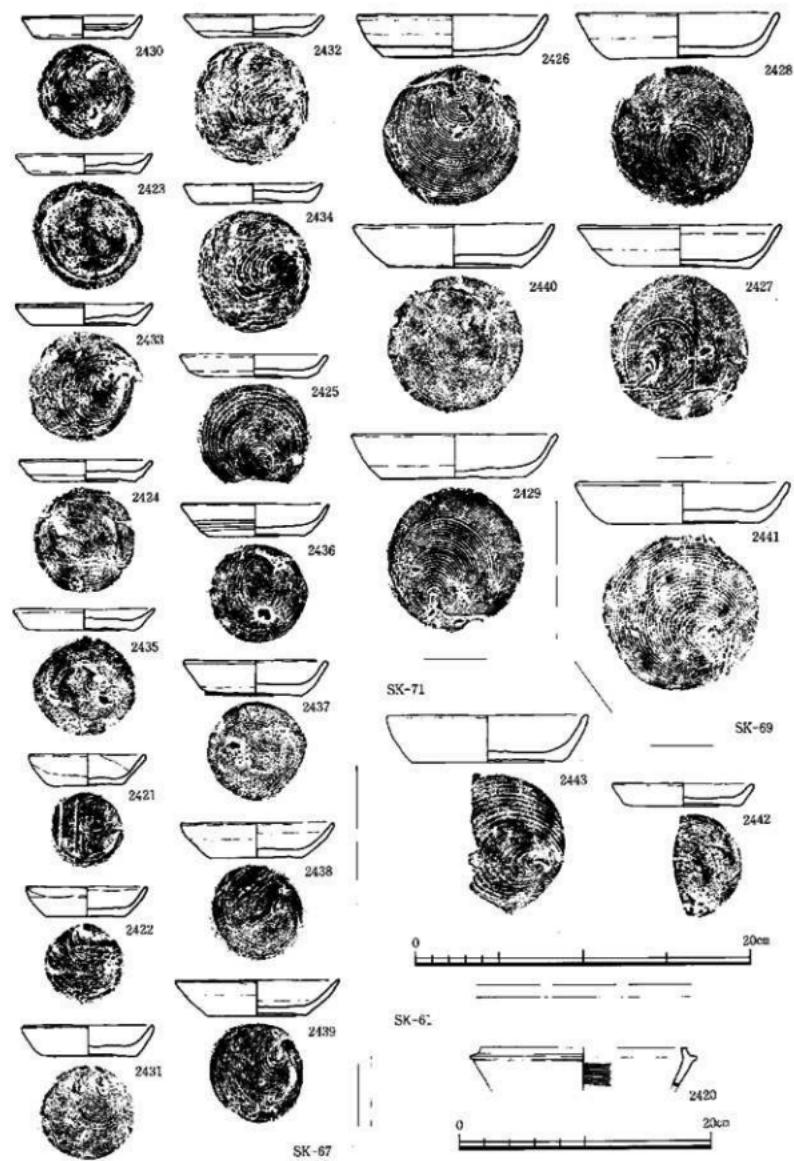


Fig.37 第61・67・69・71号土壤出土土師器実測図

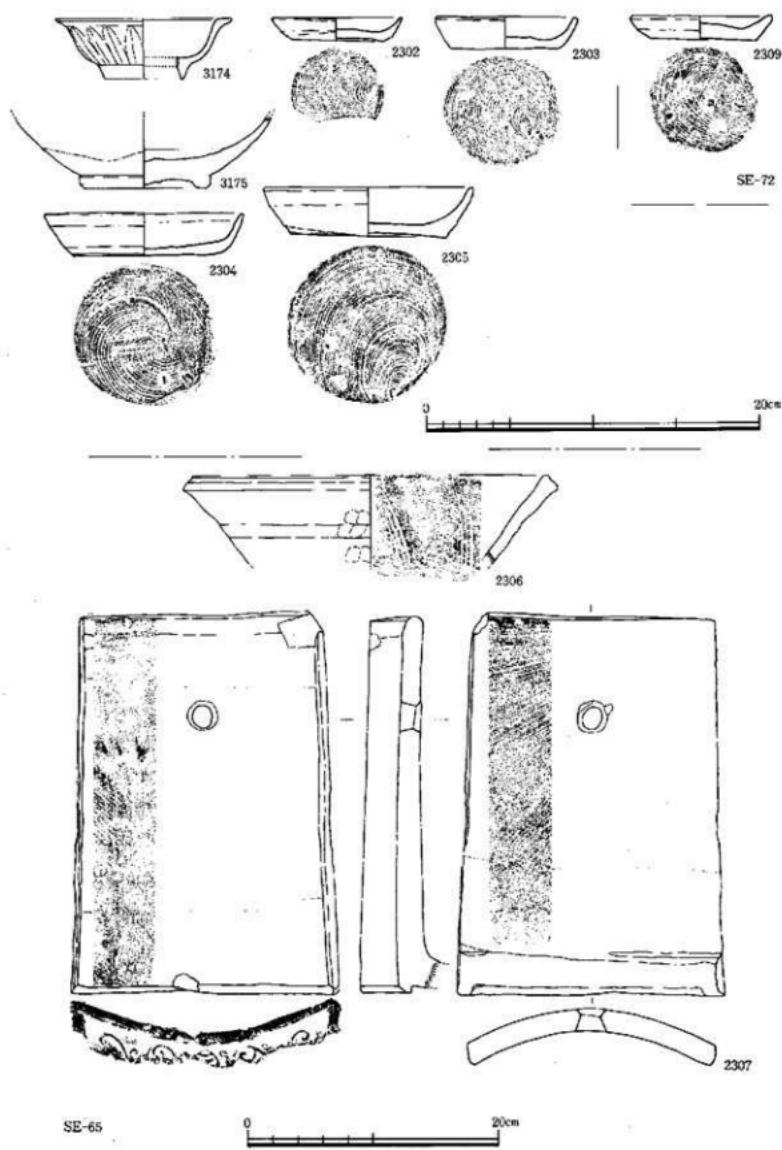


Fig.38 第65・72号井出土遺物実測図

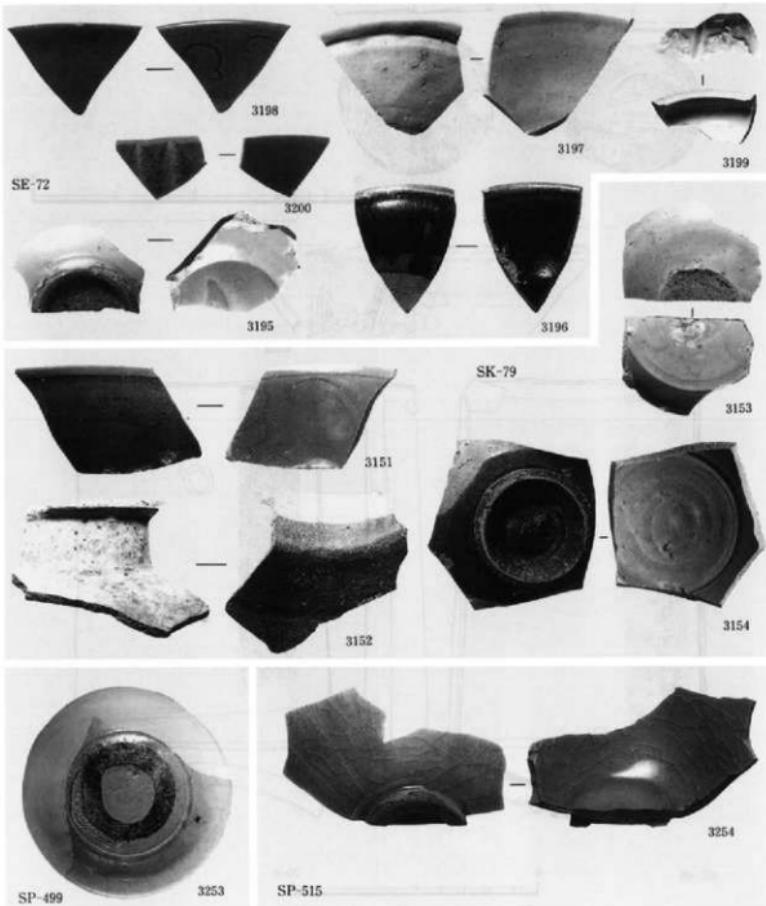
れる各種の魚骨が集中廃棄されており、その上に2400~2402の糸切り底の土師器皿・壺が置かれた状態で出土した。

SE-57 (Fig. 35・40・61, Ph.24・26・31・33)

本井戸は本調査区北西部の井戸集中部に位置し、SE-62等を切っている。検出面では径1.7m前後を測り、75cm前後遺存する鉢形の掘り方をもつ。掘り方の中央に径80cm強の井筒がある。井筒底の標高は1.6mである。本井戸からは、滑石製石鍋(5044)や縁羽口(4016)などの少量の遺物が出土した。

SK-58 (Fig. 34・36・41, Ph.27・32)

本土塙は本調査区北西部の井戸群の南に位置し、SK-73を切り、SK-48に切られている。長軸1.65



Ph.28 第3面各遺構出土陶磁器(2)

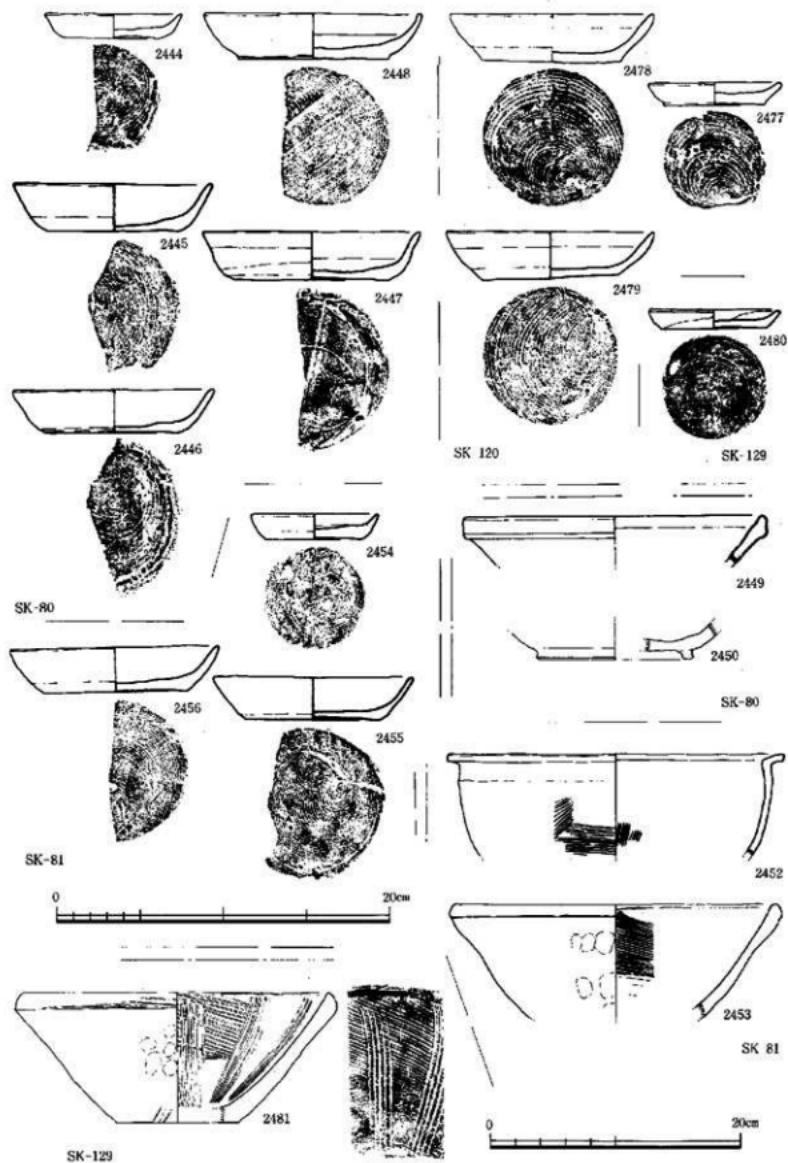


Fig.39 第80・81・120・129号土壤出土遺物実測図

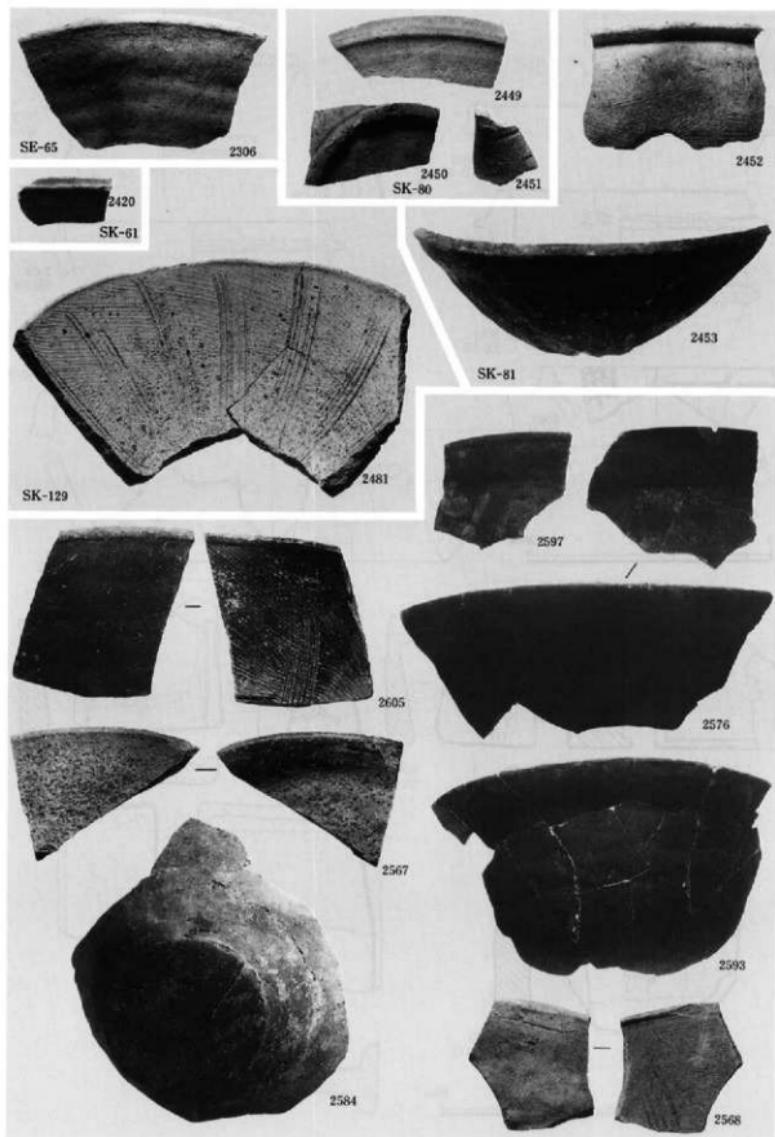


Ph.29 第3面各遺構および検出時出土土師器

m、短軸1.3m強を測る平面形隅丸方形を呈し60cm強遺存している。本土壙からは、糸切り底の土師器皿・坏(2403~2408)や鉄釘(0305・0306)などが出土した。

SK-59 (Fig.36・40・57・62, Ph.26・29・31・33・43・45)

本土壙は本調査区のはば中央に位置し、SD-74を切り、柱穴・SE-01などに切られている。長軸4.6m、短軸2.9mの平面形不正形を呈し、30cm前後遺存している。本土壙からは各種の遺物が出土した。2410~2417は糸切り底の土師器皿・坏で、5060は前述したように割符か。5061は滑石製石鍋、2419は巴を文様とした軒丸瓦。



Ph.30 第3面各遺構および検出時出土土鍋・擂鉢

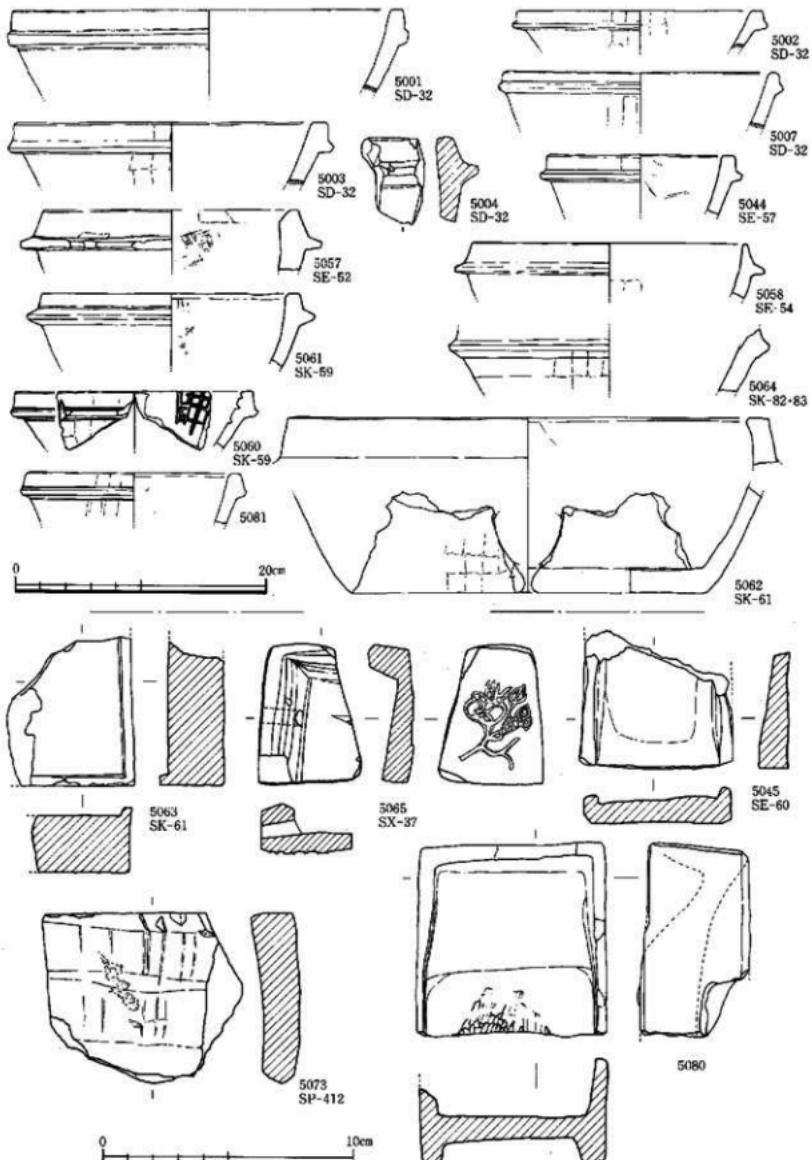
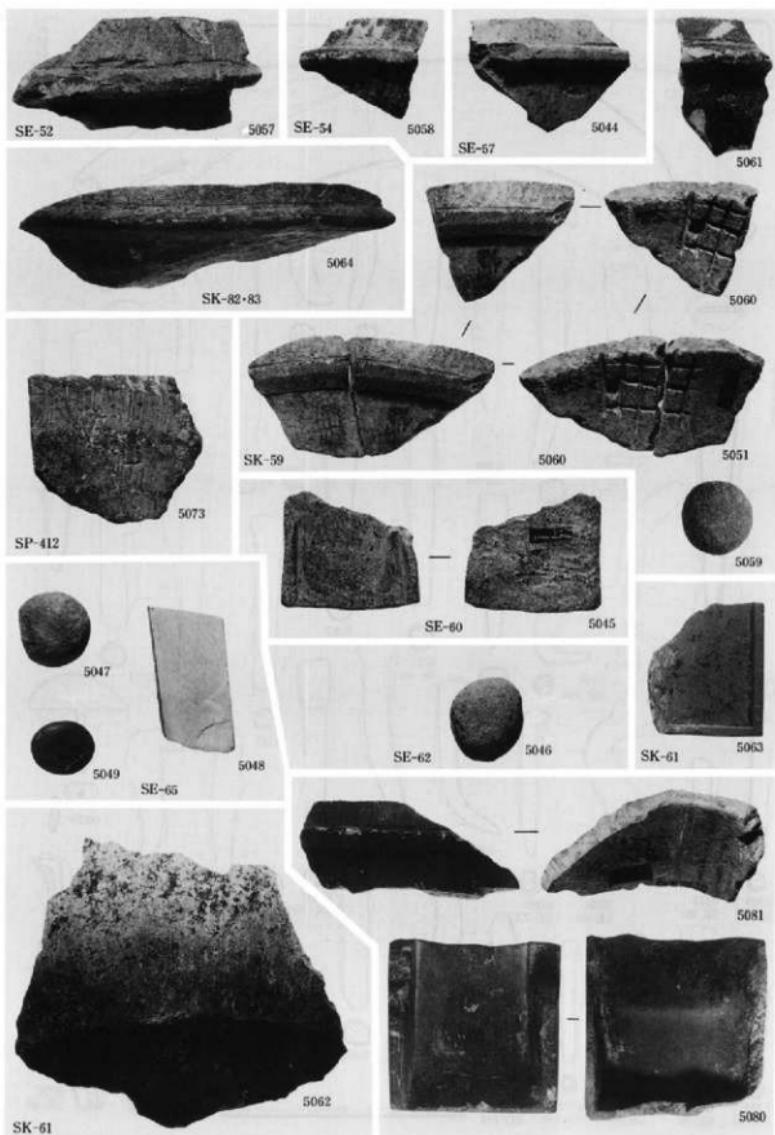


Fig.40 第3面各遺構および検出時出土石鍋・滑石製品・現実測図



Ph.31 第3面各遺構および検出時出土石鍋・石製品

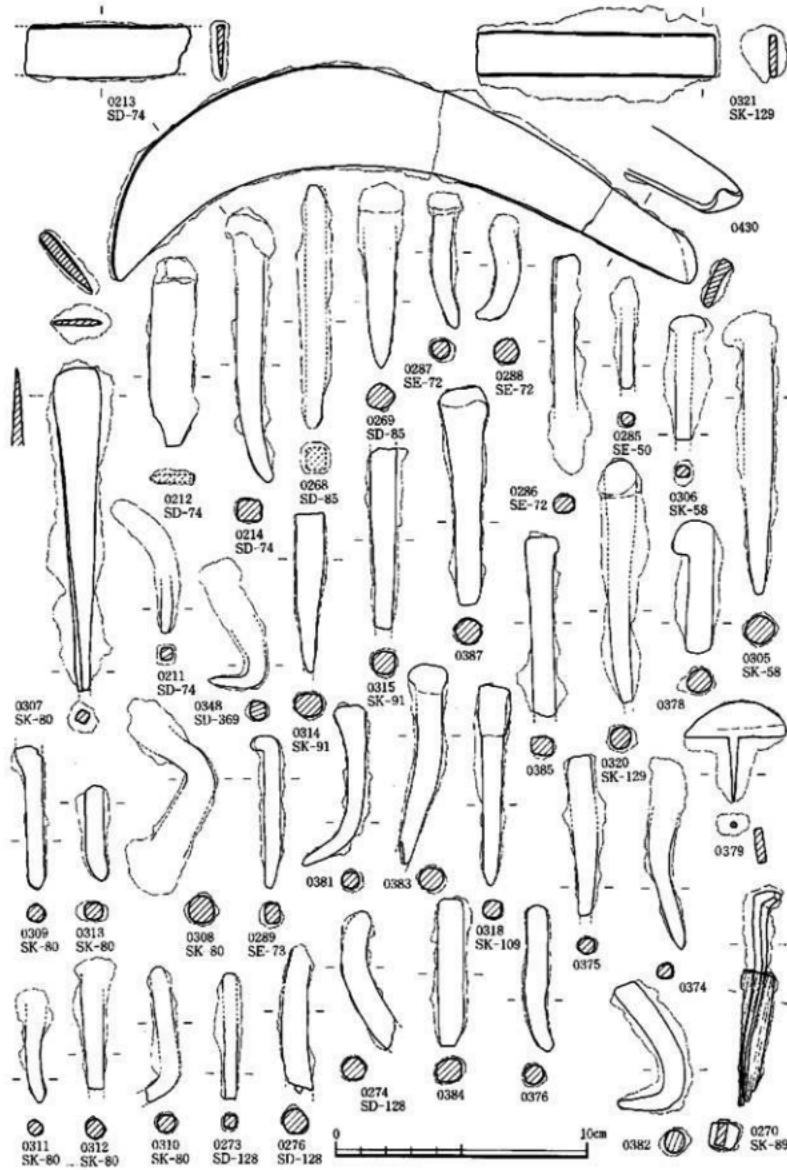
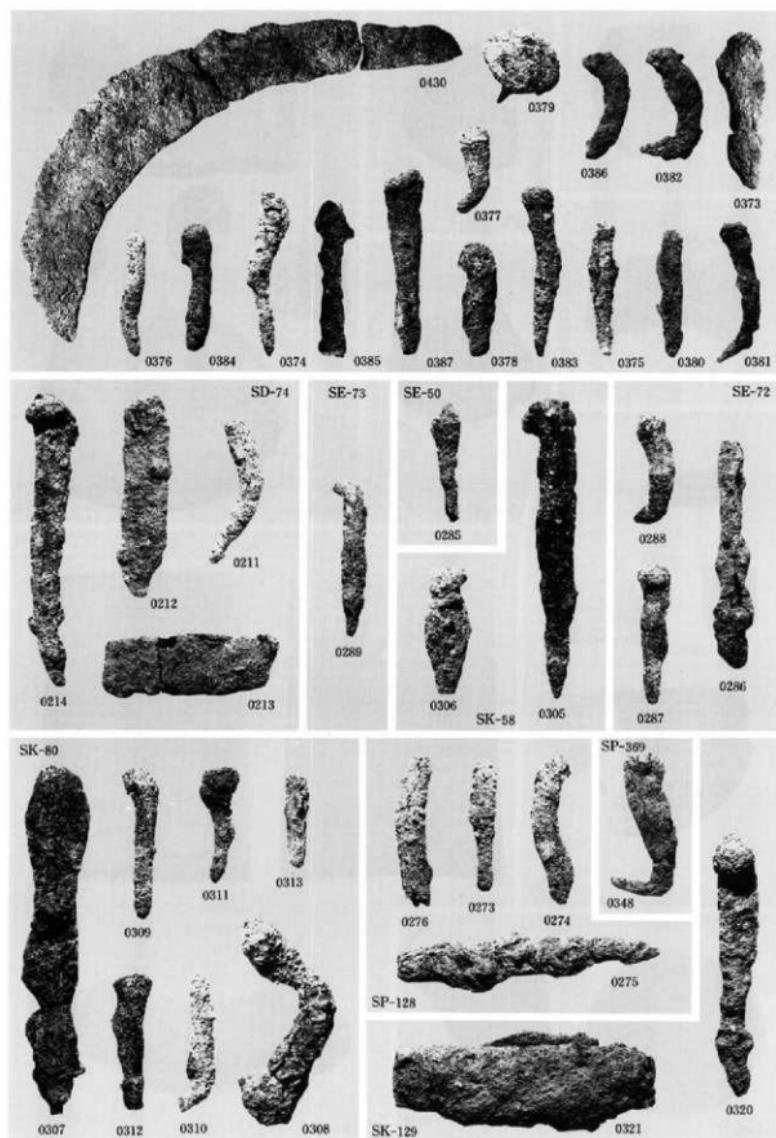
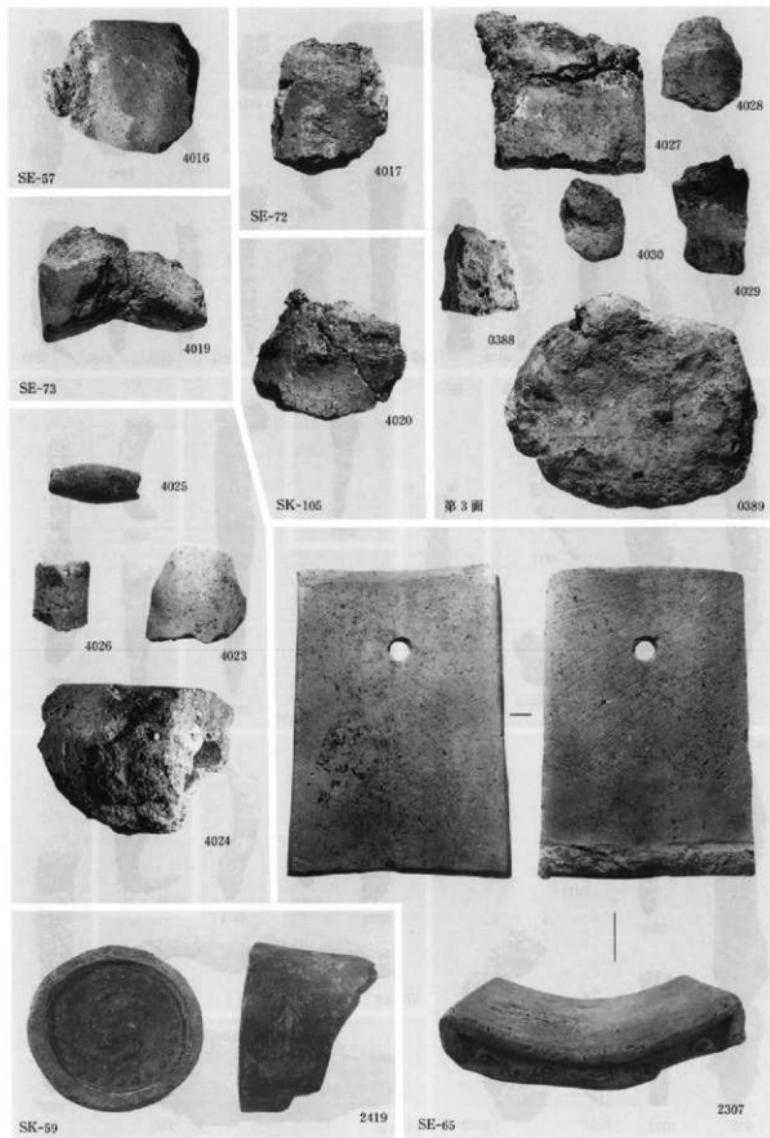


Fig.41 第3面各遺構および検出時出土鐵器実測図



Ph.32 第3面各遺構および検出時出土鉄器



Ph.33 第3・4面各遺構および検出時出土輪・鉄津・瓦類

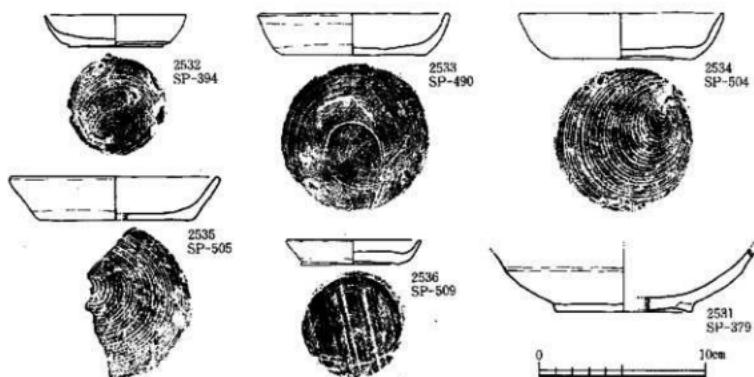


Fig.42 第3面各柱穴出土土器実測図

SE-60 (Fig. 35・40・62, Ph.24・31・45)

本井戸は本調査区の東側中央部からやや西寄りに位置し、SE-52に切られている。径2.5mで1.4m弱遺存の鉢形を呈する掘り方をもち、掘り方のほぼ中央に径90cm弱の井筒がある。井筒底の標高は1.22mである。本井戸からは少量の遺物が出土した。5045は滑石製の硯で、海部を欠失している。

SK-61 (Fig.37・40, Ph.30・31)

本土壙は本調査区の東側中央に位置し、SD-51に切られている。径70cm前後の平面形円形を呈し、20cm前後遺存している。本土壙からは瓦質の鉢(2420)、滑石製石鍋(5062)、凝灰岩?製の硯(5063)などが出土した。

SE-65 (Fig.35・38, Ph.24・26・27・30・31・33)

本井戸は本調査区北東部の井戸集中部に位置し、SE-73・SK-77を切り、SE-54に切られている。径2m前後で1m弱遺存の掘り方をもち、掘り方中央よりやや西寄りに径80cmの井筒がある。井筒底の標高は、湧水のため完掘できなかったが90cm前後と考えられる。

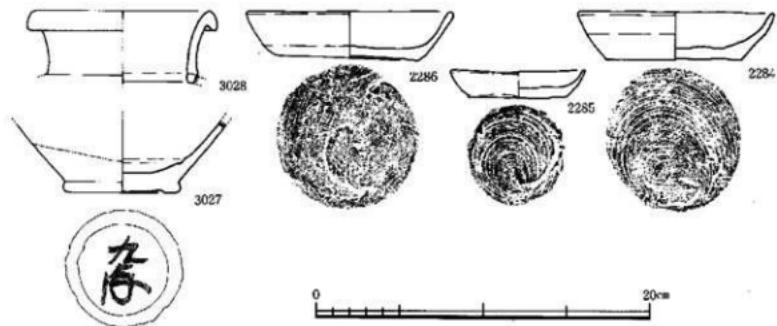


Fig.43 第74号溝出土遺物実測図

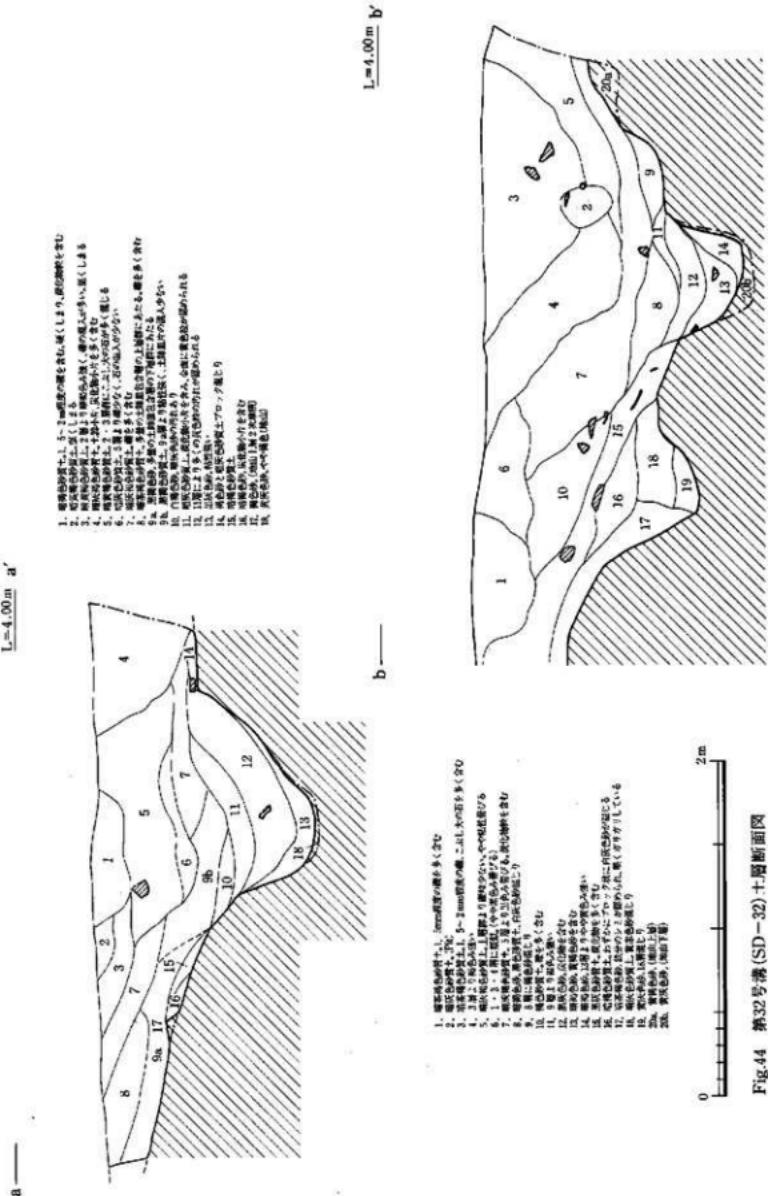


Fig.44 第32号構(SD-32)十層断面図



1) 北西から



2) 南壁土層堆積状態(北西から)

Ph.34 第32号溝土層堆積状態



1) 完掘状況(南東から)



2) 道路幅復元(南東から)



3) 完掘状況(南東から望む)



4) 路肩補強状態(南東から)

Ph.35 道路検出状況

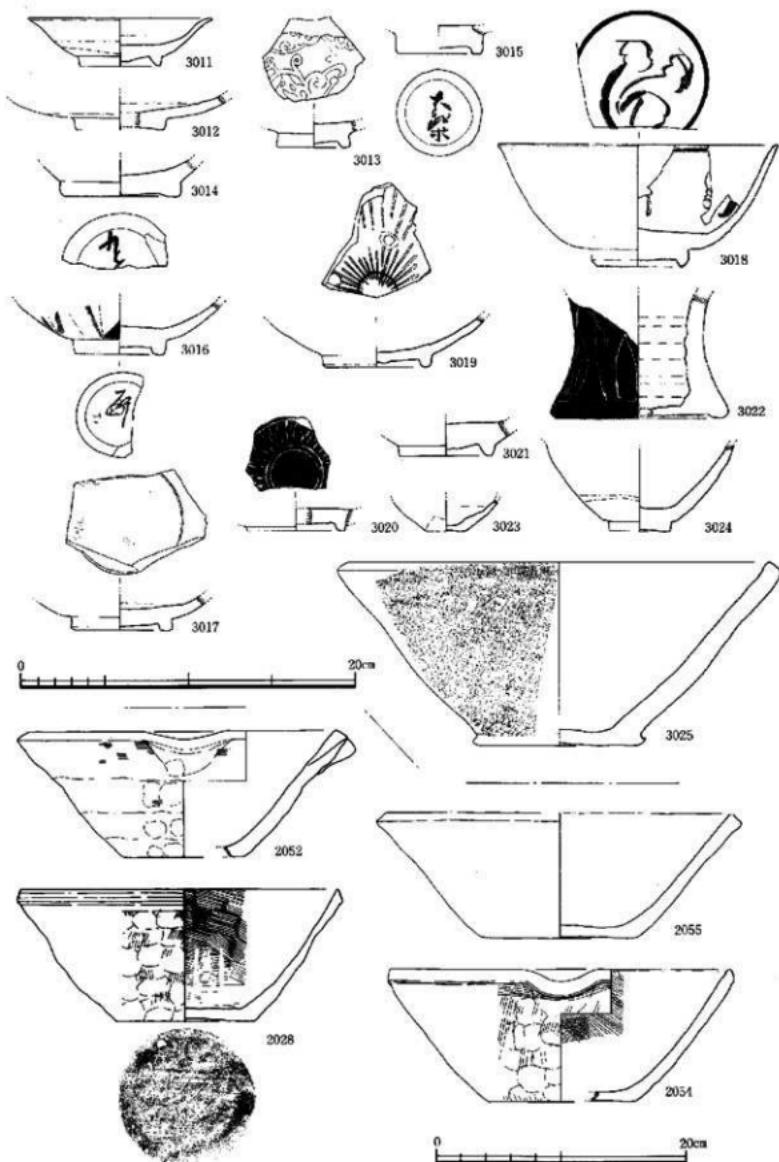
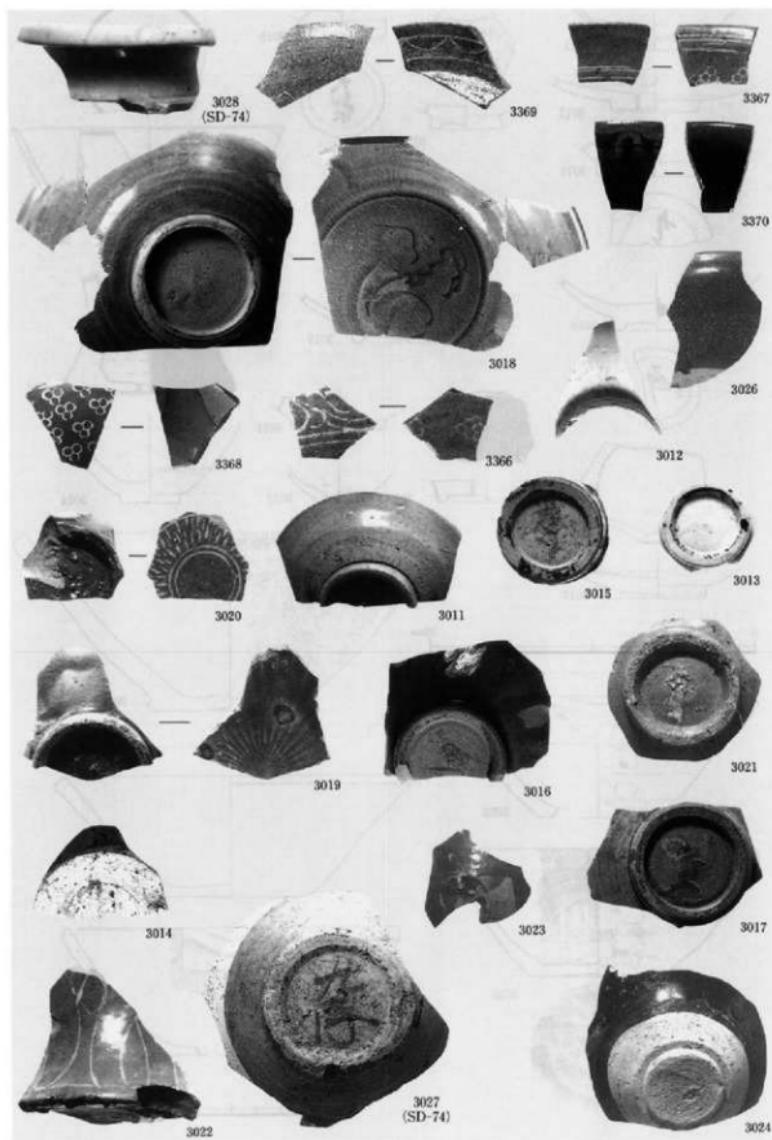


Fig.45 第32号溝出土陶磁器実測図



Ph.36 第32号溝出土陶磁器

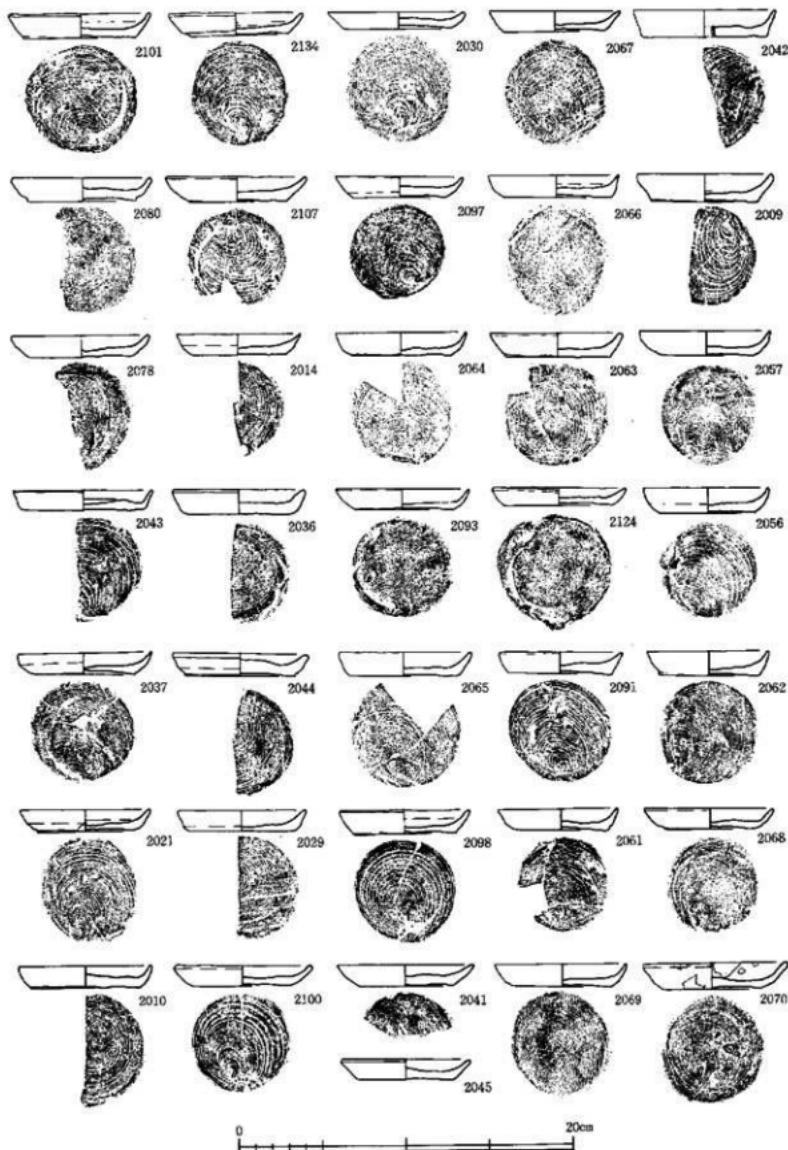


Fig.46 第32号清出土土師器尖測図(1)

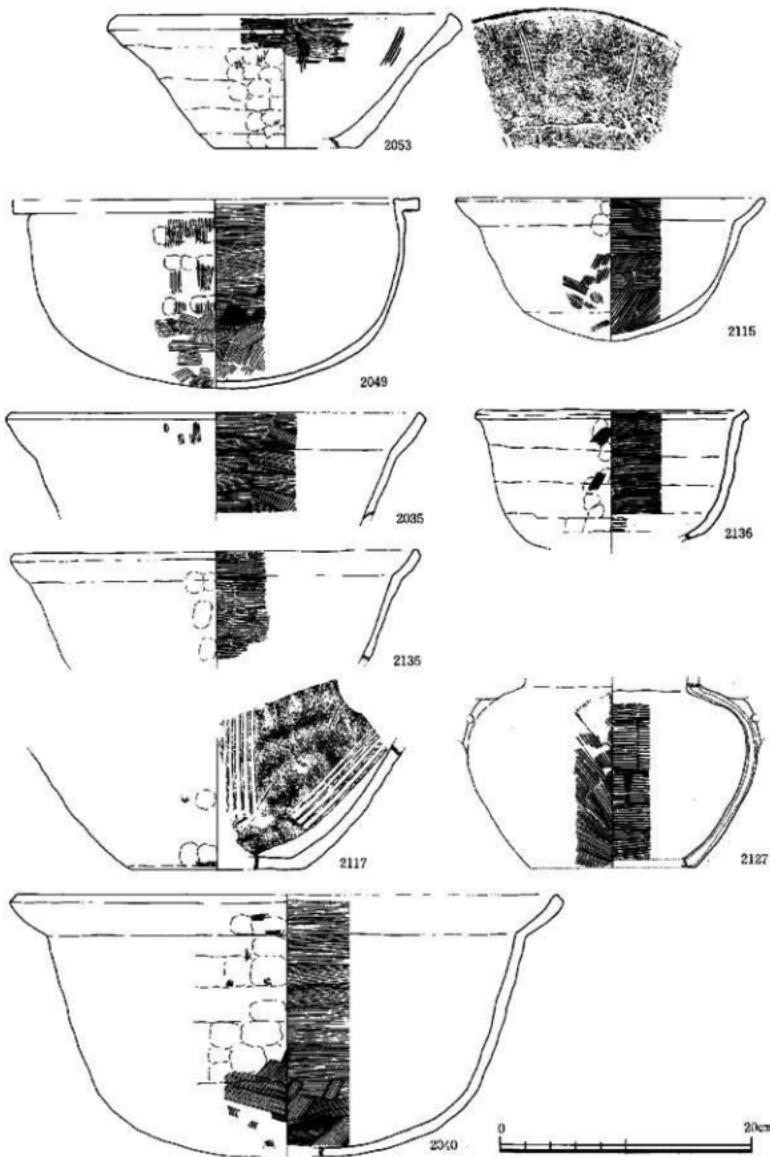
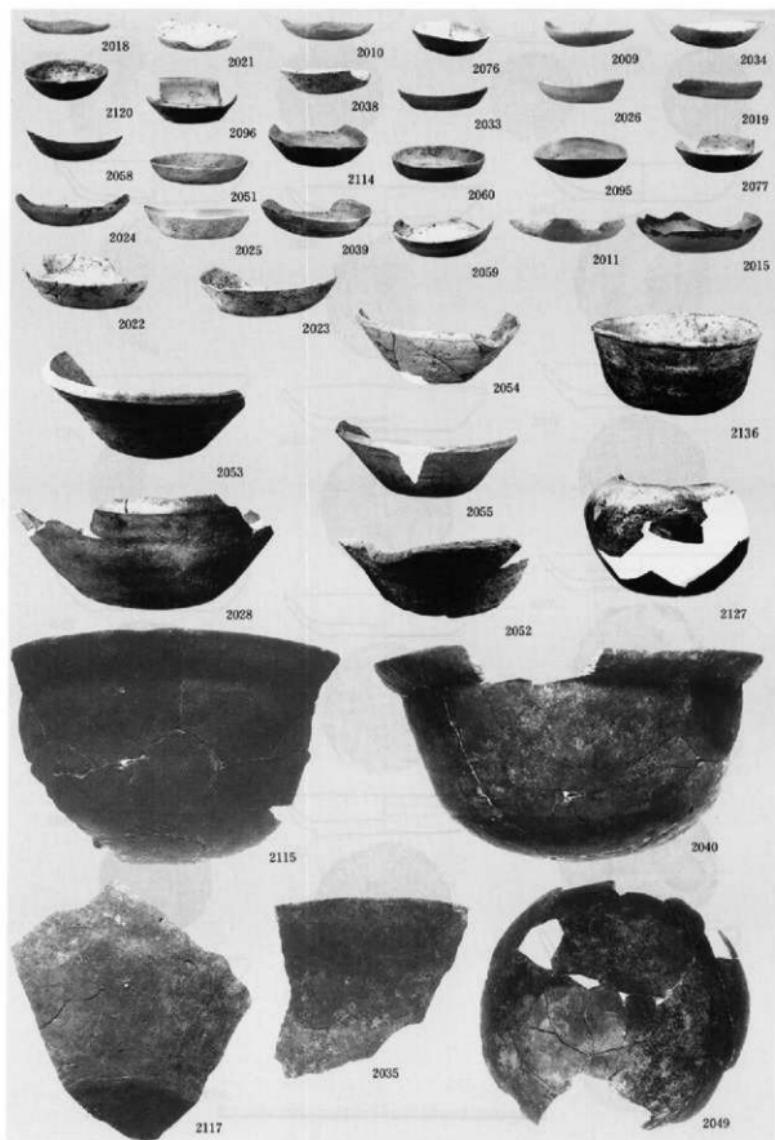


Fig.47 第32号溝出土鐘鉢・土鍋実測図



Ph.37 第32号溝出土土師器・擂鉢・土鍋

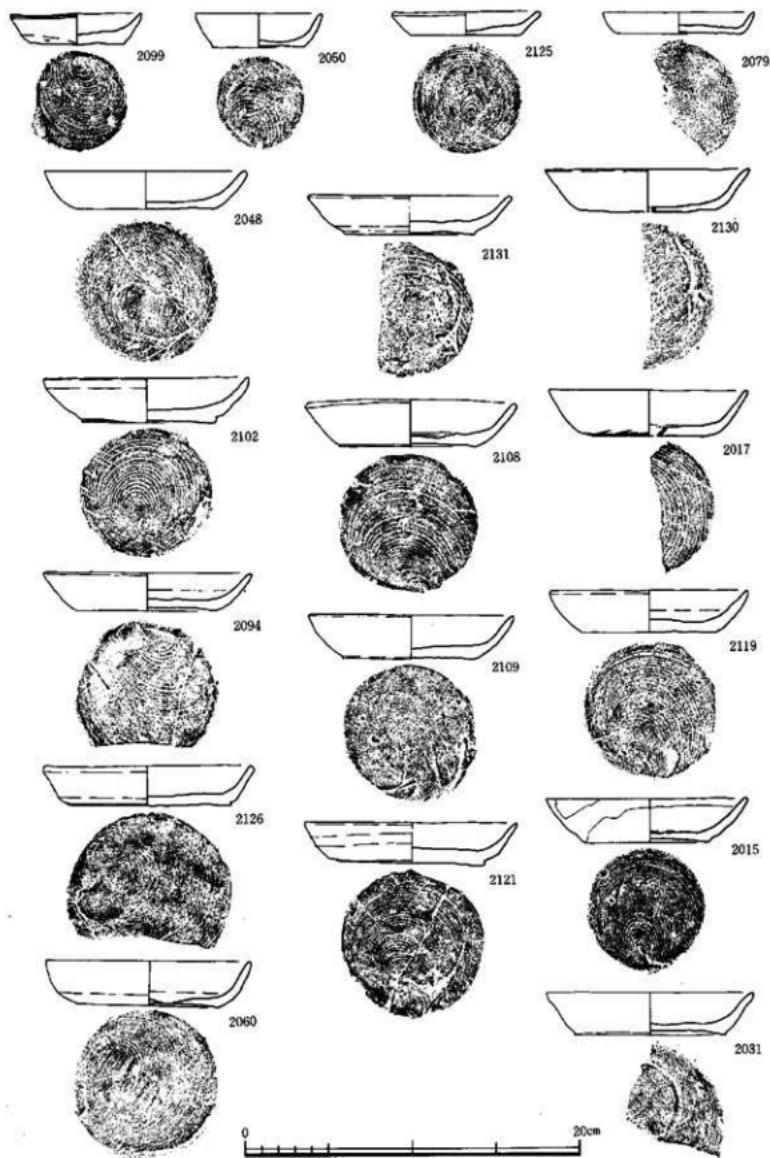


Fig.48 第32号溝出土土師器実測図(2)

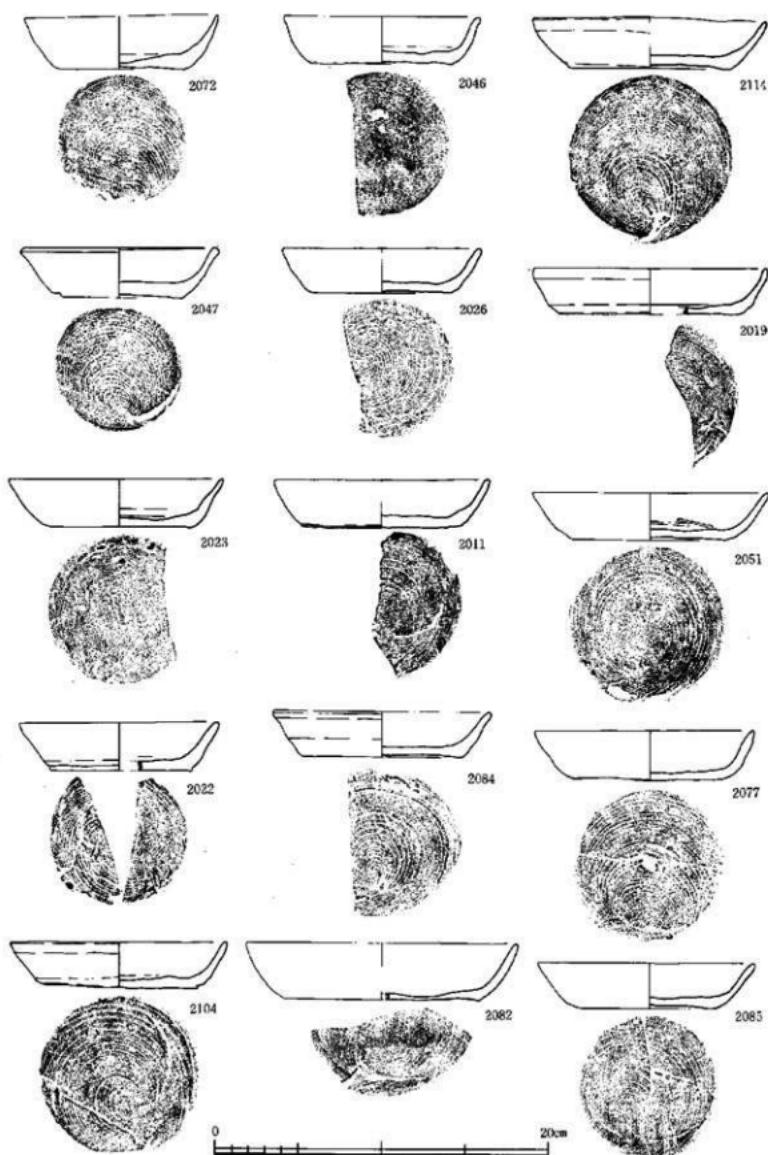


Fig.49 第32号溝出土土器実測図(3)

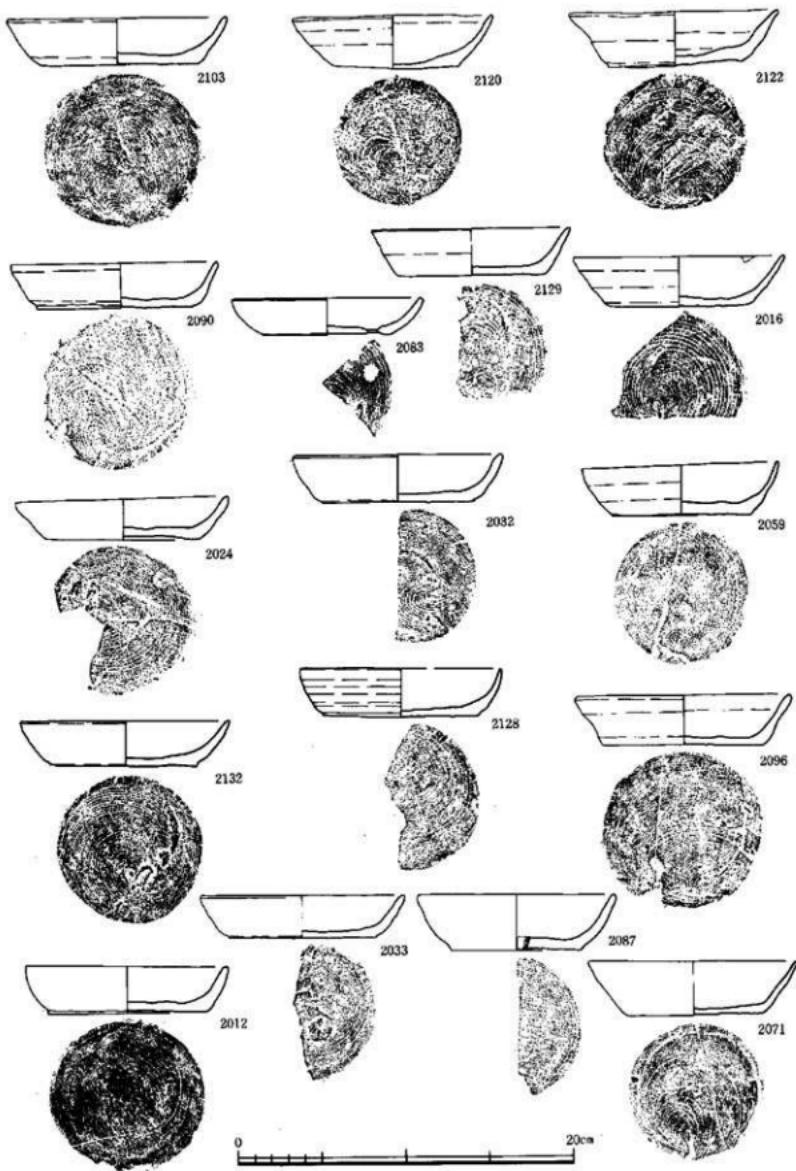
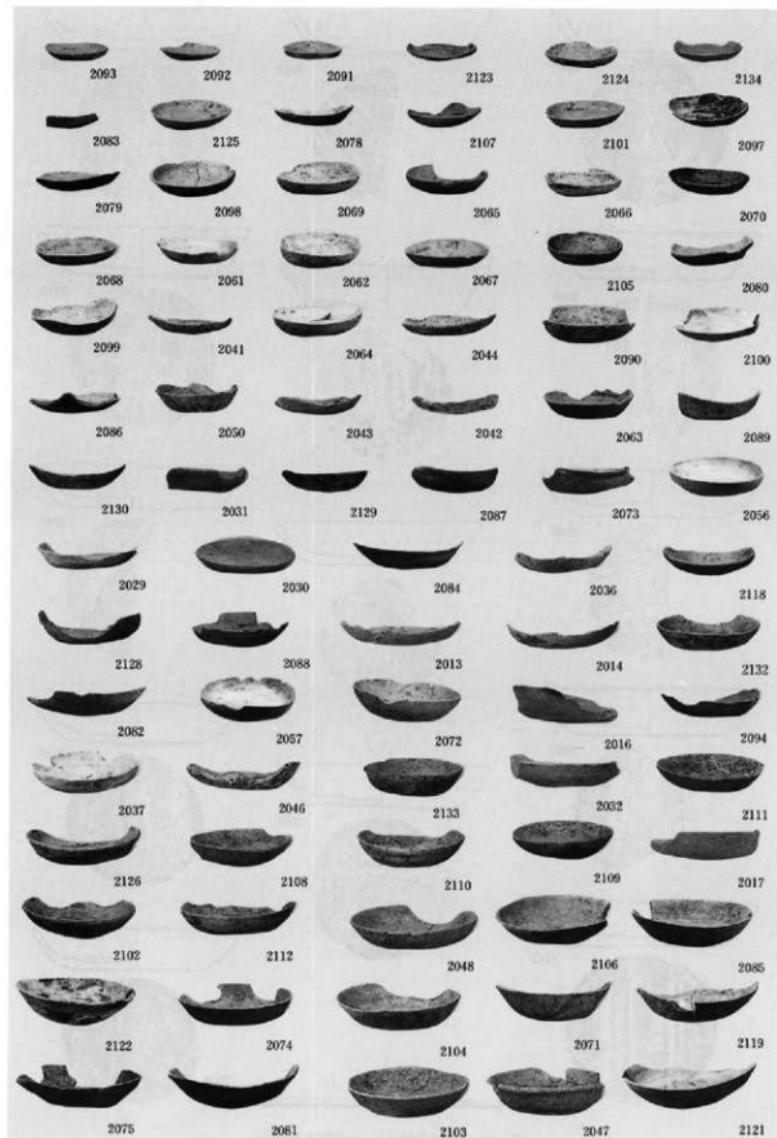


Fig.50 第32号溝出土土師器実測図(4)



Ph.38 第32号溝出土土器皿・壺

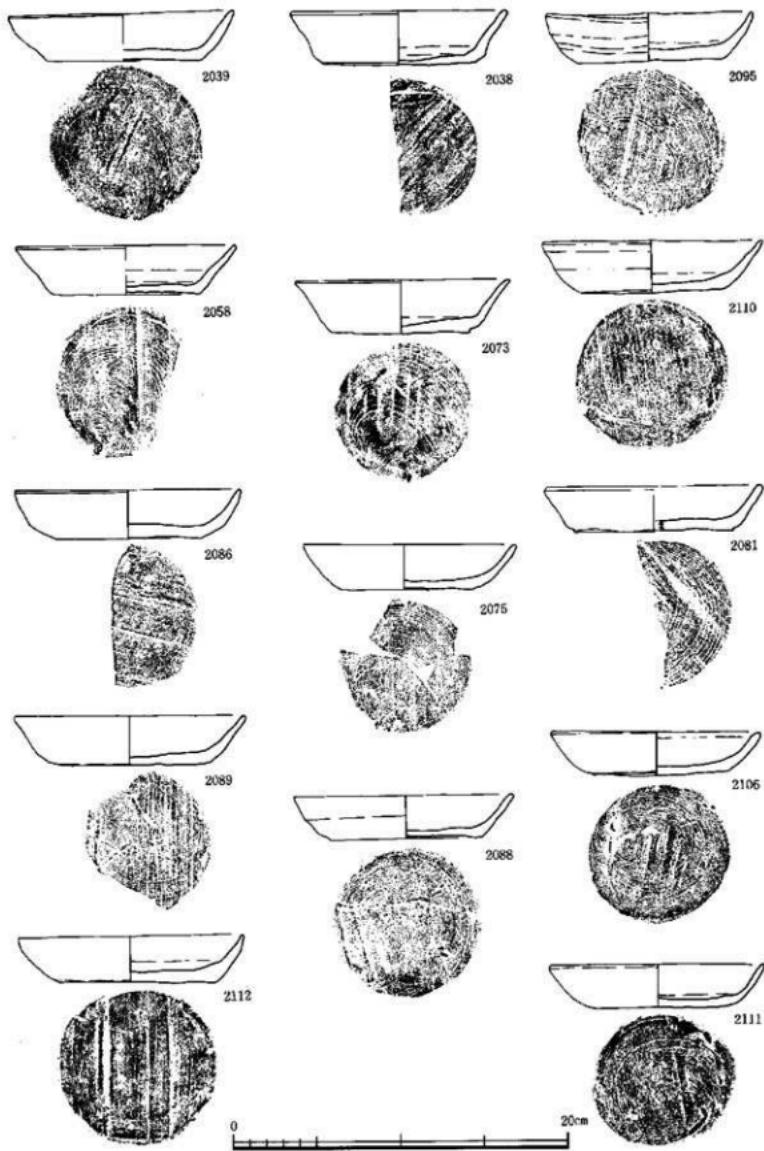


Fig.51 第32号溝出土土器実測図(5)

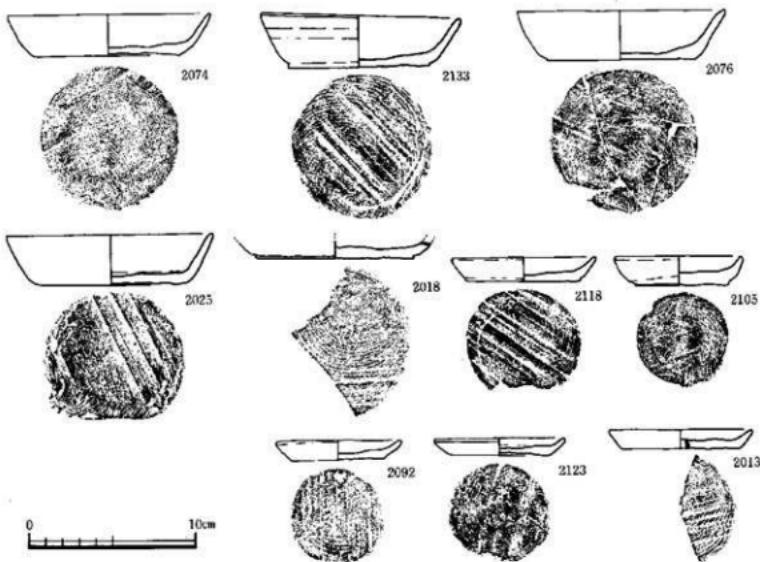


Fig. 52 第32号講出土土師器実測図(6)

本井戸からは、少量であるが比較的まとまった遺物が出土した。3174・3175は背磁で、3174は皿、3175は鉢、2302～2305は糸切り底の土師器皿・壺、2306は口径30cmを測る東播系の瓦質擂鉢。2307は唐草文を瓦頭にもつ軒平瓦で、器長30.3cm、瓦頭幅21.3cmを測る。以上の遺物はいずれも掘り方出土であり、本井戸は中世後半のものといえよう。

SE 66 (Fig. 35, Ph. 24)

本井戸は本調査区北東部の井戸集中部に位置し、SE-73を切り、SE-62に切られている。径1.8mで95cm前後遺存する鉢形の掘り方をもち、掘り方のほぼ中央に径70cm前後の井筒がある。井筒底の標高は1.72mである。

SK-67 (Fig. 34・37, Ph. 25・27)

本土壙は本調査区の中央部からやや東北寄りに位置し、柱穴・擾乱によって切られている。径1.45mの平面形円形を呈し、1m弱遺存している。南側に棚をもつか。本土壙からは糸切り底の土師器皿・壺がまとめて出土した(2421～2440)。本土壙は中世後半のものといえよう。

SK-68 (Fig. 34)

本土壙は本調査区西側中央からやや北寄りで検出した。長軸1.5m、短軸1.1mを測る平面形隅丸方形を呈し、50cm強遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。

SE-72 (Fig. 35・38・41・61, Ph. 24・28・29・32・33)

本井戸は、本調査区西側中央で検出した。長軸3m、短軸2.5mの平面形梢円形で、鉢状をなす掘り方をもち、掘り方のほぼ中央部に長軸1.25m、短軸1.15mの不正円形の井筒がある。井筒底の標高は1.3m強である。本井戸からは糸切り底の土師器皿(2309)、縦羽口(4017)、横断面形隅丸方形の鐵釘

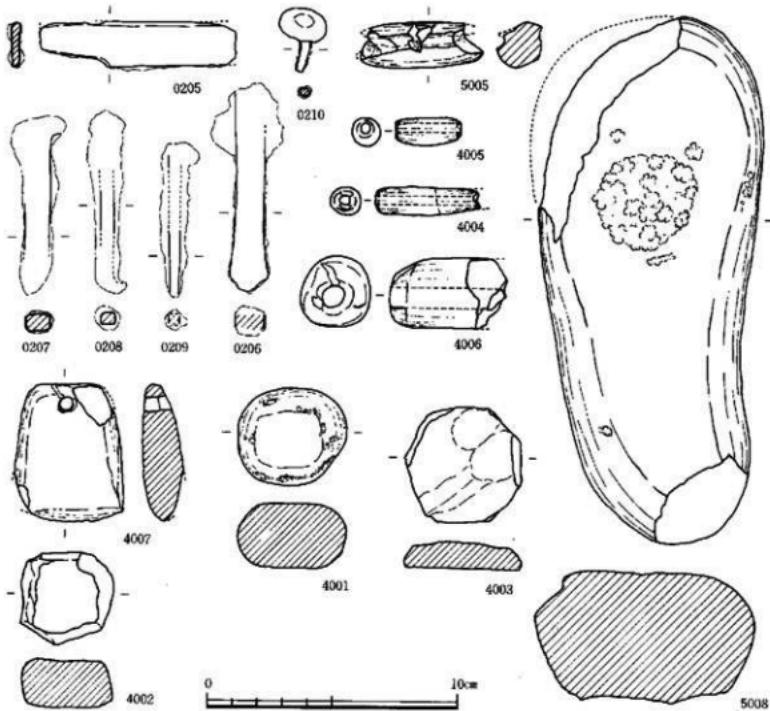


Fig.53 第32号清出土鉄器・石製品・土製品実測図

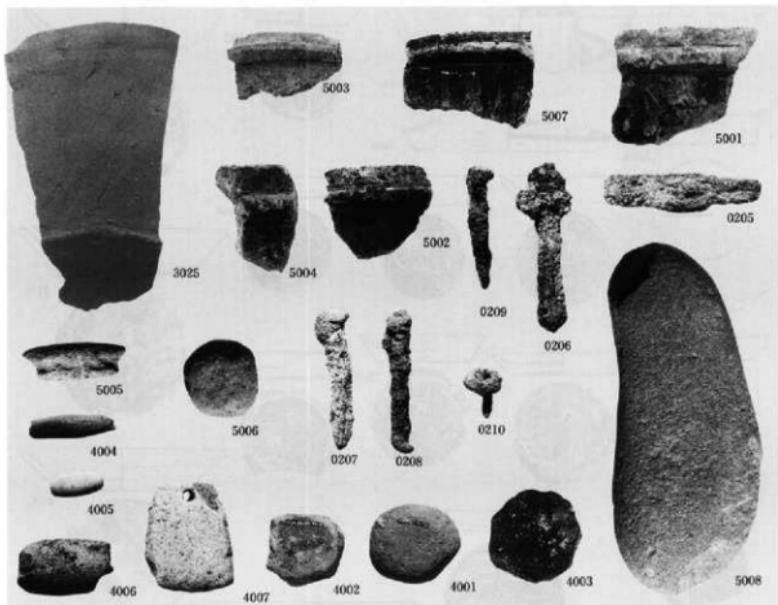
(0286～0288) など少量の遺物が出土した。

SK-80 (Fig. 39・41, Ph. 27・30・32)

本土壙は本調査区西側中央で検出し、SD-32に切られている。径1.2mの平面形不正円形を呈し、50cm前後遺存している。本土壙は黄色砂の上面で検出できた。糸切り底の土師器皿・壺(2444～2448)、束縛糸須恵器擂鉢(2449)、鉄製鑿(0307)、横断面形隅丸方形の鉄釘など各種の遺物が出土した。本土壙およびSK-81は道路築造時期に埋められたと考えられ、14世紀前後のものといえよう。

SK-81 (Fig. 39, Ph. 27・30)

本土壙は本調査区西側中央に位置し、SK-80に近接しSD-32に切られている。長軸1.3m、短軸0.8mを測る平面形隅丸方形を呈し、70cm前後遺存している。本土壙からも各種の遺物が出土した。2454は口径27cmの土鍋、2453は瓦質の束縛糸擂鉢、2454～2456は糸切り底の土師器皿・壺。



Ph.39 第32号溝出土遺物

2) 検出道路と出土遺物

道路は、本調査区西側の標高3.38m~3.41mの黄色~黄褐色砂層(地山)および暗灰褐色~灰褐色シルト~砂の面で検出した。SK-46・56や柱穴に切られ、SK-77・80~83を切り、SD-32・74、SX-37の側溝に区画されている。一部擾乱によって破壊されているが、上場幅3.3m~3.7m前後で、N-51~W前後の方針をとり、北西に延びている。SX-37とSD-74の東側の側溝が3.3m前後切れしており、東西方向の道路分岐も考えられるが、本調査区中央から西側にかけて側溝的なものが検出できず、SD-32・74などの出土遺物と同時期の生活遺構があるため、屋敷地への入口で陸橋と考えられる。以下、SD-32・SX-37・SD-74について遺物を含めながらみていくことにする。

SD-32 (Fig.40・44~53・62, Ph.34~39・45)

本調査区、南壁でみていくと、3層の暗茶褐色土を覆土とする段階、4層の段階、7~14層を覆土とする段階、17~19層を覆土とする段階と、少なくとも4回造り直された可能性が高い。道路として検出できたのは15層を除去した面である。溝の幅は2.2m前後で、70~110cmの深さをもち断面形は逆台形を呈し、底近くの壁は40cm前後ほぼ垂直に立ち上がることから、板などを当てていた可能性がある。また、道路端から溝上部にかけては、糸切り底の土師器皿・坏をくだけ敷き詰めた状態になっており、路肩補強と考えられる。

本溝からは、糸切り底の土師器皿・坏をはじめ多種多様な遺物が出土した。3011~3014は白磁、3015~3018は青磁、3019はベトナム青磁、3020~3022は半島系の青磁等、3023は小壺、3024は黒釉碗、

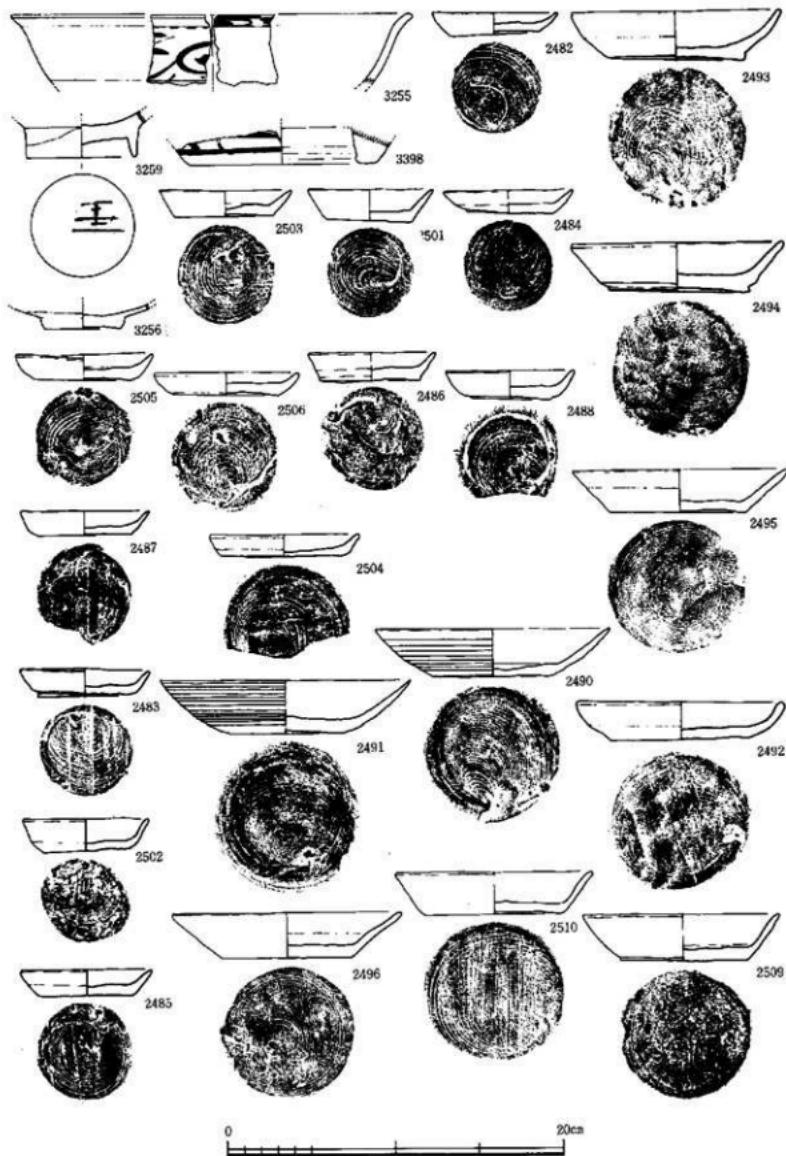
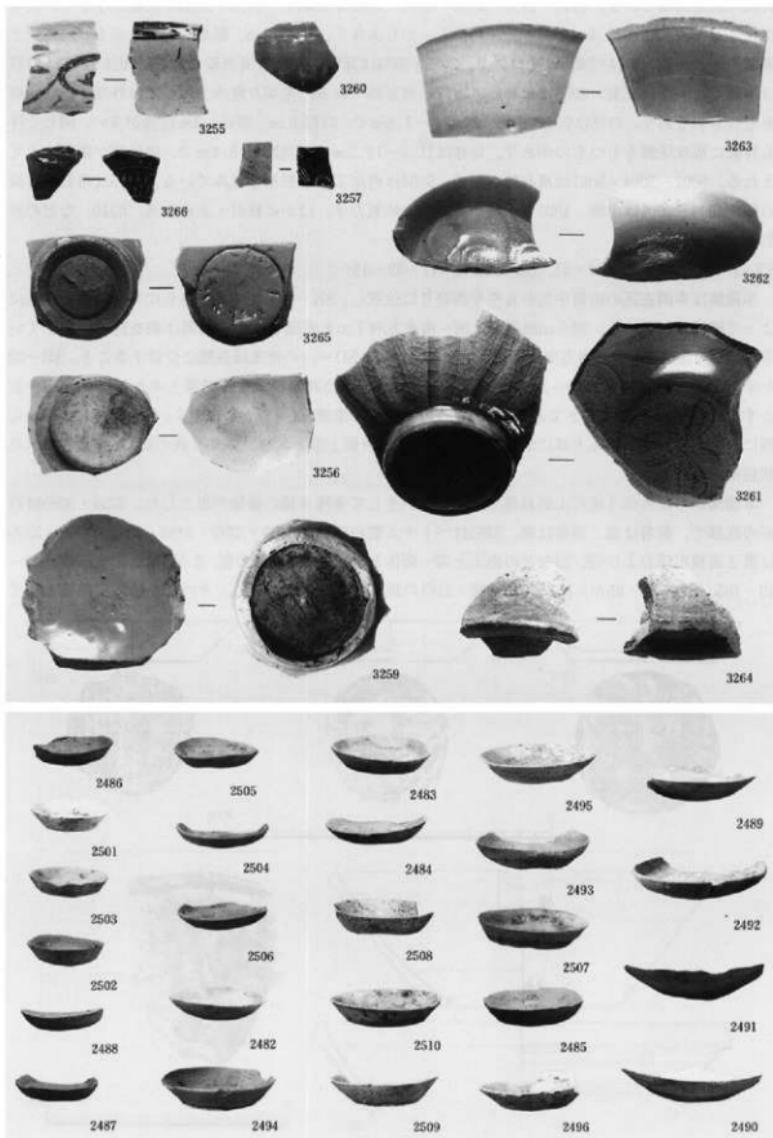


Fig.54 第37号土壤出土遺物実測図(1)



Ph.40 第37号土壤出土遺物(1)

3025は国产陶器である。2115・2135・2136・2040・2049は土鍋で、2115・2136が比較的小さく、前者は口径24.5cm、器高11.4cmを測る。2040がもっとも大きく、口径43cm、器高20.8cmを測る。2127は土師質の壺。2052・2054・2055は片口鉢で、2052・2054は瓦質、2055は須恵器である。2028・2053・2117は擂鉢で、2028は瓦質、2053は土師器、2117は須恵器である。糸切り底の土師器皿は外底に板状圧痕をもつものもあり、口径は7.2~9cm、器高1~1.8cmで、口径8cm、器高1.3cm前後が多い。同じく壺も外底に板状圧痕をもつものがあり、口径は11.2~14.2cm、器高2.2~3.4cmで、环は幅が顕著にみてとれる。5001~5004・5007は滑石製石鍋で、5004は再加工をし転用を試みている。5005は滑石製有溝石錘、4004~4006は土錘、4007も土錘か。0205は鉄製刀子。ほかに鉄釘・止め金具(0210)などの鉄製品がある。

SX-37 (Fig. 40・55・57・61・62, Ph. 40・41・43・45)

本遺構は本調査区の南側中央からやや西寄りに位置し、SK-24に切られ、さらに東西に走る擾乱によって破壊されている。幅5m前後で北西-南東方向7mを確認したが、南側は調査区外に延びている。80cm前後遺存し、東西方向は逆台形を呈している。SD-74の南東延長部に位置すること、SD-32と平行すること、覆土がSD-32-74と共通することから、道路を構成する側溝と考えられる。SX-37とするよりSD-37とすべきであるが、調査時の性格不明構造SX-37としておく。本遺構の北東部から西にかけての検出面から上部にかけては、SD-32の東側上部と同様、糸切り底の皿・环を敷き並べた状態がみられる。

本遺構からは糸切り底の土師器皿・环をはじめとして多種多様の遺物が出土した。3256・3259は白磁の底部で、前者は皿、後者は碗。3255はベトナム製白磁鉢。3390・3392・3393・3395・3398・3399は第2面検出時およびSK-59などの出土と同一個体と考えられ、鉄絵の壺。また、第2面検出時、SK-49・105、SD-76・85からは3382~3386・3161の鉄絵盤が出土している。そのほか輸入陶磁器として

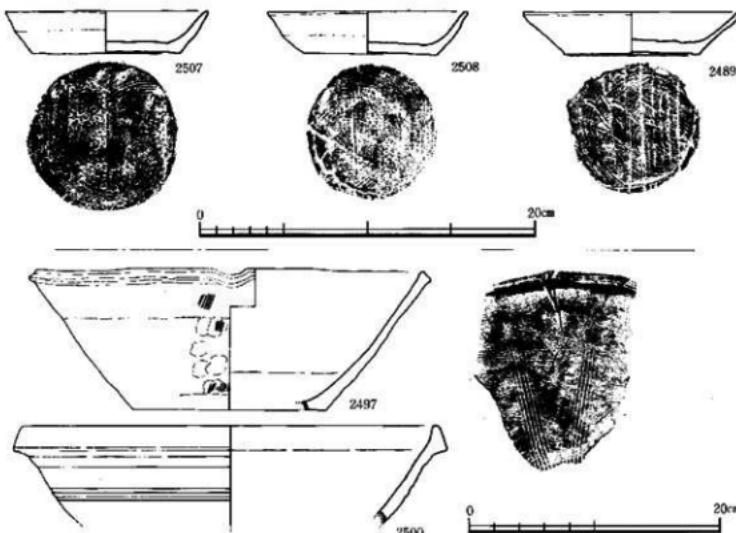
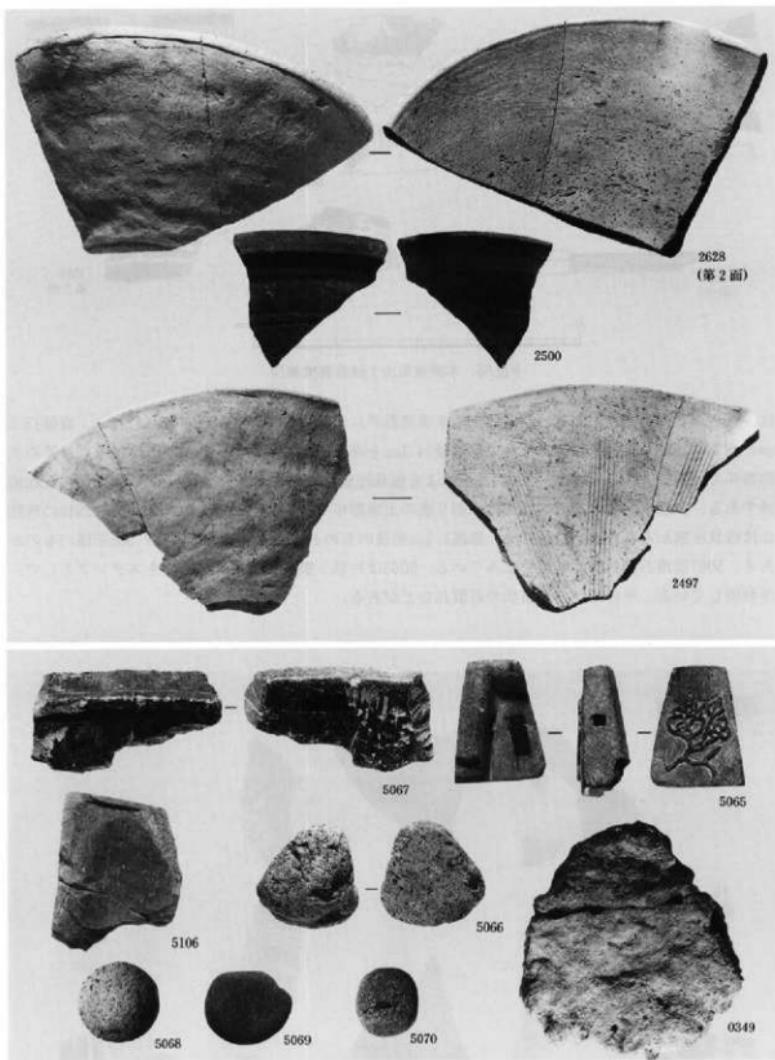


Fig. 55 第37号土壤出土遺物実測図(2)



Ph.41 第37号土塙出土遺物(2)

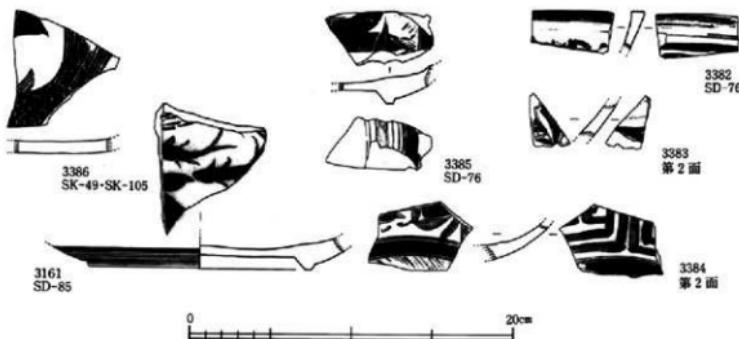
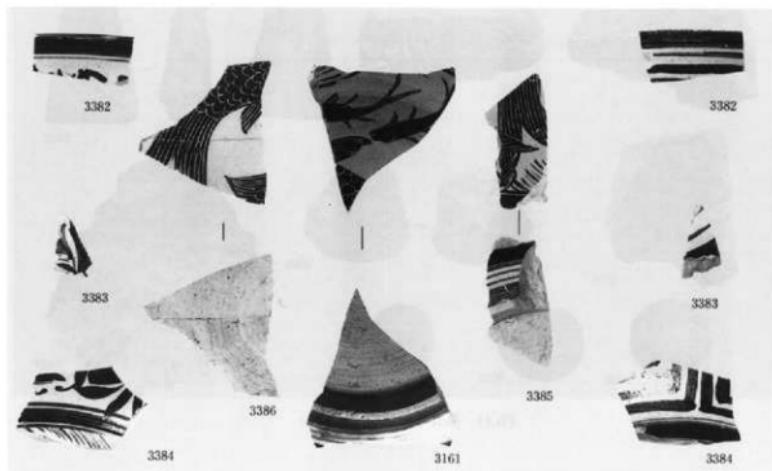


Fig.56 本調査地出土鉄絵盤実測図

は、竜泉窯青磁碗などがある。2497は東播糸須恵器の片口擂鉢で、口径31cm、器高11.2cm、底径15.5cmを測る。2500も東播糸須恵器擂鉢で、口径34.1cmを測る。2482～2488・2501～2506は糸切り底の土師器環で、2483・2485・2487・2507の外底による板状圧痕がみられる。口径8cm前後で、器高1.8m前後である。2489～2496・2507～2510は糸切り底の土師器環で、2489・2492・2496・2507～2510の外底には板状圧痕がみられる。口径13cm、器高2.5cm前後のものと、口径12.5cm、器高2.5cm前後のものがある。5067は滑石製石鍋の転用を試みている。5065は片岩？製の硯の海部の裏面をスタンプとして、再利用している。そのほか、基石状の石製品などがある。



Ph.42 本調査地出土鉄絵盤

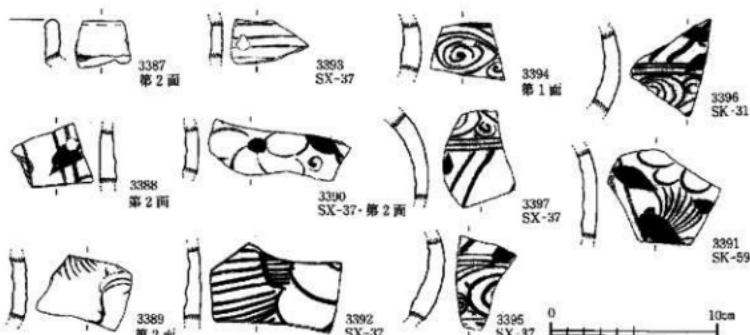


Fig.57 本調査地出土鉄検査実測図

SD-74 (Fig. 41・43, Ph. 27・32)

本溝は調査区の西側で検出し、SK-56・59に切られ、北西部の擾乱によって破壊されている。幅1m前後で16.6mを確認したが、北東方向は調査区外へ延びている。暗灰褐色～灰褐色のシルト～砂を覆土とし、25～65cm遺存し、断面形は逆台形を呈している。また、西側肩部から溝上部にかけては糸切り底の土師器皿・坏を破碎し、敷き詰めている。

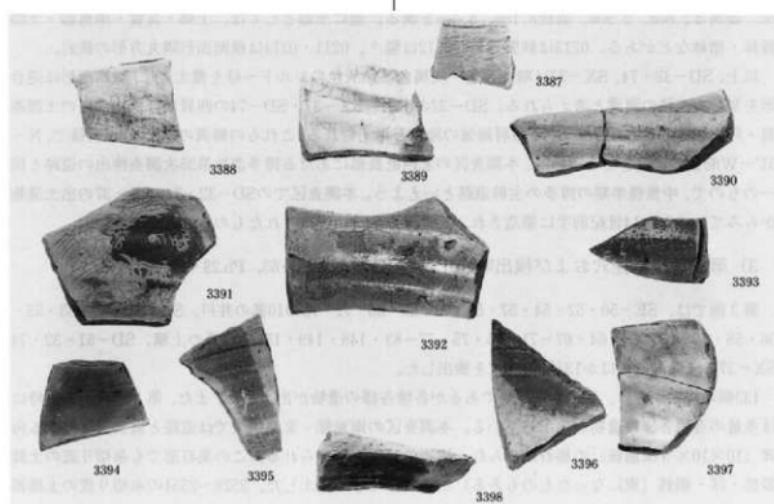
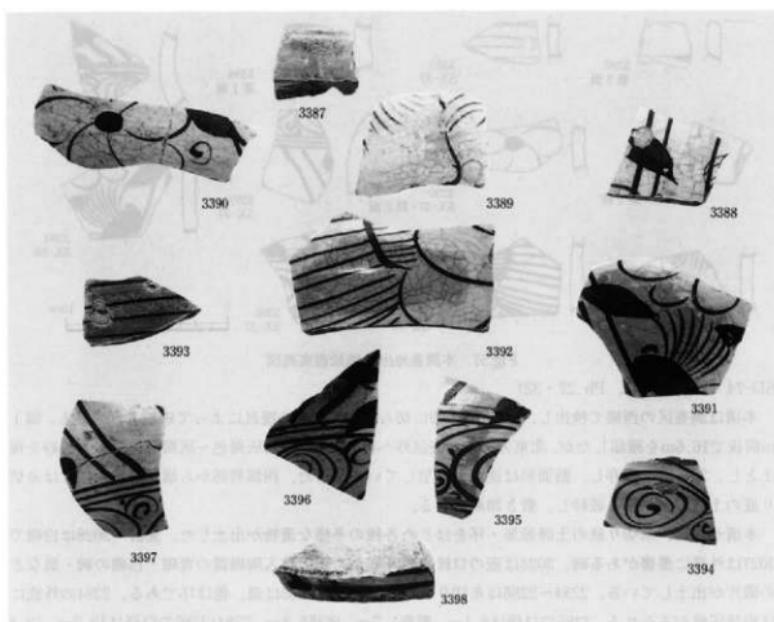
本溝からは、糸切り底の土師器皿・坏をはじめ各種の多様な遺物が出土した。3027・3028は白磁で、3027は外底に墨書がある碗、3028は壺の口縁で四耳壺か。他に輸入陶磁器の青磁・白磁の碗・皿などの破片が出土している。2284～2286は糸切り底の土師器で、2285は皿、他は坏である。2284の外底には板状压痕がみられる。2285の口径は8.1cm、器高1.7cm、底径5.8cm。2284・2286の口径は12.2cm、12.4cm、器高は2.8cm、2.9cm、底径8.1cm、8.4cmを測る。他に土器としては、土鍋・瓦質・須恵器・土師器鉢・擂鉢などがある。0213は鉄製刀子、0212は鑿？、0211・0214は横断面形隅丸方形の鉄釘。

以上、SD-32・74・SX-37は暗灰褐色～灰褐色・黒灰色のシルト～砂を覆土とし、横断面形は逆台形を呈し、道路の側溝と考えられる。SD-32の東肩、SX-37・SD-74の西肩には糸切り底の土師器皿・坏を破碎し敷き詰めており、路肩補強の施設と考えられる。これらの側溝の間は3.3m前後で、N-W～W前後の方針をとる道路は、本調査区の北西延長部にあたる博多遺跡第35次調査検出の道路と同一のもので、中世後半期の博多の主幹道路といえよう。本調査区でのSD-32・74・SX-37の出土遺物からみていくと、14世紀前半に築造され、16世紀末前後に廃棄されたものといえよう。

3) 第3面検出柱穴および検出時出土遺物 (Fig.42・58～65, Ph.28～33・44～46)

第3面では、SE-50・52・54・57・60・62・65・66・72・73の10基の井戸、SK-46・49・53・55・56・58・59・61・63・64・67・71・73・75・77・83・148・149・151の29基の土壙、SD-51・32・74、SX-37の4条の溝のほか133個の柱穴を検出した。

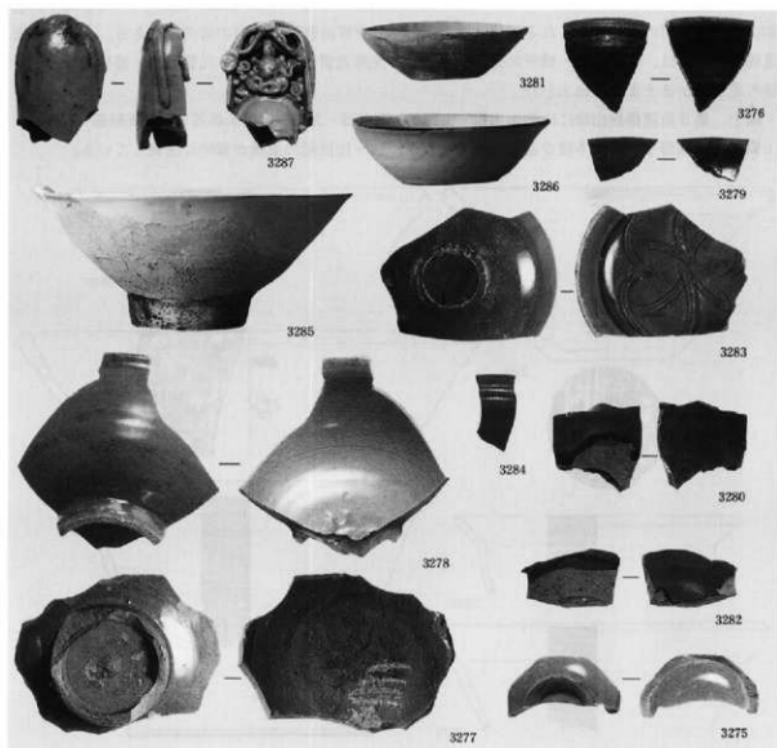
133個の柱穴からは、それぞれ少量であるが各種各様の遺物が出土した。また、第3面遺構検出時に多量の各種各様の遺物が出土している。本調査区の南東部・東側中央では道路と直交・並行する角礎(10×10×5cm前後)の集石がみられ、建物の基礎と考えられる。この集石部でも糸切り底の土師器皿・坏・銅錢(束になったものもある)が混入した形で出土した。2528～2551の糸切り底の土師器皿・坏は、この集石部から出土したものである。2538～2541・2545～2549は皿で、2541・2546・2548



Ph.43 本調査地出土鉄縁壺

の外底には板状压痕がみられる。口径8cm前後のものと8.6cmのものがあり、器高は1.2cmのものと1.3cmのものがある。2542~2544・2550・2551は壺で、2543の外底には板状压痕がみられる。2542の口径12cm、器高2.9cmがもっとも小さく、2550の口径13.6cm、器高3cmがもっとも大きい。以上から、これらの集石は中世末の16世紀頃のものといえよう。2531はSP-379出土の瓦器碗で、底径8.2cmを測る。2532~2537は各柱穴出土の糸切り底土師器で、2536は皿、他は壺。2536・2537の外底には板状压痕がみられる。壺は2532の口径8.5cm、器高1.9cmが小さく、2535の口径12.6cm、器高2.6cmが大きい。5073はSP-412出土の滑石製石鍋再加工品で、重さ157gに仕上げている。0348はSP-369出土の横断面形隅丸方形の鉄釘。本面検出の柱穴出土遺物は11世紀後半から16世紀のものが含まれており、ほとんどの柱穴は14世紀~16世紀のものといえよう。

第3面遺構検出時には、青磁・白磁の碗・皿・合子・四耳壺等の輸入陶磁器（3275~3287）が出土した。国産品としては、土鍋・鉢・擂鉢・土師器皿・壺・瓦器碗などがある。2576・2593・2597は土鍋で、いずれも外面に厚く煤が付着している。2576・2597は、鉢形をなす胴から屈曲して内湾気味に開き口縁となり、器内面はハケ目調整を施している。口径28cm、23cmを測る。2593は口径32cm、器高



Ph.44 第3面検出時出土陶磁器

14.2cm。2567・2568・2605はいずれも瓦質の擂鉢で、口径27cm、28.6cm、37cmを測る。2584も瓦質の擂鉢で、底径10cmを測り、外底には板状圧痕がみられる。2569～2575・2577～2583・2585～2592・2595・2596・2598～2599・2602～2604・2606～2611は糸切り底の土器器で、2585・2587～2589・2595・2596・2606・2607・2610は皿、他は壺である。皿のなかで2585・2587・2588の外底には板状圧痕がみられ、2606の口縁内外面には油性物の付着がみられる。2606は灯明皿として使用したものと考えられる。皿では2610が口径7.8cm、器高1.3cmと小さく、2607が口径8.8cm、器高2.4cmと大きい。壺の2571・2573・2575・2578・2579・2582・2590・2599・2604・2609・2611の外底には板状圧痕がみられる。壺のなかでは2586が口径6.8cm、器高1.8cmともっとも小さく、2573が口径16.6cm、器高4.2cmと大きい。壺は口径11.5cm前後で、器高2.7cmのもの、口径12.2cm前後で器高2.9cm前後のもの、口径13cm前後で器高2.9cm前後のものがある。5081は口径17cmを測る滑石製石鍋で、外面には煤が付着している。5080は凝灰岩製の幅7.6cmの硯で、表裏に硯面があり、海と陸が交互になっている。4027～4030は種の羽口で、4027は端部に溶解物の付着がみられ、横断面は径9cmのおおむね円形を呈するが、固定面と考えられる一部が平坦に近い状態になっている。SK-73出土の4019も径7.6cmと少し径が小さいが、同じ形態をもっている。0430は鉄製の鉈鎌で、器長21.6cm、器長最大幅3.9cm、刃渡り14cm、最大厚0.4cmを測り、端部には柄固定用の返しがみられる。他に鉄製品として横断面形隅丸方形の釘や鎌がある。また、本面遺構検出時には、太平通寶・咸平元寶・開元通寶・元祐通寶・皇宋通寶・元豐通寶・嘉祐通寶など各種の北宋銭がまとまって出土した。

以上、第3面遺構検出時には弥生土器・土器器・須恵器・瓦器・中世土器器・輸入陶磁器・石製品・土製品・金属器など各種多様な遺物が出土したが、14～16世紀の遺物が量的に圧倒している。

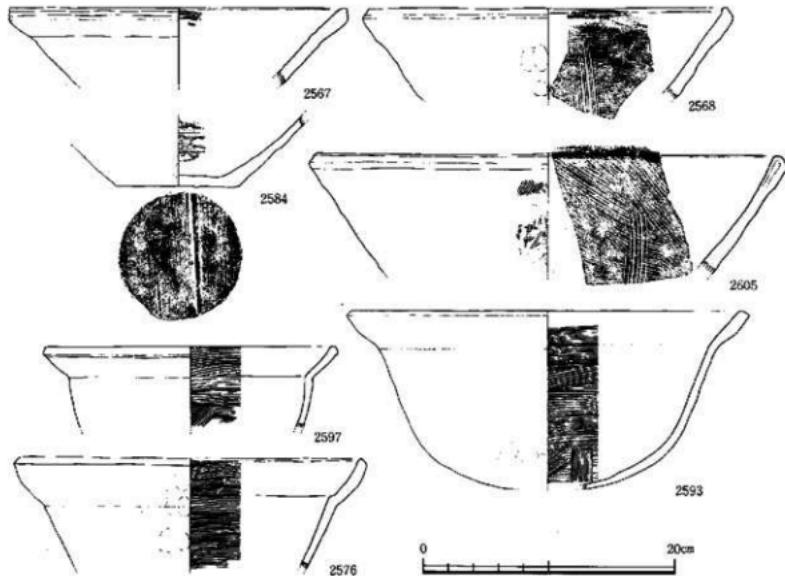


Fig.58 第3面検出時出土擂鉢・土鍋実測図

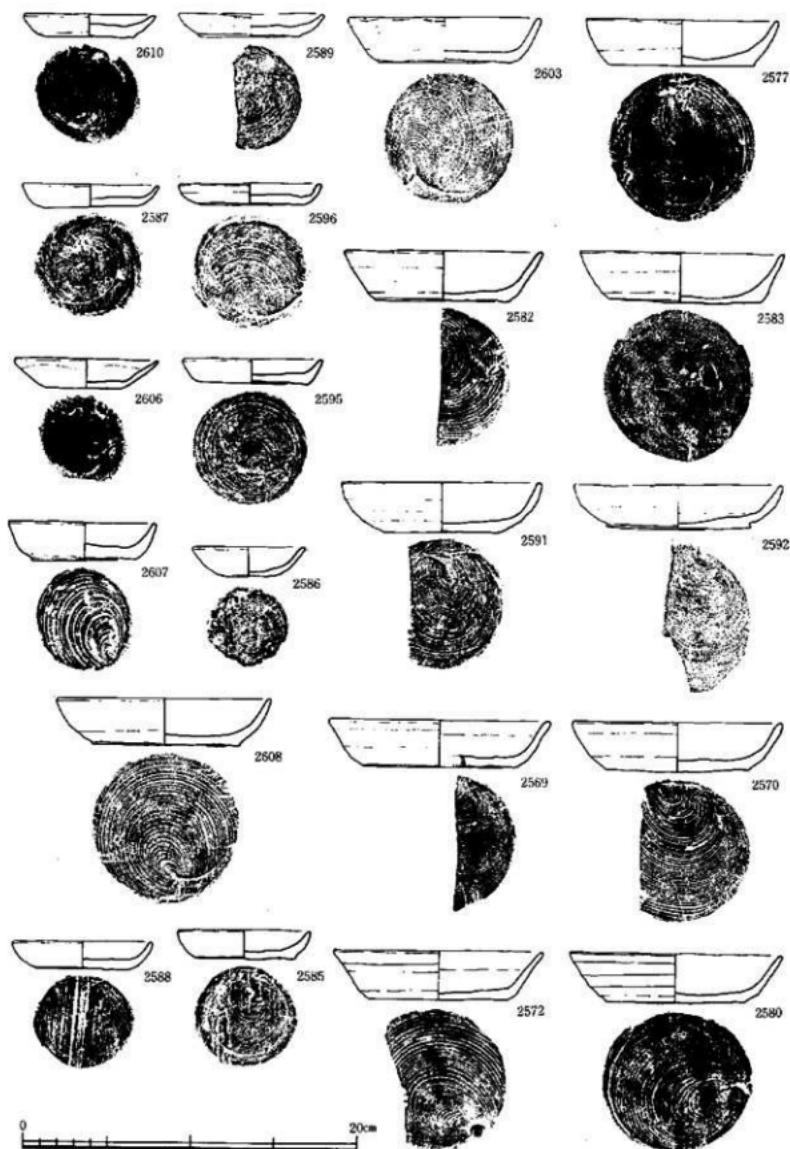


Fig.59 第3面検出時出土土師器実測図(1)

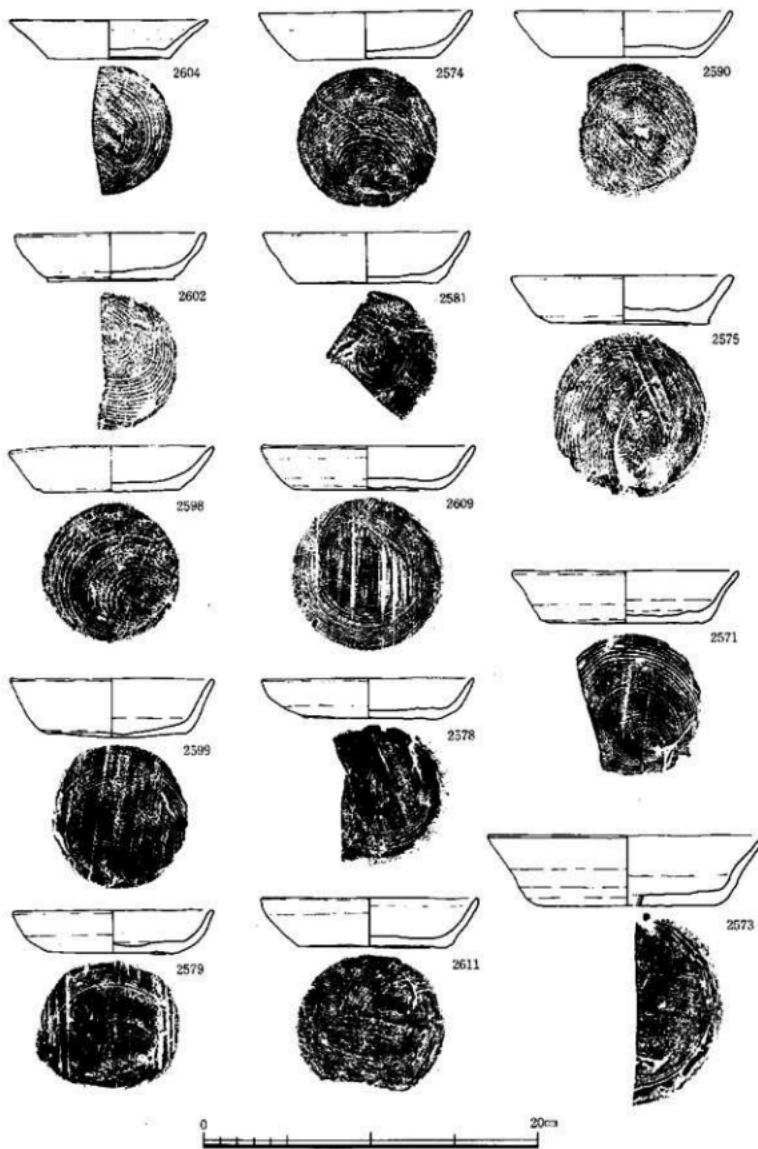


Fig.60 第3回検出時出土土器実測図(2)

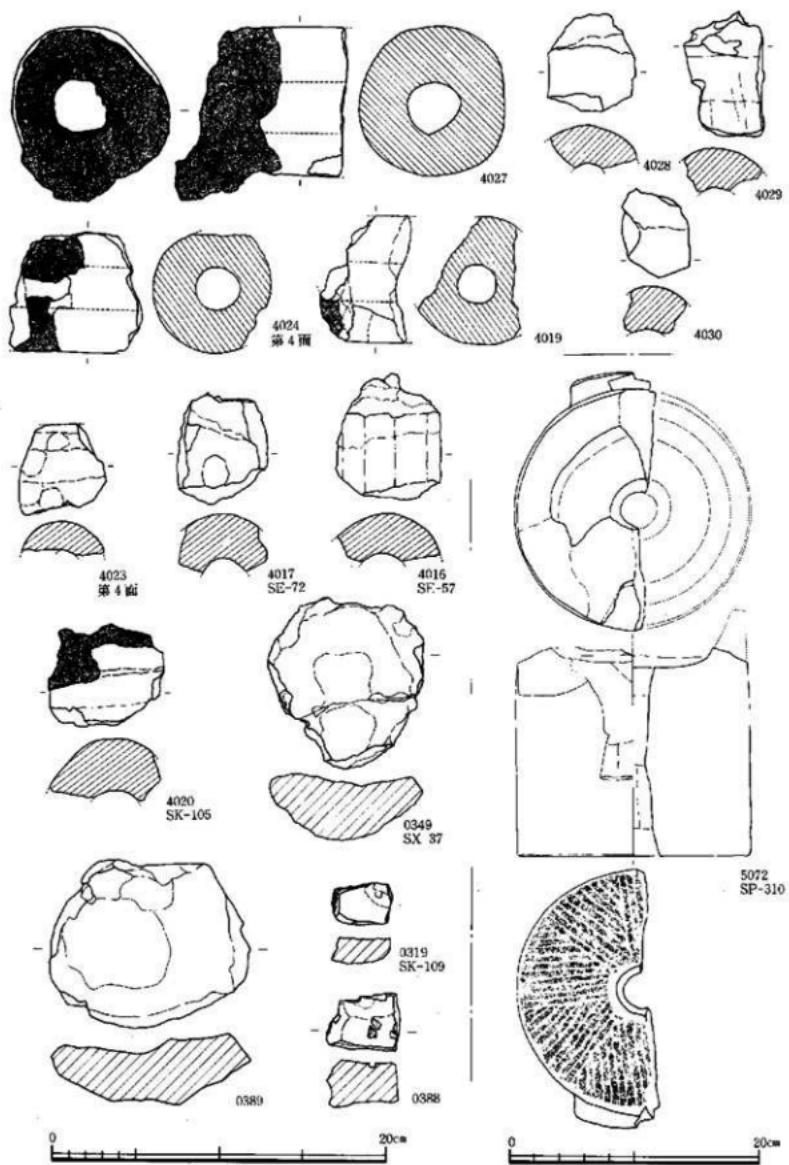
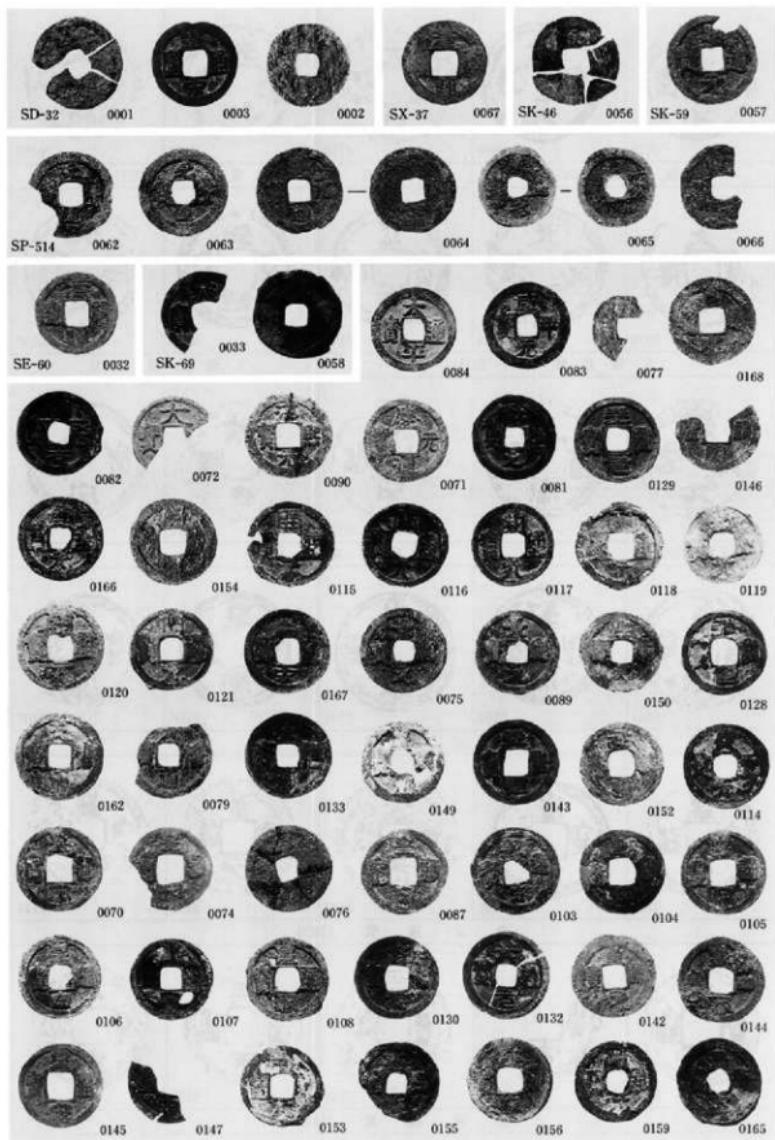


Fig.61 第3・4面検出時出土石製品・輪・鐵洗実測図

0001	0003	0002	0067	0056
皇宋通寶 (1039)	元祐通寶? (1086)		元豐通寶 (1078)	□□□□
SD-32			SX-37	SK-46
0057	0032	0033	0058	0084
圓祐通元寶 (1165)	元祐通寶 (1086)	□□□□	熙寧元寶	太平通寶 (977)
SK-59	SE-60		SK-69	第3面検出時
0083	0077	0168	0082	0072
咸平元寶 (999)	祥符二寶 (1008)	嘉祐元寶 (1056)	治平元寶 (1064)	大觀通寶 (1107)
第3面検出時				
0090	0071	0081	0129	0146
淳熙元寶 (1174)	慶元通寶 (1195)	淳祐元寶 (1241)	□□□□	□□通寶
第3面検出時				
0166	00154	0115	0116	0117
開元通寶 (1002)				
第3面検出時				
0118	0119	0120	0121	0167
開元通寶 (1002)				
第3面検出時				

Fig.62 第3面各造構および検出時出七銅錢拓影(1)



Ph.45 第3面各造構および検出時出土銅銭

0075 景德元寶 (1005)	0089	0150	0128	0162
0079	0133	0149	0143	0152
天策通寶 (1917~1921)				
0114 天聖元寶 (1023)	0070	0074	0076	0087
皇宋通寶 (1039)				
0103	0104	0105	0106	0107
皇宋通寶 (1039)				
0108	0130	0132	0142	0144
皇宋通寶 (1039)				
0145	0147	0153	0155	0156
皇宋通寶 (1039)				

Fig.63 第3面檢出時出土銅錢拓影(2)

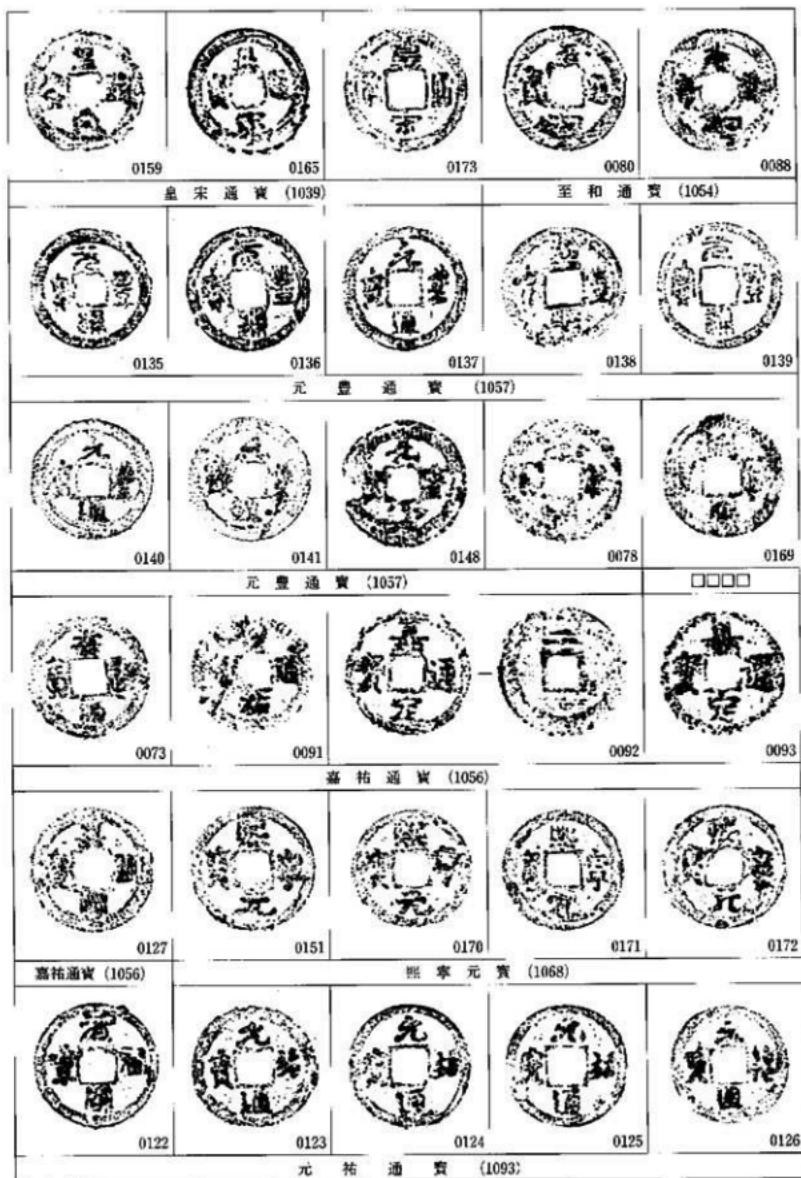
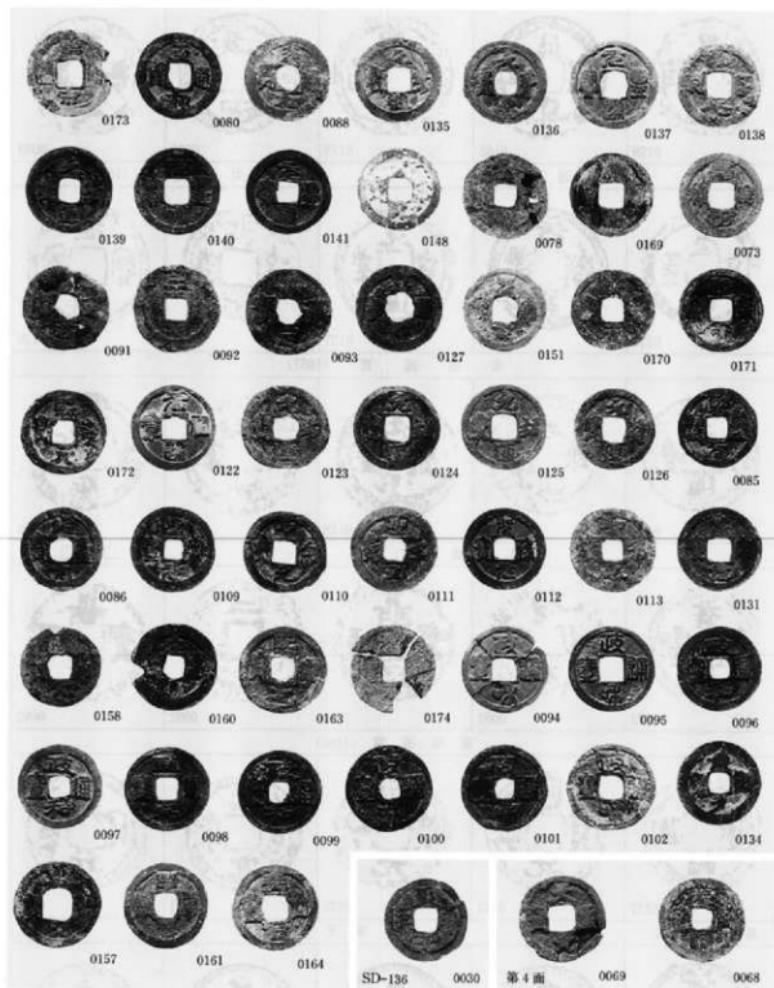


Fig.64 第3面検出時上出銅錢拓影(3)



Ph.46 第3・4面各遺構および検出時出土銅錢

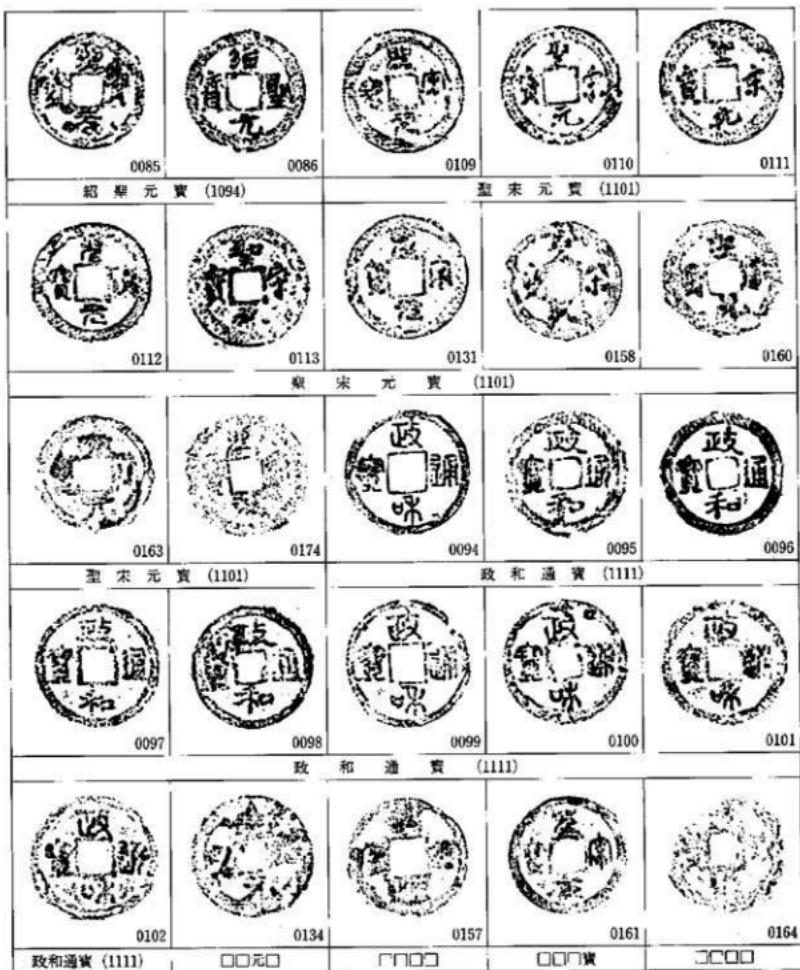


Fig.65 第3面検出時出土銅錢拓影(4)

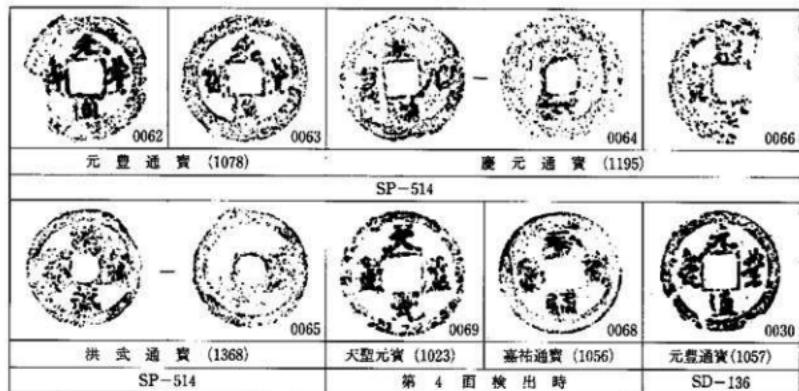


Fig.66 第3・4面各造構および検出時出土銅錢拓影

4) 第4面検出遺構と出土遺物

SK-84 (Fig.68・69, Ph.48)

本土壙は本調査区西側中央からやや南寄りに位置し、SD-113を切り、SK-153、SD-32、柱穴に切られている。標高3.1m弱の黄白色砂（地山）の面で、長軸70cm、短軸40cmを測る平面形不正形を呈し、黄褐色砂を覆土とし、甕が半裁された状態で検出できた。墓壙は皿状をなし、23cm前後遺存している。棺は中形の土師器甕を用い、口縁を合わせて水平に埋置している。合わせ口には粘土等の目貼りはみられない。

上甕は土師器甕で、底部は丸底をなすと考えられるが欠失している。丸みをもつ長胴から屈曲して聞く口縁をもっている。胴外面はハケ目調整、内面の筋曲下はヘラケズリが施され、下部には指押さえ痕が残り、口縁はヨコナデ調整で仕上げている。器壁は胴中央が0.4cm強とともに薄く、口縁・底部が厚い。口径29.6cm、器高（26cm強）。

下甕も土師器甕で、底部は丸底をなすと考えられるが欠失している。長胴から屈曲して聞き口縁となっている。胴外面および口縁内外面はハケ目調整、胴内面の筋曲下はヘラケズリが施され、口縁外面から口縁端はヨコナデ調整で仕上げられている。器壁は0.6cm前後で底部を厚めにしている。口径29.6cm、器高（26.5cm）。

以上から、本土壙は中形の土師器甕2個を用い、合わせ甕とし、水平に埋置した土器棺墓と考えられる。上下の使用棺の甕から、古墳時代終末期から奈良時代初期のものといえよう。

SK-86

本土壙は本調査区の南西部に位置し、標高2.7m前後の黄白色砂の面で検出した。黄褐色～暗褐色砂を覆土とし、東西方向70cm強、南北70cmを確認したが、南側は調査区外へ延びている。平面形は隅丸方形を呈し、70cm弱遺存している。床面は東西方向30cm、南北30cm強を測る隅丸方形を呈し、20cm弱垂直に立ち上がり、北から東にかけて幅15cm前後の棚があり、棚から開きながら立ち上がっている。南部が調査区外に延びており、全体の平面形等が不明であるが、土壙墓の可能性がある。本土壙からは出土遺物はなく、時代・時期はわからない。

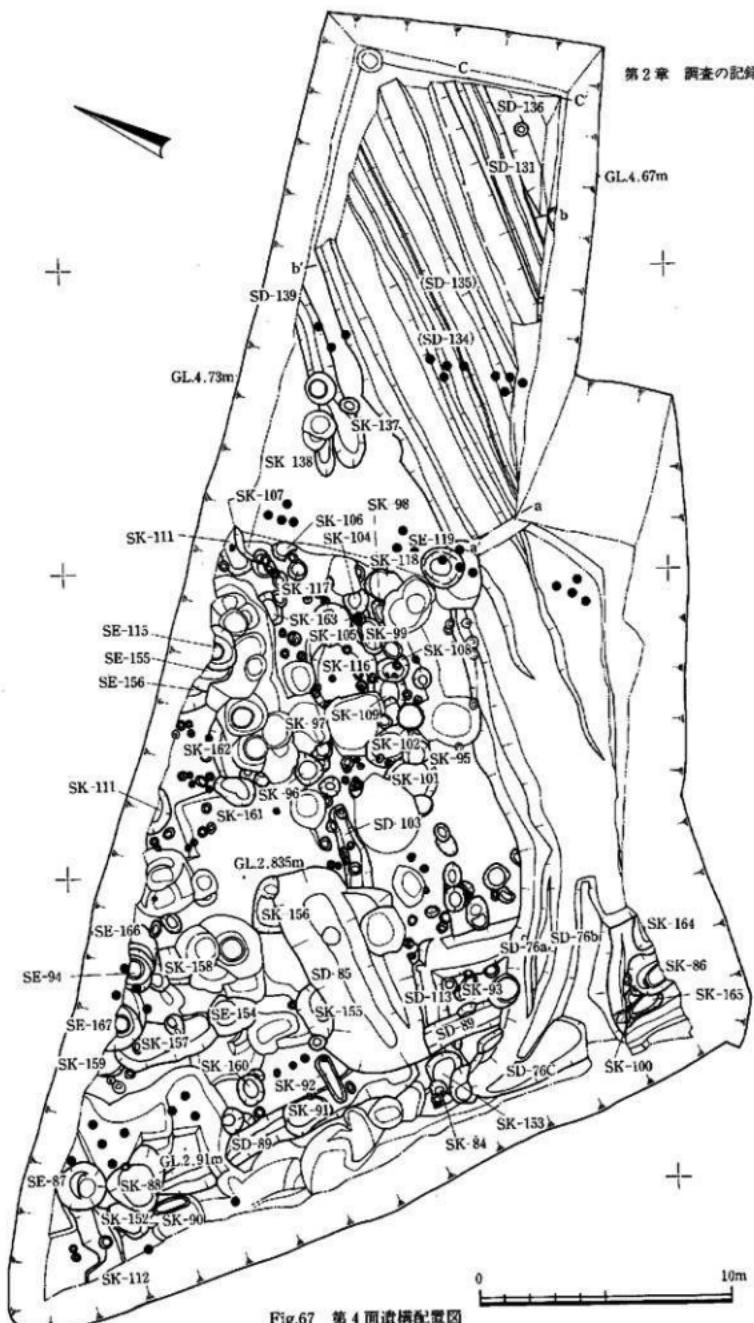


Fig.67 第4面造構配置図



1) 第4面作業風景



2) 拡張区第4面遺構分布状況

Ph.47 第4面遺構分布状況

SE-87 (Fig.70, Ph.70)

本井戸は本調査区の北西部で検出した。径2m全体の平面形円形を呈し、1.5m前後遺存している。井筒は不明瞭であり、井戸底の標高は1.54m。井戸底から20cm前後上に棚がある。本井戸からは、少量の土師器片などの遺物が出土した。3176は青白磁合子である。

SK-88 (Fig.70, Ph.71)

本土壙は本調査区の北西部で検出し、SK-89を切り、SK-152に切られ、さらに攪乱を受けている。長軸2.5m、短軸2mを測る平面形隅丸方形を呈し、90cm前後遺存している。床面は皿状をなし、壁は開きながら立ち上がっている。

本土壙からは、糸切り底の土師器などが少量出土した。2459～2463は本井戸出土の糸切り底土師器皿である。2462の口径6.3cm、器高1cm、底径4.9cmがもっとも小さく、2463の口径8.2cm、器高1.2cm、底径5.4cmがもっとも大きい。

SK-90

本土壙は本調査区の北西部で検出し、SD-32に切られている。黄色砂（地山）の面で暗褐色砂を覆土とし、長軸1.5m、短軸0.55mの平面形隅円形を呈し、50cm前後遺存し、床はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床直上に赤色顔料が検出できた。

本土壙は、床直上に赤色顔料があること、平面形・断面形から土壙墓と考えられ、出土遺物はないが、古墳時代のものか。

SK-91 (Fig.41, Ph.69)

本土壙は本調査区の西側中央からやや北寄りに位置し、SD-89を切っている。長軸2m、短軸1.2mを測る平面形隅丸方形を呈し、50cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開きながら立ち上がっている。本土壙からは、土師器片と少量の鉄製品が出土した。0314～0317は横断面形隅丸方形

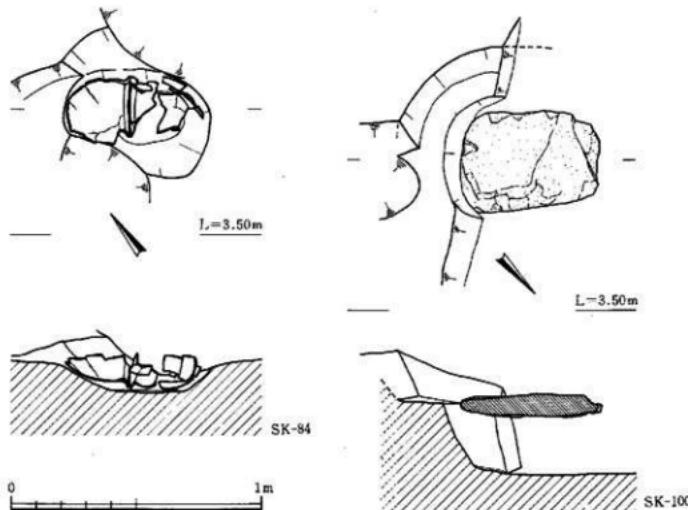
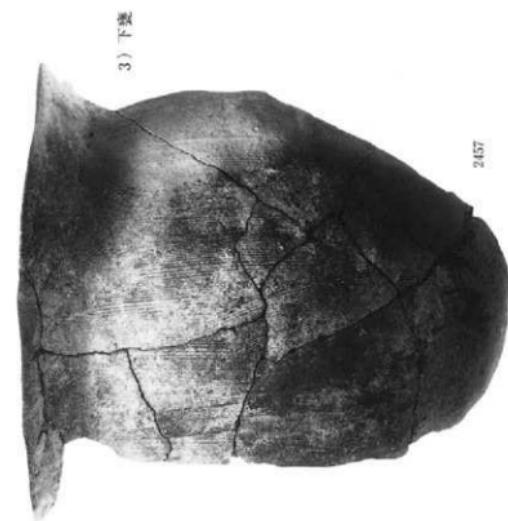


Fig.68 第84号土器棺墓・第100号石蓋土壙墓(SK-84・100)実測図

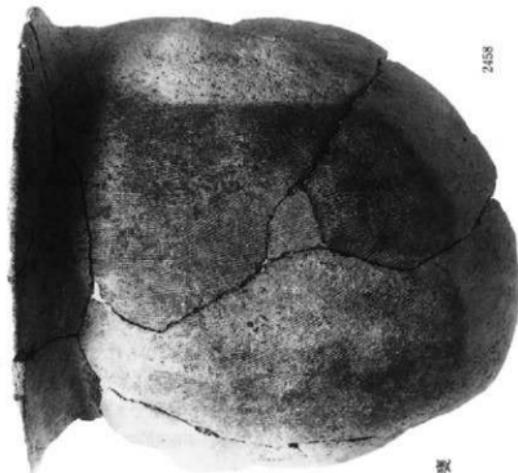
1) 检出状態



2) 土器检査在状態



3) 下邊



4) 上邊

2457

Ph.48 第34号土器检査

2458

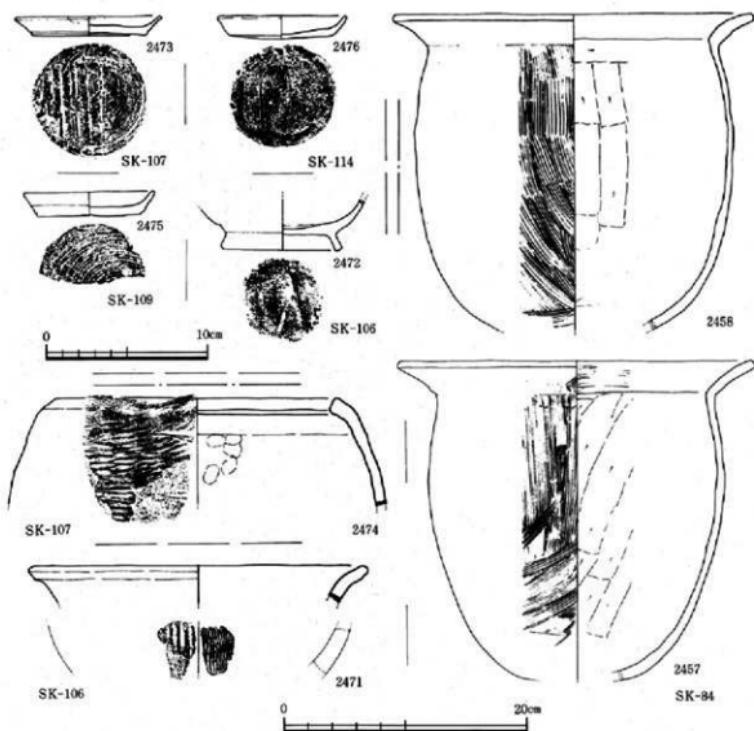


Fig.69 第4面各遺構出土遺物実測図(1)



Ph.49 第100号土壤墓

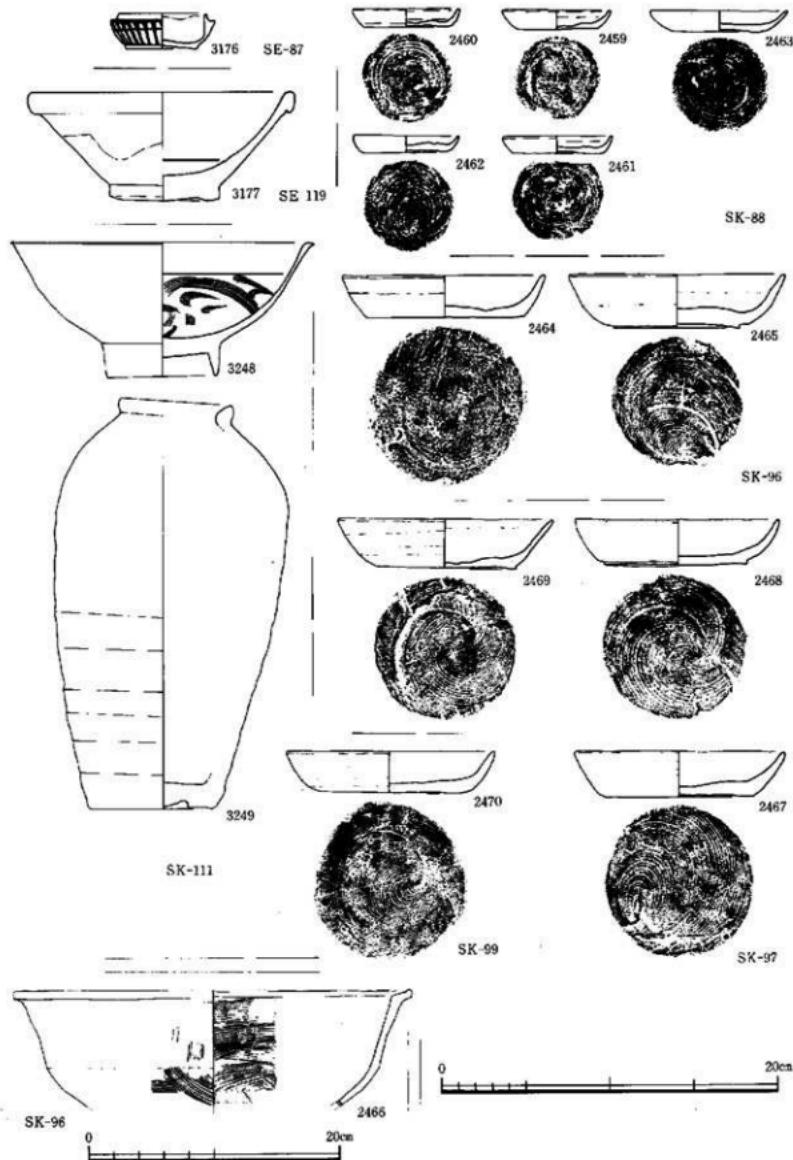


Fig.70 第4面各遺構出土遺物実測図(2)

の鉄釘である。これらの鉄釘には木質部が付着している。

SK-92

本土壙は本調査区の西側中央からやや北寄りで検出し、SD-89を切り、柱穴に切られている。黄白砂(地山)の面で検出し、長軸2m強、短軸60cmを測る平面形長楕円形を呈し、30cm強遺存している。床面は皿状をなし、横断面はU字状をなしている。本土壙からは遺物は出土しなかったが、土壤墓か。

SK-93

本土壙は本調査区の中央からやや西南寄りに位置し、SD-113を切り、柱穴に切られている。長軸1.2m弱、短軸45cmを測る平面形楕円形を呈し、30cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。SK-90・92と同形態をとることから土壤墓か。

SE-94

本井戸は本調査区北側の中央からやや西寄りに位置し、SE-166を切り、SE-36に切られている。径1.7m強を測る平面形円形で、40cm前後遺存する鉢形の掘り方をもち、掘り方の中央に径80cmの井筒がある。井筒底の標高は1.43mである。

SK-96 (Fig.70, Ph.71・72)

本土壙は、本調査区の中央から東北寄りに位置している。径1.1mを測る平面形円形を呈し、60cm前後遺存している。床はほぼ平坦で、壁はやや開きながら立ち上がり鉢状をなしている。本土壙からは少量の遺物が出土した。2466は口径31cmを測る土鍋である。2464・2465は糸切り底の土器器坏で、口径12.1cm、12.8cm、器高2.5cm、3.2cm、底径9.4cm、7.4cmを測る。

SK-97 (Fig.70, Ph.71)

本土壙はSK-96の東に近接して位置し、南北方向1m弱、東西0.6mを確認したが、東側はSK-73に切られている。35cm前後遺存し、床面は皿状となり、壁はやや開き気味に立ち上がっている。本土壙からは、糸切り底土器器坏の完形3点が出土した。2467～2469の口径は12.5cm、12.1cm、12.9cm、器高は2.7cm、2.8cm、3cm、底径8.9cm、8.5cm、8.1cmを測る。

SK-99 (Fig.70, Ph.71)

本土壙は本調査区の西側中央に位置し、SK-98と接し、柱穴と切り合っている。長軸1.5m、短軸0.9

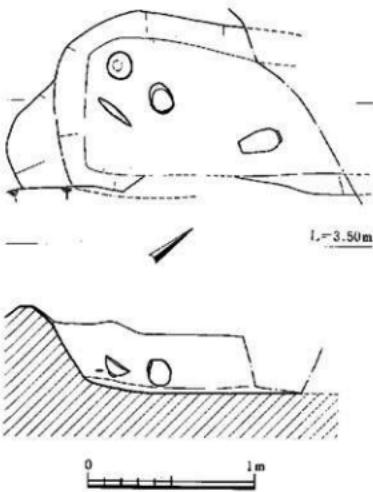


Fig.71 第111号土壙墓(SK-111)実測図



Fig.72 第111号土壙墓出土鉄器実測図



1) 檢出状態



3249

2) 長胴壺



3248

3) 白磁碗



Ph.50 第111号土壤と出土遺物

mを測る平面形隅丸方形を呈し、40cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。本土壤からは少量の遺物が出土した。2470は糸切り底の土師器壺で、口径12.5cm、器高2.4cm、底径9cmを測る。

SK-100 (Fig.68, Ph.49)

本土壤は本調査区の南西部で検出し、SD-76に切られ、擾乱を受けている。3.30m前後の黄白色砂（地山）の面で検出した。暗褐色砂を覆土としている。検出面下20cmに幅40cm、長さ55cm、厚さ9cmの頁岩？製の板石があり、板石の下23cm前後が下底（床面）となっている。推定復元すると、幅1m弱、長さ1.5~2mで、30~50cmの深さの掘り方をもち、中央に検出板石と同じ大きさのもの2枚程度を蓋し、その下に墓壙をもつものといえよう。

以上から、本土壤は遺物がなく、時期限定はできないが、古墳時代の石蓋土壙墓と考えられる。

SK-101・102

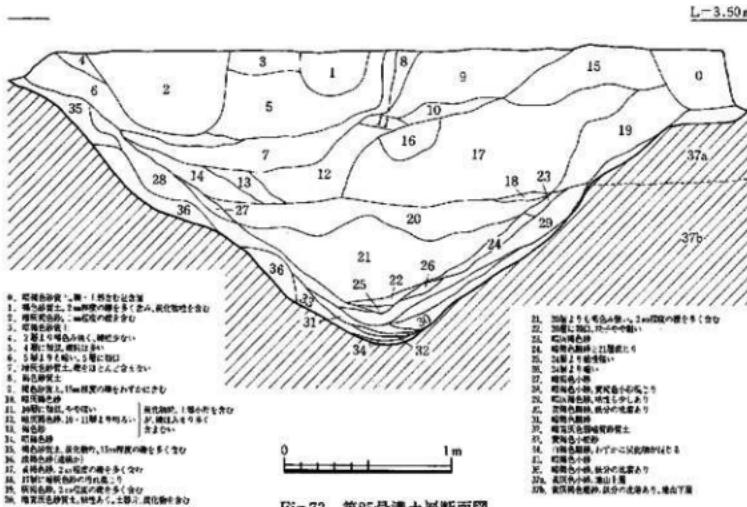
両土壙は本調査区中央から西寄りに位置し、SK-101がSK-102を切り、両土壙はSK-95に切られている。SK-101は径2mを測る平面形円形を呈し、50cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がっている。SK-102は長軸1.95m、短軸1.45mを測る平面形橢円形を呈し、90cm前後遺存している。両土壙とも少量の各種の遺物が出土したが、図化できるものはなかった。

SK-104 (Ph.72)

本土壤は本調査区西侧の中央に位置し、SK-68、柱穴に切られている。径1mを測る平面形不正円形を呈し、30cm前後遺存している。床面は皿状をなし、壁は開きながら立ち上がっている。

SK-105 (Fig.56・61, Ph.33・61)

本土壤は本調査区西側の中央からやや北寄りに位置し、SK-116を切っている。径80cm前後を測る不正円形を呈し、70cm強遺存している。床面は皿状をなし、壁は開き気味に立ち上がっている。本土壤からは少量の各種の遺物が出土した。3386は鉄絵盤で、SK-49出土のものと接合したものである。4020





1) 第85号沟



2) 第136号沟

Ph.51 第85·136号沟土层堆积状态

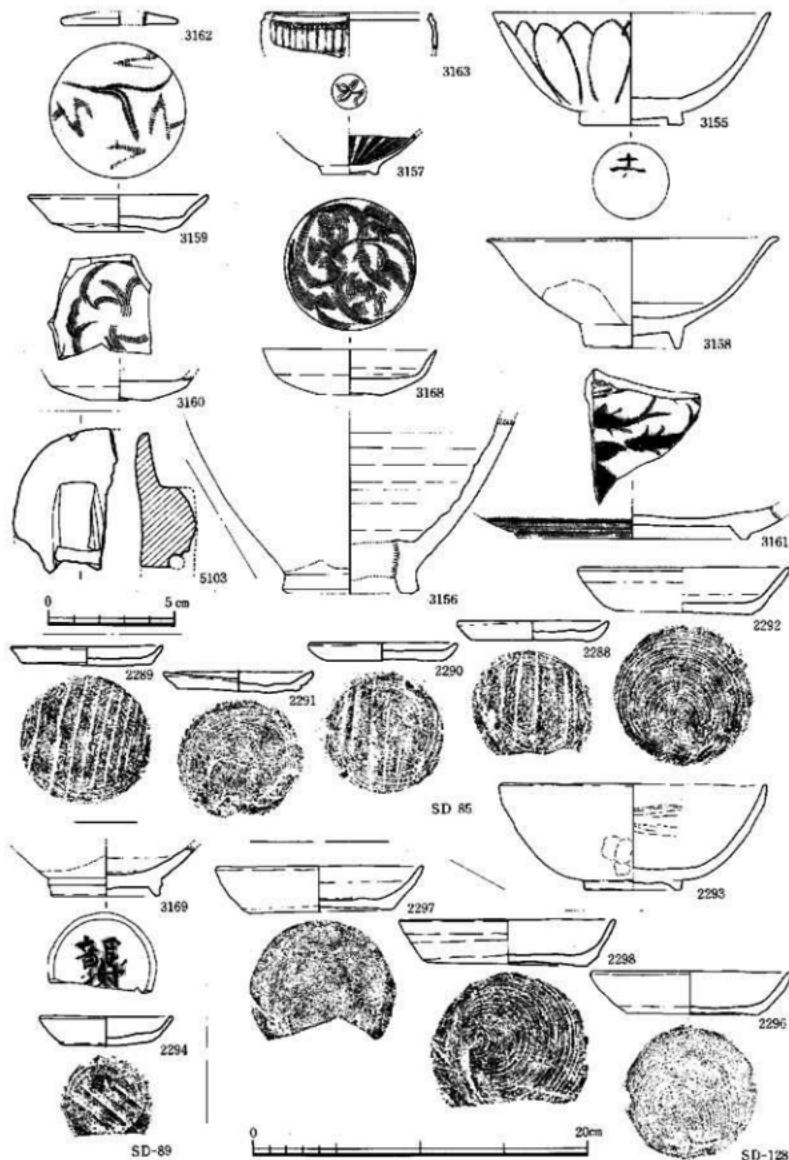
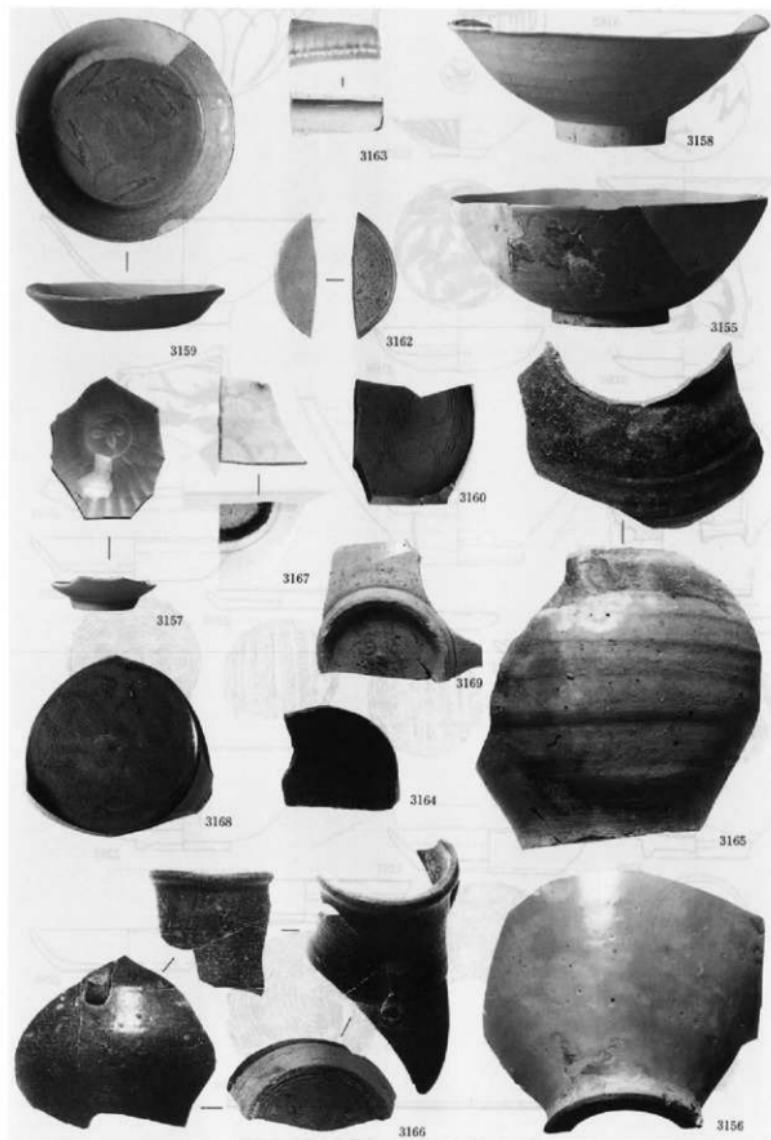


Fig.74 第85・89・128号講出土遺物実測図



Ph.52 第85号溝出土陶磁器

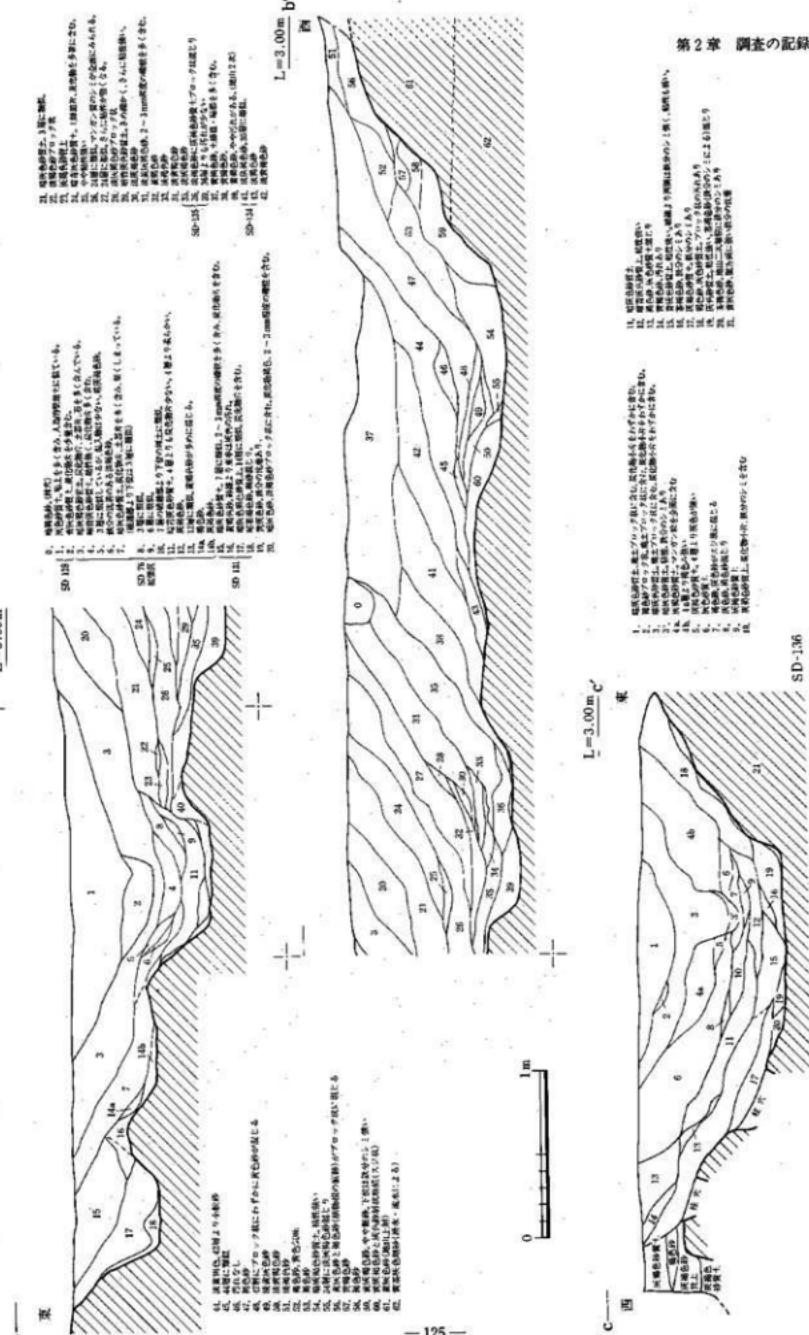


Fig.75 塩原区および第136号溝土質堆積断面図

は縁の羽口片で端部に溶解物の付着がある。

SK-106 (Fig.69)

本土壙は本調査区の北東部に位置し、柱穴に切られ、東側は擾乱によって破壊されている。径1mを測る平面形円形を呈し、40cm前後遺存している。床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がっている。本土壙からは少量の遺物が出土した。2472は土師器の高台貼付けの碗で、外底には板状圧痕がみられ、器内外面はヨコナデ調整が施されている。2471は玄海灘式製塙土器で、同一個体と考えられ、口径28cmを測る。

本土壙は黄白色砂（地山）の面で検出しており、覆土は黄白色砂であり、出土遺物も新しいものではなく比較的まとまっており、9世紀のものか。

SK-107 (Fig.69, Ph.70~72)

本土壙は本調査区の北東部に位置し、SK-111を切り、柱穴群に切られ、東側は擾乱によって破壊されている。径2.3m前後を測る平面形円形を呈し、40cm前後遺存している。床面は皿状をなし、壁はやや開き気味に立ち上がっている。本土壙からは少量の遺物が出土した。2473は糸切り底の土師器皿で、外底に板状圧痕がみられ、口縁には煤の付着がみられる。灯明皿として使用されたか。口径9cm、器高1.2cm、底径7cmを測る。2474は口縁が内傾する土師器の鉢で、器外面は叩きが施されている。口径23.4cmを測る。

SK-109 (Fig.61・69, Ph.69・71)

本土壙は本調査区の西側中央に位置し、SK-116を切り、SK-49・108に切られ、さらに現代の井戸に切られている。長軸(1.4m)、短軸1.3mを測る平面形横円形を呈し、35cm前後遺存している。床面は皿状をなし、壁は開きながら立ち上がっている。本土壙からは少量の遺物が出土した。2475は糸切り底の土師器で、口径8cm、器高1.5cmを測る。0318は横断面形隅丸方形の鉄釘、0319は鉄滓である。

SK-111 (Fig.70~72, Ph.50・69)

本土壙は本調査区の北東部で検出し、SK-107、柱穴等に切られ、東側は擾乱によって肩を破壊されている。東西方向1.1m、南北1.8m強を確認したが、北側は調査区外に延びている。平面形は隅丸方形を呈し、50cm弱遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。本土壙床面には男性？の頭骨、白磁碗と長胴壺、短刀の完形があり、上壙墓といえよう。

本土壙墓からは、副葬と考えられる白磁碗(3248)、長胴壺(3249)と長さ25.8cm、幅2.7cm、器厚0.4cmの短刀が箱に入った状態で出土した。

以上から、本土壙は上壙墓で、出土遺物から12世紀のものといえよう。

5) 第4面検出溝状遺構と出土遺物

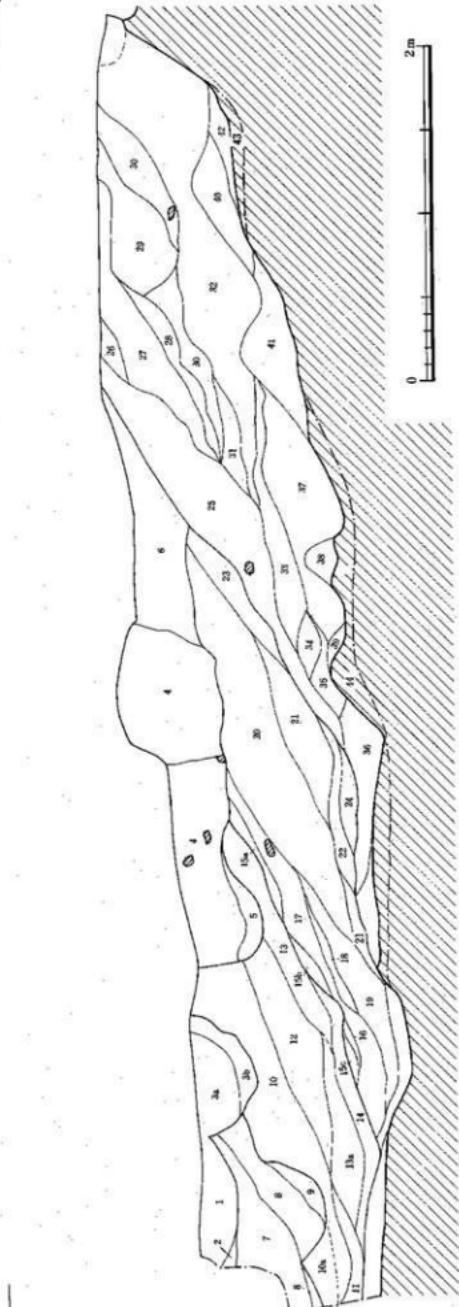
SD-85 (Fig.41・73・74・90, Ph.51・52・69・71・73)

本溝は本調査区の中央部で検出し、SD-89・103・113を切り、SK-155・156、SE-01および現代井戸に切られている。幅4.5m前後で8.8mの長さを測り、S-39°-Wの方位をもち、1.7m前後の深さをもっている。検出面は黄白色砂（地山）の面で、暗褐色～灰褐色のシルト～砂～粗砂を覆土としている。横断面形はV字状をなしており、底から1m前後上の南側は棚状をなしている。

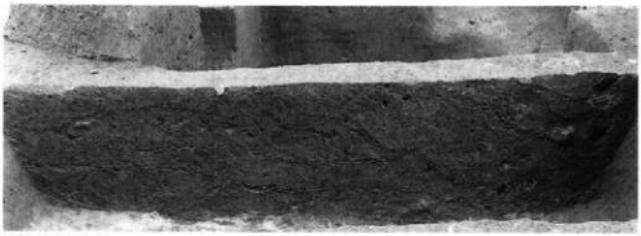
本溝からは、各種の比較的まとまった遺物が出土した。3155・3157・3158は碗で、前二者は青磁、後者は白磁。3159・3160・3168は青磁皿。3162・3163は青白磁で、前者は蓋、後者は壺。3156は白磁の四耳壺、3161は鉄絵盤。2288～2292は糸切り底の土師器で、2292は壺、他は皿である。皿はいずれも口径9cm前後、器高1.2cm前後で、2288～2290の外底には板状圧痕が明瞭にみられる。0293は高台付

第2章 調査の記録

$L=3.50 \text{ m}^2$



- Fig. 76 第16号薄土層断面図
- 説明：断面図は、地質学的構造、岩相などを示すものである。1. 砂岩層の厚さを示す。2. 地質学的構造を示す。3. 岩相を示す。4. 地質学的構造を示す。5. 地質学的構造を示す。6. 地質学的構造を示す。7. 地質学的構造を示す。8. 地質学的構造を示す。9. 地質学的構造を示す。10. 地質学的構造を示す。11. 地質学的構造を示す。12. 地質学的構造を示す。13. 地質学的構造を示す。14. 地質学的構造を示す。15. 地質学的構造を示す。16. 地質学的構造を示す。17. 地質学的構造を示す。18. 地質学的構造を示す。19. 地質学的構造を示す。20. 地質学的構造を示す。21. 地質学的構造を示す。22. 地質学的構造を示す。23. 地質学的構造を示す。24. 地質学的構造を示す。25. 地質学的構造を示す。26. 地質学的構造を示す。27. 地質学的構造を示す。28. 地質学的構造を示す。29. 地質学的構造を示す。30. 地質学的構造を示す。31. 地質学的構造を示す。32. 地質学的構造を示す。33. 地質学的構造を示す。34. 地質学的構造を示す。35. 地質学的構造を示す。36. 地質学的構造を示す。37. 地質学的構造を示す。38. 地質学的構造を示す。39. 地質学的構造を示す。40. 地質学的構造を示す。41. 地質学的構造を示す。
- 説明：断面図は、地質学的構造、岩相などを示すものである。1. 砂岩層の厚さを示す。2. 地質学的構造を示す。3. 岩相を示す。4. 地質学的構造を示す。5. 地質学的構造を示す。6. 地質学的構造を示す。7. 地質学的構造を示す。8. 地質学的構造を示す。9. 地質学的構造を示す。10. 地質学的構造を示す。11. 地質学的構造を示す。12. 地質学的構造を示す。13. 地質学的構造を示す。14. 地質学的構造を示す。15. 地質学的構造を示す。16. 地質学的構造を示す。17. 地質学的構造を示す。18. 地質学的構造を示す。19. 地質学的構造を示す。20. 地質学的構造を示す。21. 地質学的構造を示す。22. 地質学的構造を示す。23. 地質学的構造を示す。24. 地質学的構造を示す。25. 地質学的構造を示す。26. 地質学的構造を示す。27. 地質学的構造を示す。28. 地質学的構造を示す。29. 地質学的構造を示す。30. 地質学的構造を示す。31. 地質学的構造を示す。32. 地質学的構造を示す。33. 地質学的構造を示す。34. 地質学的構造を示す。35. 地質学的構造を示す。36. 地質学的構造を示す。37. 地質学的構造を示す。38. 地質学的構造を示す。39. 地質学的構造を示す。40. 地質学的構造を示す。41. 地質学的構造を示す。



1) 第1ベルト



2) 第2ベルト



3) 拡張区

Ph.53 第76号溝土層堆積状態

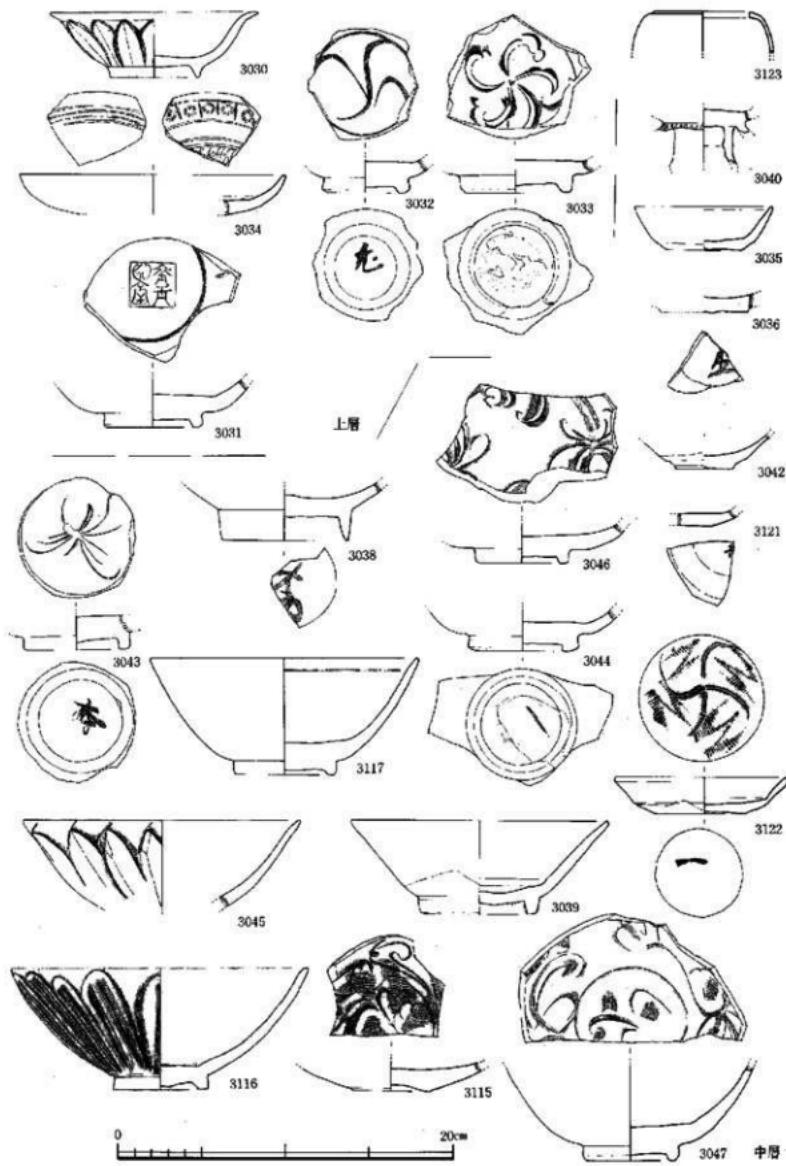
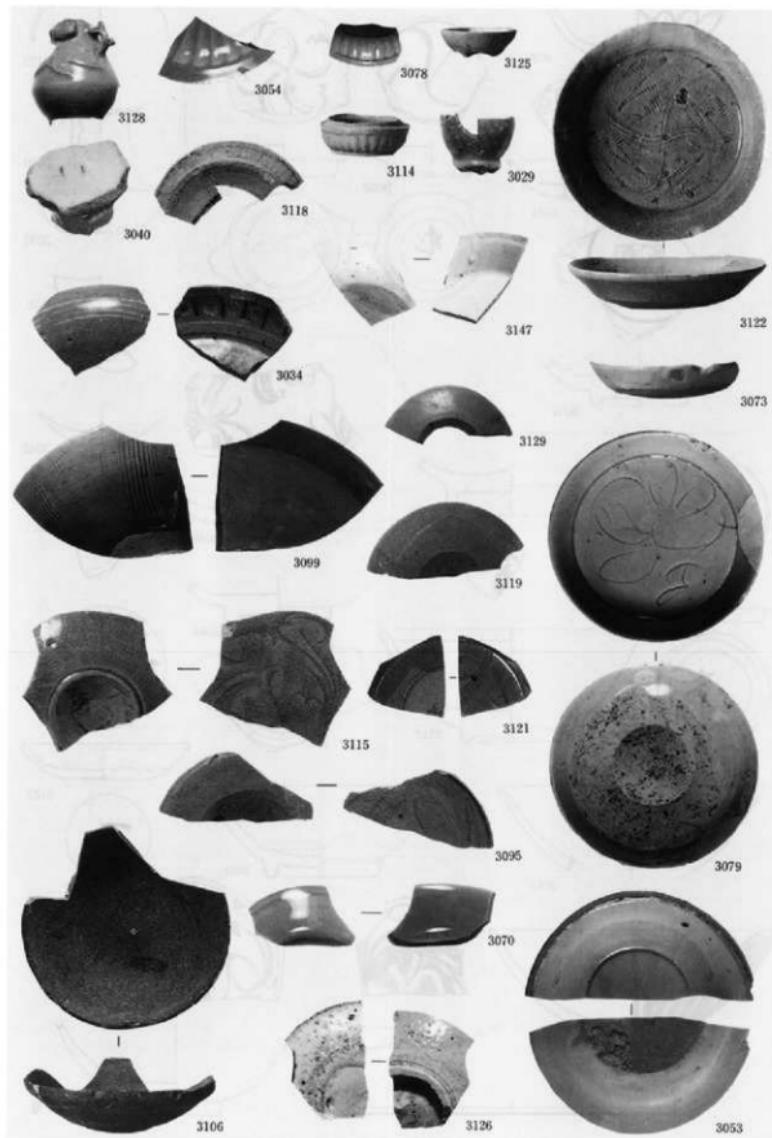


Fig.77 第76号溝上・中層出土陶器実測図



Ph.54 第76号溝出土陶磁器(1)

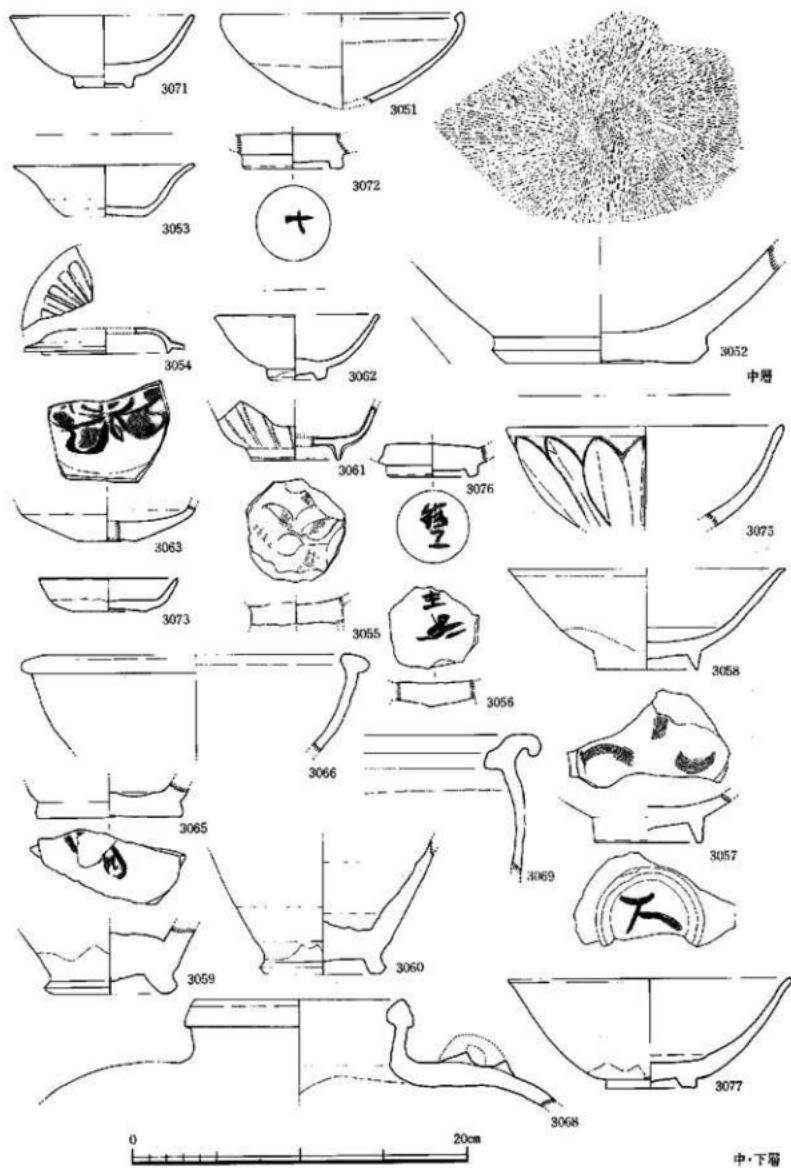


Fig.78 第76号溝中層および中・下層出土陶器実測図

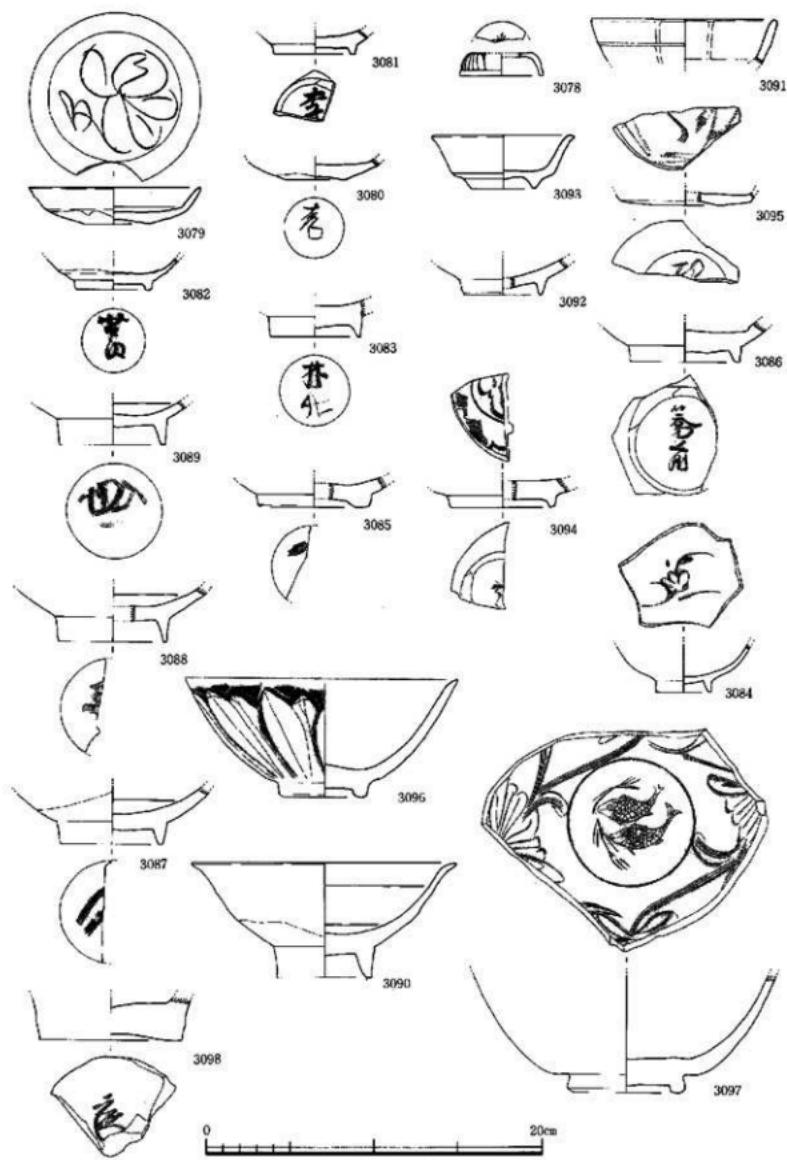
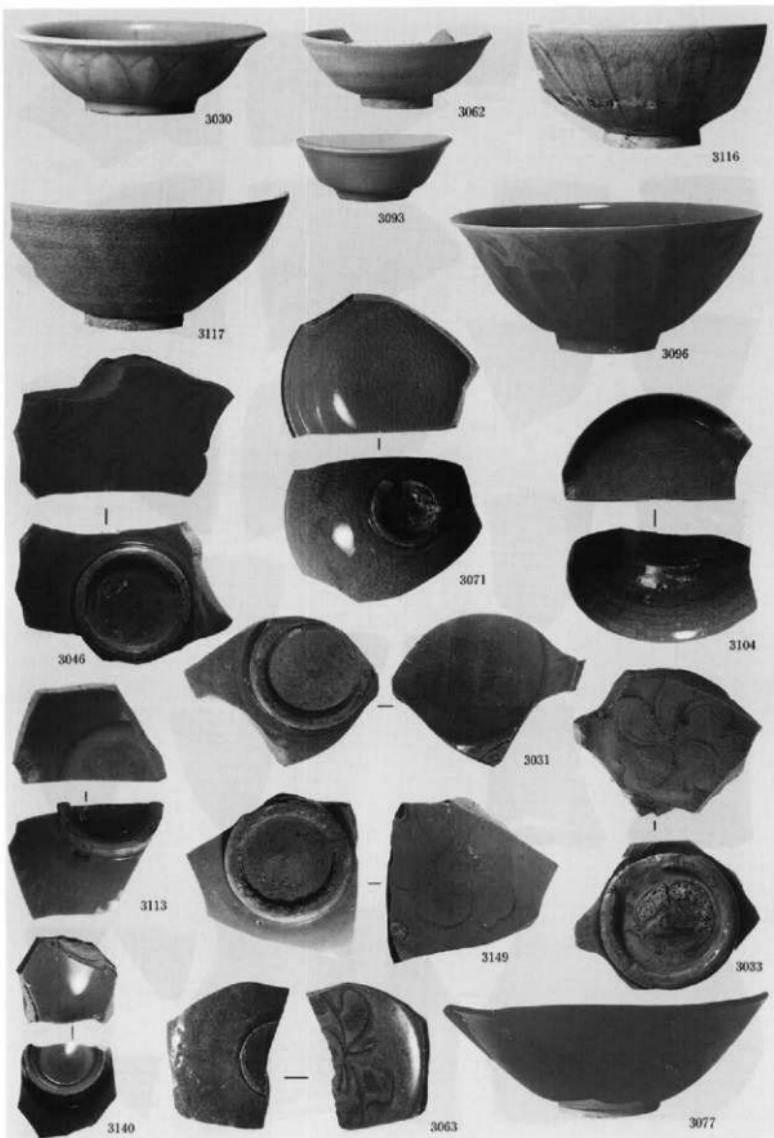
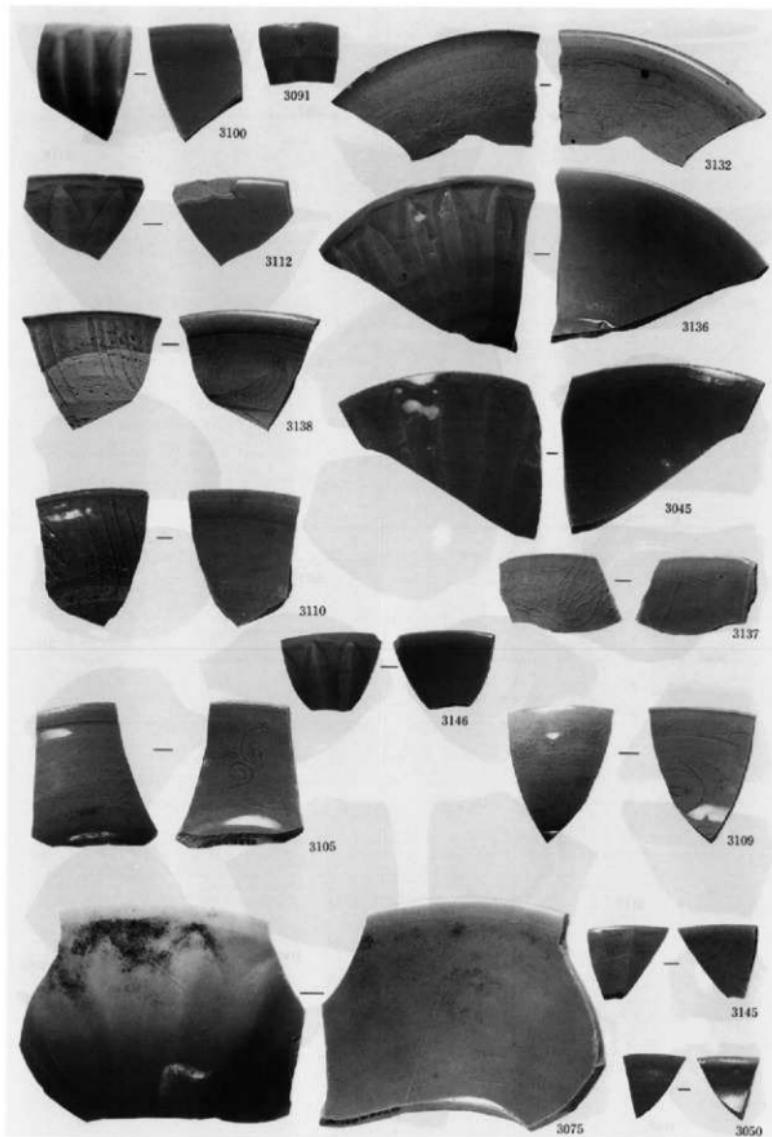


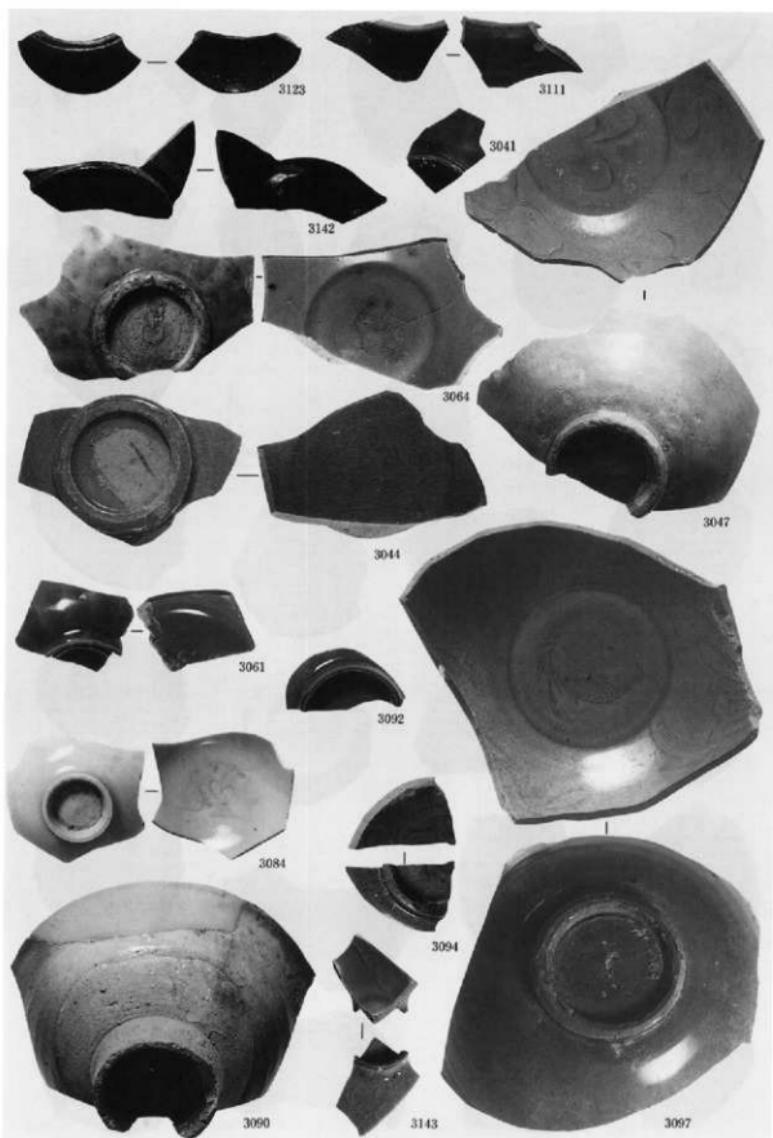
Fig.79 第76号溝下層出土陶磁器実測図



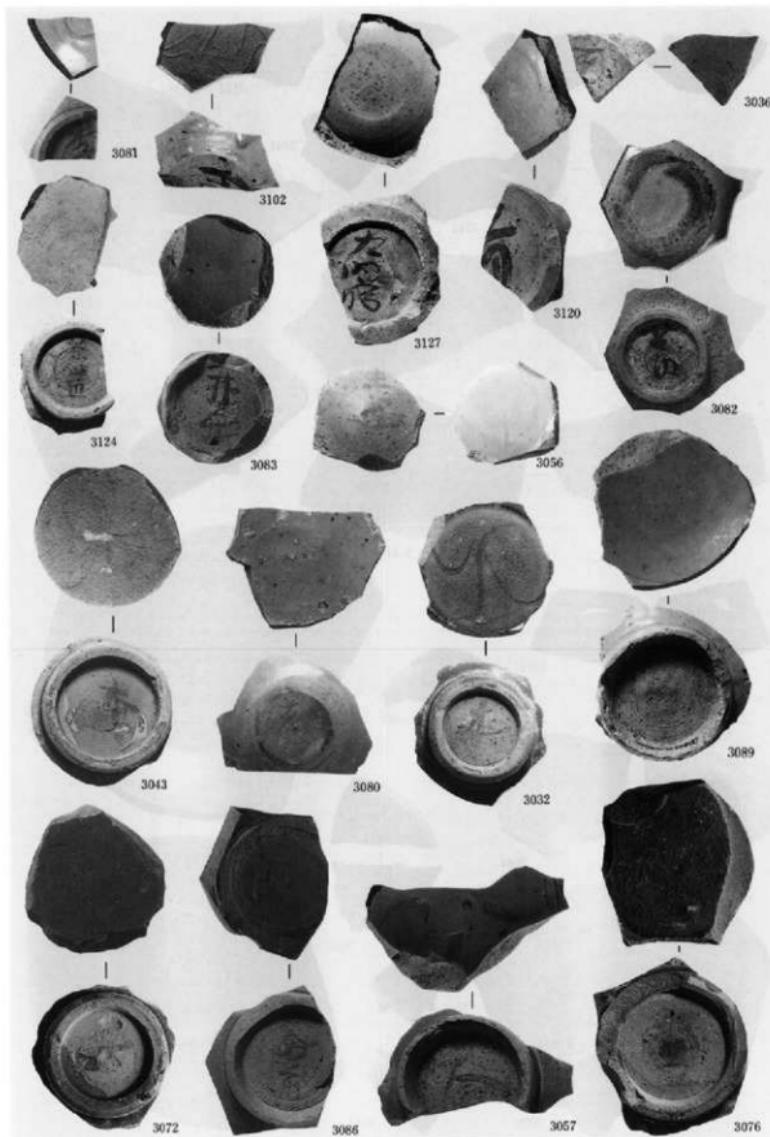
Ph.55 第76号溝出土陶磁器(2)



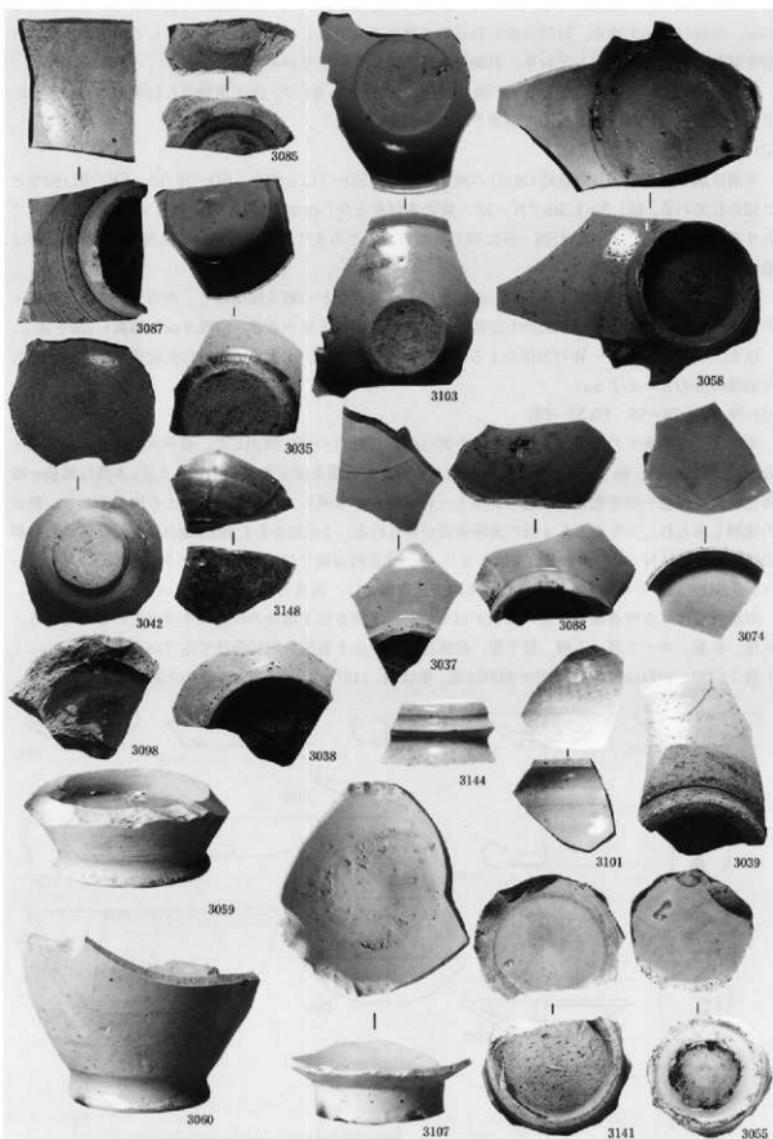
Ph.56 第76号溝出土陶磁器(3)



Ph.57 第76号溝出土陶磁器(4)



Ph.58 第76号溝出土陶磁器(5)



Ph.59 第76号溝出土陶磁器(6)

きの土師器底で、口径16cm、器高6.3cm、底径5.8cmを測る。5036～5038は滑石製石鍋で、口径21.6cm、22cm、底径14.6cmを測る。5103は滑石製石鍋の再加工品で縁をツマミ状に整形？しているが、煤の付着や穿孔部に鉄錆が付着しており、石鍋の痕跡を大きく残している。

本溝はS-39°-Wの方位をとるV字溝（土壤の可能性もある）で、出土遺物から12世紀から13世紀に使用され、14世紀の道路築造前に廃棄されたものといえよう。

SD-89 (Fig.74, Ph.69・71)

本溝は調査区西側の黄白色砂（地山）の面で検出し、SD-113を切り、SD-76・85、SK-91・92などに切られている。幅1.3～1.5mでN-52°-Wの方位をとり15m強確認したが、南はSD-76に切られておりその南へは延びず、北はSK-88に切られているところまでである。30cm前後遺存し、横断面形は逆台形をなしている。

本溝からは青磁・白磁碗・皿、天目碗、白磁・褐釉壺などの輸入陶磁器と、糸切り底の土師器皿・壺が出土した。2294は糸切り底の土師器皿で、外底に板状压痕があり、口径8cm、器高1.7cmを測る。

以上、本溝はN-52°-Wの方位をとる横断面形逆台形溝で、出土遺物から12世紀後半から13世紀前半後のものといえよう。

SD-76 (Fig.76～90, Ph.53～68)

本溝は、本調査区の南側および拡張区の黄白色砂（地山）の面で検出した。拡張区では最大幅9mあるが、土層観察から幅2～4mで横断面形逆台形の溝が流路を変えた結果といえよう。本溝は褐色～暗褐色～黄灰褐色～暗灰色～青灰色のシルト～砂～粗砂が堆積しているが、粘質土も挟んでおり、鉄分の沈澱もみられ、少なくとも4回の流路変更がみられる。1m強から1.8m強遺存し、拡張区から本調査区にかけてはN-45°、30°-Eの方位をとり、本調査区西南側では大きく弧をとり北西方向に延びているが、SD-32に切られている。また、本調査区西南では、南東方向に分歧していると考えられる。

本溝からは、各種各様の多量の遺物が出土した。本調査出土遺物の40%は本溝出土のものである。上層、中層、中・下層、下層、最下層、拡張区および出土層位分明に分けてみていく。

上層：3030～3034は青磁で、3030・3034は皿、他は碗。2191～2197は糸切り底の土師器皿・壺で、2194・

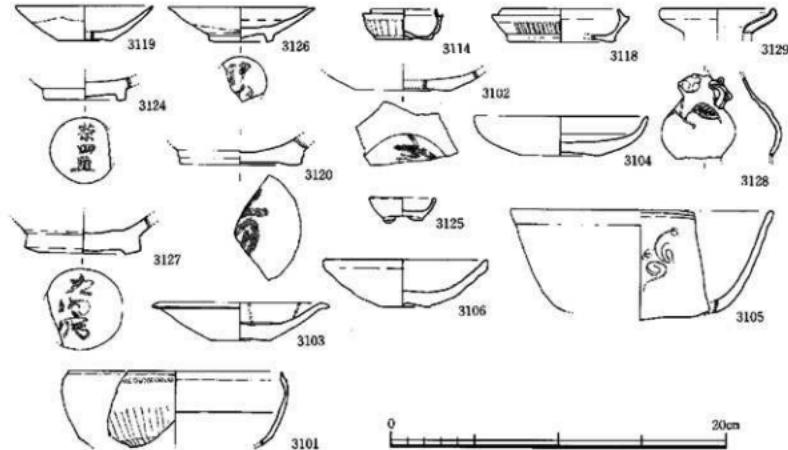
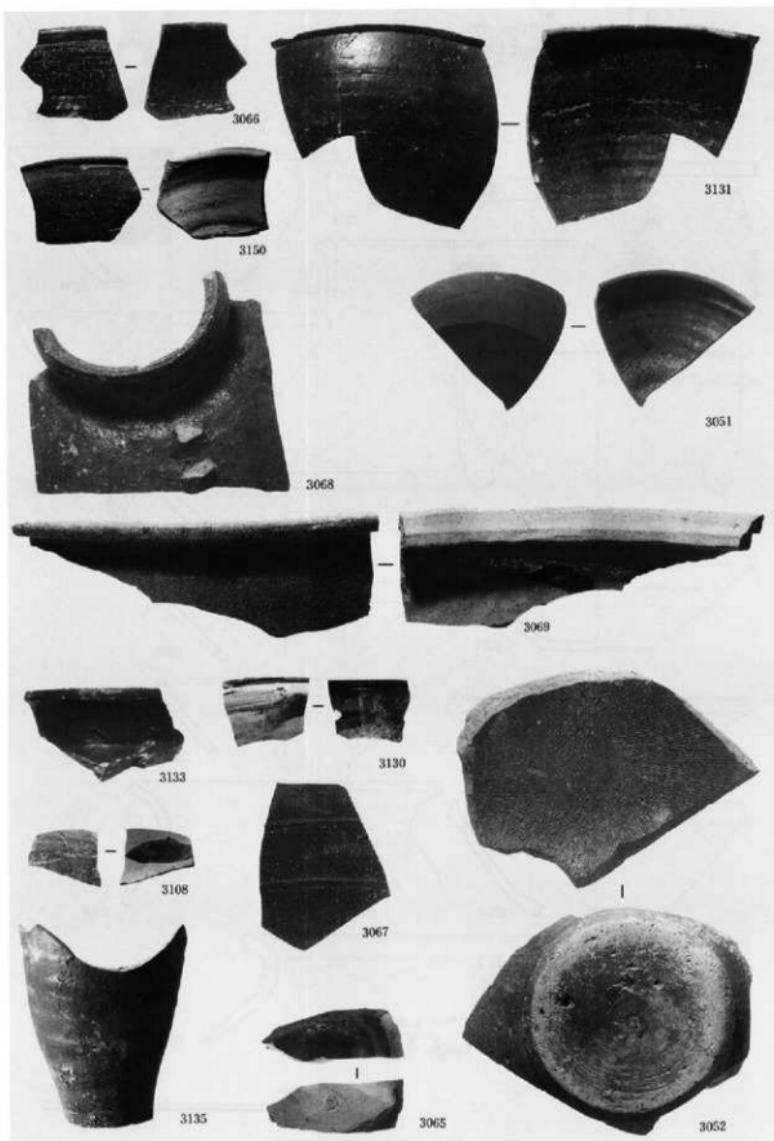


Fig.80 第76号溝最下層出土陶磁器実測図



Ph.60 第76号溝出土陶磁器(7)

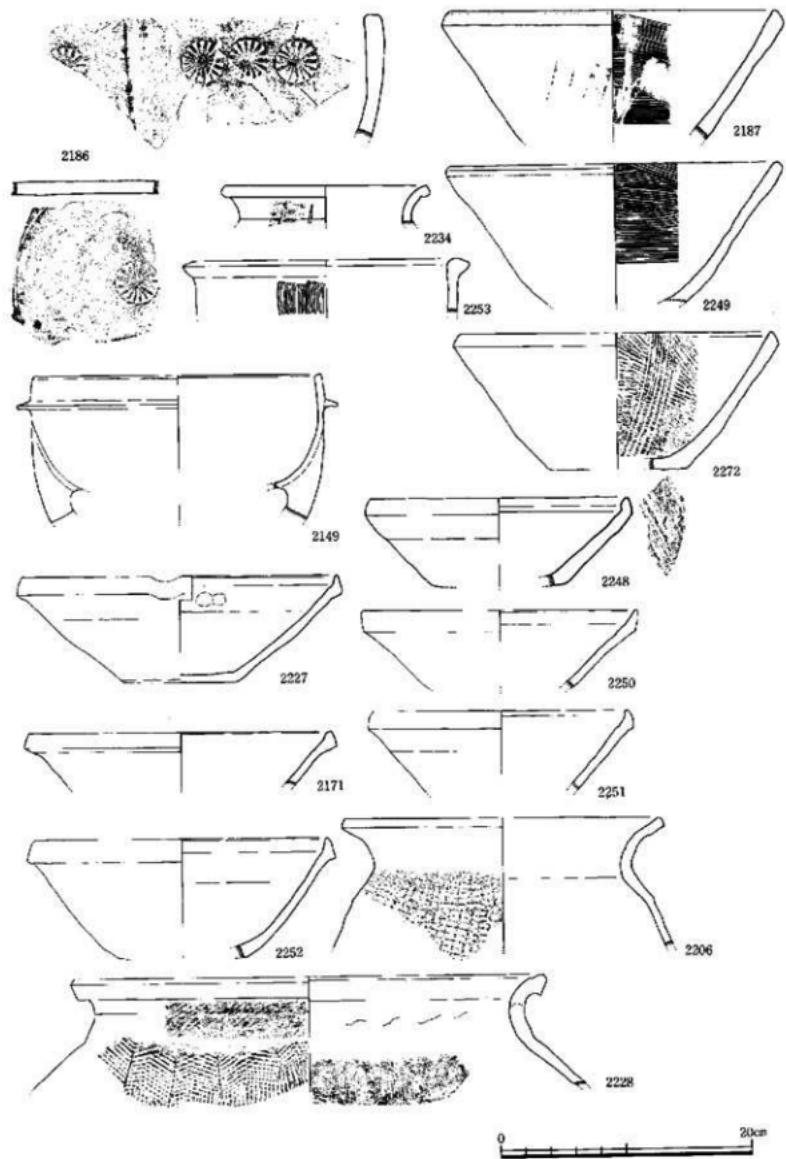


Fig.81 第76号溝出土器物等実測図

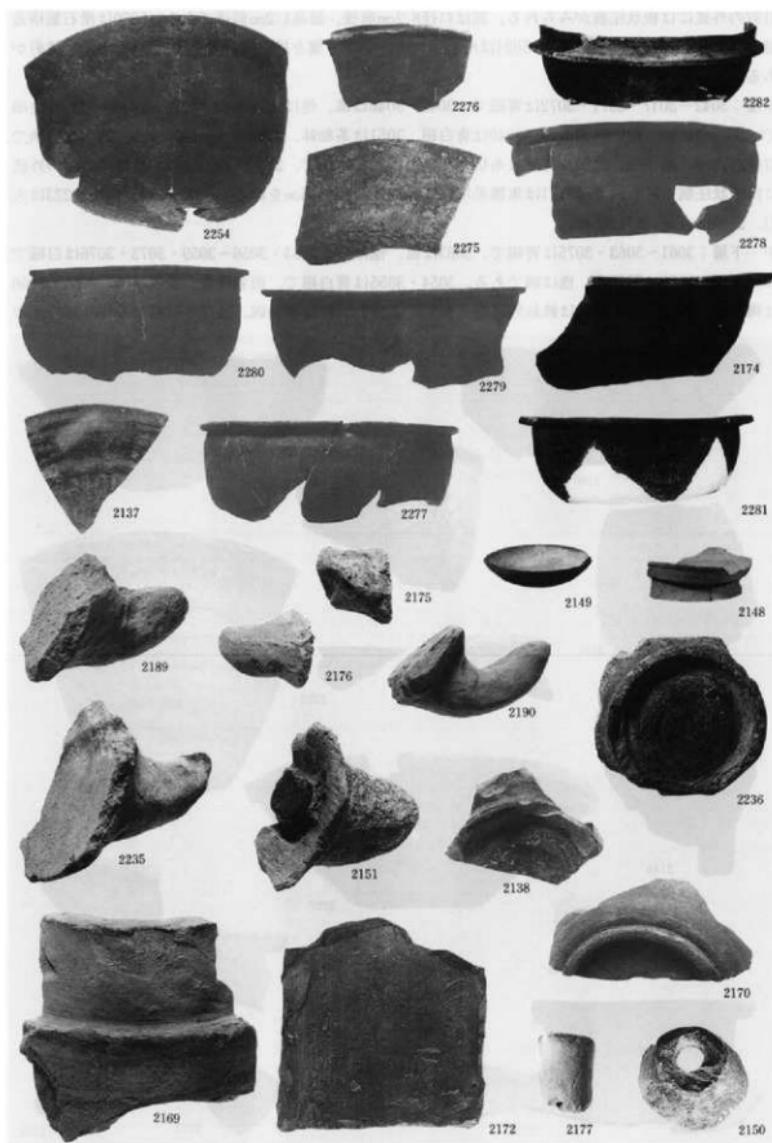
2197の外底には板状圧痕がみられる。皿は口径8.2cm前後、器高1.2cm前後である。5020は滑石製模造鏡、5023は有溝石錐で重さ63g。5024は滑石製スタンプで、鷹を描いている。他に石球・砥石・鉄釘がある。

中層：3042～3047・3071・3072は青磁で、3042・3046は皿、他は碗。3035・3036・3038・3039は白磁で、前二者は皿、他は碗である。3040は青白磁、3051は茶釉鉢、3382は鐵絵盤。2159・2174は土鍋で、口径27.2cm、28.6cm。2160～2168は糸切り底の土師器皿・坏で、2160～2163は皿、他は坏。皿の外底には板状圧痕がみられる。2171は東播系須恵器鉢で、口径24.8cmを測る。5104・5105は碗。0223は大刀。2169は丸瓦、2172は埴。

中・下層：3061～3063・3075は青磁で、3063は皿、他は碗。3053・3056～3059・3073・3076は白磁で、3053は皿、3059は四耳壺、他は碗である。3054・3055は青白磁で、前者は蓋、後者は碗。3065・3066は褐釉壺・鉢、3068・3069は鐵絵四耳壺・黄釉鐵彩鉢、3077は黒釉碗。2178～2185は糸切り底の土師



Ph.61 第76号溝出土器物等



Ph.62 第76号溝出土土鍋等

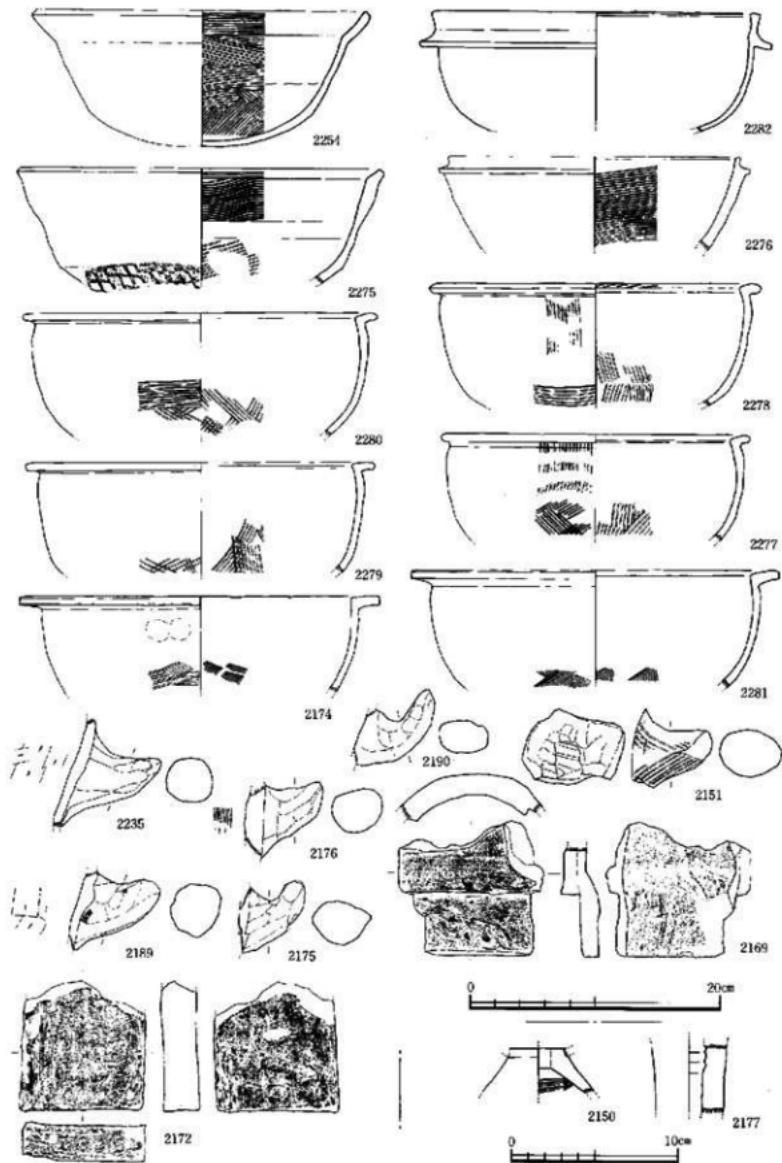


Fig.82 第76号溝出土土鍋等実測図

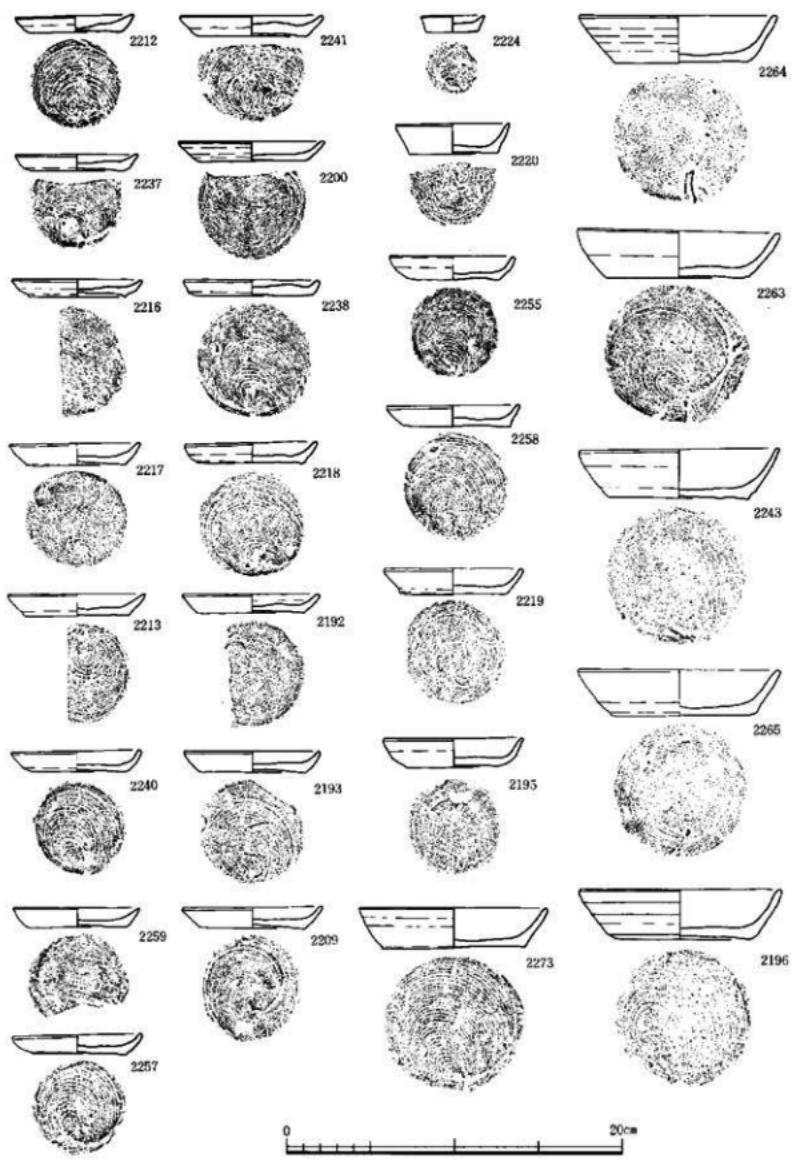


Fig.83 第76号溝出土土師器実測図(1)

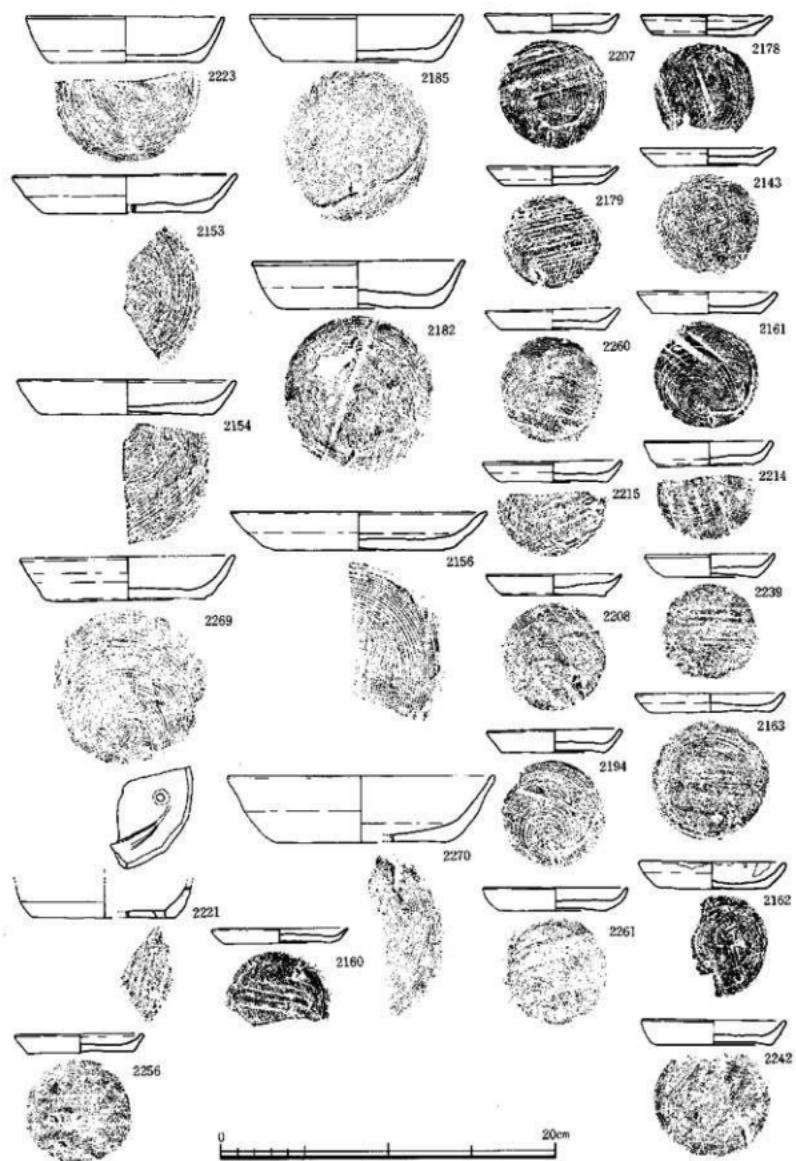


Fig.84 第76号溝出土土師器実測図(2)

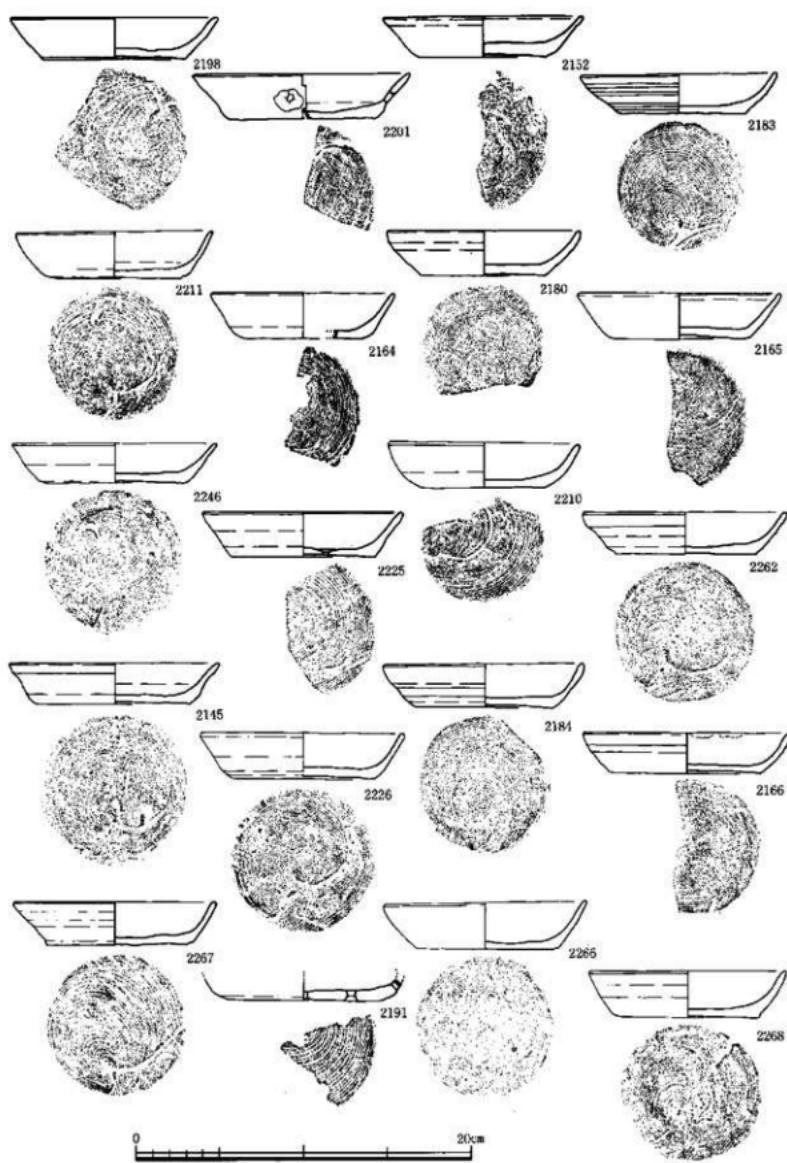


Fig. 85 第76号溝出土七土器実測図(3)



Ph.63 第76号溝出土土器

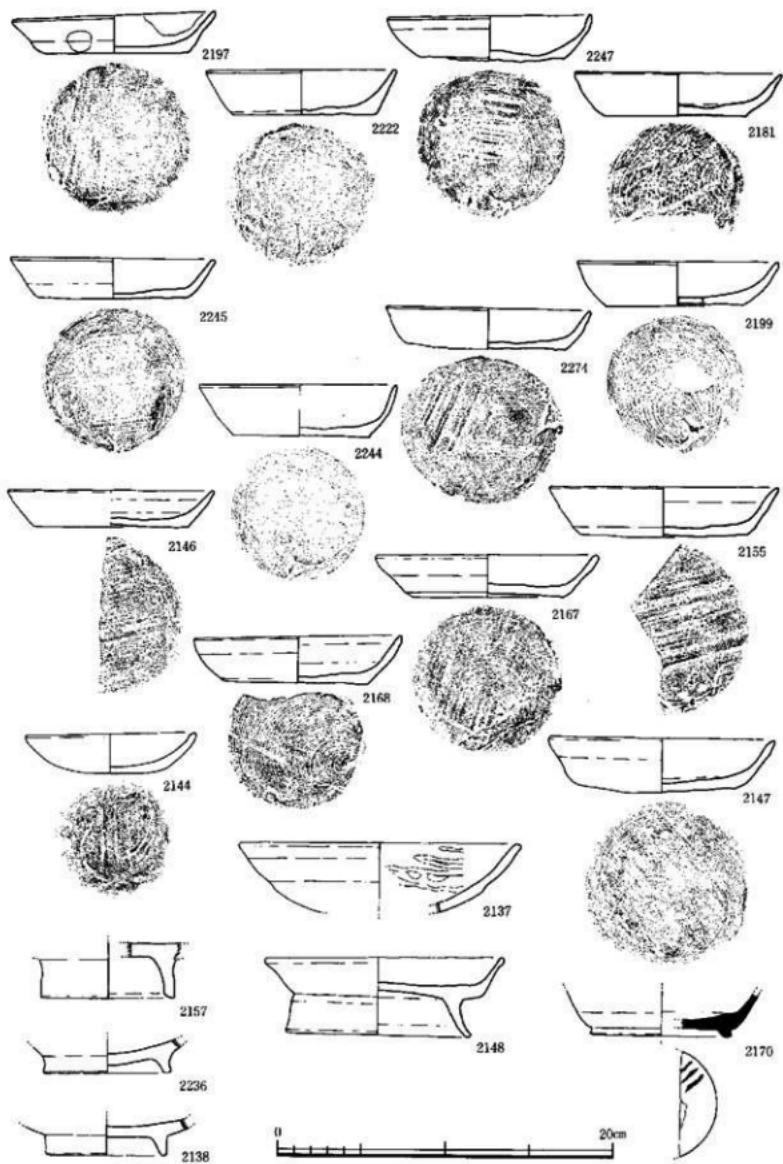
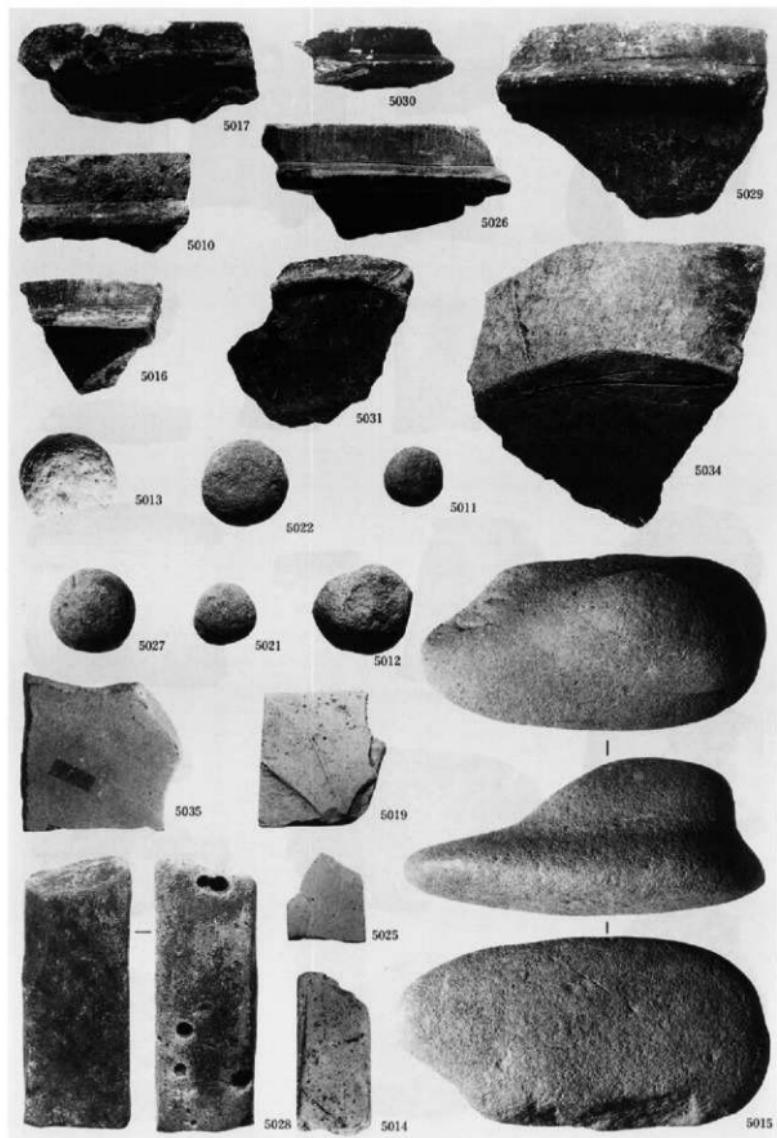
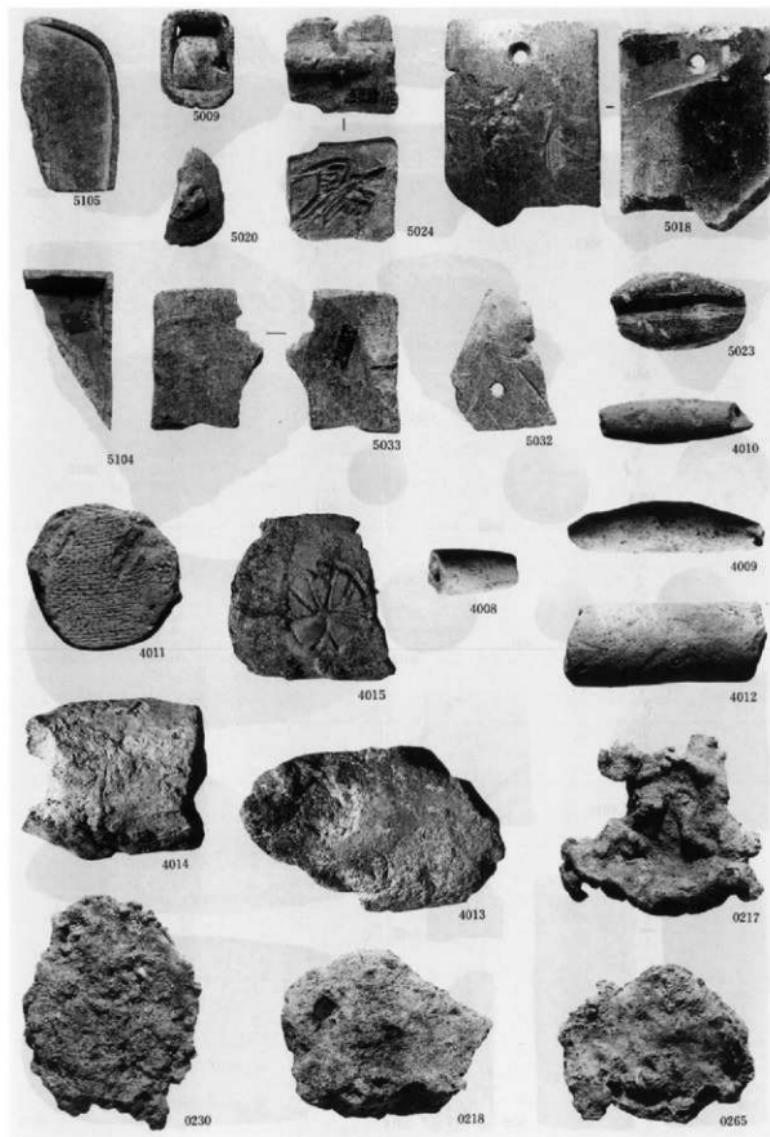


Fig.86 第76号清出土土器片測図(4)



Ph.64 第76号溝出土石鍋・石製品



Ph.65 第76号溝出土石製品・土製品・鐵滓

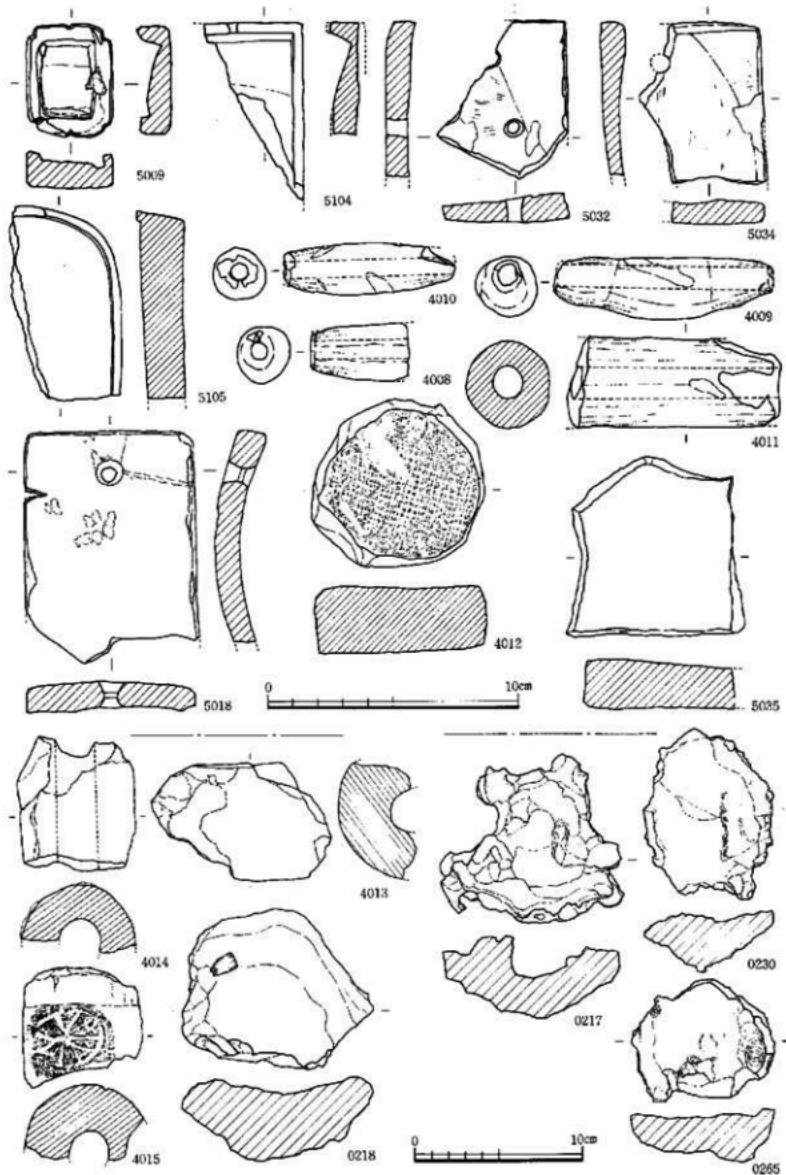


Fig.87 第76号溝出土石製品・土製品・鉄滓実測図

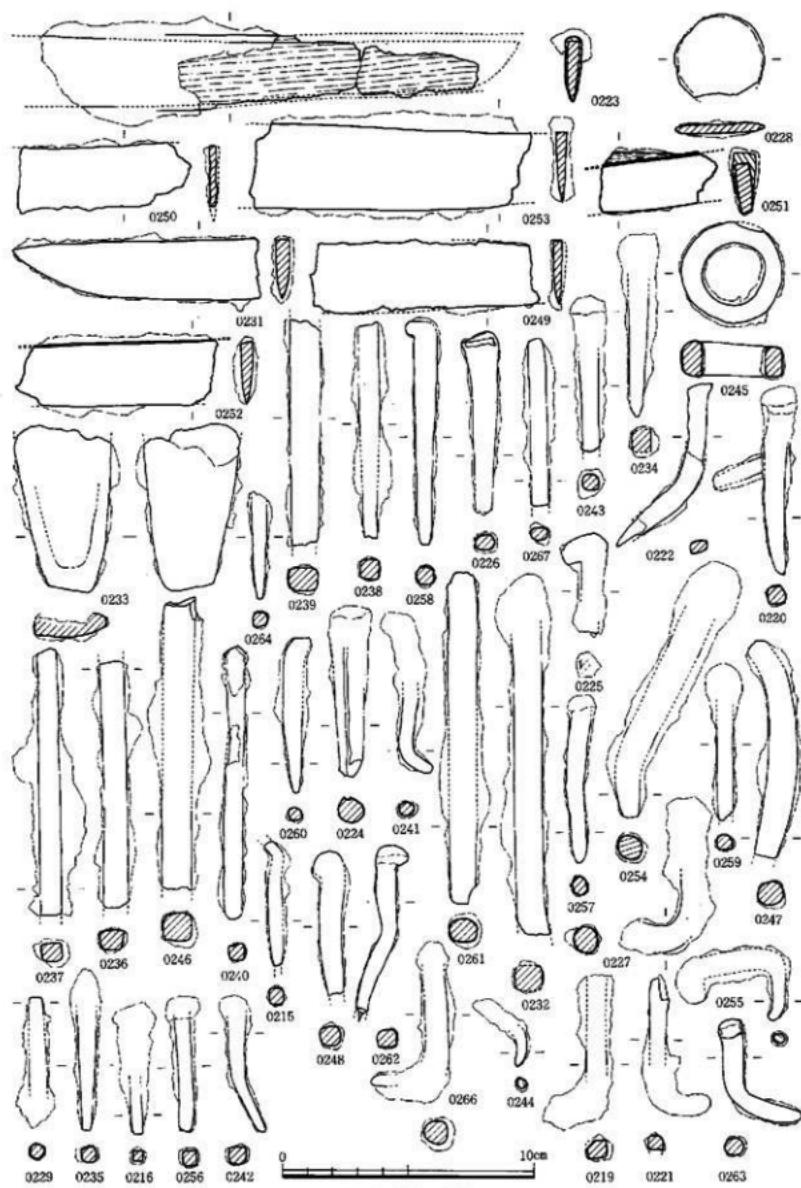
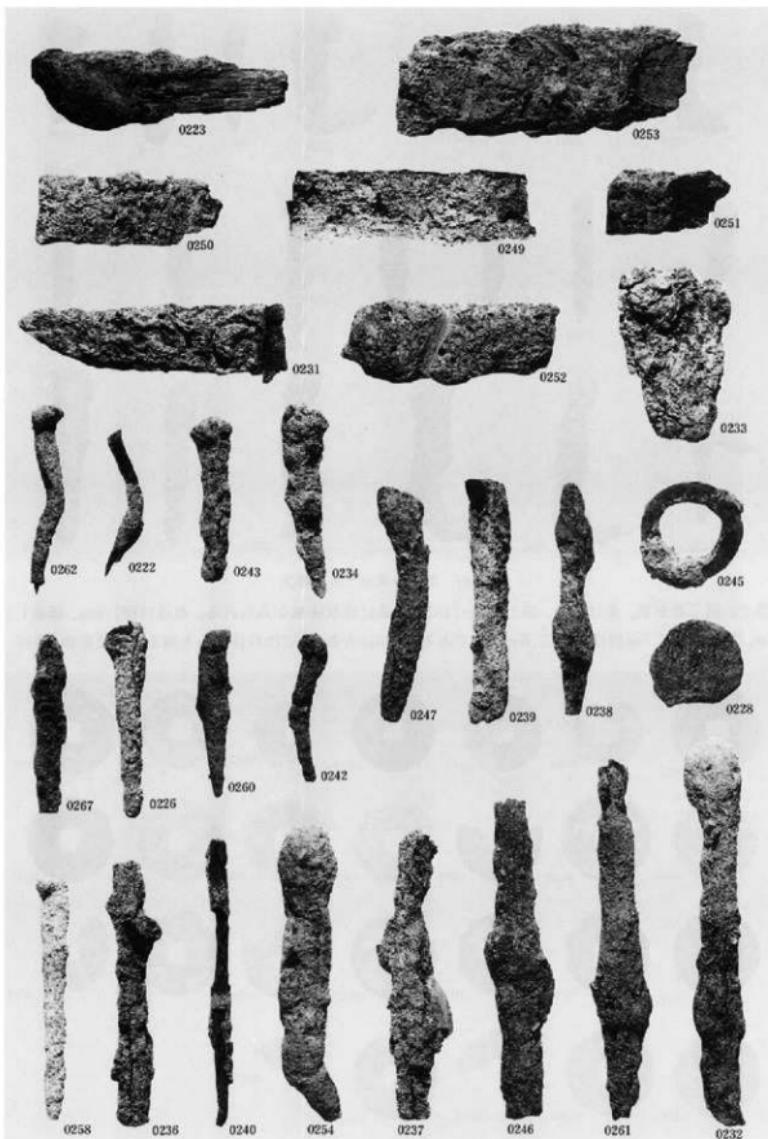
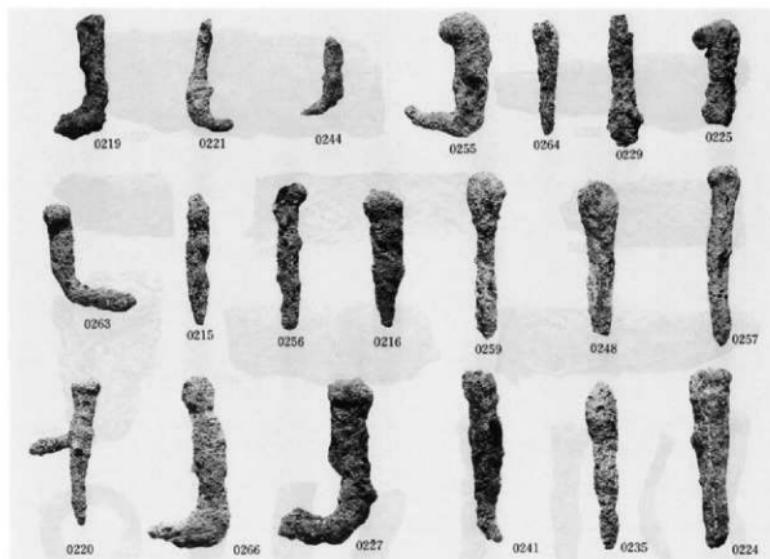


Fig.88 第76号溝出土金属器実測図

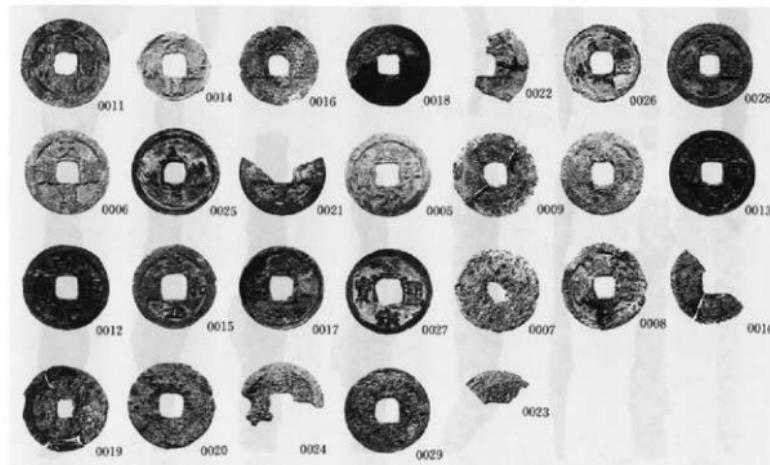


Ph.66 第76号溝出土金属器(1)



Ph.67 第76号溝出土金属器(2)

器で、前二者が皿、他は環で、皿と2181・2182の外底に板状压痕がみられる。皿は口径7.8cm、器高1.2cm。環は口径12.7cm前後、器高2.6cm前後である。2186は火舎、2187は口径26cmを測る瓦器質擂鉢。5016-



Ph.68 第76号溝出土銅錢

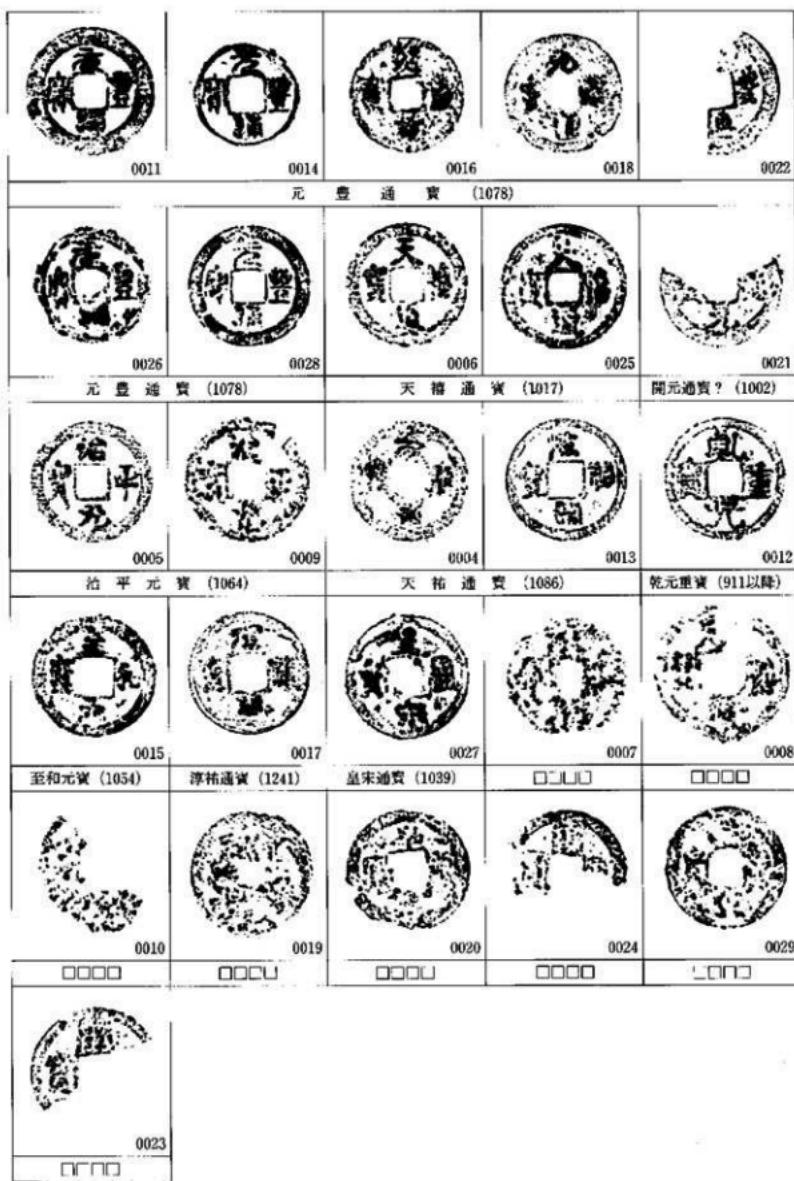


Fig.89 第76号溝出七銅錢拓影

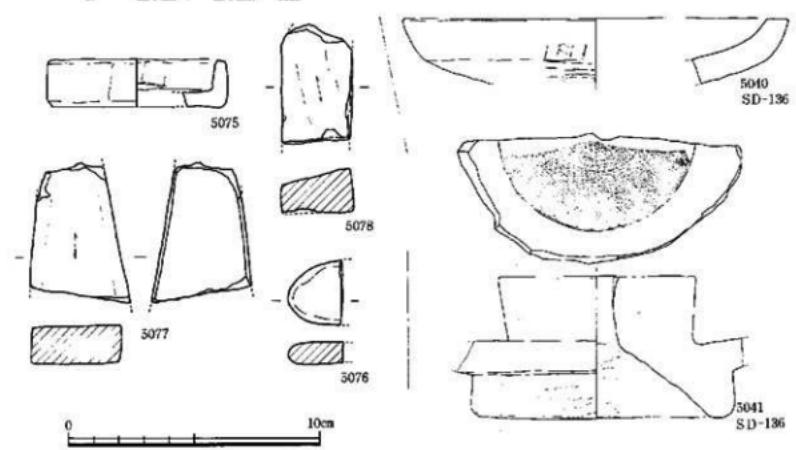
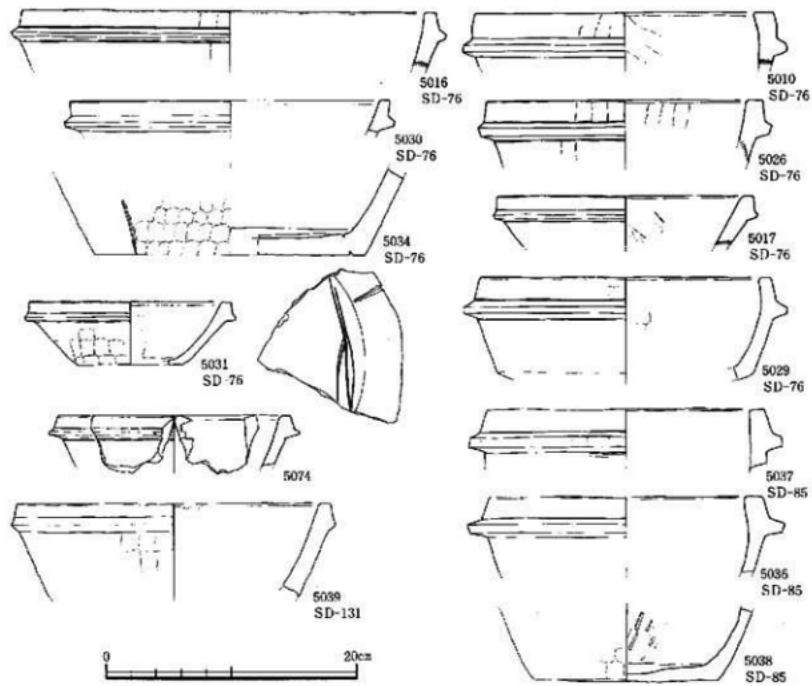
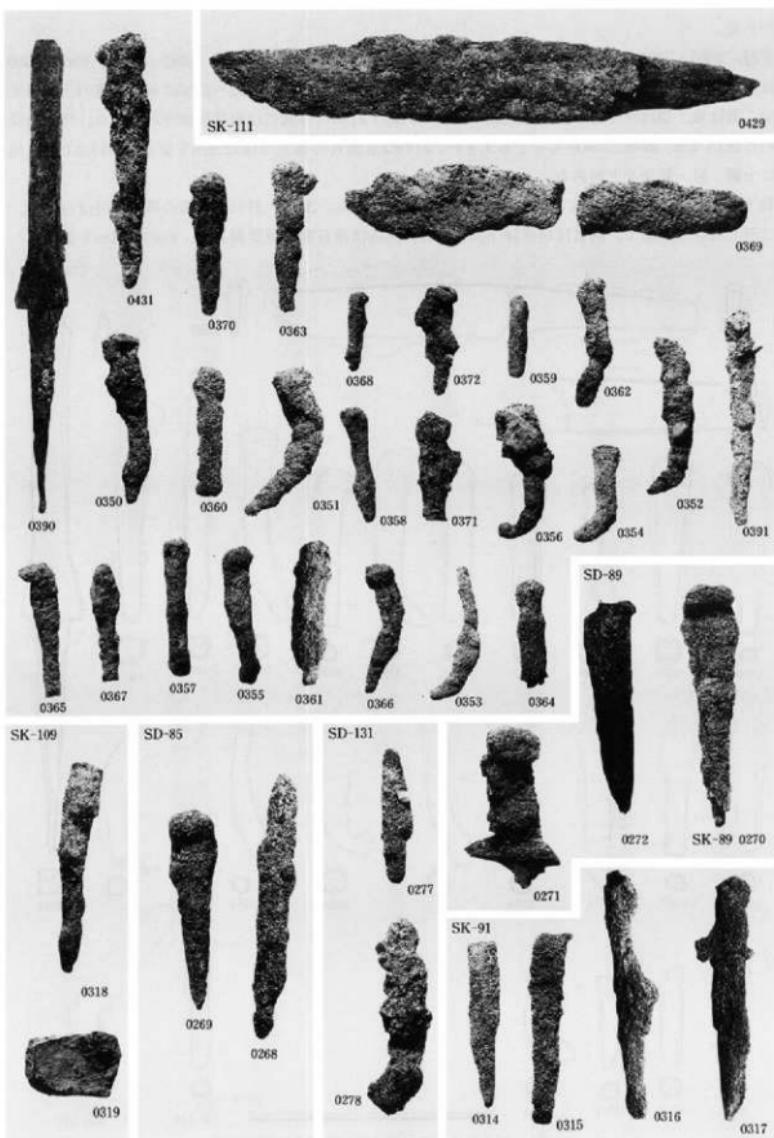


Fig. 90 第4面各遺構および検出時出土石鏃・石製品実測図



Ph.69 第4面各遺構および検出時出土鉄器・鉄滓

5017は滑石製石鍋で、口径33cm、20.5cm。5018は石鍋を転用した石鍤で重さ149.7g。他に釘・鉄滓(0230)がある。

下層：3086・3091～3097は青磁で、3091・3095は皿、他は碗である。3080～3083・3085・3087～3090は白磁で、3080は皿、他は碗である。3098は施釉壺。2143～2147・2152～2156は糸切り底の土師器で、前二者は皿、他は壺である。皿と2146・2147・2155・2156の外底には板状圧痕がみられる。壺は2156の口径15.4cm、器高2.3cmがもっとも大きい。2149は瓦器質の鼎で口径22.8cmを測る。5010は石鍋、他に土鍤・釘・鉄滓などがある。

最下層：3104・3105は青磁で、前者は皿、後者は碗である。3102・3103は白磁の皿、3101は白磁壺。2137・2138は瓦器で、前者は口径16.8cmを測る。5009は滑石製の硯型製品で、4.5×3.4cmを測る。

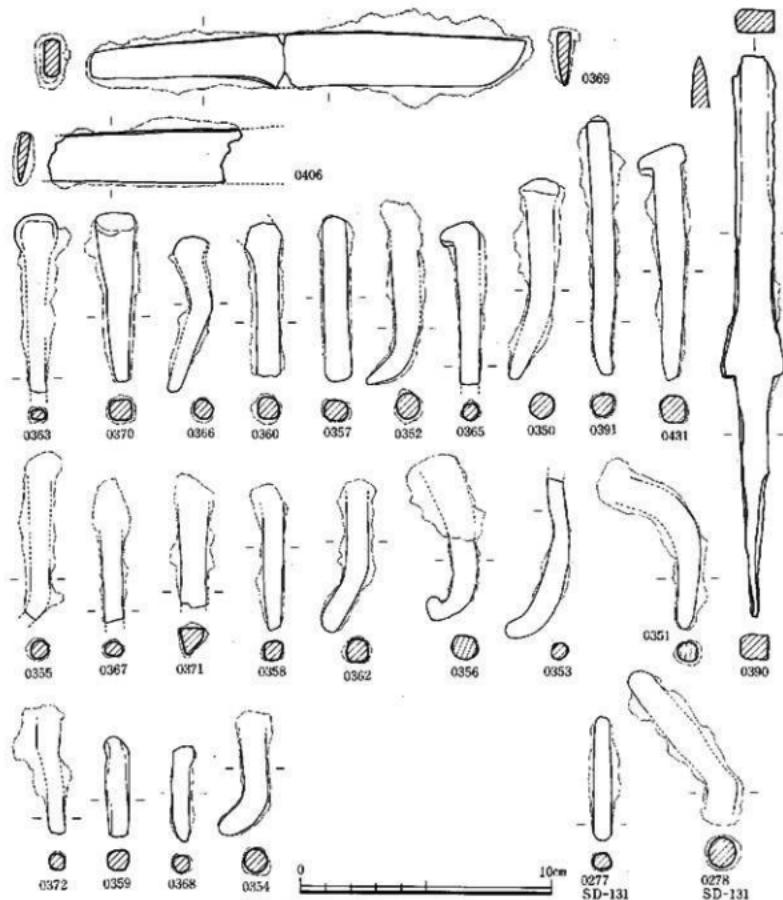
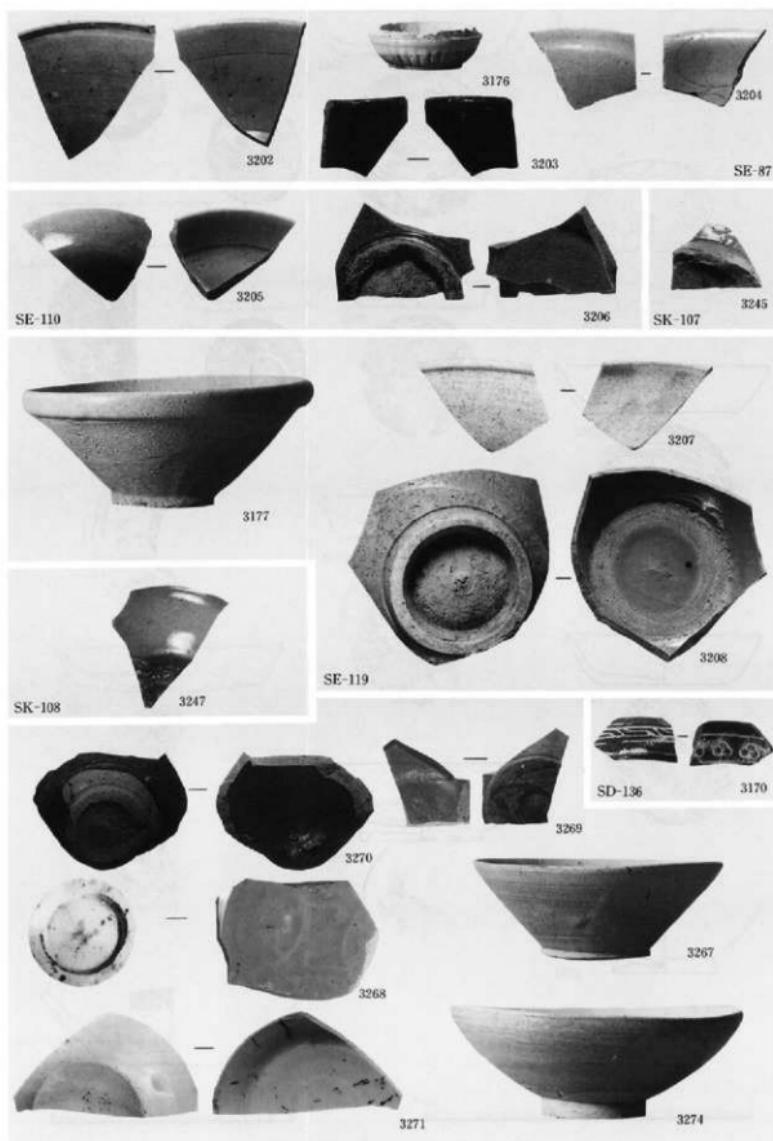


Fig.91 第4面各遺構および検出時出土鉄器実測図



Ph.70 第4面各遺構および検出時出土陶磁器

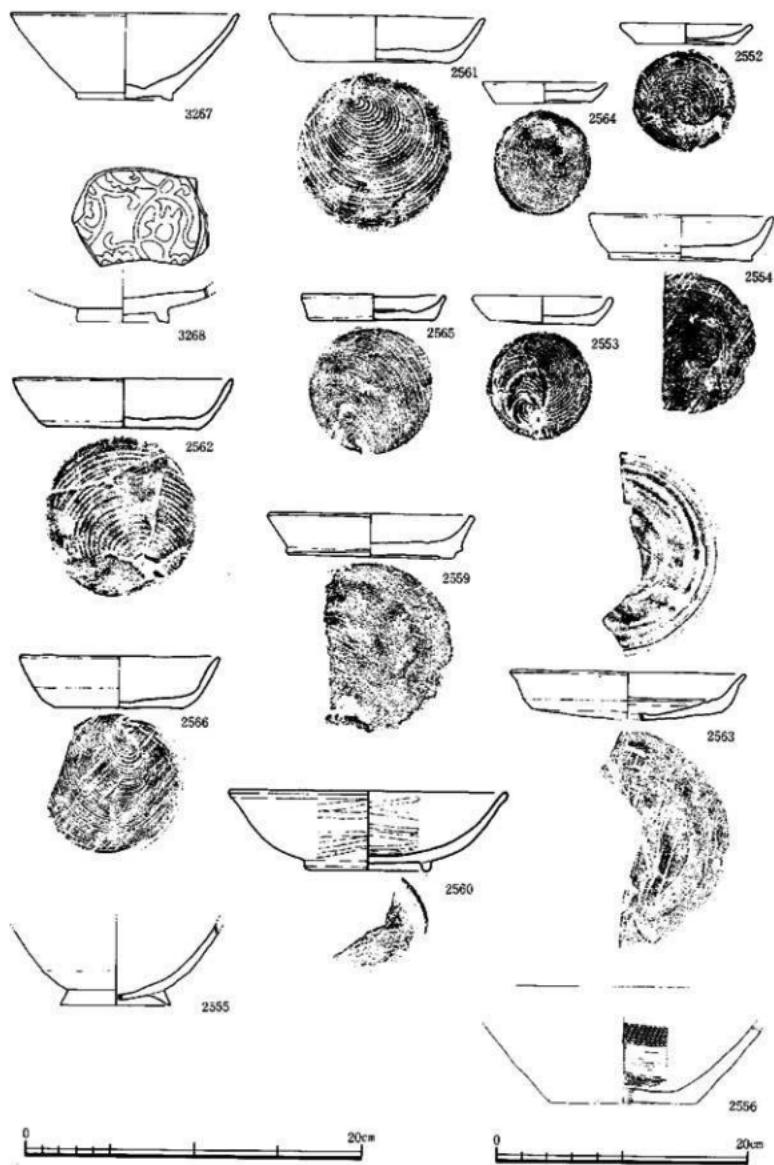


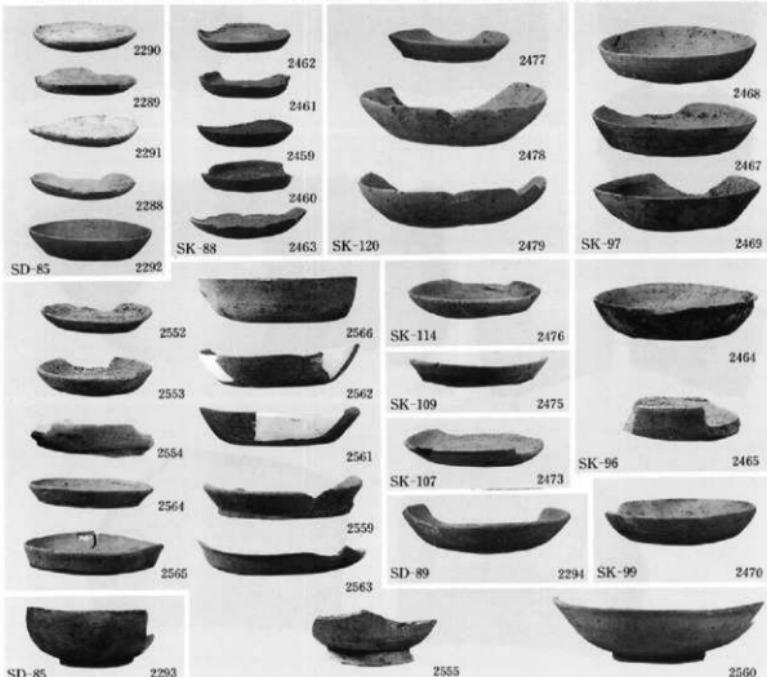
Fig.92 第4面検出時出土遺物実測図

拡張区等：3115は越州窯系青磁碗。3116・3117・3121・3122・3129は青磁で、前二者は碗、後者は皿と瓶。3079・3119・3120・3124・3126・3114・3127は白磁の碗・皿・合子身、3078・3084・3118・3124・3128は青白磁で、3128は瓶、3084・3124は碗、他は合子の蓋と身である。他に茶入れ（3123）等の輸入陶器がある。拡張区では多量の糸切り底の土師器皿・壺とともに、土鍋・東播系の須恵器擂鉢・鉢・瓦質鉢などの国産陶器が出土した。石製品としては、石鍋（5031は口径16cm、器高5cm）、石球、砥石、石鍬（5033は49g）などがあり、土製品としては縁の羽口、瓦玉がある。金属器としては、銅錢（北宋錢）、鐵刀（0231・0249～0253）、鐵斧？（0233）、鐵釘などがある。以上のはか、鉄滓（0265）や魚骨、馬の下顎など自然遺物も出土した。

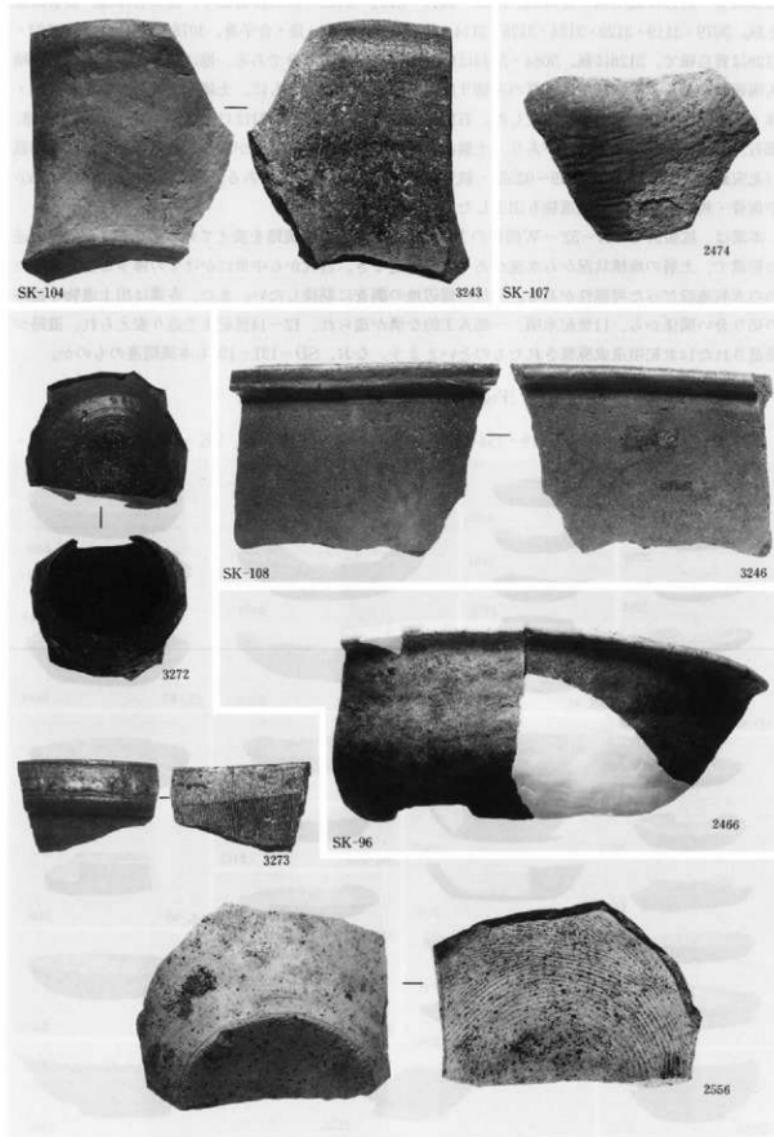
本溝は、拡張区ではN-52°-W前後の方位をとり、たびたび流路を変えている幅2～4m前後の逆台形溝で、土層の堆積状況から水流があったと想定でき、古代から中世にかけての博多市街を守るために水利施設だった可能性がある。今後の周辺地の調査に期待したい。また、本溝は出土遺物と道路の切り合い関係から、11世紀末頃、一部人工的な溝が造られ、12～14世紀まで造り変えられ、道路が築造された14世紀頃造成廃棄されたものといえよう。なお、SD-131・136も本溝関連のものか。

6) 第4面検出時出土遺物 (Fig.90～92, Ph.69～73)

第4面では、SE-87・94・119・154～156・166・167の9基の井戸、SK-84・86・88・90～93・



Ph.71 第4面各遺構および検出時出土遺物



Ph.72 第4面各遺構および検出時出土遺物

95~102・104~109・111・112・114・116~118・137・138・152・153・155・157~165の41基の土壙、SD-76・85・89・103・113・131・136・139の8条の溝のほか、110個の柱穴を検出した。各柱穴から



Ph.73 第4面各遺構および検出時出土石器・石製品

は、輸入陶磁器、国産陶器、土師器皿・坏、鉄釘などの鐵器が出土したが、各柱穴とも古代末から14世紀のものと考えられることから、第3面検出柱穴出土遺物として前述している。

第4面遺構検出時には、青磁・青白磁・白磁などの輸入陶磁器、擂鉢などの陶器、土師器の土鍋・皿・坏、石鍋などの石製品、土鍤などの土製品、刀子などの鐵器、銅錢など各種多様の古代末から中世の遺物が出土した。ほかに、弥生土器、土師器、須恵器など弥生時代から古代前半期の遺物も出土しているが、これらについては次項でみていくことにする。

3267は青磁碗、3268は青白磁皿。2552～2554・2559・2561・2562・2564～2566は糸切り底の土師器で、2552～2565は皿、他は坏である。皿は、2564が口径7.5cm、器高1.3cm、底径5.8cmと小さく、2565

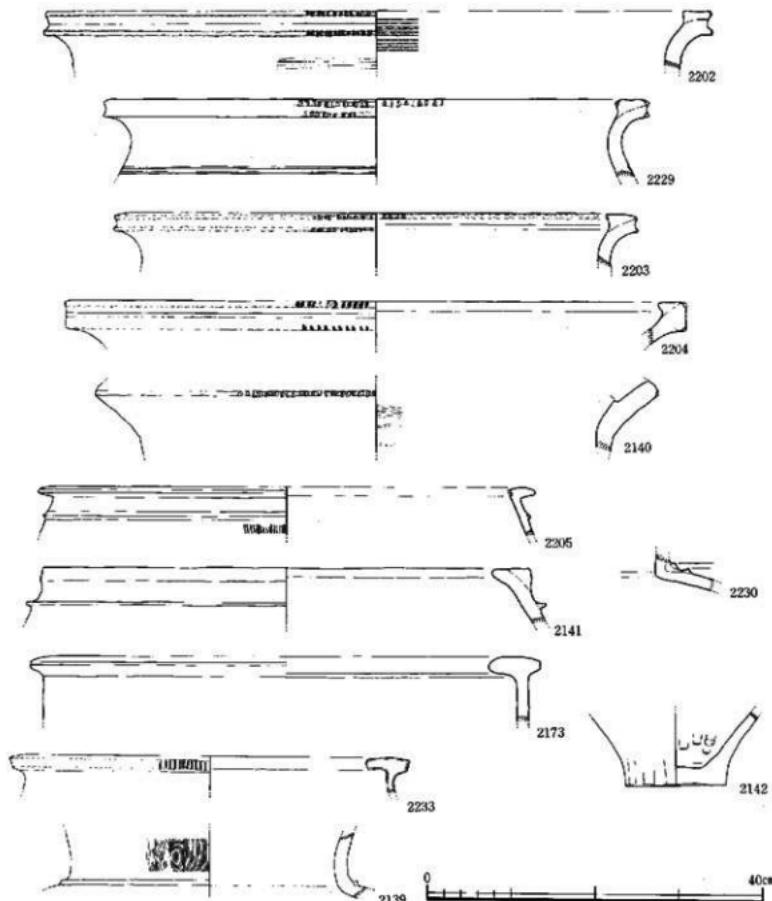


Fig.93 第76号溝出土弥生式土器実測図

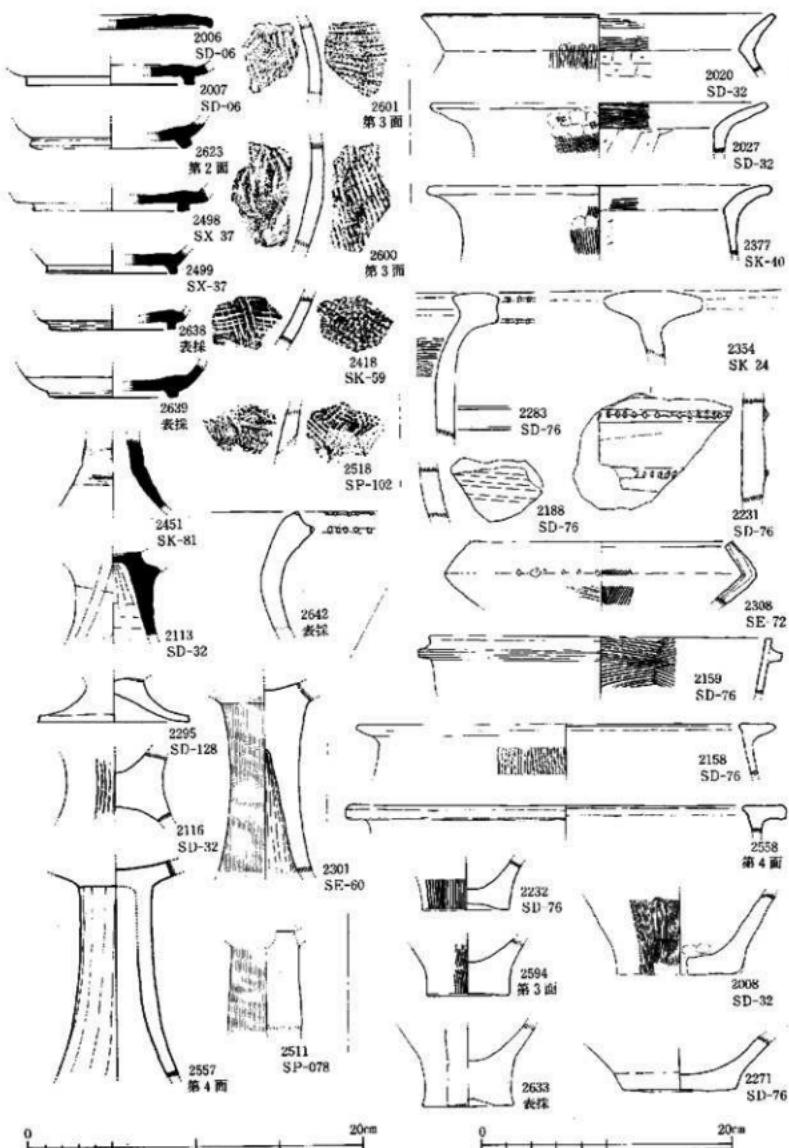


Fig.94 本調査地出土弥生式土器・須恵器・土師器実測図

が口径8.6cm、器高1.6cm、底径7.4cmと大きい。坏は、2561・2562のはかの外底には板状压痕がみられ、2559が口径10.4cm、器高2.6cm、底径7.8cmと小さく、2562が口径13cm、器高3cm、底径9cmと大きい。2555・2563は土师器で、前者は碗、後者は皿である。2555は逆三角形の貼り付け高台をもち、底径6.4cmを測る。2563は外底にヘラケズリ痕がみられ、口径14cm、器高(2.9cm)、底径11.3cmを測る。2560は器外面ともヘラミガキを施した瓦器碗で、貼り付け高台をもち、口径16.6cm、器高4.7cm、底径7.4cmを測る。2556は東播系の擂鉢で底径12cmを測る。

5074・5075は滑石製で、5074は口径18.2cmを測る石鍋、5075は口径7cm、器高2cm、底径6.7cmを小皿状に削り加工によって仕上げている。5079は玄武岩製の磨石、5077・5078は砥石、5076は基石(白)か。

0369は鉄製の刀子(刀か)で、器長17.4cm、幅2.1cm、最大厚0.6cmを測る。0390は器長22.2cmを測り、ノミか。0350～0371・0391・0431は横断面形隅丸方形の鉄釘である。他に金属器としては北宋錢がある。

4025は12.9gを測る管状土錐、4023・4024は鞆の羽口、4026は棒状の土製品で、容器の脚か。

4. 中世以前の出土土器 (Fig.93・94)

本調査では、第1面遣構検出時から第4面遣構まで弥生時代から古代前半期の土器が出土した。そのなかでも弥生土器がコンテナ5箱程出土した。2008・2116・2139～2142・2158・2173・2188・2202～2205・2229～2233・2271・2283・2301・2308・2354・2511・2558・2594・2633・2642は弥生土器で、2116が蓋?、2139・2230・2308が蓋、2301・2511が高環、他は甕である。2301・2511は丹塗りで、2308は複合口縁をもち口径21cmを測り、2139・2230は頸と胴の境に貼り付け凸帯を巡らしている。2231が胴に刻目凸帯を2条巡らしており、前期のものである。続くものとしては2140・2188・2202～2204・2229・2283・2642で、肥厚した口縁をもち、口縁端の上下に刻目を施した大形のものがある。これらは前期末から中期初頭のもので、口径62.2～79.2cmを測り甕棺として使用されたものといえよう。2173・2233・2354はT字状をなす口縁をもち、中期初頭から中期前半のもので、2233は口縁端部に刻目が施され口径47.6cmを測る。他の2点は大形で、2173は口径60.4cmを測り甕棺として使用されたといえよう。2141・2158・2205・2558は逆L字状口縁をもち、2205・2141の口縁下には1条の貼り付け凸帯を巡らしている。2158・2558は口径33.4cm、35cmと中形で、2205・2141は口径59cm、(58.5cm)を測り大形であり、甕棺として使用されたものといえよう。2141など4点は中期後半のものである。2008・2271は平底、2232・2633は上げ底、2142・2594はやや上げ底気味の底部である。以上の弥生土器の大半は大形の甕棺として使用された甕であり、傷みが少ないと想定できる。

2020・2027・2295・2377・2418・2518・2557・2600・2601は土師器で、2295が底径9cmを測る台付鉢?、2557が高环、他は甕である。2020・2027・2377は肩から屈曲して開き口縁となるもので、胴内面はヘラケズリが施されている。2418・2518・2600・2601は外面に叩きが施され、内面に当具痕がみられる。2257・2295の他は、古墳時代の終わりから奈良時代にかけてのものといえよう。

2006・2007・2113・2451・2498・2499・2623・2638・2639は須恵器で、2006が無返しの坏蓋、2113・2451が高环、他は有高台环である。2638・2639が底径7.6cmと小さく、2007が底径10cmと大きい。いずれも古墳時代終末期から奈良時代のものである。

第3章 結章

1. 博多遺跡第64次調査出土陶磁器

1) 第1面各遺構および検出時出土遺物

SE-01 (Fig. 8, Ph. 4)

3171の白磁碗は、体部を直線的にのばす器形であり、灰色の精製土に緑灰色の透明釉がかけられ内底には円状の輪線をめぐらしている。3171は黒釉碗であり、やや鈍い匙（束）口につくり、黑色釉は体部下半でとまり、茶色のうすい施釉部分につながり、釉薬の肥厚はない。器面、胎内部ともに褐色土である。

SK-03 (Fig. 6, Ph. 3)

3209は美濃・瀬戸の黒釉碗とみられ、匙口に茶黒色釉がうすく高台脇までかけられ垂れは少ない。露胎部分は灰褐色を呈し、外底に朱色で文字が記されているが判読は難しい。

SK-07 (Fig. 8, Ph. 4)

3210は青磁皿であり、高台部分を欠損している。白色の胎土であり、釉薬はうす緑色に呈発している。3211は朝鮮陶磁であり、内底に胎土目、外底は粗い削りであり、レンガ色の陶胎に、暗黄緑色がかけられた粉青碗である。

SP-140 (Fig. 11, Ph. 8)

3250は白磁合子の蓋である。甲部に型押しされた文様は、夢のような水生植物の葉と地紋としての水波文によって表現された泡壇に、枝をさし伸ばしている梅枝であろうか。灰白色の不透明釉は内側面の端部をのぞいてかけられている。

2) 第2面各遺構および検出時出土遺物

SK-21 (Fig. 16, Ph. 13)

3224は竈泉窯青磁の小碗であり、灰白色の磁胎に透明釉がかけられ、釉下に篦刻みの不揃いの蓮弁文をいれている。

SE-29 (Fig. 18, Ph. 13)

3173は井筒内から検出した黄釉鉢で、口径26cmをはかる。内面にかけられた釉薬は灰褐色に呈発している。磁灶窯の产品である。

SK-30 (Fig. 21, Ph. 13)

3228は雷文帶青磁碗で、外側面の口縁部に簡略化された雷文を、その下方に花文、内面にも大きく篦刻文を、見込みには草花印文を、それぞれ配している。暗緑色釉は高台をつつみこんでかけられ、外底部には焼台の痕跡がみられる。

SP-168 (Fig. 26, Ph. 16)

3251は青磁碗であり、内面に片切彫りで花文様がみられる。灰色の胎土に暗緑色釉薬が滑らかにかけられている。

検出時遺物 (Fig. 25・54・57, Ph. 14・43)

3288は、褐釉長臺で黄褐色の釉薬が薄くかけられている。

鉄絵壺の破片がこの層を中心として出土し、SX-37出土品なども含めてここでまとめて述べる。鉄絵盤もこの層から検出しているが、これについてはSD-76の項でまとめて記述した。

口縁部とみられるのは3387で、2cm程の立ち上がりをもつ頭部である。3388-3398は胴部の破片であり、そのうち3394以下は器肉の厚さからみて胴下半部の破片であろう。胎土は白灰色ないし褐灰色で軟質であり、内外ともに淡紅色をおびた水裂文の白色釉がかけられ、化粧土が認められる。器面上に灰色の斑点状の汚れが付いているのは2次的なものであろうか。釉下の鉄絵は明瞭であり、大柄な花文を主文として下半には渦巻文をいれる。3398(SX-37出土)は底部の破片であり、釉薬は最下端までかけられ、露胎の疊付には白砂が付着し、内抉り部分は段状に削られ、一部は黒灰色を呈する。第2面以外の出土は、SX-37から3392・3393・3395・3398、SK-31から3396、SK-59から3391、他は第2面の出土である。また、3390は第2面とSX-37の破片が接合している。

3) 第3面各遺構および検出時出土遺物

SD-32 (Fig.45, Ph.36・39)

陶磁器では、白磁、青磁とともに、ベトナム製青磁、高麗青磁などを検出している。3011-3014は白磁で、3011の小皿は口縁外反し、露胎の下半部を削り、底は兜巾状になり、墨痕がかすかにみられる。内底は輪状に釉薬を剥ぎとり黄色の砂が付着している。3012は皿で純白の釉薬が滑らかにかけられ、腰以下の露胎部分は褐白色を呈し、高台脇はチジミ状になっている。内面に圓線、外底は平底に近く、わずかに凹ましており、削りの痕跡は認められない。3013は、いわゆる枢府タイプの碗であり、内底に相対する唐草文は暗花様に不鮮明に型押されている。釉は明瞭な青白色で高台脇までおよび、面とりされた疊付と高台の外底側に黒焦げ痕と黒砂がつき、外底にも黄砂が少し付着している。3014は通有の正縁口縁の碗で、外底に「九□」とみられる墨痕がある。

3015-3018は青磁で、3015の外底露胎部分に「大柴」と判読できる墨書銘が記され、底全体を円形に打ち欠いている。玩具の用途と想定されているものであろう。3016は竈窓窯連弁文碗で、透明で、光沢のある黄緑色釉が高台脇までかかり、灰色を呈する露胎の外底に花押とみられる墨痕がある。3017は内底に4個の砂目跡をつけ、透明で、淡緑黄色釉が高台上までかかり、一部は疊付までながれてい。高台の削り出しは比較的丁寧であり露胎の外底は灰色を呈する。竈窓窯青磁とはやや異なる印象を受ける。3018は内面を区画するデザインの竈窓窯青磁碗、高台先端部を面取りし、外底は平らに削る。綠黄色釉。

3019はベトナム製と考えられる青磁碗で、器肉は比較的薄く、胎土は白く、きめは粗いが硬質である。釉薬は緑色でやや厚めに施釉され、高台脇までかけられ、疊付に黒い細かい粒子の砂がつき、外底全体は黒茶色に塗られ、一部は少し薄くなっている。内底の釉下に、幅のせまい鏡文(四線文)が彫られ、中心にある円文から放射線文のようにみえる。4個の目跡が釉薬を剥ぎとる形でのこっている。3020は朝鮮時代の粉青沙器で、内底から放射状に繩縞文を刻み、白泥を埋めている。総釉で疊付と外底に石粒が固着している。実測はできない小片が他に4片ある。3021は同じく朝鮮時代の雜釉碗で、灰色の胎土に淡い灰緑色の釉薬が内外にかけられ、疊付付近に白・黒砂が付着し、一部は釉がはがれて、茶色を呈している。3022は高麗青磁瓶の底部で、腰に蓮弁文を白象嵌でいれる。少し灰色をおびた緑色釉は、疊付を包んでかけられ、その部分にかなり大きな石粒が固着している。外底の中央部は露胎で、茶色に発色する。底は器肉が薄く内面には輪轉による凹凸が顕著にみられ、胎土は灰色、硬質で水窓されている。

3023はいわゆる茶入れで、下半部だけであるが、獨特な茶色の緻密土に、内面のすべて、外面は腰まで茶色の釉薬がかけられており、下地塗り状にうすい施釉部分もみられる。外底に黒灰色の石のクッツキがのこる。3024は黒釉碗で、禾目などの文様がなく、釉際は茶色を呈する。茶色のうすく施釉されている箇所もある。胎土は灰褐色、高台の抉りはほとんどなく、餅底で糸切り放し痕をのこしている。他に黒釉碗の小片もある。3025は国産の陶鉢で、胎土は暗灰色、白い粒子がまじり、器表面は茶色に酸化し、焼き縮められている。内外は比較的丁寧にヨコナデ調整され、外面にはクシ目、内面の一部には自然釉がみられる。標目はない。

この溝出土品は、14世紀から16世紀とやや幅の広い時期のものが混じっている。

SX-37 (Fig.54・57, Ph.40・43)

3255はベトナム白磁鉄絵鉢で、白濁色の釉下に鉄絵を描き、内面の口縁部にも連続文様を配する。釉薬は細かく氷裂しており、またピンホールも多い。3256は軟質の白磁皿で、餅底部は無釉で焼成はあまり、淡褐色をおびた白釉はマットで、細かい氷裂文をみせる。3259は端反り白磁碗であり、外底に直径4.3mmの焦げ跡とシュウエン周囲に砂が固着し、また墨書もあるが判読でき難い。鉄絵壺の破片3390、3392、3393、3395、3398はこの遺構から検出しており、第2面の項で記述する。

SD-74 (Fig.43, Ph.36)

3027は白磁玉縁口縁碗の高台であり、腰以下は露胎で、「九□」の墨書銘が記されている。釉薬は白濁色を呈し、よく融解していない状態である。内底に圓線を明瞭にめぐらす。3028は通有の白磁四耳壺である。この種の大型の器形は出土量が少なくないが、小片が多く、形態も共通しているため、実測図をしめすことが少ないので、掲げる。氷裂のない灰白色透明釉がかけられ、頸部内側は薄いため黄色に発色している。肩部との接合が頸部下端で観察できる。

SE-65 (Fig.38, Ph.26)

3174は竜泉窯青磁蓮弁文皿で、鋸のみはっきりとし各弁の界線は不明瞭であり、砧釉が1mmと厚くかけられ胎土は白灰色、露胎の疊付は赤変している。3175は大型の青磁鉢であり、黄緑色の釉薬は腰まであり、それ以下は黒灰色の露胎で削り調整がなされている。内底には目跡が5カ所にわたって認められる。これらはいずれも掘方内の出土。

4) 第4面各遺構および検出時出土遺物

SD-76 (Fig.56・77~80・87・95, Ph.42・54・56~60・65)

この溝の出土遺物はかなり多く、上・中・下・最下層に分けて検出した。

上層—おおよそ13~14世紀代の遺物が中心である。3029は、青白磁小壺の小片であり、白磁胎に、型押で珠文を多用する花文が表され、内面は無釉で、別の大型器形に貼付されていたとみられる。3030~3033は竜泉窯青磁で、3030はほぼ光形の鋸蓮弁文皿で、口径12.3cm、器高4.0cmをはかる。先端の尖り、間弁をはさむ蓮弁で、透明で緑色に発色した総釉が滑らかに融解し、疊付のみ釉薬を削り取り灰色を呈し、焼成後に研磨されている。3031は内底の方形スタンプ文が「竟貢龍産」かとみられ、比較的の出土例は少ないが、竜泉窯などで出土例がある。暗緑色釉は疊付までかけられ、橙色の焦げ状を呈する。3032は外底に墨書の1字がみられ、黄緑色釉、内底に簡略な籠書き文。3033は、その内底の施文が丁寧で、5弁振り花文を片切彫りでいれている。施釉は疊付までされ、高台が成形時点での欠損していたため、釉薬が外底まで流れ込んでいる、そのため直徑3.6cmのハマ痕が釉薬の上にクッキとなっている。施釉後、疊付の釉を削り取った擦痕がある。3034は高麗青磁黒象嵌菊花文皿である。

中層—3035~3039は、白磁で、3035は芒口皿であり、白色磁胎に光沢のあり、氷裂のない釉薬が下

半までかけられ、釉際は赤茶色になり、無釉の外底には糸切り痕と直径5cmほどのクツキ痕がみられる。3036は粗とみられ、無釉で褐色の粗質胎土に花押様の墨書が認められる。3037も外底に墨痕が認められる白磁碗である。3038は、高台の細く高いタイプの通有の碗であり、白褐色の無釉の外底部に墨書があるが、判読できがたい。3039の碗は、内底の釉薬を輪状に削りとり重ね焼きするもので、高台の内外にも黄色の砂が固着している。ピンボールの多い釉薬が体部下半までかけられ、調整は乱雑な削りである。3040は、青白磁の脚付容器の小片であり、脚との接合部位の裾に隆線文をいれ、節状の脚部分を接合している。

3041～3047は青磁である。3042は腰以下は露胎で、褐灰色の胎土が赤変し、内面の釉薬は緑黄色で越州窯製品に類似している。これとは別に越州窯青磁玉壁高台碗の小片がある(3040)。3043は露胎の外底に「本」の墨書、釉薬は淡緑、透明である。3044は外底の半分に釉薬が流れ込み、ハマの砂が円形に付着しており、こる露胎部分に「一」の墨書がある。3045は明瞭な鎧運文を刻む皿であり、水裂のない暗緑色釉がかけられる。3046は片切彫蓮華割花文を内底に刻む皿で、暗緑色透明釉が美しくかけられ、豊付にもおよんでいる。露胎の外底に径3.0cmのハマ痕がのこる。3047の碗も割花文で、淡緑色透明釉がよく触解し、豊付にも部分的ではあるが施釉されている。茶色を呈する露胎の外底にハマ痕を示す径3.2cmの黒砂が付着する。これら青磁はいずれも竜泉窯製品である。

3382～3386の5片は、吉州窯鉄絵盤とみられる破片で2個体分あると考えられる。底部の3385と3386は文様は類似しているが、厚さがかなり異なり別個体と考えられ、3385は、後述SD-85拡張部出土品と同一個体であろう。共通した特徴は、胎土は灰白色、精製土であり、化粧土はまったく認められず、光沢をもつ透明釉が高台直上までかけられ、外底は白灰ないし褐灰色で、回転の鋭い削り痕がみられる。内底の主文は魚藻文と推定でき、尾、鰐を焦げ茶または黒茶色の鉄絵で描き、この魚文のみ線刻をいれ、周囲の空地を毛羽文でうめる。かまぼこ状に隆起する界線をはさんで、内体部は花葉文を表現しているようだ。濃淡のある鉄釉を、筆の太い、細いを巧みに使い分けして重ね書きしている。外面は口縁部と腰部分は、これまで濃淡をもつ横線文でひきしめ、下半部は太めの回文を同様な筆致であらわす。口唇部分は鉄釉、透明釉とともに施釉後削りとり、全体に擦痕が認められる。口径は37cm、底径は13cm前後とみられるが小片のため正確に計測できない。3383と3384は第2面の出土。

わが国出土の吉州窯陶器は、黒釉玳瑁文と表示したような白地鉄絵陶器の各11例があり、今回の発見により後者に新例を加えることになる(亀井明徳「日本出土の吉州窯陶器について」貿易陶磁研究11号 1991)。整型品は初出である。

3051は内外の口縁から体部上半は露胎で、それ以下の内外に茶釉をかける鉄鉢形の器形である。胎土は赤茶色の精製土であり、器内がうすく、ヨコナデ調整が露胎部にのこす。3052は擂鉢で、赤褐色で小石を含む胎土で内面に細かく擂目がはいり、やや黒みをおびている。高台の削りは鋭角であるが、底の周縁とともに使用のため摩滅している。このほかに黒釉碗(3050)の小片を検出している。

5104は長方形の石硯、5105は菱形石硯であり、ともに小豆色の石質で底部は摩滅している。

中・下層-3053～3060は白磁である。3053は芒口皿で、底部は釉薬を拭きとったよう薄く釉がのこり黄褐色を呈し、口端の無釉部分には黒砂がつき、一部釉が剥ぎ取られている。内底に圓線をめぐらして、鏡をつくる。3054は青白磁小壺の蓋で菊花文を半部に型押とする。無釉は口縁裏部分のみであり、釉際は赤変している。3055も青白磁碗で、外底の釉薬を径3.5cm削り取り、黒茶色のハマ痕がみられる。胎土が白いので発色がよく淡い青色を呈し、内底釉下には花文が刻まれているが、浅く不鮮明である。3056、3057は通有の白磁碗で、外底の露胎部位に墨書があり、各々「土二」、「一人」とよめる。3058の端反り碗は、ピンボールのおおい釉薬で、内底の圓線にそって黄色砂がめぐり、クツ

キがある。外底は露胎の高台内抉りにそって砂が付着している。3059と3060は白磁四耳壺の底部破片であり、全形を知りえないが、実測図を掲げておく。3059のほうが灰白色の磁胎で、釉の発色も白みがあり、良質である。ともに高台を短く削り出し、鋭角な稜にけざる。壺付には全周にわたって白砂が付着し、胎土、釉薬ともに灰色みのつよい3060では無砂の内底にも圓状に白砂がついている。

3061～3064は竈足黒青磁である。3061は高台先端部のみを露胎にする蓮弁文小碗で、蓮弁は二重線で区画された肉盛りをもち、内底に双魚文が貼付されているが、小片のため頭部の痕跡である。釉薬はかなり厚くかけられ、暗緑色を呈し、壺付部分は削り取られ赤褐色であり、接地部分は焼成後に研

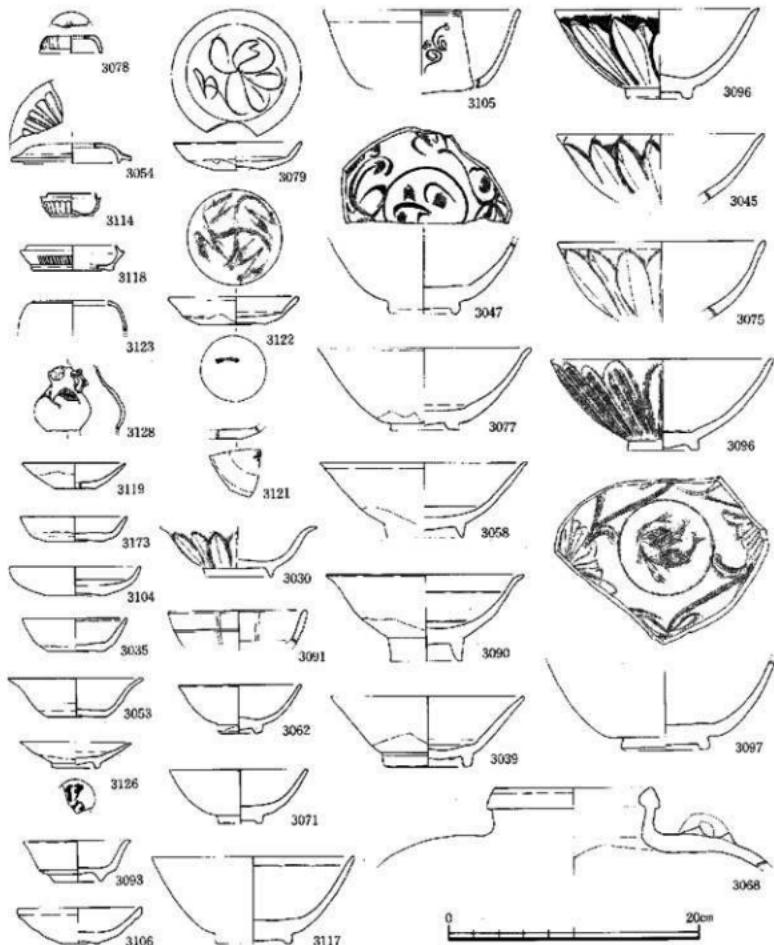


Fig.95 第76号溝出土陶磁器実測図

磨されている。3062は緑黄色釉薬のかかる小碗で、ほぼ完形である。口径9.9cm、器高3.9cmをはかり、高台は面取りされそこまで釉薬がついている。胎土は褐色で、粗く、内底に降灰がみられる。3063は、折れ腹形の皿であり、平底は釉薬を削り取り暗灰色を呈し、ハマ痕がついている。内底には割花蓮華文を片切彫りで表している。12世紀代の製品。3064は図示していないが、蓮弁文碗の通有品で、内底に花文スタンプが認められる。

3065以下は陶器であり、3065は壺の底部であり、内面に茶褐色で光沢のある釉がかけられている。無釉の底部は赤褐色を呈し、「□□」の墨書が認められるが、器面の剥離もあり判然としない。「□網」であろうか。3066は褐釉鉢で、内外に茶褐色釉がかけられ、外面ではカイラギ状を呈している。T字形口縁の上面は釉薬が削り取られ、暗赤褐色で、目跡がある。3068は茶色釉の四耳壺大壺であり、口径12.4cmをはかり、胎土は褐色で内面の無釉部分では、灰褐色を呈する。3069は、黄釉鉢の口縁部破片で、内面の口縁下以下に黄緑色釉が薄くかけられ、鉄彩がみられる。外面は赤茶色、鶴状口縁部分は橙色で、目跡が認められる。磁灶窯製品。

白・黄灰色砂層-中層に相当するこれらの層位から3070~3077を検出した。3070(小片のため未実測)は、疊付のみを露胎にする竜泉窯青磁の小碗。3071も青磁で、黒胎に近い暗灰色の胎土に、やや厚めにかけられた釉薬は暗緑色に発色し、内外全体に細かく氷裂文がでている。疊付にも施釉され、一部は外底までながれ、ハマ片が固着している。3072、3076は竜泉窯青磁碗であり、外底に墨書が認められるが、いずれも判然としない。3075は通有の箇蓮弁文碗であり、氷裂のない緑色透明釉がかけられている。3073は白磁小皿で、体部下半以下は削り調整され、無釉であり、凹状の外底には径3.3cmのハマ痕が認められる。釉薬は白灰色で、形態とともに芒口のそれらと類似するが、これは口縁にも薄く施釉され、黄ばんでいる。3077は黒釉碗で、少し茶色気味の黒釉が腰付近までかけられ、露胎で褐灰色の胎土をみせる高台は、粗く削り出され、疊付に3個の赤変した目跡が残っている。

下層-12世紀を主とし、13世紀の遺物を一部含む層位である。3078は青白磁合子壺の小口であり、釉薬はやや灰色気味を呈する。甲部は草花文の型押し。3079~3085は白磁である。3079は、内底釉下に花文を明瞭に刻み、体部を腰折れ状にする形態で、露胎の下半は回転削りされ、白色の磁胎がみえ、あげ底状にして砂が少量付着している。口縁の一部を欠損するほかはすべて残存している。3080は形態はこれに類似するが、釉調が異なり、内面に目跡とおもわれる直徑5mmの孔はげが認められ、釉上にはツツヅの付着物がみられる。褐色をていする無釉の外底部に墨書があるが、判読できない。3081は、内底に箇と縦により施文され、外底に「李□」の墨書がある。

3082は、内底を輪状に釉引きする粗製であり、無釉の外底に「廿口内」の墨書がある。この種の墨書について言及したことのあるが(拙著『日本貿易陶磁史の研究』)、梶包された20口の同型品の端にあったもので、その梶包数を表示したものである。墨書が消えにくいで、これは商品価値が低くなり、開梶後に廃棄されたと推定され、この種の墨書品が博多以外から出土することがほとんどないことも、その推定を裏書きしている。「□□網」もその意味するところ同じであり、あいかわらずこれを「網首」の略称と考えるのは無定見である。3084は、青白で透明な釉薬がうすくかけられた小型の碗(底径3.5cm)であり、内底には片切彫りで花文が鮮明に刻まれる。白磁胎で、釉薬は疊付までかけられた後削りとられており、外底は無釉で砂の付着が認められる。

3083~3089はいずれも通有の碗であり、外底部に墨書紙止められる。3083は「林□」、3086は「□前」と読める。3089は花押、それ以外は判読不可能である。3090は、端反り碗であり、露胎の外底抉り部分の全体に墨が付着してはいるが、文字の混成は認められない。

3091~3098はいずれも竜泉窯青磁である。3091は、縦および横方向に凹線で区切る皿で、内外に若

草色で水裂のない釉薬がかけられている。3092は、小片ではあるが特徴的な小碗である。胎土は不純物のない粒子の細かい粘質で、褐色を呈し、透明な釉薬は水裂を全面にみせ、厚く内外面にかけられ、疊付きのみ露胎にし、その部分は黒茶色に呈発している。竜泉淡口窯タイプである。3093も小型品であり、厚く施釉され、よく融解し、露胎部分は疊付のみであり、そこは釉薬を粗く削られ、褐色を呈する。

3094は通常の大きさの碗であり、内底には対と拂による施文があり、胎土は褐色、粘質の精製であり、釉薬はガラス質である。3095は描画文青磁皿で、淡緑色釉であり、釉際は黄色に変じている。外底部の墨書は不明。3096は典型的な複弁輪弁文のデザインであり、高台の脇まで暗緑色で透明な釉薬が厚さ約1mmでかけられている。疊付の一部にも釉薬がたれているが、外底は無釉であり、直径2.2mmの黒砂の焼台痕がのこる。内底には窯附の付着がみられる。3097は内底に印花双魚文を配し、周囲に片切彫りで蓮華文を刻む、宋代竜泉窯の典型的施文であり、暗緑色釉が灰色の胎土にかけられ、無釉の外底部には直径2.9cmの焼台痕がのこる。底径6.8cmとやや大型の碗である。3098は褐釉壺の底部の破片であり、外底には茶褐色釉がうすく認められ、墨書は「罐」であろうか。この書体は類例がほかにある。

最下層一下層と年代的には変わらず、12世紀を中心として、13世紀の遺物を含んでいる。

白磁では3101は器内が薄く、口縁部に珠文、体部に沈線を表す小窓であり、釉薬は透明で牙白色、こまかい氷裂文がみえ、芒口である。3102は黄白色釉の小皿で、内面に割花文、外底に墨痕が認められる。3103は白堆線を体部に5本いれる小皿である。3114は小型の青白磁合子身、灰色で光沢のある釉薬が底部をのぞいてかけられている。関係品で、口径4.8、高さ1.8cmを有する。3118の青白磁合子は、体部下半の露胎部は表面は褐色、器内内部は白色の磁胎となっている。3119は、灰色で光沢をもつ釉薬を体部の中位までかけ、無釉の外底に糸切り痕がある。3120は玉縁口縁碗の底部であり、墨書は「九綱」であろうか。3124の内面には描画文、外底の墨書は「茶四口」、3126の内面釉剥ぎの小皿の墨書「伊口」、3127の碗外底部の墨書は「九綱口」であろう。

3128は、青白磁小瓶の頸部から胴部にかけての小片であり、肩に葉文を貼付し、小耳がのこる。胴部で上下を接合しているようであり、外面には青白色で、透明な釉がかけられ、内面はザラザラした淡褐色の無釉である。

青磁では、3105が内面を分割し花文をいれるタイプの碗、3104は小皿であり、黄緑色で水裂のある釉がかけられ、外底部は釉薬を削りとり灰色を呈する。3106は淡茶色を呈する釉薬がかけられた陶質の粗製小皿である。3115は越州窯ないし初期竜泉窯青磁皿である。内底に片切彫りと拂書きを併用して施文し、暗緑色透明釉をかけ、外底部では釉薬を粗く抉るように搔きとり、砂目跡がのこり、黒いクツツキが2カ所みられる。胎土は灰色ないし褐色、緻密である。3116は初期竜泉窯の製品であり、先端の尖らない運舟内に各3本の範刻み線をいれる。高台脇までかけられた青磁釉は淡緑で、水裂文が全面にわたってみられ、高台内側は斜めに粗く削る。3117は、内底に4個の砂目跡をもつ碗であり、暗黄緑色に釉が呈発している。3121、3122はいずれも青磁墨書であり、3129はいわゆる砧釉が厚くかけられ、灰色の胎土を示す青磁瓶の口縁部である。

3123は茶入れであり、2mmほどの器肉の胎土は、茶色の粘りけのある精製土で、茶色釉がかけられ、口縁部に浅い溝がめぐらされている。3125は灰釉小皿である。

SD-85 (Fig.56・74, Ph.42・52・73)

3155と3156は暗灰土上層の出土、3157~3168は褐色砂層出土である。3155は間弁をいれた青磁弁碗であり、釉は若草色で、窯滓が付着し、外底の墨書は上半部分のみ残る。3156は白磁四耳壺の底部

で、胎土は灰白色で、これに灰白色の釉薬が内面と、外面は高台の直上までかけられている。疊付の側面は面取りされ、接地面に砂が付着している。露胎部分は黄白色に発色する。

3157は、内側面に放射線文を、見込みには草花文をそれぞれ型押しでいれる。淡緑色の透明釉を高台の脇までかけ、無釉の外底は黄褐色で焦げ痕をのこす青磁小碗。3158は黄灰色透明釉がかけられた端反り白磁碗で、外底に黒い焦げ痕が付着している。3159は描画青磁皿で、外底部は削り調整で灰褐色を呈する。3160は内面に描画花文をいれる竜泉窯青磁皿であり、黄緑色の透明釉薬が褐色の精製土にかけられ、外底は釉薬を削りとり砂の付着が認められ、墨痕もあるが判読不能である。3161は吉州窯鉄絵盤の底部であり、前述のSD-76出土の3385と同一個体とみられる。露胎部分は灰白色で、数匹の魚文は細部の文様を搔線で表現し、透明で光沢のある釉薬をかけている。高台際には淡色の園線を釉下にめぐらしている。3162は青白磁の蓋であり、裏面は釉がなく、やや赤みをおびた褐色を呈する。3163も青白磁の蓋であり、口縁部に珠文をめぐらし、刻線を垂下させており、口唇部は無釉である。小片のため口径は正確ではない。3168は竜泉窯青磁皿であり、露胎にした外底には焼台の砂痕がみられ、内底いっぱいに描画文を配し、暗黄緑色透明釉をかける。5103は滑石製品で、耳のある面には焼が付き半欠きの孔には鉄錆が認められ、鍋としての使用時の鉄環痕であめうか。反対面はよく摩滅している。

SE-87 (Fig.70, Ph.70)

3176は青白磁の合子身で約半分を遺存し、口唇部の釉薬を剥ぎとり外面は中位以下を露胎のままである。外底に型しづをのこす。

SD-89 (Fig.74, Ph.52)

3169は白磁碗であり、内面の釉薬を輪状に削り取り、外面には灰白色でピンホールのおおい釉をかける粗製ひんである。無釉の外底の墨書は「龍跡」であろうか。

SK-111 (Fig.70, Ph.50)

3248の白磁碗は、内面に捲描文をいれる端反り碗であり、不透明な白濁色でピンホールのおおい釉薬がかけられている。3249は、緑茶色の釉薬がかけられた完形品の長壺で、外底部は中心を抉り高台を作り出している。口唇部に砂目跡、内面の一部にも施釉されている。胎土中に石粒がかなり多く混入している。

SE-119 (Fig.70, Ph.70)

3177は通有の玉縁口縁の白磁碗である。完形品であり、口径16.0cm、底径6.5cm、高さ6.5cmをかかる。釉薬は濁った白色であり、中位以下の露胎部は黄褐色を呈する。内底に園線をめぐらす。

検出時出土遺物 (Fig.92, Ph.70)

3267は小振りな青磁碗であり、直線的に延びる体部から低い高台を削り出す。釉薬は越州窯青磁にいた暗緑灰色を呈し、カセた状態であり、疊付をのぞく總釉である。疊付は施釉後に削られ、レンガ色を示している。胎土は灰色である。3268は第4面の暗灰色砂質土の検出品で、いわゆる枢府タイプの皿である。内底の暗文は不明瞭であり、釉は透明な青白色で冰裂ではなく、高台脇までかけられている。露胎の外底は丁寧に削り出され、斜めに削られた高台内側に黒茶色の砂が付いている。

2. 第64次調査から

本調査地は「博多浜」砂丘の東南斜面に位置し、博多遺跡群の東南部にある。本調査の結果、第1・2面で中世末から近世初期の生活遺構と墓地、第3面で中世後半の道路および生活遺構、第4面で古代末から中世の生活遺構が検出できた。以上のほか、古墳時代終末期から奈良時代初期の土器棺墓を検出し、弥生土器、古代の土師器・須恵器がまとまって出土した。以下、弥生時代から奈良時代までの本調査地周辺の様相について、中世以前の様相、古代末から近世初期の様相について、検出道路に視点をあて、中世の様相として述べていく。

1) 中世以前の様相

本調査地では、弥生土器がまとまって出土した。出土弥生土器は、中期後半の一部の中形甕・高坏を除いていずれも人形の甕が多く、摩耗がみられない。これらの出土弥生土器は甕棺用の甕で、中期初頭前後のいわゆる金海式がもっとも多く2/3を占めており、中期後半の立岩式が続き、汲田式・須恵式は少量である。本調査地出土の甕棺片は、本調査地の出土位置を合わせて考えると、本調査地南側隣接地を中心として前期末から中期後半にかけての甕棺墓からなる墓地の所在が想定できる。この甕棺墓群は、これまで「博多浜」砂丘の頂部（祇園地区）の都市高速鉄道店屋町・祇園Ⅰ区・同祇園出入口、第22・24・32・36次調査（以下、○次とする）で検出されている甕棺墓群と別のものといえよう。第30次の堅穴住居検出、第17次など「博多浜」砂丘の東南部から東斜面にかけての各調査で、前期から中期前半までの遺構・遺物が検出されている。このような状況から、博多では弥生時代前期頃、「博多浜」砂丘の東南部で人の生活が始まったといえよう。

その後は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて「博多浜」砂丘を中心として集落を営まれていることが、これまでの調査で確認されている。さらに古墳時代中期に入ると、「博多浜」砂丘頂部に前方後円墳が築造されている。本調査では、弥生時代後期から7世紀前半までの遺物は数点あるのみで稀薄である。ただ、SK-86・88は土壙墓と考えられ、石蓋土壙墓（SK-100）とともに暗褐色砂を覆土としているところから古墳時代前半期のものと考えられる。本調査地西側隣接地の第20次などの調査で方形周溝墓が検出されており、本調査検出の土壙墓・石蓋土壙墓は方形周溝墓の主体部、または第28次など検出の前方後円墳に付属する墓地か。

本調査地では、古墳時代終末期から奈良時代の遺構としては土器棺墓1基検出したのみである。同時期の遺物はコンテナ1箱程度出土しており、生活遺構も所在したと考えられるが、中世の造成などの地形改変によって破壊されたといえよう。

2) 中世の様相

本調査地では、第3面の標高3.38m～3.41mの地山および暗灰褐色～灰褐色シルト～砂の面で、SD-32・74、SX-37の側溝に区画された道路を検出した。道路幅3.3m～3.7mでN-51°W前後の方位をとり、北西・南東方向に延びている。道路両側の端（路肩）には多量の糸切り底の土師器が踏み潰され敷き詰められており、軟弱な砂およびシルト上の造成を補強したものといえよう。西側の側溝（SD-32）は4回造り直され、幅2.2m前後で0.7m～1.1m道存し、断面形は逆台形を呈している。東側の側溝はSD-74とSX-37からなり、両溝間が3.5m前後切れているが、屋敷地への出入口と考えられる。SD-74は幅1m前後で、65cm道存し断面形は逆台形を呈している。SD-32・74、SX-37からは各種各様の遺物が出土しているが、糸切り底の土師器皿・坏がもっとも多い。糸切り底土師器皿・坏は外底に板

状压痕をもつものもあり、皿は口径8cm、器高1.3cm前後を測るものが多く、环は口径11.2cm～14.2cm、器高2.2cm～3.4cmを測る。出土土器器皿・环および青磁・白磁などの輸入陶磁器から、本道路は14世紀前半に築造され、16世紀末前後に廃棄されている。

本調査検出道路の北西方向延長部では、第26・35次で道路が検出されている。第35次検出道路は幅3.6m～4.6mでN-60°～67°-Wの方位をとり、北西・南東方向に延びている。第35次では豊富な多種多様の遺物が出土し、出土遺物と切り合い関係から、道路は13世紀末に築造され16世紀末頃に廃棄されたと考えられている（出土遺物は本書記録）。近い方位をとる道路は第38・40次などで検出されているほか、築港線関係調査ではこれに交差する道路が検出されている。本調査検出道路は、第26・35次と主軸方位に10°前後のずれがあり、中間に東長密寺があり、直接的につながるとは考えにくいが、道路幅・築造・廃棄時期が近似しているところから中世後半の一連のものといえよう（Fig.96）。

道路築造前は、道路下にN-52°-Wの方位をとる幅1.4m前後で30cm遺存のSD-89があり、先行する道路があったか。また、N-45°30'-Eの方位をとるSD-76は、幅2～4m前後の断面形逆台形の溝である。「博多浜」砂丘は、木調査区南端から少なくとも20m前後南に扯がっていたと考えられ、旧比恵川を人工的に改変導水した水利施設と考えられる。少なくとも4回の流路変更がみられ、出土遺物から築造時期は11世紀末前後で、道路が築造され博多市街が東南部に拡がる14世紀初頭前後に廃棄されたか、もっと南へ移り古図にみられる旧比恵川となつたと考えられる。本溝は、古代木から中世前半にかけての博多市街の南端～南東端に位置するとも考えられる。

中世後半の道路廃絶後は、柱穴・土壙が多く検出でき、太閤町割りによる市街地整備がなされ、本調査地全域に町屋の所在が想定できる。また、調査区南側は墓地として利用されたか。

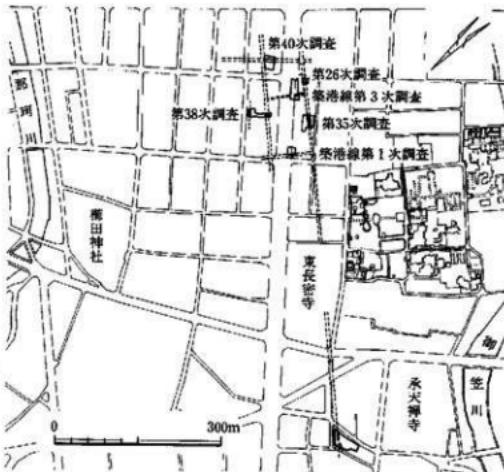


Fig.96 中世後半期検出道路分布図

付編：博多35次調査遺物編

1. はじめに

本編は1986年11月17日～1987年6月8日にかけて実施した博多遺跡群第35次調査の埋蔵文化財調査報告の遺物編で、1988年刊行の「博多12」—博多遺跡群第35次調査『福岡市埋蔵文化財調査報告書第117集』の統編である。整理作業の体制は以下の通りである。

調査担当：池崎謙二 加藤良彦

整理作業：池田初実 馬瀬（前田）直子 木村厚子 国武真理子 薮田慧 小城信子 堤満代

橋崎多佳子 西原由規子 能美須賀子 山崎賀代子

遺物実測：加藤良彦 平川敬治（九州大学） 山崎賀代子 木村厚子

写真撮影：平川敬治 加藤良彦

製図：山崎賀代子 木村厚子 国武真理子 加藤良彦

本編の執筆・編集は池崎の協力を得て加藤が行った。

2. 調査の概要

本調査区は博多区上呉服町56番に所在し、「博多浜」砂丘の北西に延びた稜線上の最頂部に近く、現地表高6mの地点に位置する。

調査は地表下1.8m程の地点で15世紀前半～中頃の二本の側溝にはさまれた幅4.8mの道路遺構(SF49)を検出(Fig. 1・2)。以下14世紀前半までの5面の道路面と側溝、7世紀前半までの4面の遺構面を検出した。道路遺構は土層断面の観察から、第1検出面から地表下60cmの太閤町割による廃絶と思われる面までにさらに4面の道路面と側溝を確認、14世紀前半～16世紀末の260年余にわたる都合10面に及ぶ中世都市博多の基幹道路であった事が確認された。方位はN-61°～67°-Wを示しており、砂丘の稜線に並行し、建久6(1199)年創建とされる聖福寺伽藍の主軸にはば直交する。遺物の質・量も基幹道路である事を示しており、655m²の調査でコンテナ470箱の出土量をみ、質も以下に示すごとく他地点では得がたい貴品がそろっている。

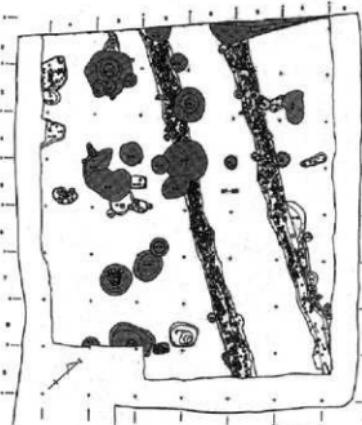


Fig. 1 調査区1面全体図(1/360)



Ph. 1 調査区1面全景(南東より)

遺構は他には7世紀後半の竪穴住居1棟・8世紀中頃の埋甕1基・8世紀後半の土壙4基、平安時代は土壙16基・井戸4基・溝2条、鎌倉時代は土壙26基・井戸2基・集石3基、室町時代は土壙48基・井戸3基・集石2基、江戸時代は土壙4基・井戸8基を検出している。

前述の様に、本調査区では道路とこれに付随する側溝が主体であり、6面にわたる道路面と側溝・以下の3面にわたる遺構面毎に各期を定め、これにしたがって陶磁・土器・瓦・土製品・石製品・金属器・ガラス・木器・骨角器・文字資料と、主要な資料に関して述べていきたい。尚、近世遺物・自然遺物に関しては紙面の関係で割愛した。

I期	15世紀前半～中頃	SF49・1面-SD20・30
II期	15世紀初頭～前半	SF49・2面-SD52
III期	14世紀末～15世紀初頭	SF49・2～3面間-SD56
IV期	14世紀中頃～末	SF49・3面-SD74
V期	14世紀前半～中頃	SF49・4面-SD82・127・128
VI期	14世紀前半	SF49・5面-SD109・135
VII期	13世紀前半～14世紀前半	下5層-SD106
VIII期	13世紀初頭～後半	下5層-SD119・78
IX期	12世紀	下6層-SD120
X期	9～11世紀	下7層
XI期	7～8世紀	下7層

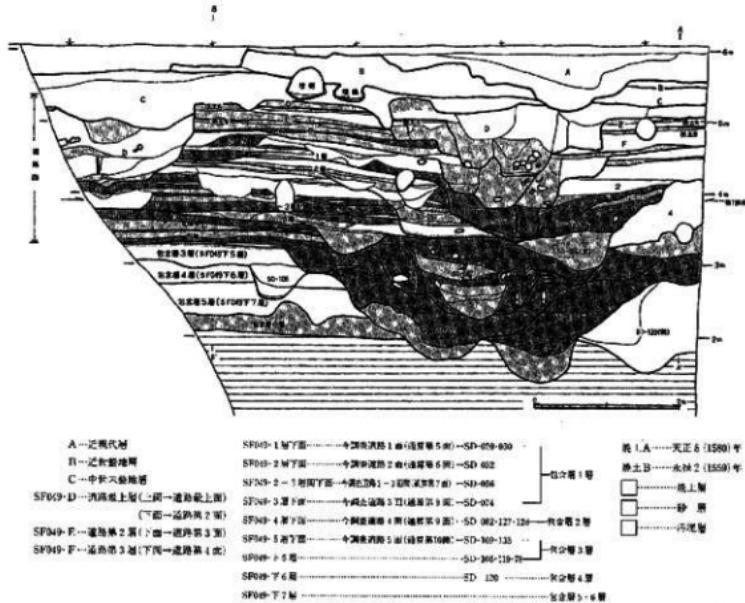


Fig. 2 SF49横断土層改訂図(1/70)

3. 陶磁・土器

I) SF49・I面 SD20・30-I期 (Fig. 3~5) 1は龍泉窯系の小鉢で口径10.9cm。釉は厚く暗緑色。胎土は灰色で若干粗い。内面に片切の草花文、外面下位に陰刻の蓮弁文を施す。2は磁州窯系の白地鉄絵の鉢で口径46cm。胎土は灰白色でやや粗目。口縁内面に5条の圓線と以下に文様を鉄彩で描き乳白色のくすんだ釉をかけ口縁端部から外面に不透明の黒褐釉を厚くかける。内面は貫入が入り外面はピンホールが多数みられる。口唇上端は重ね焼きのために釉がはげ落ちている。断面には接着に用いた黒漆状の顔料が残っている。3~5は土師器の皿で全て糸切り。11径7.8~8.3、器高1.4~1.6cmを測る。4のみ板压痕がある。6~20はSD20の土師器皿・坏で皿は6~8の口径6.1~6.9、器高1.4~1.9cmのもの、9~12の口径7.5~8.3・器高1.4~2.1、13~17の口径8.7~9.3・器高1.4~1.8cmのものに大別できる。坏は11径11.9~12.7・器高2.4~2.8を測る。全て糸切りで6~10・12~14・15~20に板压痕がある。21~27はSD30の土師器皿・坏で、皿は口径7.1~8.4器高1.5~1.6cm坏は26~27で口径13.3~13.6器高2.6~3.1cm、25は京都系で口径12器高3cmを測る。全て糸切りで25~27に板压痕がある。Fig. 4はSD20出土の陶磁器で28はベトナム産の白磁碗。3片の小片だが同一個体である。口径18.6cmで深い器形、口縁を輪花にする。胎土は灰白で緻密、釉は緑がかかった灰白色で全面に施釉。内面に陽刻印花の縱線と牡丹文を施す。29は耀州窯系の印花青磁碗。胎土は緻密で灰色、釉は明オリーブ灰色で厚い。30はベトナムの青磁碗で内面に描きの縱線と片切形の文様を施し青味がかったオリーブ灰の釉を薄くかける。見込は蛇の目にかきとり釉際は赤く発色する。外底は鉄漿が塗られ赤褐色を呈する。31は磁州窯系鉄絵翡翠釉壺。7片の小片となっているが同一個体と思われる。底径6.4cm。灰白の粗めの胎土に白化粧土をかけ外面に鉄絵で文様を描く。内面と外底には透明釉を施し、外面に

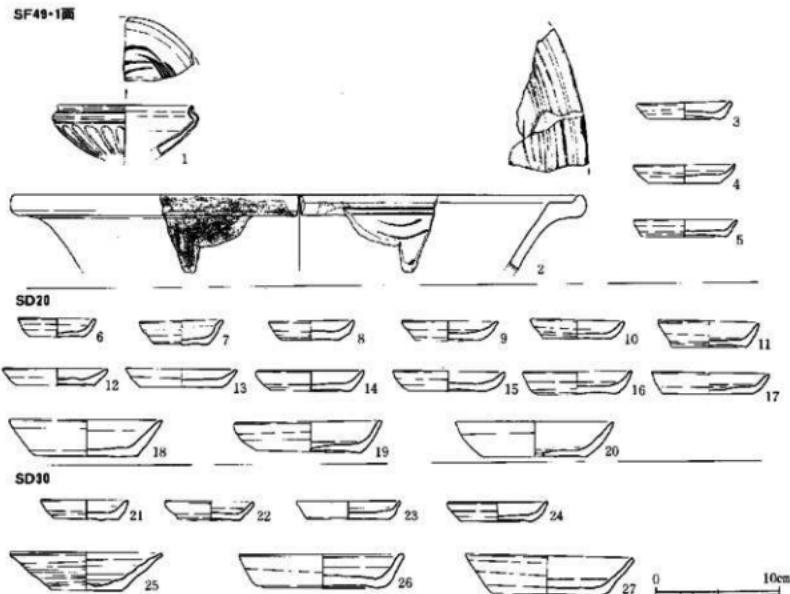


Fig. 3 SF49 I面出七陶磁・土器(1/4)

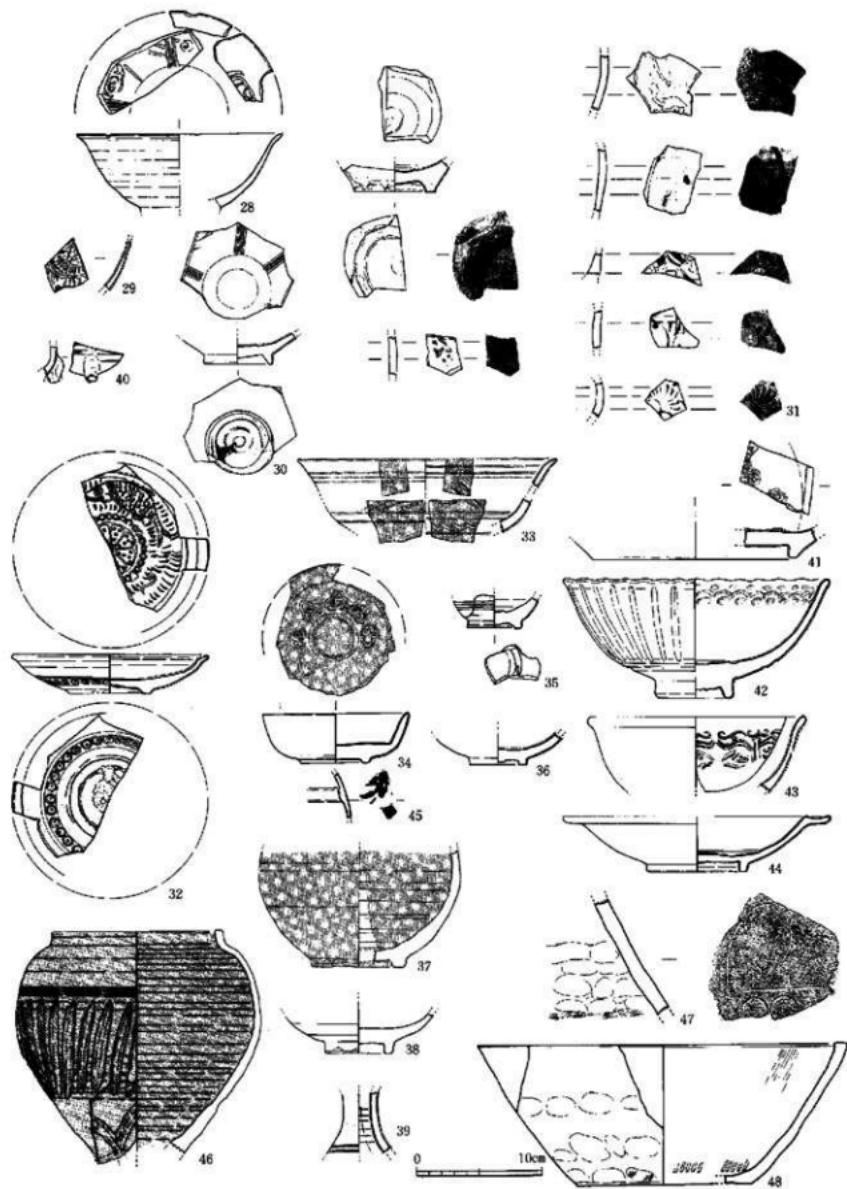


Fig. 4 SD20出土陶磁・土器(1/4)

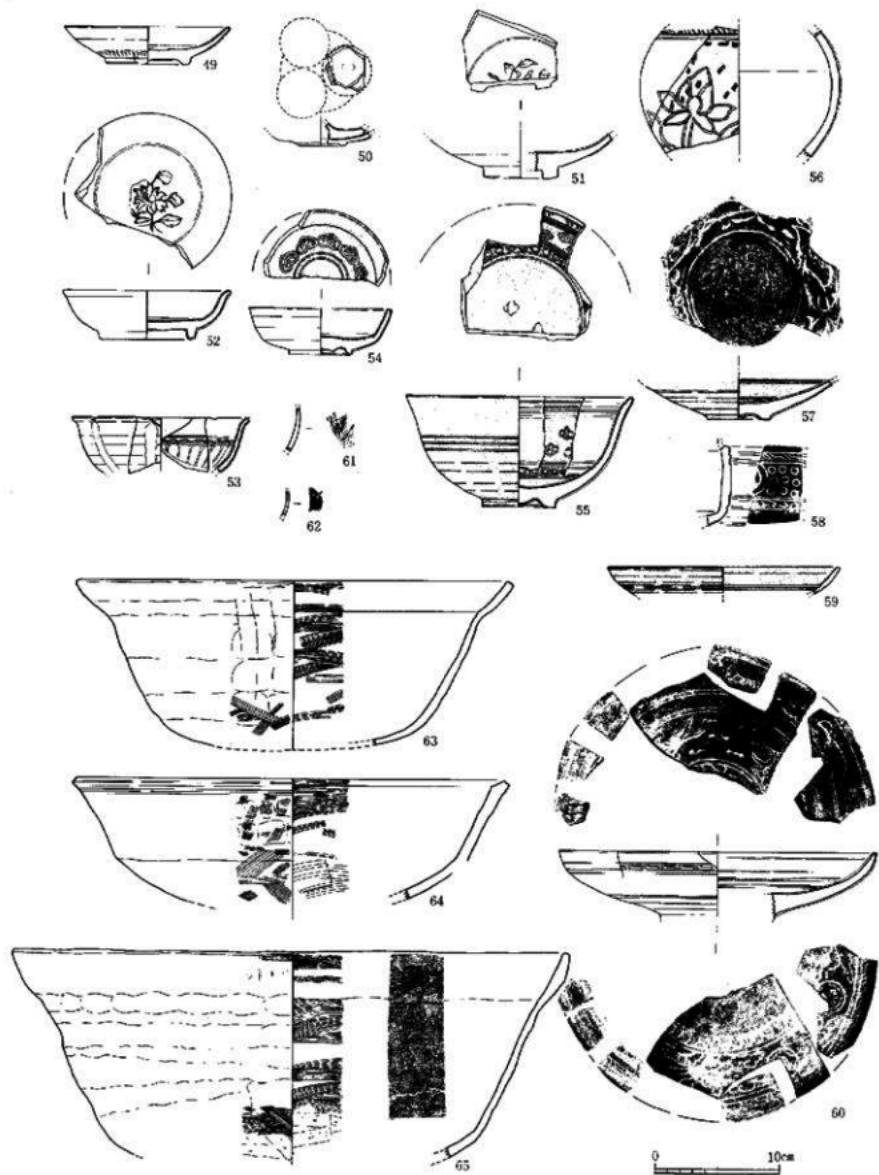


Fig. 5 SD30出土陶磁・土器(1/4)

は天青色の翡翠釉をかける。疊付は焼成時の熔着のため化粧土まではがれています。二次火熱を受けており翡翠釉は沸騰して部分的にしか残らず鉄絵は赤褐色を呈する。32~36・39は高麗・李朝青磁。32は白黒土の象嵌で双魚文他を描く皿。疊付のみ露胎で外底に砂が熔着する。見込にも目痕が残る。33は同じく高麗の白黒土象嵌の碗。34は粉青象嵌の小鉢。全面施釉で高台内際に目痕が3ヶ所残る。35・37・39は粉青象嵌の壺で35は内面と外底が無釉。37は内面の一部が無釉で疊付に砂が熔着、高台内に目痕が残る。39は頸部で内面の一部が流し掛けによって無釉。36・38・40~44は龍泉窯系の青磁。36は見込を円形に書き取り外底も無釉。胎土は灰色のセメント質で緻密。38も碗で高台際~内にかけ露胎。40は香炉の脚部で見込み露胎。41は貼花龍文盤の小片で龍の脚部が見込みに残る。胎土は灰白で緻密、釉は灰オリーブで水裂が入る。疊付は書き取り。42は輪花の大碗で口径21.3cm高9.5cm。口唇内面には印花を施し、外面には輪花に合わせ丸彫の蓮弁文を施すが厚い釉のため不鮮明。釉はにぶい黄色で全面施釉し高台内を輪状に書き取る。43は陽刻印花文の碗で口唇が毛線状を呈する。口径17.4cm。44は鉗口縁の皿で口径21.4cm。疊付のみ書き取り。45は元様式青花瓶の胴部で胎土は白色で緻密。呉須は粒子の粗い暗青~深藍色で波文に宝相華唐草を描く。46はタイの黒釉陶器の壺と思われ、口径13.6cm高約20cm。外面肩部に沈線3条と凹線1条、胴中位に5条の凹線を施し、肩部と此との間を右に傾いた縱方向の連続凹線で埋める。下位には同様の凹線によって蓮弁をめぐらせてある。胎土は浅黄橙色で落雁状、微細な気泡を含む。釉は黒褐色の不透明釉で薄い部分は暗褐色を呈する。内外とも下位が露胎で口唇は書き取る。47は備前焼の壺の小片で外面に錢文の刻印とヘラ描文様がある。48は土師質の擂鉢で口径29cm、器高11cm。胎土は3~4mmの小礫を多く含み黄橙色。外面は指圧痕と板ナデが残る。内面は摩滅が著しく描目はほとんど摩耗している。Fig. 5はSD30出土のもの。49~51は白磁。49は皿で内外面とも下半は露胎。胎土は細かいが2~3mmの小礫を少量含む。釉は灰オリーブで水裂が入る。50は子持ち合子と思われる口径4cm程の小皿3枚が入っていたと思われる。高台脇以下が露胎で胎土は灰白で緻密。釉は透明で薄くかかる。51は碗で見込み陰刻の花卉文の印花を施す。胎土は灰色で緻密。釉は灰白の透明で外面の高台脇以下を削りとっている。52・53は龍泉窯系青磁。52は皿で見込み陰刻の牡丹文の印花を施す。胎土は灰白で緻密。釉はオリーブ灰で全面に厚くかけ高台内を輪状に書き取る。露胎部は赤褐色を呈す。53は輪花の碗で内面には印花の縁取りの蓮弁を施す。外面は丸彫による蓮弁文を描く。釉は厚く明緑灰色。54~60は高麗・李朝の象嵌青磁。54は粉青象嵌の小鉢で口径11.3cm。高台内を丸蓋で削る。胎土は灰色で粗い。釉はオリーブ灰で全面に施釉、疊付に胎土目が残る。55も粉青象嵌の碗で口径18.1cm。胎土は灰色でやや粗く釉はオリーブ灰色で全面に薄く施釉する。見込み胎土目跡が残り疊付には砂が熔着する。56は粉青象嵌の壺で外面に蓮華文を施す。胎土は灰色で緻密、釉は透明で外面に薄くかかる。57は粉青象嵌の皿で内面に圓線と牡丹唐草文を陰刻し白土を象嵌する。胎土は灰褐色で密、釉はオリーブ灰で全面に施す。見込み胎土目が3ヶ所、疊付には砂が熔着する。高台内は丸蓋で削る。58は高麗象嵌の合子の身の小片で外面に雷文等を白黒土で象嵌する。59は粉青象嵌の皿で内面下に3条の圓線を象嵌する。57と同個体の可能性がある。60は高麗の白黒土象嵌の皿で内面上半に花鳥文、下半に波文・魚文を外面は牡丹文・菊花文等を施す。胎土は灰白で緻密、釉は灰色で全面に薄くかかる。61・62は明青花碗の小片で、外面に61は芭蕉葉文、62は牡丹唐草文をくすんだ青色の呉須を描く。胎土はともに白色で緻密、黒色微粒を若干含む。釉は灰白色。63~65は土師質の土鍋で、63・65が口縁が屈曲して長くのび体部が深い形態で、64は短い口縁で体部が浅い形態を示す。調整はいずれも外面は指頭圧後ハケ目・ナデ調整、内面は横方向の細かなハケ目調整を施す。

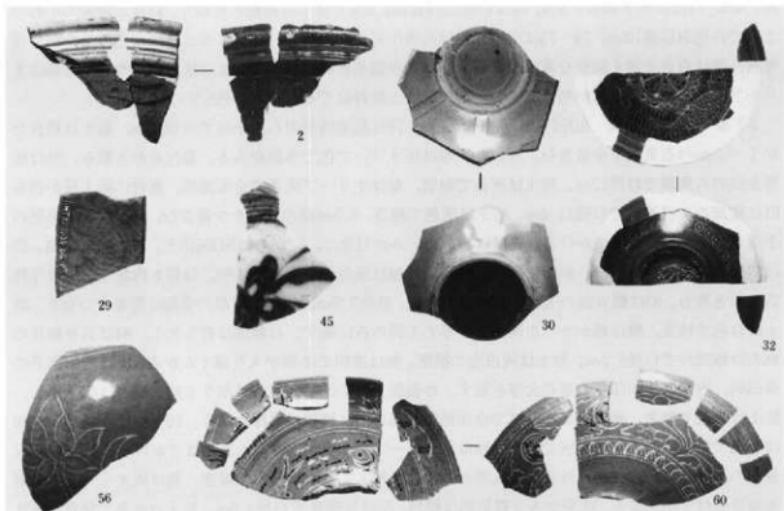


Fig. 2 I期出土陶磁器

2) SF49-2面 SD52-II期 (Fig. 6) 66は徳化窯系の白磁碗。高台内は階段状に削り出されている。胎土は細かな落雁状の粉っぽいもので灰白色。釉は淡黄色で細かな貫入があり、薄く高台際までかけられる。底径5cm。67は粉青粉引の碗で口径18cm。外面中位に白土が帯状に散る。胎土は灰白色で精良。釉は灰色で薄い。68は白磁の碗で見込の周線内に印花文を施すが半湯の釉のため不明瞭。胎土は灰白色で精良、黒色微粒を多く含む。釉は明オーリーブ灰色で半湯。高台際までかける。外底は赤褐色。69は青磁の碗で内面に陽刻印花の縦線と花文を施す。胎土は灰白色、精良で黒色微粒を含む。釉は淡緑灰色で厚く全面に施し見込内を蛇目状にかき取る。70~72は土師器皿・環で、70は口径8.1器

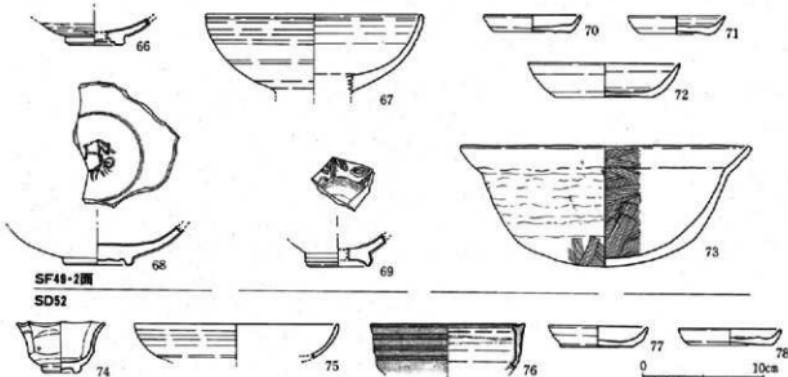
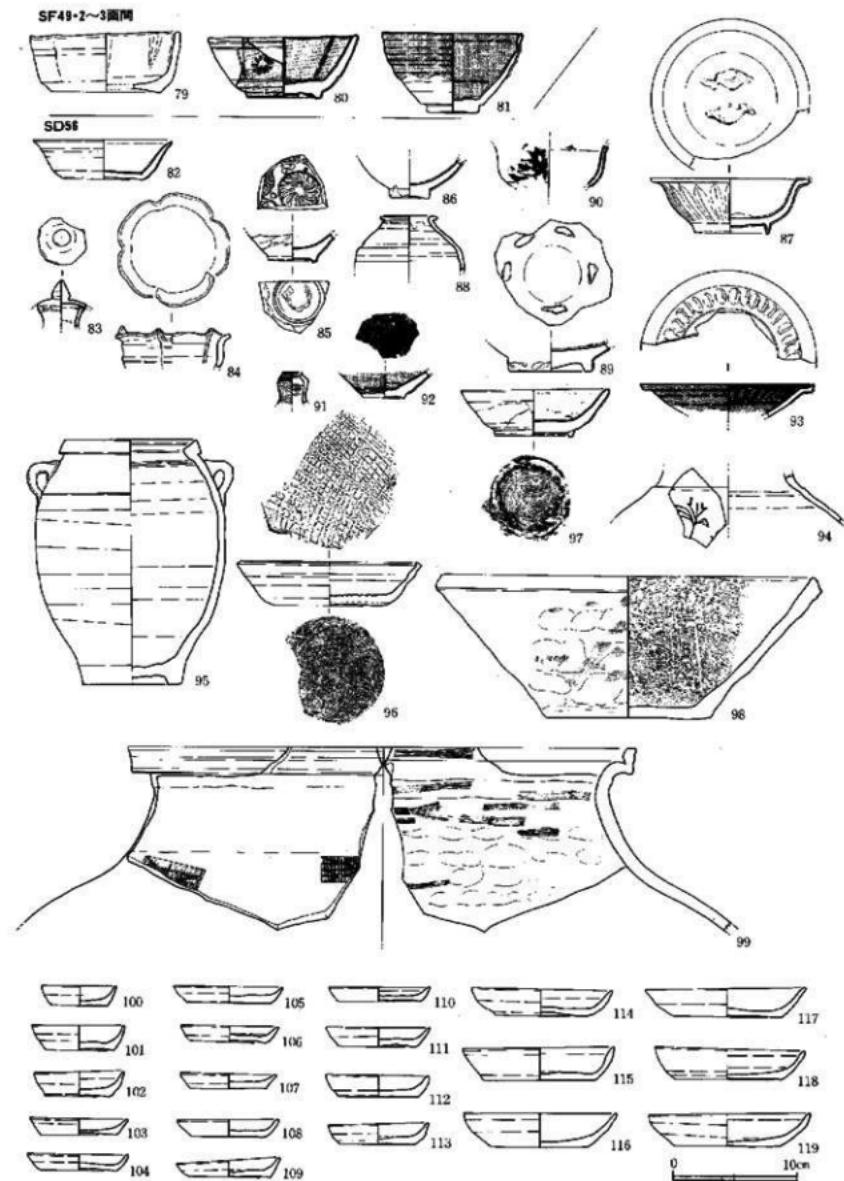


Fig. 6 SF49-2面・SD52出土陶磁・土器(1/4)

高1.4cm、71は口径8器高1.5cm、72は口径12.4器高2.8cmで全て右回転の糸切り。73は土師質の小形の土鍋で口径24器高10cm。74・75は白磁で74は八角小壺。75は皿で、ともに胎土は灰白色のやや粗い落雁状。釉は白色で薄く細かな貫入が入る。76は龍泉窯系青磁の香炉で胎土は灰白色でやや粗く釉はオリーブ灰で厚い。内面露胎部は淡赤色。77・78は土師器皿でそれぞれ口径8.2・8.5cm。

3) SF49-2~3面間 SD56-III期 (Fig. 7) 79は龍泉窯系の八角小鉢で口径12cm。胎土は精良だが1~2mmの石英粒を少量含む。灰白色。釉は灰オリーブ色で水裂が入る。疊付をかき取る。80は粉青象嵌の八角碗で口径12cm。胎土は灰色で緻密。釉はオリーブ灰色で全面施釉。高台に胎土目が残る。81は建窯の天目茶碗で口径11.4cm。胎土は灰色で精良。0.5mm程の砂粒を少量含む。釉は茶~黒褐色の不透明釉を外面中位までかける。茶溜にビンホールが目立つ。82からはSD56出土。82~84は白磁。82は口禿の皿で口径11.2cm。胎土は灰白色で精良。釉は灰白色で厚く半透明。口唇と内側をかき取り外底はふき取る。83は鶴首瓶の宝珠つまみ付きの蓋、底径2.7cm。体部と筒形の受部は泥漿でつなぐ。胎土は白色で精良。釉は緑がかかった灰白色で厚く上面のみに施す。口縁部は打ち欠く。84は五弁輪花の瓶の口縁部片で口径9.2cm。胎土は灰白色で緻密。釉は透明で水裂が入り薄くかかる。85は耀州窯系の青磁碗。内面に陽刻印花の菊花文等を施す。外面胴上位には手持ちヘラ削りを施し高台は削り出し。胎土は灰色で緻密。釉は灰オリーブで全面施釉。高台内に輪状の目跡が残る。86~88は龍泉窯系。86は小碗で胎土は明オリーブ灰で緻密。釉は灰オリーブで水裂が入り高台外面までかける。87は貼花双魚文の小鉢で口径12.8cm。外面に錦入単弁の蓮弁を施す。胎土は灰白で緻密、釉は灰オリーブで全面施釉後疊付をかき取る。水裂が入り露胎部は橙色。88は短頸壺で口径4.6cm。胎土は灰色で精良、釉は灰オリーブで薄く口縁内面までかかる。89は高麗青磁の碗。粗雑な造りの輪高台で高台内は兜巾状に削る。胎土は細かいが軟質で灰色。釉は若干にごったオリーブ灰で厚く疊付以外に施釉。内部に目跡が残る。90は明青花の小碗で外面に宝相華唐草文を描く。胎土は緻密で白色。釉は青味がかかった灰白色。91は黒褐釉陶器の注口部。口径1.4cm。胎土は灰褐色で精良。釉は黒褐色の不透明釉で口縁内側までかける。92は吉州窑天目碗。胎土は灰白色でやや粗く黑色微粒を多く含む。釉は外面は漆黒色の不透明釉に黄褐色の斑文が浮かぶ。内面は茶褐色に橙色の釉が斑状に浮かぶ。93は黒褐釉の銅口縁の皿で内面に陰刻の蓮弁を施す。胎土は灰色で精良。釉は黒褐色の不透明で外面上半まで薄くかかる。94は黄褐釉四耳壺の小片で肩に線彫で花文を描く。胎土は褐灰色で粗く多くの砂粒を含む。釉はオリーブ黄色で半透明。95はB群の双耳壺で口径10.8cm。胎土は灰色で緻密、黑色砂を含む。釉はオリーブ灰~黒褐色で外底以外に薄くかけられる。口縁内面に目跡が残る。96・97は交渡瀬戸系の灰釉陶器で96は鉢皿で口径14.8cm。97は碗で口径12.4cm。ともに胎土は灰色で粗く多くの砂粒を含む。外底は糸切り。釉は淡緑~灰白色で薄い。98は瓦質の擂鉢で口径30.8cm。灰白色で2~3mmの砂粒を多く含む。99は常滑の甕で口径43cm。肩部に袈裟摩の印文がある。胎土は灰色で粗く2~5mmの大砂粒を多く含む。100~119は土師器皿・壺で皿は口径6.4~9.8cm、壺は口径10.6~13cmと上層より大振りの傾向がある。全て右回転の糸切りで約半数に板压痕が残る。

4) SF49-3面 SD74-IV期 (Fig. 8) 120は青白磁の碗。底径4.5cmで低小さな高台を削りだす。胎土は灰白で緻密。釉は灰白で高台外面までかける。見込に片切彫と櫛描の花文を描く。121も同様の口禿盤で口径25.8cm。内面下位に妙意頭様の、見込に牡丹の陽刻印花文を施す。高台は同様に削り出し。胎土は白色で精良。釉は淡青色で厚く、大きな水裂が入る。全面施釉後口縁と、高台内を蛇ノ目にかき取る。122~132は龍泉窯系の青磁。127までは碗。122は口径16cm。外面に細い単弁の錦蓮弁を施す。胎土は灰白で緻密、釉は緑灰色で極めて厚い。123は口径19.8cm。胎土は黄橙で精良。釉は明オリーブ灰で高台外面まで厚くかかる。二次的火熱で釉が沸騰している。124は口径14.9cmの輪花碗で内面に陽



刻の線取蓮弁と牡丹の印花文を施す。胎土は灰色で緻密。釉はオリーブ灰。125も輪花の碗で、外側は輪花の下に二重の縦線を8本削り出し蓮弁を表わしている。内面は陽刻で牡丹唐草を、見込に花卉文を印花で施す。口径15.8cm。胎土は灰白で精良、釉はオリーブ灰で厚く疊付の中程までかかる。126は碗の腹部で外面に線彫の細い蓮弁を、内面に陽刻の牡丹文を印花で描く大碗。胎土は明オリーブ灰で緻密。釉は明オリーブ灰で厚く、水裂が入る。127も同様の碗で、外面の細い蓮弁に合わせて口唇に刻目を施す。胎土は灰色で緻密。釉はオリーブ灰で厚い。128・129は瓶の口縁で、128は外反して垂下した口縁の内面に線彫の蓮弁を描く。胎土は灰色で緻密。釉は灰オリーブで薄い。129は外反した口縁下に5条の凹線を巡らす。胎土は灰白色で精良、黒色微粒を多く含む。釉は明緑灰で厚く水裂が入る。130は小碗で底径2.7cm。胎土は灰白で緻密。釉は灰オリーブで厚く水裂が入り、高台外面までかかる。131は香炉脚部。胎土は灰白で緻密。釉はよい黄で細かな貫入が入る。内面と脚下面は露胎。132は大形の香炉で口径20cm。2条の凹線下に貼花牡丹文を施す。胎土は灰色で緻密。釉は緑灰で厚く全面に施釉。水裂が入る。133～134は高麗・李朝青磁で、133は碗で口径5.5cm。胎土は灰色で2～3mmの砂粒を多く含む。釉は灰オリーブで疊付以外に施釉。細かな貫入が入る。見込に目痕が残る。134は粉青象嵌の皿で口径12.5cm。内面に同心円文等、外面に雷文を施す。胎土は灰白で精良、釉はオリーブ灰で厚く全面施釉。細かな貫入が入る。疊付に砂が若干熔着。高台内は丸彫で削る。135は大碗で口径24cm。白黒土で内面に花文・外面に菊花文等を象嵌する。胎土は灰色で精良、釉は灰色で厚く、細かな貫入が入る。136は瑠璃釉瓶で、胎土は白色で緻密、釉は鮮明な瑠璃色で外面に厚く施す。137は備前大窯の肩部で陰刻の桜花の印花がある。胎土は灰色で粗く多くの砂粒を含む。外面は自然釉で灰オリーブを呈する。138は瓦質の擂鉢で口径30.4cm。内面に6本単位の瘤目を13条施す。139～142は土師器皿・坏。皿はそれぞれ口径8.1・8.6cm、坏は12.3・13.3cmを測る。全て右回転の糸切りで、140・141に板圧痕がある。143は青白磁の渦文瓶の底部。底径9.4cm。外面に片切彫で渦文を施す。胎土は灰白で緻密。黒色微粒を含む。釉は明緑灰で高台外面と疊付以外に施釉。細かな貫入が入る。二次火熱を受け釉が沸騰している。144は龍泉窯系の青磁碗で口径11cm。外面に複弁の鎬入蓮弁を施す。胎土は灰白で緻密、釉は明緑灰で疊付から高台内以外に厚く施釉する。大きな水裂が入る。145は瀬戸天目で口径12.3cm。底部は右回転の糸切り後高台内を浅く削り出す。高台脇は同軸板ナデ。胎土は灰白の粗い落雁状で、釉は口縁部が褐色、以下が漆黒色の不透明釉でやや厚くかける。146～156は土師器皿・坏で皿は口径7.2～8.3、坏は11.6～15.1cmを測り全て糸切り。149・151・155に板圧痕あり。

5) SF49・4面 SD82・128～V期 (Fig. 9) 157は枳府系の白磁高台付皿。底径5cm。見込に陽刻印花牡丹唐草文を施す。体部にも有るが不明瞭、胎土は白色で緻密。釉は淡い青味をおびた白色で半透明。疊付まで施釉し、ここはかき取る。158は高麗青磁碗。口径9.5cm。外面腰部の沈線上に線彫の細い単弁の蓮弁文を施す。胎土は黄灰色で緻密。釉は灰オリーブで薄く全面に施す。158・159は龍泉窯系の小鉢。159は八角小鉢で口径11.3cm。底部は基筋底気味の低い高台を削り出す。胎土は灰白色で緻密。釉は明オリーブ灰で全面に施釉し、高台内を蛇の目にかき取ると思われる。細かな貫入が入る。160は八輪花の小鉢で外面口縁下に突帯を1条巡らす。口径12.6cm。胎土は白色で緻密。釉は青味を帯びた緑灰色で厚くかける。二次火熱を受ける。161は美濃瀬戸系の灰釉瓶子。肩部下に撇描の不明瞭な沈線が2段施される。内面は横方向の指頭圧と指ナデが見られる。胎土は灰白色で粗い。釉は全面に施し肩部は二重にかかる。淡緑色。162～166は土師器皿・坏で、162は口径12cm。皿は口径7.5～8cmと8.3～8.4cmのものに二分される。全て右回転の糸切りで165に板圧痕が残る。167～172は白磁。167・168は口禿の碗でそれぞれ口径15.9・15.8cmを測る。167は体部が浅く器高6.3、168は深く7.2cmを測る。胎土は灰白色で緻密。黒色微粒を含む。釉は灰色で167は高台脇までかかり水裂が入る。168は高

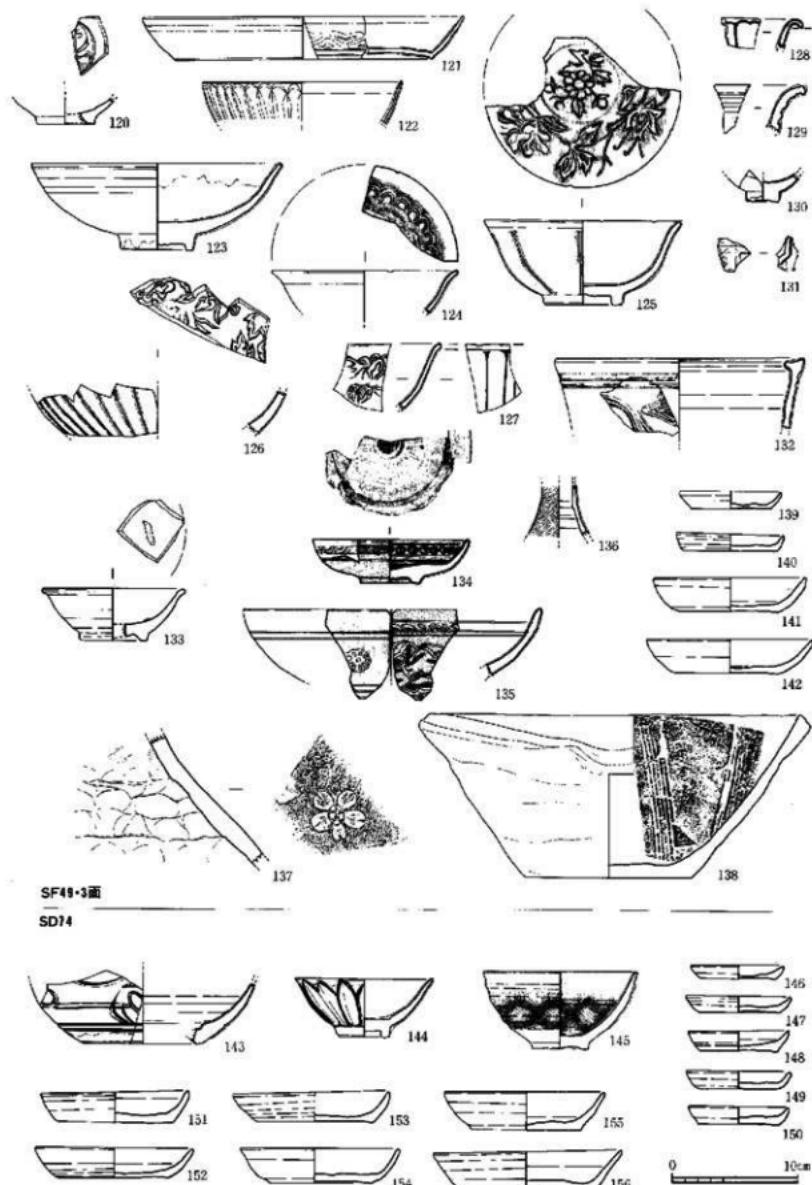


Fig. 8 SF49 3面・SD74出土陶磁・土器(1/4)

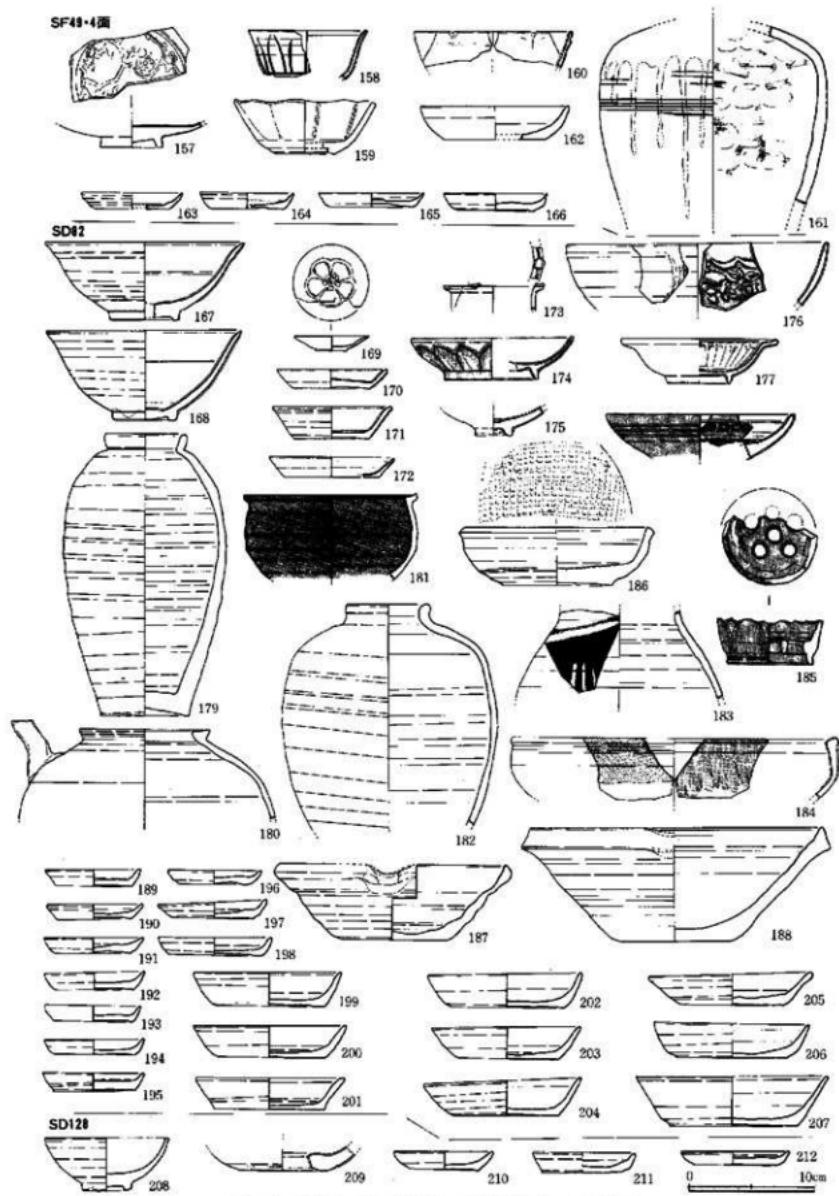


Fig. 9 SF49 4面・SD82・128出土陶磁・土器(1/4)

台際までかかる。ともに見込み盛り上がる。169は見込み陽刻の五弁花を印花する小壺で口径6cmでへラ切のベタ高台。胎土は灰白で精良。釉は明オリーブ灰で外底以外にかける。170~172は口禿の皿。170は口径8.8cm器高1.5cmを測る。胎土は灰白で緻密。黒色微粒を含む。釉は灰白色で外底はふき取る。露胎部は明黄褐色を呈す。口唇に炭化物が広範囲に固着する。灯明皿として用いられている。171も同様で、11径9.6器高5.9cm。口唇が若干外反する。胎土は灰白色で緻密。黒色微粒を含む。釉は明オリーブ灰で外底をふき取る。口唇の2ヶ所に灯明の芯跡が残る。172は口径10器高1.6cmで胎土は灰白で緻密。釉は黄味を帯びた白色で細かな貫入が入る。外面体部下半をかき取り以下は露胎。173は青白磁の香炉で口径8cm。鋸状に屈曲する口縁の上面に圓線を1条彫り込みその上に小さな装飾を貼付する。上方は欠失。胎土は明オリーブ灰で緻密。釉は明綠灰。174~177は龍泉窯系の青磁。174は高台付皿。口径12.8器高3.3cm。外面体部に複弁の鏽入蓮弁を施す。見込みに圓線がある。胎土は灰色で緻密。黒色微粒を含む。釉は緑灰色で全面に厚く施釉後疊付をかき取る。175は高台の小さな碗で底径3.1cm。見込みの茶溜りがくぼみ、高台内は兜巾状に削る。胎土は灰白で緻密。黒色微粒を含む。釉はオリーブ灰で水裂が入る。全面に厚くかけ疊付をかき取る。176は碗で口径10.5cm。内面に陽刻の牡丹文を印花する。外面には線形で簡略な蓮弁を描く。胎土は灰白で緻密。釉はオリーブ灰で厚く、水裂が入る。177は鈎口縁の高台付皿で、口径12.5器高3.5cm。体部内面に陰刻の細かな蓮弁を施し、見込みに圓線が巡る。胎土は灰色で緻密。黒色微粒を含む。釉は灰オリーブで水裂が入る。全面に板めて厚く施釉後疊付をかき取る。178は粉青象嵌の皿で口径15cm。内面に菊花文等を施し、外面に圓線が3条巡る。胎土は灰色で緻密。179~185は陶器。179はB群の長瓶で器高22.3cm。胎土は黄灰色で粗く2~3mmの黒色砂を多く含む。釉は黄灰色で外底以外施釉する。180はC群の水注で口径10.4cm。破片のため取手の有無は不明。胎土は灰オリーブで緻密。白色細砂を多く含む。釉は褐色で全面施釉し口縁上端に目痕が残る。181は鉢で口径13.9cm。胎土は黒色で緻密。釉は緑がかった黒釉で全面に薄く施釉する。182は小口瓶で口径6.5cm。胎土は灰黄褐色で精良。細かな茶色砂を多く含む。釉は外面はオリーブ褐内面は黄褐色を呈する。183は壺の肩部で胎土は灰白で緻密。黒・白色細砂を含む。釉は内面は灰黄色外面は灰オリーブ釉に黒褐色を流しがけする。184はA群の盤で口径26cm。胎土は灰色で2~3mmの砂粒を多く含む。釉は鮮緑色の透明釉を内外面の上半にかけ、内面は以下に黃金色の不透明釉がかかる。口縁端で一部釉がはがれている。185は蓮華形の綠釉香炉の蓋と思われ、底面に径1.3cm程の穿孔が5ヶ所ある。底径6.8cm。胎土は浅黄褐色で緻密で軟質。釉は鮮黄緑~緑色で全面に施釉し内面に目跡が残る。186は美濃瀬戸系の灰釉卸皿。口径15.5cm。胎土は黄褐色で粗目。釉は明オリーブ灰で全面にまだらにかかり、外面腰あたりに焼付跡が、見込みに4ヶ所砂目が残る。外底は右回転の糸切り。187は瓦質の捏鉢。口径18.4cm。胎土は2~3mmの砂粒を多く含み内面は灰黄外面はオリーブ黒色を呈する。焼成はゆる日。188は東播系の捏鉢で口径23.2cm。胎土は黄灰色で緻密。2~3mmの砂粒を含む。口縁外面は黒色。外底は糸切り。189~207は土師器皿・壺で皿は口径6.6~9器高1~1.5cm壺は口径10.8~16器高2~3cmを測る。全て糸切りで195・197・200・201・204・205に板压痕がある。208・209は龍泉窯系の青磁で208は小碗。口径10cm。胎土は灰白で緻密。釉は灰オリーブで高台外面まで厚くかけ、ビンホールが目立つ。209は双層碗か大型の香炉の底部で径6.5cm。穿孔され外底脇に圓線を1条施す。胎土は灰白で緻密。黒色微粒を含む。釉は明緑色で全面に厚くかけ疊付をかき取る。210~212は土師器皿で径8~8.7器高1.1~1.6cmを測る。全て糸切りで板压痕を有する。

6) SF49・5面 SD109・135-VI期 (Fig.10) 213~215は白磁。213は枢府系の腰折高台付皿で直径6cm。見込囲線内に陰刻の花文を印花で施すが釉調のため不明瞭。胎土は灰白で緻密。釉は明オリーブ灰で半透明。全面に施釉し外底はふき取る。214は口禿の皿で口径9.2cm。胎土は灰白色で精良。釉は灰白色で外底部脇まで施釉する。215は長瓶の頸部片で横方向の取手が貼付されていた様だが欠落している。胎土は淡黄色で緻密。釉は灰白で外面に施釉し細かな貫入が入る。216は青白磁の皿の底部で径6cm。見込に櫛描と片切形で文様を描く。胎土は灰白色で緻密。釉は青灰白色の透明釉で水裂に入る。疊付まで施釉し、ここをかき取る。217・218は龍泉窯系の青磁で、217は蓋。つまみで径5.9cmを測る。体部外面に二条の圓線が巡り以下、鏽入の複式蓮弁を施す。胎土は灰白で緻密。釉はオリーブ灰で全面に施す。貫入が入る。218は小碗の底部で径4.2cm。胎土は灰白で緻密だが気泡がふくらみ見込が盛り上がっている。釉はオリーブ黄色で水裂が入る。高台外面まで施釉し、見込に焼付がある。219は陶器の整口壺で口径10.1cm。縦形の耳の破片が有り四耳壺になると思われる。胎土は暗灰色で緻密。白や茶の砂粒を含む。釉は褐色の透明釉で全面に薄くかかる。底部は雑な造作で気泡がはじけ割れている。220は瓦器壺で口径15.1cm。内外ともに横方向の粗い研磨を施す。口縁内側を沈線状にくぼませる。胎土は灰~灰白色で精良。体部上位は内外とも暗灰色を呈する。221は土師器壺で口径12.6cm器高2.8cm。底部中央に径2mmの焼成後の穿孔がある。外底は糸切り。222~232は白磁。222は皿で高台径8.4cm。内面に圓線と櫛描・片切形で文様を施す。胎土は灰白色の細かな落彫状で軟質の風がある。釉は灰白で水裂が入る。高台外面までかけられる。223~230は口禿の皿・壺で223~228は口径8.5~10.7cm器高1.4~2.4cmを測る。胎土は灰白で精良、黒色微粒を多く含む。釉は灰白~明オリーブ灰色で半透明。厚く全面に施釉し水裂が入る。ビンホールが目立つ。外底はふき取る。224~227は口唇に一ヶ所芯跡で炭化物が固着しており灯明皿に用いられている。229は口径10.5cm器高3.3cm胎土・釉は皿と同様。230は口径10.8cm器高3.2cm。口縁が若干外反する。胎土は橙色で緻密。釉は灰白色で外面体部上半までかけ二次火熱のため沸騰している。231は花盆で盤口の口縁下端に波状裝飾を施す。胎土は灰色で緻密。釉は灰白で半濁する。232は基筈底の鉢で外面に縦線を刻む。胎土は灰白で若干粗目。釉は青味を帯びた灰白で外底脇までかける。233~234は口禿の青白磁小碗で233は口径10.5cmを測る。外面に線影の、内面に印花の複式蓮弁を施す。胎土は灰白で精良。釉は淡青色。234は内面に印花の雷文と蓮弁を施す。胎土は白色で緻密。釉は明オリーブ灰。235~240は龍泉窯系の青磁。235~237・239は碗で、235は見込囲線内に陰刻の牡丹文を印花し外面体部に鏽入蓮弁を施す。胎土は灰白でやや粗く釉は明緑灰色。236・237は見込囲線内に陽刻の文字様の文様を印花し外面中位から下位以下を削り片切形の蓮弁を施している。外面のこれらに削られた部分以外は水分の関係か化粧土を施しているか表面が白濁している。胎土は灰色で緻密だが1mm前後の砂粒を少々含む。釉は灰オリーブで薄く高台外面までかける。238は高台付皿で体部に鏽入の複式蓮弁を施す。口径13cm。胎土は灰白で緻密。黒色微粒を多く含む。釉は緑灰色で全面に施釉し骨付はかき取る。239は小さな高台の碗で外面に細い鏽入蓮弁を施す。胎土は灰白で精良。釉は黄味を帯びた緑灰色で水裂が入る。全面に施釉し同じく疊付はかき取る。茶留りがくぼむ。240は口径10.1cmの小碗で胎土は灰色で精良。釉はオリーブ灰で疊付の中程まで厚く施釉する。241は越州窯系の碗。胎土は灰色で緻密だが2~3mmの砂粒を多く含む。釉は灰オリーブの半濁で全面に厚く施釉するが高台に釉切れが数ヶ所見られる。見込と疊付に目跡が残り、特に疊付は焼付等で荒れている。242は陶器の直口壺で口径6.5cm。肩部に縦方向の取手が残っており四耳壺になると思われる。胎土は灰白色で緻密、黒色細砂を多く含む。釉は茶~黒褐色の不透明釉で口縁内面までかけ口唇はかき取る。243は柿葉型の瓦器皿で見込に研磨による菊花文を描く。胎土は灰白で精良。内外面は暗灰色を呈する。244は土師質の土鍋で口径46cm器高18cmを測る。胎土は黄橙色で1~2mmの砂

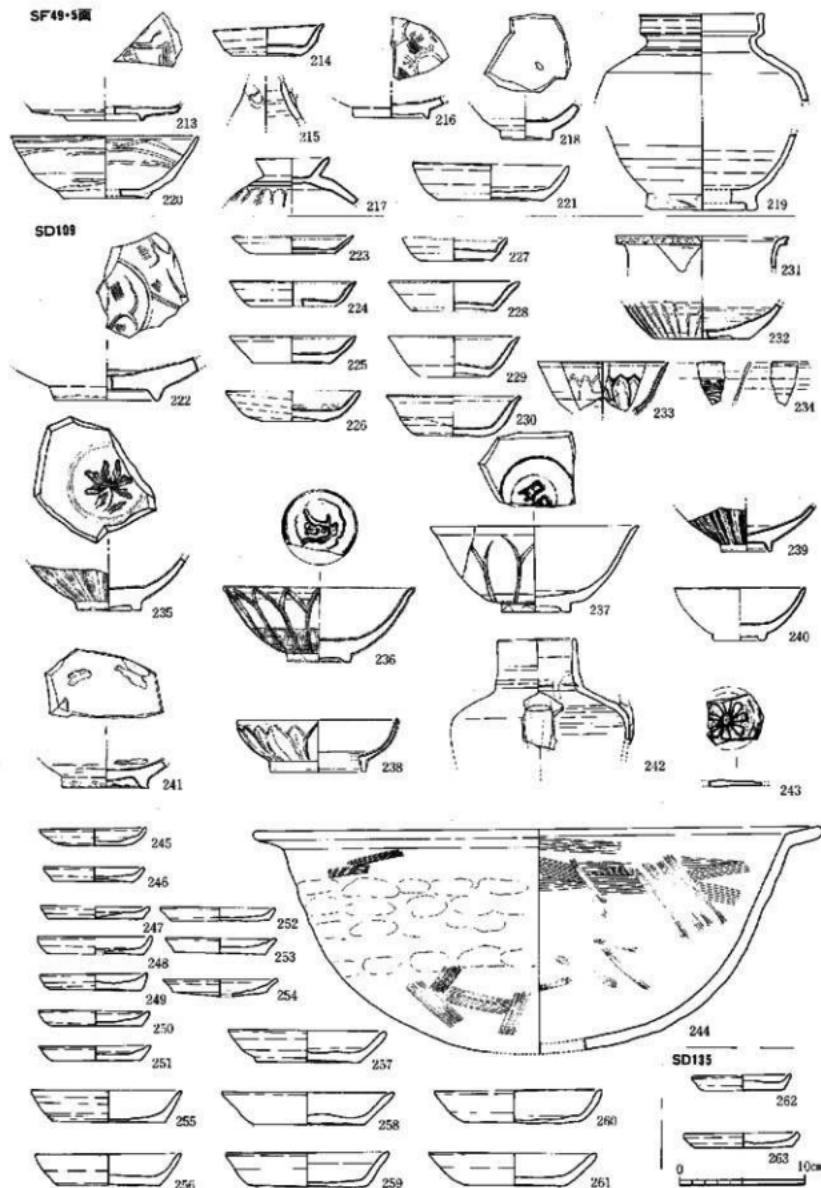


Fig.10 SF49 5面・SD109・135出七陶磁・土器(1/4)

粒を多量に含む。外面に厚く煤が付着する。245～261は土師器皿・坏で、皿は口径8.5～9.4器高1.0～1.4cmを測る。坏は口径11.8～13.7器高2.4～2.9cmを測る。245と254が笠切で以外は糸切り。248・249・251・255・257・258以外は板压痕が残る。

7) 5面下 SD125・SK102他-VII期 (Fig.11) 264～266は包含層3層出土。264・265は白磁で264は口径10cmの小碗。外面に片切の斜線文を施す。胎土は白色で緻密。釉は灰白で薄く高台脇～高台外面までかかる。265は口径12cmの輪花皿。成型形で内面に突帯で、外面に凹線で蓮弁を表わしている。胎土は灰白で緻密。釉は灰白で薄く細かな貫入が入る。外底は露胎。266は青白磁の香炉。口径7cmで端部を内面に折り返す。外面部を四線状に粗く削り、龍の立体像を頭部を口唇と並行させ外面に貼付する。右側は此の蓋と思われる蓮弁状の凹線の上位に歯脚が残っており、同様に龍をのせたものと思われる。煙出の孔は径6～7mmで16mm間隔で穿く。胎土は灰白で緻密。釉は淡青灰色で体部の折り返し以下と蓋の内面は露胎。267～285はSD106出土。267～269は白磁。267は壺蓋で口径6cm。胎土は白色でやや粗目。黒色微粒を少量含む。釉は淡灰オリーブで細かな貫入が入る。外面は露胎で丁寧なナデが施される。268～270は口禿の坏。口径は10～11cm。胎土は白～灰白色でやや粗目。黒色微粒を少量含む。釉は灰白色で半渦、厚く外面にビンホールが目立つ。268の外底はふき取り。271～275は龍泉窯系の青磁。271は小碗で口径10cm。胎土は淡灰色で緻密。黒色微粒を少量含む。釉は淡灰オリーブで薄く疊付までかかる。272は単式錦蓮弁の小碗で口径12cm。胎土は灰白色で緻密。釉は淡青灰色で全面に厚くかけ疊付をかき取る。273も細目の単式錦蓮弁の碗で口縁下に沈線を一条巡らす。口径17cm。胎土は淡灰色で緻密。細かな気泡が若干ある。釉は淡青灰色で厚く全面にかける。274は小鉢で口径13cm。体外面に単式錦蓮弁を施し見込には双魚文が貼付される。胎土は淡灰色で緻密。黒色微粒を若干含む。釉はオリーブ灰で細かな貫入が入る。全面に厚くかけ疊付をかき取る。275は盤で底径10cm。胎土は淡灰～淡黄褐色でやや粗目。細かな気泡が少々入る。釉は淡黄オリーブで細かな貫入が入る。全面に厚くかけ疊付をかき取る。276～285は土師器皿・坏で皿は口径7.6～8.2器高1.0～1.6cmを測る。坏は口径11.5～12.6器高2.2～3cmを測る。全て回転糸切り。276・284・285に板压痕がある。286～298はSK102出土。286～288は口禿白磁。286は碗で口径17.6cm。胎土は灰白色でやや粗目、黒色微粒を少々含む。釉は淡乳灰色で薄くかかる。287は皿で口径10cm。288は坏で口径10cm。ともに胎土は灰白色でやや粗目。黒色微粒を少量含む。釉は乳灰色で半渦。厚くかけ外底はふき取る。289～291は龍泉窯系青磁。289は壺の蓋で口径8.4cm。胎土は緻密で灰白色。釉は明緑灰色で水裂が入る。全面に厚くかけ口唇をかき取る。290・291は碗で290は体外面に細目の錦蓮弁文を施し、見込圓線内に陰刻のバラメントを印花する。胎土は灰白で緻密。釉はオリーブ灰で高台外面までかかる。291は体外面に複弁錦蓮弁文を施し見込圓線内に牡丹文を陰刻で印花する。胎土は灰白で緻密。釉はオリーブ灰で高台外面までかかる。292～298は土師器皿・坏で、皿は口径7～9.6器高1～1.3cmを測る。坏は口径11.2～22.5器高2.3～2.6cmを測る。全て糸切りで292・296に板压痕がある。299～306はSK113出土。299は口禿白磁の皿で口径9cm。胎土は灰白色で緻密。黒色微粒を若干含む。釉は淡乳灰色で厚くかけ外底はふき取る。300・301は龍泉窯系の青磁。300は坏で口径14cm。胎土は淡橙色でやや粗目。釉は淡橙緑色で細かな貫入が入り厚くかかる。301は銅口縁の小鉢で体内面に陰刻の蓮弁文を施す。胎土は淡灰色で精良。釉は淡灰オリーブで細かな気泡が入る。302は備前系の土師器碗で口径10.3cm。口縁外面に板ナデが施され体部は不定方向の指ナデが施される。内面は指压痕、板ナデがなされ平滑に仕上げられる。胎土は精良で灰黃色を呈する。303～306は在地の土師器坏・皿で、坏は口径11.8～12.2器高2.4～2.5cmを測る。皿は口径7.9～8.6器高1.2～1.4cmを測る。全て糸切りで板压痕が残る。307～324はSK125出土。307は口禿白磁の坏。口径11.6cm。胎土は灰白色でやや粗く黒色微粒を含む。釉は明緑灰色で半渦。厚

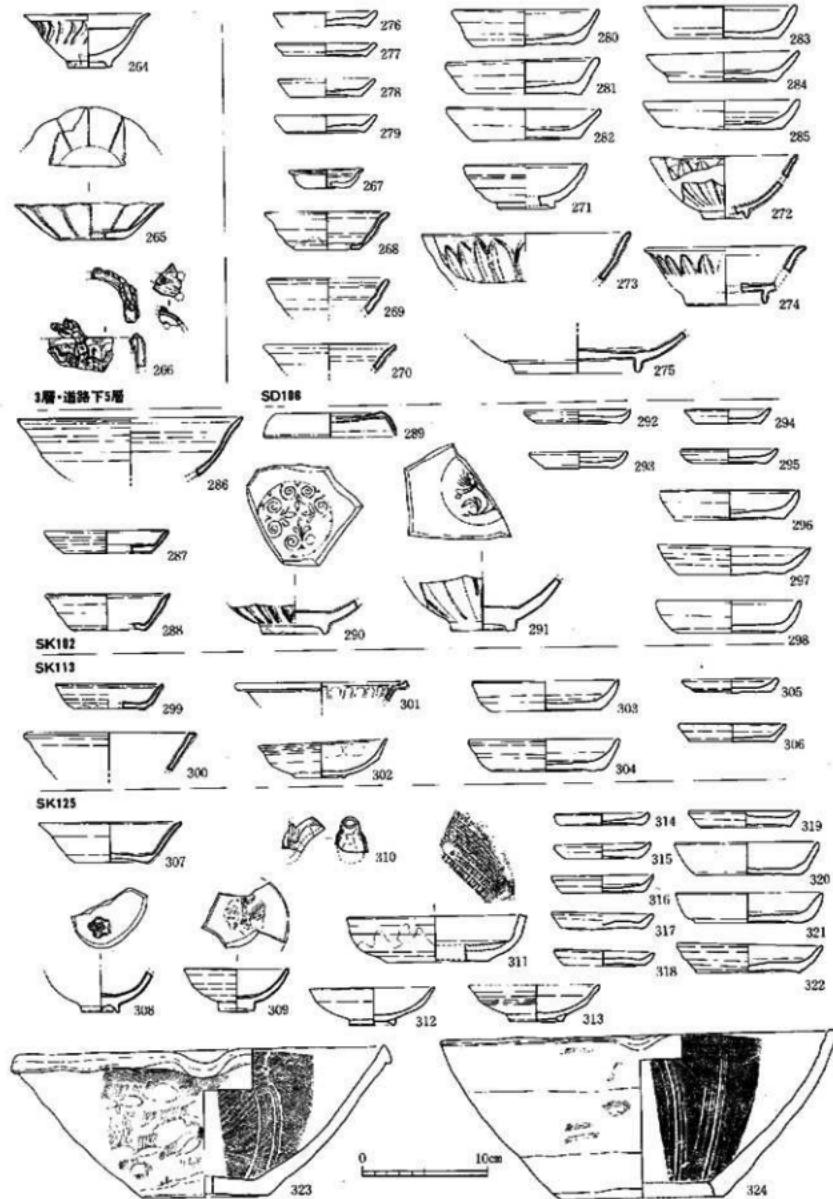


Fig.11 5面下・SD125出土陶磁・土器(1/4)

くかけ外面にピンホールが目立つ。外底はふき取り。308~310は龍泉窯系の青磁。308は小碗で高台径3cm。見込に五弁花の貼花を施す。胎土は灰白で緻密。釉は明緑灰色で大きな貫入が入る。外底まで厚くかける。309は高台の小碗で口径8.4cm。胎土は淡灰色で緻密。釉は灰オリーブで厚く、見込で釉切れを起こしている。高台内は露胎。310は小型の水注の注口部。胎土は灰白色で緻密。釉は明緑灰色で厚くかかり大きな氷裂が入る。311は美濃瀬戸系の灰釉卸皿で口径14.5cm。外底は右回転の糸切り。胎土は灰白で2~7mm程の白色砂を含む。釉は青味を帯びた灰白で体外面の中位まで斑らにかかる。312・313は備前系の土師器碗で、312は口径10.1器高3cm、313は口径10.6器高2.9cm。ともに外面は回転ナデ内面は平滑に仕上げられている。胎土は精良で灰黄色を呈する。314~322は在地の土師器皿・坏で、皿は口径7.6~8.8器高0.9~1.3cmを測る。环は口径11.7~11.8器高2.2~2.6cmを測る。314・315・318に板压痕があり全て糸切り。323・324は瓦質の擂鉢。323は口径30.2器高11.8cm。口唇は横板ナデ後横ナデ。体外面は指圧後縫ハケ、内面は横ハケ後4本単位の擂目を入れる。口縁部はナデる。胎土は2~3mmの白色砂を含み、断面芯部は黒灰色・外側は黄灰色。器表は口唇から内面は黒灰色、外面は淡灰色を呈する。324は口径34器高13cmを測る。体外面は細かなハケ調整後、回転ナデで仕上げる。内面は回転ナデで5本単位の擂目を入れる。胎土は灰色で2~5mmの白色砂を多く含む。

8) 5面下・SD119他-V期 (Fig.12) 325~339はSD119出土。遺構編では6面での検出であるが、時期的には5面下に属する。325は白磁の碗。口径15.1cm。胎土は黄味を帯びた灰白色で釉は灰白で薄く氷裂が入る。外面高台脇から際までかける。326・332は同安窯系青磁。326は碗で口径15.9cm。体内面の口縁下の沈線以下に4本単位と20数本単位の擂齒で花文を描く。外面は細目の擂齒で8ヶ所継線を引き、外底は無造作な削り。胎土は灰白で1~2mmの茶色砂を含む。釉は灰オリーブで氷裂が入り高台脇までかける。332は皿で口径11.2cm。見込に笠と擂描の花文を描く。胎土は灰色で緻密。釉は灰オリーブで氷裂が入る。全面施釉後外底をかき取る。327・329~331は龍泉窯系の青磁。327は高



Ph. 3 SF・SD出土陶磁

台径5.8cm。体内面に片切彫と櫛描で蓮華文を描き外面は同様の蓮弁を施す。胎土は灰白で緻密。釉は灰オリーブで外底は露胎。329は無文の碗で口径16cm。胎土は淡灰色でやや粗目。黒色微粒を少量含む。釉は淡オリーブで厚く、細かな気泡が入る。外底は露胎。330は体外面に複弁の片切彫蓮弁を施す碗。胎土は淡灰色でやや粗目。黒色微粒を若干含む。釉は淡オリーブで白色微粒を少量含み薄くかける。331も同様の碗で、高台径5.7cm。胎土は淡灰褐色でやや粗目。釉は淡オリーブで白色微粒を少量含み水裂が入る。外底は露胎。328は高麗青磁か。高台径6cm。胎土は灰色でやや粗目。釉は灰オリーブで白色細粒を若干含み半済する。全面施釉後唇付を書き取っているが見込と外底に目跡が残る。333は青白磁の袋合子で口径4.9cm。体外面に8本の鉢入蓮弁と浮彫の綺線を施す。胎土は白色で緻密。

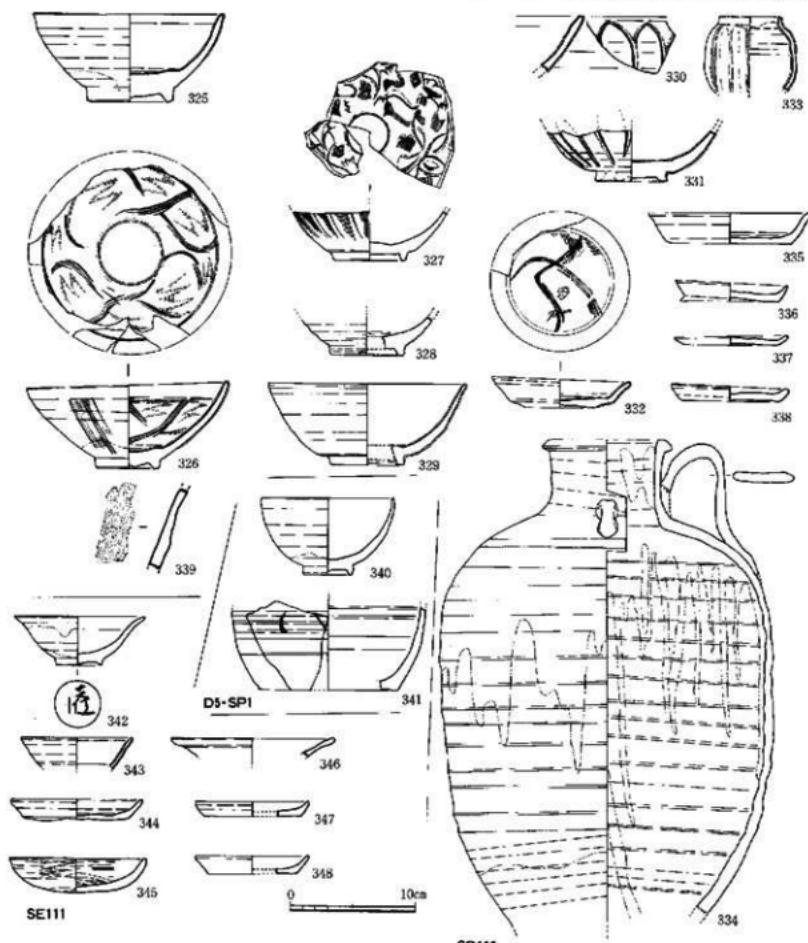


Fig.12 5面下・出土陶磁・土器(1/4)

釉は淡青色で口縁部内面以外に施し口唇はかき取る。334は陶器双耳壺で取手が付く。反転復原のため明確ではないが水注の可能性がある。肩部に2条沈線を巡らす。胎土は灰色、緻密でセメント質。釉は体外面下位まで黒褐釉の上に灰オリーブの不透明釉が二重にかかる。335～339は土師器。335は壺で口径12.9器高24cmを測る。336～338は皿でそれぞれに径8.9・9.2・9.4cm器高1.4・0.6・1.2cmを測る。全て糸切り。339は焼塙壺の小片で外面はナデ、内面には布压痕が残る。胎土は雲母微粒・石英粒を多く含み断面芯部が明青灰外面は灰褐内面はにぶい橙色を呈する。

340・341はD5SP1出土。340は上野高取系の陶器碗。口径10.7cm。胎土は灰褐色で白色砂を多く含む。釉はオリーブ黒色で半透明、高台脇までかかる。見込に4ヶ所目底が残る。341は上絵付の鉄彩の

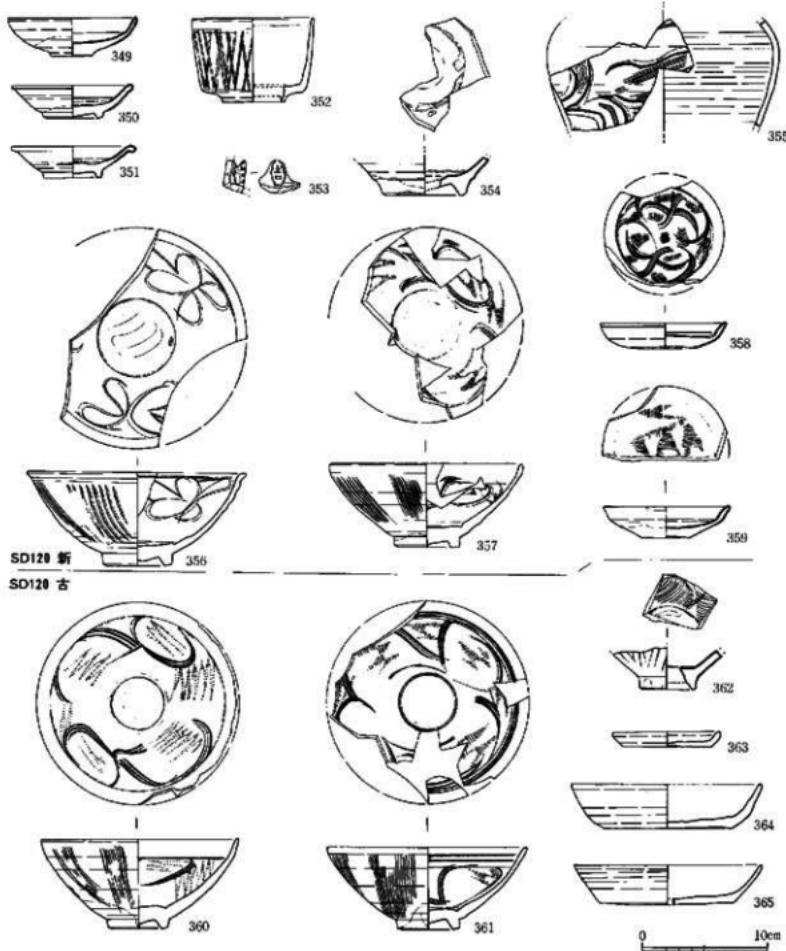


Fig.13 SD120出土陶磁・土器(1/4)

壺で底径11cm。胎土はにぶい黄橙色で緻密。長石釉を施し外面は灰色を呈する。ともに近世の所産で、340かSE22の資料と接合するため遺物取り上げ時に混乱したものと思われる。342～348はSE111出土。342・343は白磁。342は小碗で口径10.2cm。胎土は灰白色で精良。釉は灰白色で高台脇まで厚くかける。高台内に墨書がある。343は口禿坏。口径9cm。胎土は灰白色でやや粗く黑色微粒を少量含む。釉は乳灰色で外底脇と口縁をかき取る。344・346～348は土師器の皿で344は口径10.5cm器高15.5cm347は口径9cm器高1.2cm348は口径9cm器高1.4cmで全て糸切り。344・347は板圧痕がある。346は外來で京都系か。口径13cm。胎土は砂粒を少量含み浅黄橙色を呈する。345は瓦器皿で口径10.8cm。体部は横方向の細かな研磨で内面はハケ調整が残る。内底はシグザグの研磨を施す。

9) 6面 SD120-Ⅳ期 (Fig.13) 349～353は白磁。349は平底皿で口径10.2cm。胎土は灰白で緻密。黒色微粒を含む。釉は灰オリーブで体外面上半までかける。350・351は高台付皿で口径9.7cm。胎土は黄味を帯びた灰白色でやや粗い。釉は灰オリーブで高台脇までかける。見込は蛇ノ目にかき取る。351は口径9.8cm。胎土は灰白色で緻密、黒色微粒を多く含む。釉は明オリーブ灰で体外面上半までかける。見込は蛇ノ目にかき取る。352は香炉で口径9.7cm。口縁沈線下に線刻の斜格子文を施す。胎土は灰白で精良、黒色微粒を含む。釉は灰白で半渦。口縁内面から高台外周までかける。353は壺頭部の装飾で「吉」字を陽刻で印刻する。胎土は灰白で釉は灰オリーブ。354は高麗の青磁碗か。粗雑な造りの高台で径6.6cm。胎土は灰白で緻密。1～2mmの砂粒を含む。釉はオリーブ灰で薄く高台脇まで施す。見込と豊付に目跡が残る。355は越州窯系の青磁壺。肩部径17.4cm。外面に片切影と櫛歯で花文を描く。胎土は黄灰で緻密。釉はオリーブ黄色で薄く全面に施釉する。356・357・359は同安窯系の青磁。356は碗で口径17.7cm。外面の沈線下に粗い櫛歯の縦線を施し内面も沈線下に片切影の蓮華文を施す。胎土は浅黄橙色緻密、釉はオリーブ黄色で細かい貫入が入る。薄く高台脇まで施す。357は口径15.5cm。体外面上に櫛歯で縦線を刻む。内面は片切影と櫛歯で花文を描く。胎土は灰白で緻密、黒色微粒を含む。釉は灰オリーブで薄く高台脇までかかる。359は平底皿で口径10.1cm。見込に櫛描の文様を描く。胎土は灰白で緻密、釉は灰オリーブで体外面上半まで薄くかける。細かな貫入が入る。358は龍泉窯系の平底皿。口径10cm。外面の口縁下と外底脇に沈線を施し見込に片切影と櫛描で花文を描く。胎土は灰白で緻密、黒色微粒を含む。釉は灰オリーブで大きな氷裂が入る。全面施釉後外底をふきとる。360～365はSD120古期からの出土。360・361は同安窯系の青磁碗。口径15.8～17cm。体外面上に櫛描の縦線を9本内面沈線下に片切影と櫛描で花文を描く。胎土は灰白で緻密、黒色微粒を含む。釉は灰オリーブで薄く高台脇までかける。氷裂が入りビンホールが多い。361は口径16cm。体外面上に細目の櫛描の縦線を19本、内面2条の片切影の凹線下に片切影と櫛描で花文を描く。胎土は灰白で緻密、釉は灰オリーブで薄く高台脇までかける。362は同安龍泉窯系以外の青磁碗で高台径4.5cm。体外面上に片切影の縦線、内面に櫛描文様を描く。胎土は灰色で緻密。釉はオリーブ灰で高台外周までかける。363～365は土師器。363は皿で口径8.6cm器高1.2cm。364・365は坏でそれぞれ口径15cm器高3.5・3.1cm。全て糸切りで板圧痕を残す。

10) 土壙・井戸 (Fig.14～16) 366～372はSE57 (遺構縦図47) 出土。366は龍泉窯系青磁輪花小鉢。体外面上に陽刻の体内面に陰刻の蓮弁文を施す。跨口縁内には輪花の二重沈線を施す。胎土は灰白で緻密。釉はオリーブ灰。367は高麗青磁の碗。胎土は灰黄褐色～赤褐色で1mm前後の砂粒を多く含む。釉は灰オリーブで白く半渦する。高台脇まで施釉し見込に目跡が残る。368は備前の人號で外面上に横板ナデ・指ナデ後鏡文のスタンプを印す。胎土は黄灰で2～3mm大の砂粒を含む。外面は黒褐色。369～372は土師器皿。口径7.1～8.2cm器高0.9～2cm。全て糸切りで371以外板圧痕を有する。373～384はSE75 (遺構縦図49) 出土。373・374は瓦器で楠葉型。373は碗で外面上は横ナデ。内面体部は細かな横研磨、見込

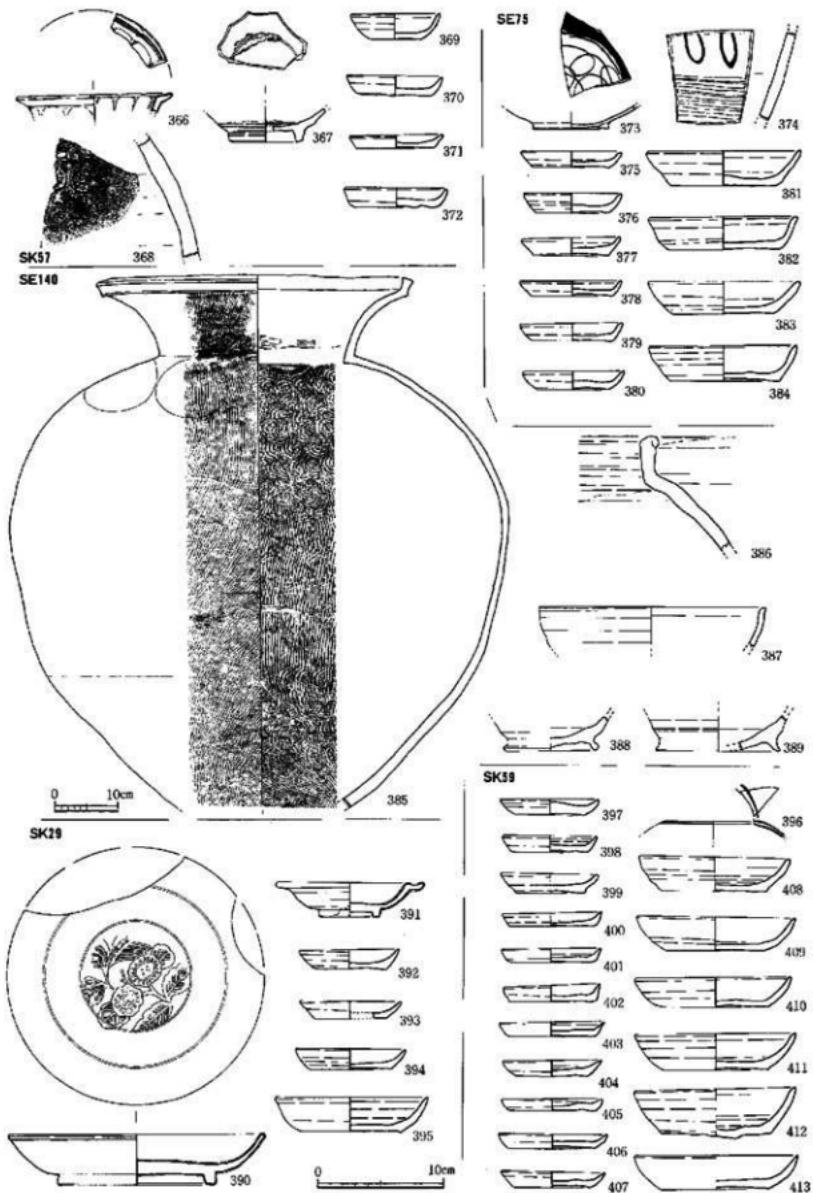


Fig.14 SK・SE出土陶磁・土器 1 (1/4・1/8)

は縦ナデ後螺旋状の暗文を施す。胎土は灰白で精良。器表は暗灰色。374は鉢で外面は不定方向のハケ調整後ゆるい研磨、内面は回転横ナデ後下半に幅広の横研磨、上半にゆるい研磨後蓮弁状の暗文を施す。胎土は黄灰色で細かな砂粒を多く含む。器表は灰色。375~384は土師器皿・壺で皿は口径7.2~8.9cm 器高1.2~1.6cm。壺は口径11.5~12.5cm 器高1.4~2.6cm。全て糸切りで半数弱に板圧痕が残る。385~389はSE140(遺構編図45)出土。385は底を抜き倒置して井側とした須恵器系の大甕で口径50cm 腹径80cm。口縁外面は平行叩後横ナデ、上位に3本単位の波状文を描く。胴部外面は縦位の平行叩で内面上位と下位は同心円当呂底、中位と内底には平行の当具底が残る。胎土は褐灰色で精良。外面の多くと口縁内面は自然釉がかかり黒褐色。肩部に径13cmの窪を3個重ね焼きしており牡丹餅状をなす。386は備前焼の甕で口径は36~38cm程。胎土は3mm程の石英粒を多く含み紫褐色。外面と口縁内は自然釉がかかり暗褐~暗緑灰色。387は黒色土器A類の壺。回転ナデ後口縁内~外面に粗い横研磨を施す。外面は淡黄灰口唇~内面は黒灰色。388~389はB類。388は外面体部は回転ナデ後粗い横研磨、高台内はヘラ削り後回転ナデ、内面は丁寧な横研磨。胎土は精良で赤褐色。器表は脂質のある黒色。389は外面体部は回転ナデ。高台内はヘラ削り後回転ナデ。内面は丁寧な横研磨。胎土は精良で淡灰褐色、器表は黒灰色。390~395はSK29(遺構編図55)出土。390~391は龍泉窯系の青磁。390は盤で口径20.3cm、見込に2条の團線を巡らし陽刻で菊花文を印花する。胎土は灰白で若干粗い。釉は灰オリーブで厚く全面施釉後高台内を蛇ノ目にかき取る。391は銅口縁の高台付皿で口径11.8cm。胎土は灰白で緻密。釉は灰オリーブで分厚く高台外面までかける。見込は円形にかき取る。392~395は土師器皿・壺で皿は口径7.9~8.7cm 器高1.4~1.8cm。壺は口径12.1cm 器高2.7cm。全て糸切りで393~395に板圧痕が残る。396~413はSK59(遺構編図57)出土。396は龍泉窯系の無頭壺で口径6cm。口縁外面に沈線が1条巡る。胎土は灰白で緻密。釉は明緑灰色で分厚くかかる。397~413は土師器皿・壺で皿は口径7.1~8.6cm 器高0.9~1.5cm。405に焼成前の穿孔がある。壺は口径12~12.9cm 器高2.4~3.7cm。全て糸切りで半数に板圧痕がある。414~424は白磁天人像を検出したSK58(IHSK37)上層出土品(Fig.15)。414は白磁天人像で帽7cm 残存高7.5cm。盤座に腰かけ右足首を左膝上にのせる。右腕上に剥離痕があり右肘の跡とすると半跏思惟像である。磐座と幅2cm程の像の体部は表裏二枚の型造りで中は中空、体部に粘土支柱があり、背面に一孔がある。像は円筒形の本体に衣・足と部品を貼付して全体に割と雑な造作。胎土は灰白で砂粒を多く含み、磐座の上半に灰色の透明釉をかけ像には青白色の透明難をかける。磐座の露胎部の一部に赤色頬料が残る。415~416は口禿白磁の壺。415は口径11cm。胎土は白色で透明感がある。釉は灰白色で厚目。416は口径11cm。胎土は灰白でやや粗く釉は乳白色で厚目。417は青白磁の碗で内面に線描の花文を描く。胎土は白色で精良、釉は淡青灰色で薄く全面にかけ疊付をかき取る。420は白磁碗で口径17cm。口縁外面に凹線を施し直下に沈線を1条巡らす。内面には同様の凹線を巡らす。胎土は暗灰~黄白色でやや粗目。釉は乳白色で半溝し外面にピンホールが多く入る。421~424は土師器壺・皿で、421は口径13.5cm 器高2.9cm。422~424は皿で口径8.2~8.5cm 器高1.3~1.5cm。全て糸切りで422は板圧痕を残す。425~429はSK89出土。425は白磁の小皿で見込に陽刻で花鳥文を印花する。底部は基盤底。胎土は白色で透明感があり釉は乳白色で全面に施す。426は無釉盤口口注で器高15.8cm。胎土はにほい赤褐色で白色砂を多く含む。外底に4~5mmの小穴が接着。427~428は瓦器で427は口径9.8cm。体外面は回転ナデ後横研磨、底部は鋸切後板ナデ。内面体部は横研磨、見込はジグザグに細かく研磨する。胎土は灰色で緻密。器表は暗灰~黒色。428は碗で口径16.8cm。体外面は回転ナデ後上半部は粗い回転研磨で下半は指圧痕が残る。内面は口縁

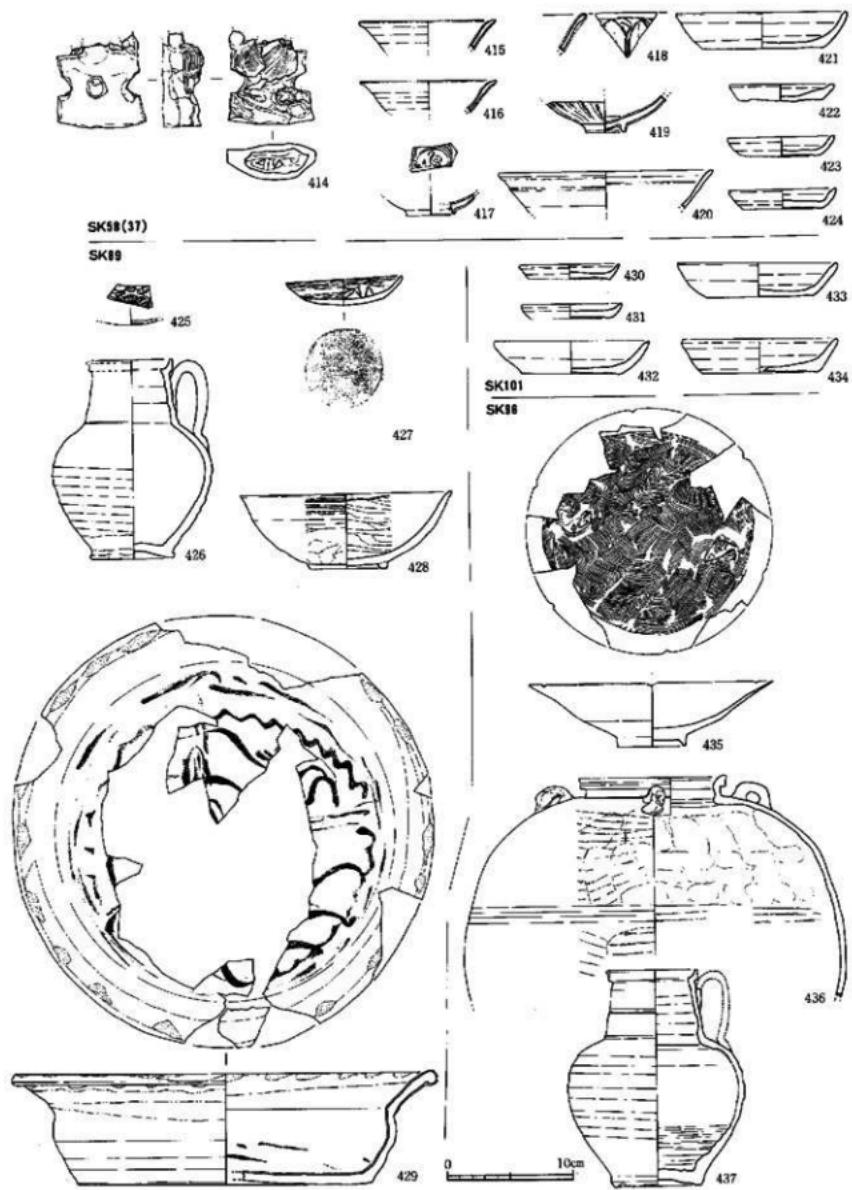


Fig.15 SK・SE出土陶磁・土器 2 (1/4)

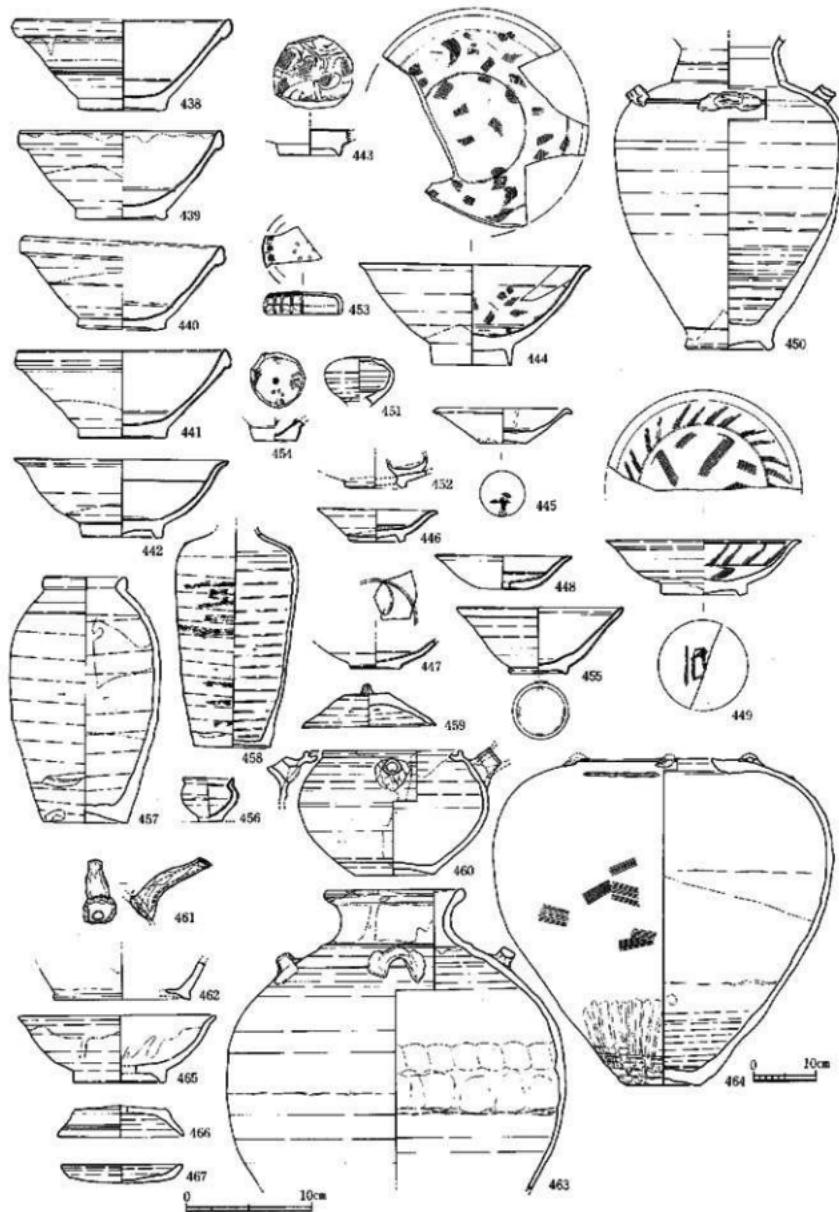


Fig.16 SK85出土陶磁・土器(1/4・1/8)

までシグザグ状の一定方向の幅広の研磨を施す。胎土は灰白で緻密。器表は灰白色で口縁部のみ黒色。429は磁灶窯系の陶器の鋸口縁の盤で口径34cm。胎土は褐灰色で1~2mmの砂粒を多く含む。内面から口縁外周まで淡黄灰色の化粧土を施し内底に鉄絵を施す。釉は灰オーリーの半溝で口縁外周まで薄くかけ口唇上面と口縁外面上位をふき取りこの部位に目跡が多数残る。430~434はV期の路面中央に掘削された土壤SK101出土。土師器皿・壺で皿はそれぞれ口径7.9~8.0器高1.2~1.1cmを測る。432~434はそれぞれ口径12.4~12.3~12.7器高2.7~2.6~2.7cmを測る。全て糸切りで430~433に板压痕がある。435~437はSK89を切るSK96出土。435は青白磁碗の優品で極めて薄いつくりの六輪花瓶。口径19.4cm。内面に描模と片切彫で水波双魚文を描く。胎土は灰白で緻密。釉は青灰白色で水裂が入る。高台外周まで薄く施す。436は陶器四耳壺で口径11.7cm。外面は目の粗い平行叩後横ナデ、胴上位に凹線を2条施す。内面は無文の当具痕が残る横ナデ。胎土は灰褐色で細砂を多く含む。釉ははにい褐色で外周のみ施す。437は426と同様の水注で口径7.2器高17cm。外底は焼き付き荒れる。Fig.16はSK85(遺構編図54)出土。438~442・444~452は白磁。438~441はIV~2類の碗で口径16.3~18.4器高7.0~7.4cm。胎土は灰白~橙色で緻密、釉は灰白~乳灰色を呈し体外面上半までかける。438~439~441は二次火熱を受け釉が沸騰、胎土が赤変する。442はV類の碗で口径16.9cm。胎土は灰白で細砂を含む。釉は灰白で体外面上半までかかり見込は蛇ノ目にかき取る。444はVI類の碗で口径18cm。体内部沈線下に描模で短い曲線を描く。胎土は灰白でやや粗く釉は淡黄色を呈し高台脇までかける。445はIV類の平底皿で口径11.2cm。内面に白堆線を施す。胎土は白色で緻密、黑色細砂を含む。釉は灰白で水裂が入る。外底際までかける。外底に墨書がある。446は高台付皿II類。口径9.6cm。胎土は灰白で精良。釉は明オーリー灰で高台脇までかける。見込は蛇ノ目にかき取る。447は平底皿O類で見込に線描文を施す。胎土は灰白で緻密。釉は黄味を帯びた灰白で外底際までかかり細かい貫入が入る。448は平底皿II類で口径10.8cm。胎土は灰白で粗目。釉は緑がかった灰白で細かな貫入が入る。全面に施釉後外底をかき取る。449は高台付皿III類で口径15.8cm。内面に沈線をはさんで2段の描模縦線を施す。胎土は灰白で黒色微粒を多く含む。釉は灰白で高台脇までかかる。高台内に墨書がある。450は四耳壺で口縁を欠く。肩径18.5cm。頸部に2ヶ所と高台脇に1条、肩部に2条の沈線を巡らせる。胎土は灰白で緻密、黒色微粒を多く含む。釉は灰白で内面から高台脇までかかる。451は袋合子で口径4cm。胎土は灰白で黒色細粒を含む。釉は緑がかった灰白で内面から外底脇までかかる。452は子持ち合子で底径5cm。内面に径3.3cmの小壺を4個配していた様である。胎土は灰白で緻密、釉は淡黄色で貫入が入り内面から高台脇までかける。443~453~454は青白磁。443は碗で見込に片切彫と描模で花文を描く。胎土は白色で黒色細砂を多く含む。釉は淡青色で水裂が入る。高台外周までかかる。453は合子の蓋で径6cm。胎土は灰白で緻密、釉は淡青色で口縁部のみ露胎。454は小碗で茶溜りが深くくぼみ高台内は浅くさらう。胎土は白色で黒色細砂を含み釉は淡青色で厚く高台外周までかける。443とともに丸く打ち欠いた瓦平となっている。455は高麗青磁碗で口径13.5cm。胎土は黄味を帯びた淡灰色で2~3mmの砂粒を多く含む。釉は灰オーリーで薄く全面に施し高台内外に目跡が残る。456は青磁子持壺の子壺で口径4.1cm。胎土は灰色で緻密、釉はオーリー灰で体外上半までかかる。外底は接合のための笠刻みが入る。457~460~463~464は陶器で457は長瓶。器高19.5cm。肩部に2条沈線を施す。胎土は淡灰色で1~2mmの茶色砂を多く含む。釉は灰オーリーで透明、全面にかける。458は小口瓶で肩径9.9cm。胎土は黄灰色で砂粒を多く含む。釉は黒褐色不透明で肩部以上にかけ、目跡がある。459は無釉の蓋で口径10.8cm。上面は笠切で方形のつまみを貼付する。胎土は橙色で細砂を少量含む。460は注口付の行平で器高9.8cm。胎土は褐色で黒・茶の細砂を多く含む。釉は黄褐色で内面から注口部にかける。口唇内側に日跡が4ヶ所ある。463は四耳壺で口径11.2cm。口縁下と肩部に1条の沈線を頸部に低い三角突帯を巡ら



Ph. 4 SK・SE出土陶磁

す。胎土は灰色で2mm前後の砂粒を多く含む。釉は暗褐色の透明で内面と外面肩部下にかける。464は無頸四耳壺で器高51cm。外面は目の粗い平行叩で内面は丁寧なナデ。胎土はにぼい橙色で2mm前後の石英粒を多く含む。内面上半から外面に褐灰色の薄い釉をかけ（内面は横刷毛塗り）外面はさらに下位まで淡黄灰の化粧土をかけオリーブ褐の半透明釉をかける。461は黒褐釉の水注の注口で胎土は灰色で緻密。釉は黒褐色で半透明。全面にかける。462は越州窯系青磁の碗。胎土は灰色でやや粗く釉は灰オリーブで不透明。内面と外面上位に施釉。465は灰釉碗で口径15.8cm。胎土は灰白で1mm前後の石英粒を少量含む。釉は灰オリーブ～オリーブ黒で内面から外体部上位までかかる。466は須恵質の蓋。口径10.1cm。天井は覓切後ナデ、体部に沈線2条を施す。胎土は灰白で2～3mmの砂粒を多く含む。467は土師器皿で口径9.6cm。外底は覓切り。板压痕がある。

11) 包含層 (Fig.17) 468～471は1層出土。468はタイ470はベトナム産。468は白地鉄絵の碗で口径16.7cm。胎土は黒灰色で1mm前後の砂粒を多く含む。これに黄灰白色の化粧土をかけ内外に黒褐色の鉄絵を施す。釉は灰白の半湯で薄く全体にかける。細かな貫入が入る。470は白磁皿で胎土は灰白で緻密。釉は灰白で透明、細かな貫入が入る。外底際までかけ見込に小さな目痕が残る。高台内は鉄絵を塗り暗褐色を呈す。469は青白磁香炉の六角脚部。径5cm。胎土は灰白で黒色細砂を多く含む。釉は明緑灰で全面にかける。471は龍泉窯系青磁香炉の口縁。取手に陽刻の唐草文を印花する。胎土は灰色で緻密。釉は明緑灰で全面に厚くかける。472は高麗象嵌青磁の長瓶で口径9cm。胎土は灰色で精良、釉は灰色で内底と、外面疊付以外に施釉。高台内際に砂が培着する。473～502は2層出土。473～477、493は白磁。473は碗で小さな茶漬まりを有する。内面に片切形と描描で文様を施す。胎土は灰白で緻密。釉は灰白で疊付までかかる。474・475は枢府系の腰折の高台壺。474は口径12.4cm。内体部に陰刻

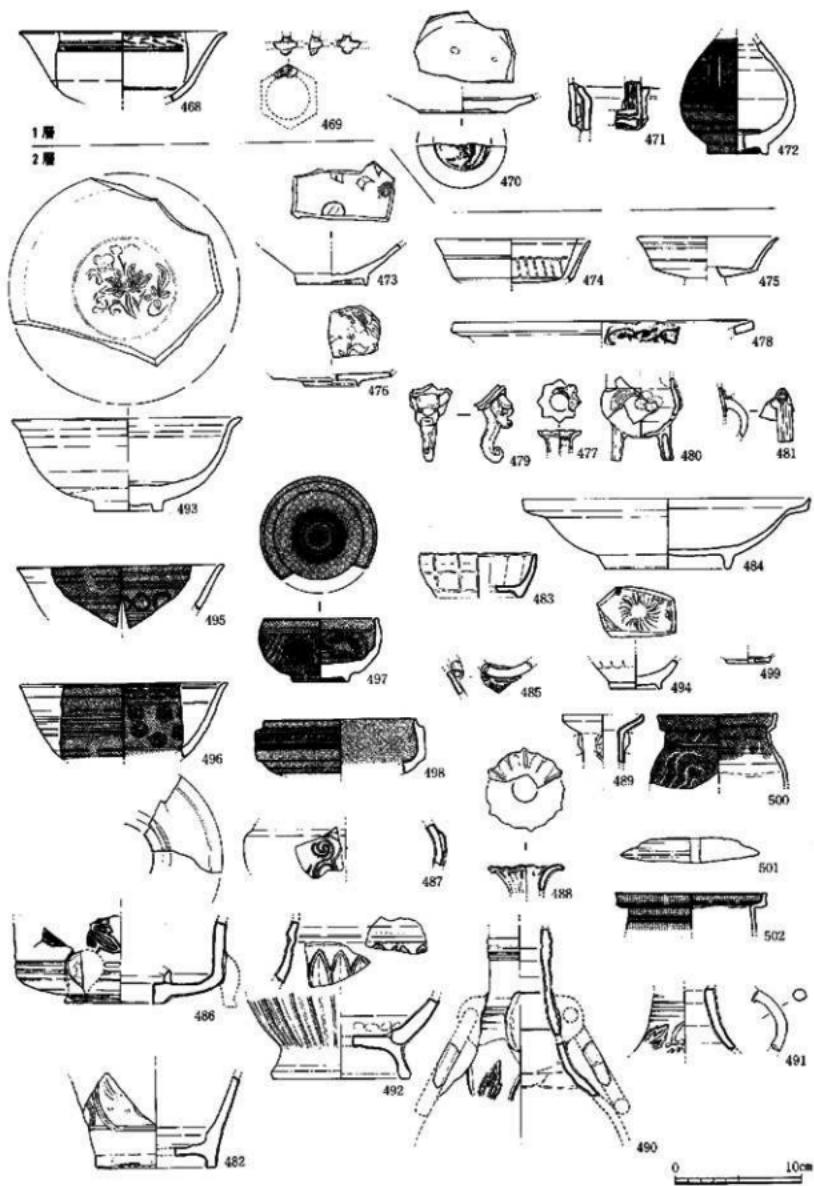
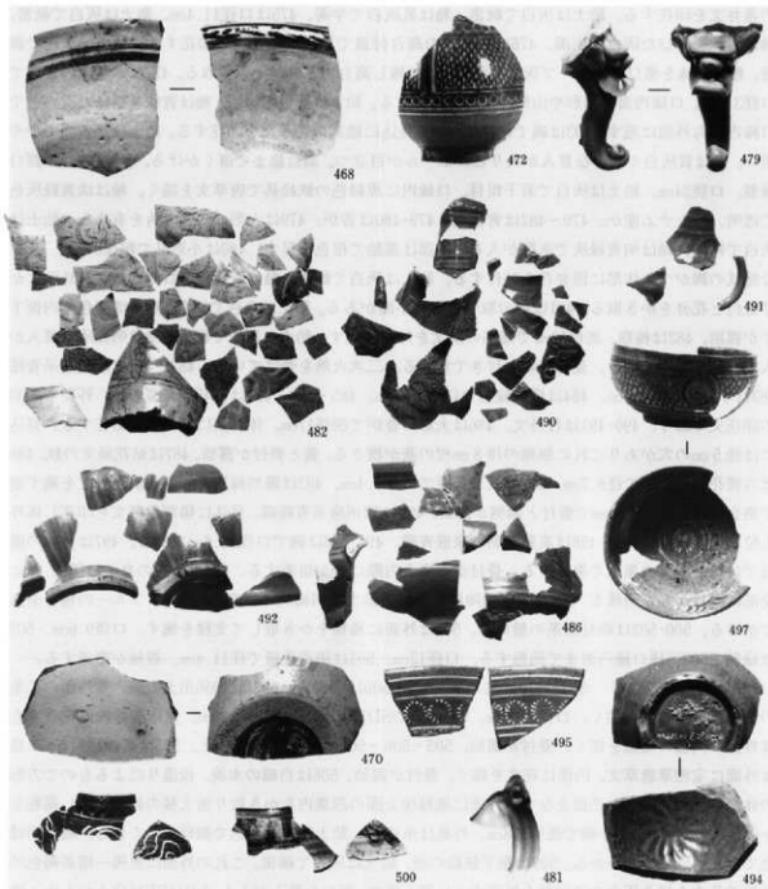


Fig.17 包含層出土陶磁器(1/4)

の蓮弁文を印花する。胎土は灰白で緻密、釉は乳灰白で半濁。475は口徑11.4cm。胎土は灰白で緻密。釉は青味を帯びた灰白で半濁。476は枢府系の高台付皿で見込みに花文を印花する。胎土は灰白色で緻密、釉は青味を帯びたオリーブ灰で半濁。全面に施し高台内と豊付をふき取る。477は八稜花の長瓶で口徑3.5cm。口縁内面に円形や山形の浮文を印花する。胎土は灰白で緻密、釉は青味を帯びた灰白色で口縁内から外面向に施す。493は碗で口徑18.4cm。見込に陰刻の蓮華文を印花する。胎土は淡黄灰でやや粗い。釉は黄灰白で細かな貫入がありビンホールが目立つ。高台脇まで薄くかける。478は鉄絵の飼口縁盤。口径24cm。胎土は灰白で若干粗目。口縁内に黒緑色の鉄絵具で唐草文を描く。釉は淡黄緑灰色で透明。ベトナム産か。479~482は青白磁。479~480は香炉。479は大形の獸脚で角を有する。胎土は灰白で精良、釉は明青緑灰で冰裂が入る。内面は露胎で橙色を呈す。480は小形品で胴径6.4cm。長小な筒状の脚がつき体部に四弁花を貼付する。胎土は灰白で緻密。釉は灰青色で口縁内面から外面向にかけ豊付と花弁をかき取る。481は壺の取手で上に小環がある。胎土は白色で緻密、釉は淡青色で内面下半が露胎。482は梅瓶。底径10cmで権描の淌文を外面に施す。胎土は灰白で緻密、釉は明緑灰で貫入があり体部外面向のみ施す。豊付は焼き付きで荒れる。二次火熱を受けている。483~492は龍泉窯系青磁。483は小鉢で口徑9.4cm。484は飼口縁盤で口徑23.2cm。485~490~491は双耳不游環の瓶。外面を陽刻の印花文で飾り、490~491は牡丹文。486は大形の香炉で胴径17cm。体外面に牡丹文を貼花する。見込には径5cmの穴がありこれに無釉の径8cm程の蓋が覆さる。蓋と豊付が露胎。487は貼花淌文の瓶。488は六稜花瓶の口縁で径6.7cm。489は双耳花瓶で口徑6.4cm。492は陽刻縁取りの低い鍋蓮弁文を施す壺で酒会壺か。高台径11cmで豊付と両側が露胎。494は耀州窯系青磁碗。見込に陽刻蓮華文を印花し体外上位を寬で削る。495~498は高麗李朝の象嵌青磁。495~496は碗で口徑16.6cmを測る。497は小鉢の優品で口徑9cm。白墨土で象嵌する。豊付から高台内際に砂が熔着する。498は合子の身で口徑12.2cm。受部に砂目が8ヶ所残る。499は翡翠釉陶器の小皿で胎土は明褐灰で緻密。コバルトブルーの釉を全面にかける。500~502は磁灶窯系の盤11皿。500は外面に褐釉をかき取して文様を施す。口徑9.6cm。502は綠釉で500同様口縁内面まで施釉する。口徑12cm。501は陶器楽器で径11.4cm。周縁が摩滅する。

12) その他 (Fig.18) 503~510は混入品。503~505は明青花。503はSD56出土の碗。体外面の二条の圓線下に草花文を描く。口徑13.2cm。504は碗でSD109出土。高台径5.4cm。見込圓線内に花鳥文を、体外面に同様の文様を描く。豊付が露胎。505~506~508~509はSD120出土。505は高台径7.4cmの皿。体外面に宝相華唐草文、内面に花文を描く。豊付が露胎。506は白磁の水滴。板造りによるもので方形の体部で上面がゆるい凸面をなす。外面に施釉後上面の四葉内にかき取り雷文様の線刻を施し褐釉をかける。508は綠釉の小碗で底径3.8cm。外底は糸切り。胎土は淡黄灰色で細砂を多く含む。釉は明緑色で薄く外底脇までかかる。509は釉下鉄絵の壺。胎土は灰白で緻密。これの外面に黒褐~暗茶褐色の鉄絵で花文を描き灰白の透明釉を外面のみに薄く施す。細かな貫入が入る。507はSE16出土ベトナム鉄絵碗で、高台径5.2cm。胎土は灰白で粗目。体外面と見込に淡黒緑色の鉄絵で團繪と花文を描く。釉は淡黃白色で半濁。外底は露胎で高台内に鉄絵を塗り暗紫褐色を呈する。見込に小さな日痕が残る。510はSE22出土の古州窯天目碗の高台脇小片。胎土は灰白色でやや粗く落雁状を呈す。釉は不透明の黒釉を高台脇までかけ内面には浅黄色の虹色を帯びた斑文が浮かぶ。511はSK 9出土の龍泉窯系青磁碗。口徑15.4cm。見込圓線内に陰刻の菊花文を印花する。胎土は灰白でやや粗く、釉は明オリーブ灰で高台外面向まで厚くかける。512は青白磁の小鉢でSK 7出土。口徑12cm。体外面の中位に2条高台脇に1条の凹線を巡らし上下に綿四線を施す。この間の口唇内側を斜めに刻み口唇が細かな波状を成す。見込には陰刻の花文を印花する。胎土は白色で細砂を含み釉は淡青灰色で高台脇までかかる。断面に黒墨状の顔料が塗布されており接着剤として使用している。513は調査区南東の壁面から検出。高麗の象嵌青



Ph. 5 包含層出土陶磁

磁碗で高台径5.8cm。体内外面に圓線・蓮弁文等を施す。胎土は灰色で砂粒を含み釉は灰オリーブで外底をふき取る。高台内に丸窓の削りがあり胎土目が残る。514は象嵌の小鉢でSK03出土。口径10.7cm。内面に花鳥文等、外面に雷文・圓線を施す。胎土は灰色で精良、釉は全面にかけ外底をふき取る。515は粉粧沙器の短頸壺でSK17出土。口径9.5cm。胎土は灰色で細砂を多く含む。釉は緑がかった灰色で全体に施す。516はSK59出土の口禿白磁小碗。口径10.4cm。体内面に陽刻の雷文と縁取りの蓮弁文を印花する。胎土は灰白で緻密、釉は明オリーブ灰で冰裂が入る。517は青白磁の口禿小碗でSD120出土。口径10cm。見込に五弁花を陽刻で印花する。胎土は白色で緻密、釉は淡青色で外底が露胎。518は北トレンチ出土の青白磁の壺か水注の取手。外面に陽刻の花文を印花する。519は桜府系の口禿高台壺。見込

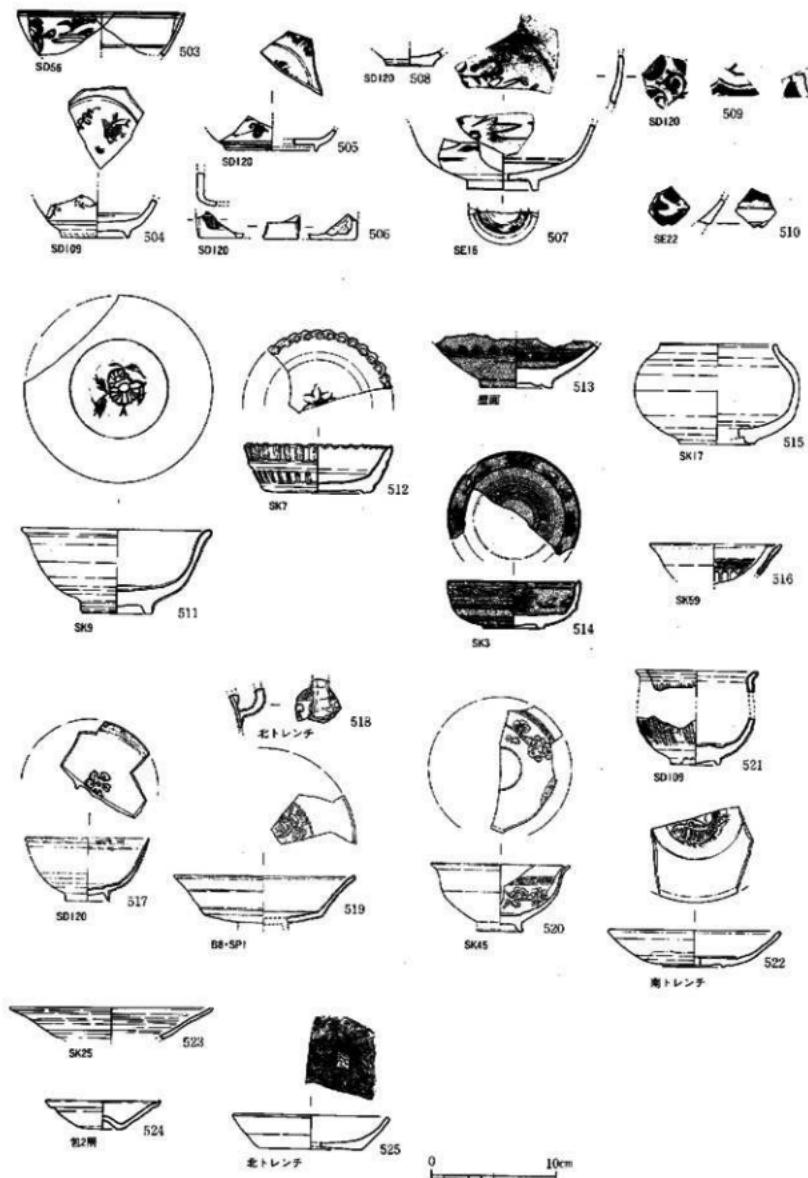


Fig.18 その他の陶磁・土器(1/4)



Ph. 6 その他の陶磁・土器

に陽刻の牡丹文を印花する。胎土は白色で釉は淡青灰色。B8SP2出土。520はSK45出土の青白磁小碗。口径11.2cm。体内面に陽刻の雷文と牡丹唐草文を印花する。521はSD109出土の白磁小碗で口径9.8cm。体外面に櫛搔の縦線を施す。胎土は淡灰色でやや粗目。釉は淡灰色で透明。小さな貫入が入る。高台際までかける。522は口禿白磁の高台付皿。南トレンチ出土。見込に陽刻の双魚文を印花する。胎土は灰白で釉は明緑灰色。体外面下位まで施釉する。523はSK25出土の土師器环。口径16cm。胎土は金雲母を多く含み灰白。524は包含層2層出土の土師器皿。口径7cm。胎土は灰白で精良。523とともに京都系と思われる。525は北トレンチ出土の在地系土師器环。口径12.4cm。見込内に1.2×1cmの梵字風のスタンプがある。

(13) 7面 SX100他-X・II期 (Fig.19) 526~528はSX100 (造構図28) 出土。526・527は須恵器の環蓋。526は口径19.4cm。回転ナデ後内面中位は手持ちで多角形にナデ外面天井部に回転削りを施す。527は口径14.4cm。回転ナデ後内面天井部は不定方向のナデ外面天井部は回転削り。528は体部の土師器甕で口径18、器高13cm。外面口縁は横ナデ体部上半と底部は縦ハケ下位に斜めハケを施す。内面口縁は横ハケ後横ナデ体部上位は縦斜め削り下位は指圧痕が残る。胎土は細砂を多く含み黄橙色を呈す。529~532はSK99上層の出土と思われる。全て須恵器で529~531は环蓋。529は口径20cm。回転ナデ後内面天井部は手持ちの縦ナデ外面天井部は回転削り。宝珠つまみ上面に円形の墨書きがある。530は口径13.8cm。回転ナデ後外面天井を削る。531は口径12cmで同様の調整。532は高台环で口径12cm。器高4.3cm。丸い体部に細く外方に跳ねる高台と内側に屈折する受部をもつ。回転ナデ後外面体部下半と高台内は削り。高台内に「大」字の線刻がある。533~535はSK94出土。全て須恵器で533・534は高台环。533は口径14cmで回転ナデ調整後体外面最下位が回転削り。534は口径12.1cmで調整は同様。535は壺底部で丸い体部に細い高台が強く外方に跳ねる。高台径10.4cm。回転ナデ調整後内底は縦指ナデ。外面には自然釉がかかり黒灰色を呈す。536~540は包含層4・5層出土。全て須恵器。536は盤の蓋で口径26cm。輪状のつまみがつくと思われる。回転ナデ後内面天井は不定方向の指ナデ外面天井は右回転の範削りを施す。537は高台环。口径17.2cm。回転ナデ後見込は縦指ナデ外底は範切後回転ナデを施す。

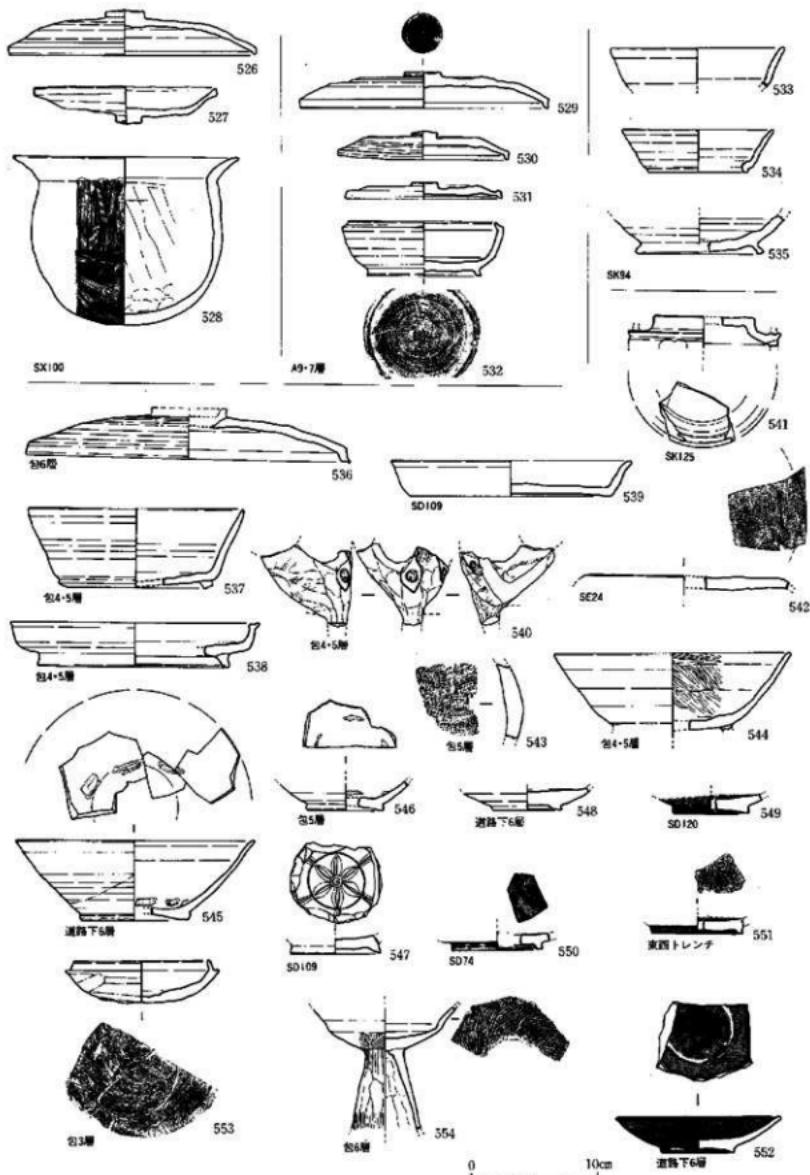


Fig.19 X-XII期陶磁・土器 (1/4)

す。538は高台付盤。口径20器高3.3cm。調整は同様。539は盤で口径19.4。外底は範切後回転ナデ。口縁内から体外面が黒変する。540は獸形の右前脚部。現況で長6.2・幅7.2・高6.4cmを測る。成形は板・範・指ナデ等でなされ、正面に線刻とスタンプによる邪視文様の文様を2ヶ所施す。右側面上位には径5~6cmの穴があいている様である。胎土は灰白で緻密、焼成は須恵質。541・542は須恵質の円面碗で541はSK125出土。碗面径8.1cm。範切後回転ナデを施すが摩滅する。脚部に透かしの装飾がある。542は径15.5cm。SE24出土。調整は同様。盤の転用の可能性もある。543は包含層5層出土の焼塙壺。544は4・5層出土の黒色土器A。口径18.6cm。545~548は越州窯系青磁碗。545は道路下6層出土。口径18.8cm。胎土は灰色で緻密、釉はオリーブ黄色で半渦。露胎部はにぶい橙色。546は包含層5層出土。高台径6.2cm。胎土は灰白で緻密、黒色細砂を多く含む。釉は浅黄色で外面は露胎。547は見込に蓮華文を線刻する。高台径7.1cm。胎土は灰色で緻密。釉はオリーブ灰色で一部白濁する。全面施釉。SD109出土で瓦玉に転用。548は道路下6層出土。高台径5.5cm。胎土は灰黄色で緻密、釉はオリーブ黄で全面施釉。疊付に目跡が8ヶ所残る。549~552は綠釉陶器。549は円盤高台の皿で胎土は灰色で緻密。釉は暗オリーブ灰で全面に施釉。焼成は須恵質。SD120出土。550はSD74出土。551は東西トレンチ出土でつまみ出しか削り出しの輪高台を有する。見込に陰刻花文を施す。胎土は灰~暗灰色で緻密、白色細砂を多く含む。釉はオリーブ灰で全面に施釉。552は円盤高台の皿で道路下6層出土。口径13.3cm。見込に研磨を施す胎土は同様で釉は濃緑色。外底は露胎で見込に重ね焼痕が残る。553は包含層3層出土IV期の須恵器壺。554は道路下7層出土の布留新段階の土師器高环。



Ph. 7 X・XI期出土陶磁・土器

4. 瓦 (Fig.20) 555~557は牡丹文の軒丸瓦当の小片で、555は左下位、556は左中位、557は左上位に当たり、Fig.20右上はこれを合成したものである。径約15cmを測る。胎土は精良で暗灰色、須恵質の焼成である。558~559も同様で圓線が1条巡る。558は径約17cm。瓦質で焼成はゆる目。559は浮文が高く木目の圧痕が残る。胎土・焼成は555等と同じ。560は三巴文でI期。巴は末尾が一体となる。珠文は19点、径13cm、灰黃色で砂粒を多く含む。561~562は軒平瓦当の小片で、561はI期の忍冬唐草文、高4.5cm。562は押圧文を施すもので555等と対をなす。文様帶はそれぞれ粘土帯を重ねたもの。上面は布目圧後ヘラナデ、下面の波は布目圧痕。IX期の出土。瓦は破片で純重量176.5kg。数十枚分でしかない。道路面・居住面の別なく出土しており、屋根を葺いていたとは考えにくい。X期から目立ち始める。

5. 土製品 (Fig.21) 563・564は型成形の仏像で土師質。563は中心に串を通す深さ2cm程の穴があり、光背等の飾か。564は地蔵。正面・裏面の型成形を接合するもの。565・566は土師質の双六の駒、径3.9~3.4cm。566には表裏に線刻の文様がある。567は土師器の壇堀。口径4cm、器高2.1cmの尖底氣味の底部で器壁が厚い。口唇の両端に小さな注口がある。胎土は石英粒を多く含み黄灰~灰白色を呈す。使用済で激しく焼け内面に銅津が付着する。568~569は未使用の壇堀の可能性がある。それぞれ石英粒を多く含み黄灰~赤灰色を呈す。口径は2.4~2.5cm。570~574は土師器皿、壺のミニチュアで、570~571は口径3.1~3cm器高1.2~1.1cm。内外ともヨコナデ。572~574は口径1.3~2cm、器高2~2.7cm。同様にヨコナデ。全て右回転の糸



Ph. 8 出土瓦当

測定値	測定値							平均値	標準偏差	%標準偏差
	1	2	3	4	5	6	7			
SP4P	6.2	7.1	1.0	4.9	3.5	6.5	5.0	10.2	20.5	40.7
SD	9.7	6.2	3.8	9.8	13.0	13.2	9.8	10.8	3.0	27.8
SK-SH	5.2	1.1	1.3	0	4.8	5.2	3.9	7.0	4.9	9.1
新住瓦	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	0.0	0.0
胎土	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	0.0	0.0
粘土	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	0.0	0.0
素	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	0.0	0.0
総計	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	0.0	0.0
測定値	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	0.0	0.0
標準偏差	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	0.0	0.0
%標準偏差	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	13.0	0.0	0.0
出土量 (kg)	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5	0.0	0.0

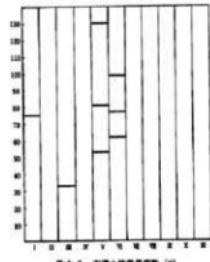
Tab.1 X出土量 (kg)



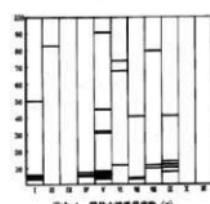
Fig.20 出土瓦当 (1/4)

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	VII	X	XI	XII	計(点)	%
SF49				2	4					4	30	12	533	3.9
SD	2		1	1	9	2	2	5	2		24	12	533	3.9
SK+SE	3	1	1			1			2		9	12	533	3.9
新住民														
新規														
既存														
合計														
遺物分														
SF49(SD)	4	1	1	3	3	14	2	4	2	4	29	12	533	3.9
%	10.7	2.4	0.6	7.7	10.0	6.1	0.3	0.7	0.3	0.7	5.4	2.2	533	3.9

Tab. 2 土器出土数



Tab. 3 土器土器重量密度(g)



Tab. 4 土器土器重量密度(g)

切りで在地のもの。575はミニチュアの碗で、口径3cm。器壁は薄く内面は丁寧なナデ。にぶい黄燈色で雲母粒が多く含む。瀬戸内系か。576は中国製の陶器の藻研と思われ、径13.4cm。孔径2.6cm。胎土は灰褐色で小豆色の微粒を多く含む。Ph.11は陶磁・瓦等を円盤状に打撃整形した瓦玉。総数で533点。SF, SDの道路部で65.4%居住部で34.6%と道路部で2/3を検出しており激しい片寄りが伺え、路上で主に使用したものと知れる。時期的にはX期から全期間出土しているが、VII期に盛期をむかえV期の132点をピークにI期とVI期に山がある。使用部位では白磁と青磁碗の底部で38%を占めこれに瓦の13.4%がつづく。高台の円形を生かす事に関心がはらわれている。毬杖の玉等、子供の遊具と考えられる。577~606は土鉢。577~582は土師質の有溝土鉢。577は33g578は77g579は81g580は130g581は75g582は62gを測る。当該区での初見はVI期で、以降軽量化の傾向がある(Tab.3)。583~602は土師質の管状土鉢。583~588は4g589は6g590は8g591は7g592は7.5g593は11g594は13.5g595は12g596は31g597~598は41g599は45g600は83g601は91g602は68gを測る。管状土鉢の初見はIX期からで、当初から4~14gの小型品、31~50gの中型品、68~91gの大型品の3種の分化が見られ、魚種・漁法の差異に伴う漁具の使用が確立されていた様である(Tab.4)。筒形のものは中・大型品に、紡錘形のものは小型品に採用されている。603~604は球状の土鉢で、603は土師質で重量16g、孔に並行して上面に溝がある。604は備前焼の土鉢で径5.5全長3.8cm。石英粒を若干含み暗灰色を呈する。605は平瓦片転用の偏方形の土鉢で六面を平滑に磨りあげている。胴中位に直交方向に対面する打ち欠

しの片寄りが伺え、路上で主に使用したものと知れる。時期的にはX期から全期間出土しているが、VII期に盛期をむかえV期の132点をピークにI期とVI期に山がある。使用部位では白磁と青磁碗の底部で38%を占めこれに瓦の13.4%がつづく。高台の円形を生かす事に関心がはらわれている。毬杖の玉等、子供の遊具と考えられる。577~606は土鉢。577~582は土師質の有溝土鉢。577は33g578は77g579は81g580は130g581は75g582は62gを測る。当該区での初見はVI期で、以降軽量化の傾向がある(Tab.3)。583~602は土師質の管状土鉢。583~588は4g589は6g590は8g591は7g592は7.5g593は11g594は13.5g595は12g596は31g597~598は41g599は45g600は83g601は91g602は68gを測る。管状土鉢の初見はIX期からで、当初から4~14gの小型品、31~50gの中型品、68~91gの大型品の3種の分化が見られ、魚種・漁法の差異に伴う漁具の使用が確立されていた様である(Tab.4)。筒形のものは中・大型品に、紡錐形のものは小型品に採用されている。603~604は球状の土鉢で、603は土師質で重量16g、孔に並行して上面に溝がある。604は備前焼の土鉢で径5.5全長3.8cm。石英粒を若干含み暗灰色を呈する。605は平瓦片転用の偏方形の土鉢で六面を平滑に磨りあげている。胴中位に直交方向に対面する打ち欠



563



564



566



567

Ph.9 土製品



Ph.10 土鉢



Ph.11 瓦玉

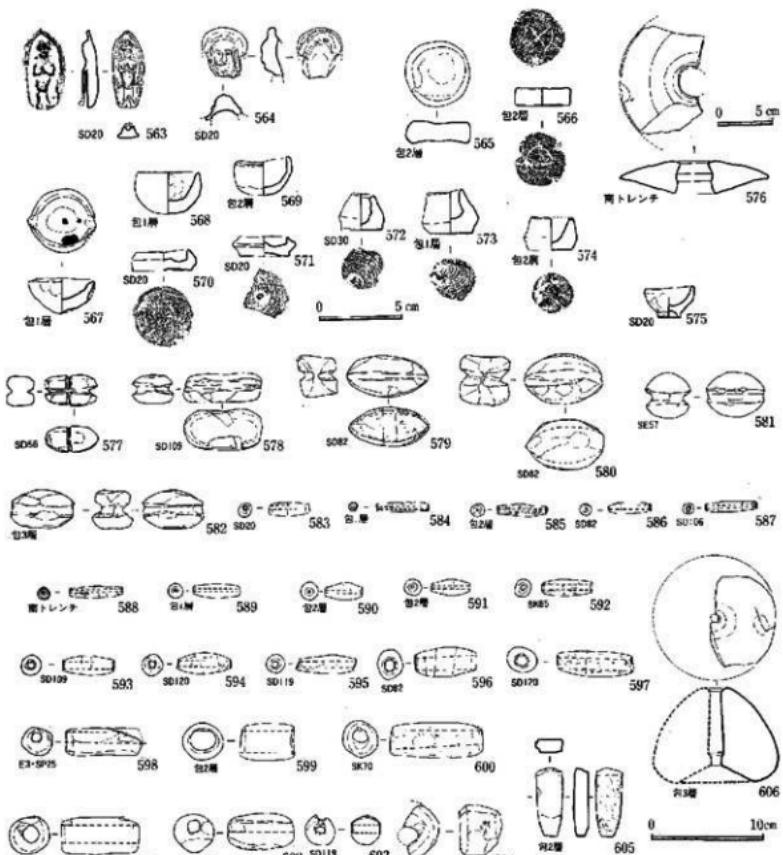


Fig.21 土製品(1/3 · 2/9)

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	%
高砂層	5	3	0	27	89	12					11	17	41		
SD-49		30	4	105	23	6	5	3			17	109	45.4		
SK-S2	8	3	2		36	4	24	4	7		64	123	56.4		
等化層															
1-4層															
總計															
実測値	56	1	27	31	125	41	39	10	14	1					
%	11.7	3.0	6.6	16.0	43.3	8.3	2.9	2.0	3.0	0.2					

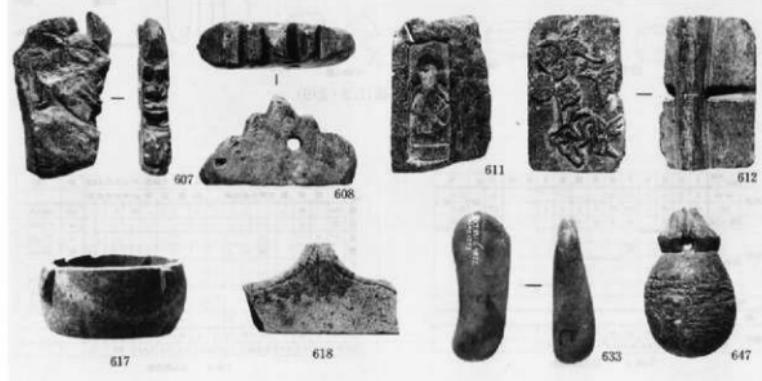
Tab.5 土・水・土質

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	(%)
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	(%)
高砂層	116	91	2	1												42.0 (3.0)
SD-49	116	4														7.3 (0.6)
SK-S2	2	2	2	2												7.1 (0.6)
等化層																0.0 (0.0)
1-4層																0.0 (0.0)
總計																59.3 (4.6)
実測値	22	3	91	2	1	10	10	10	7	22	8	24	20	26	4	87.8 (7.3)
%	11.0	1.5	45.8	0.6	0.3	5.2	5.2	5.2	3.5	11.7	4.2	12.6	11.0	14.0	0.4	2.4

Tab.6 土・水・土質

きがある。606は円錐形の大型の土師質の土錘。復原径12高8.5cm。重量は550~600g前後と思われる。上下に径1.5cmの成形時の孔が貫通しており、内面が摩滅する。定置網の錘か。土錘は総数で66点。道路面46.9%、居住面53.1%と均衡しており、集中部はない。時期別ではVI期が28点で圧倒しており、VII・I期がこれに続く。(Tab.2)。

6. 石製品 (Fig.22-23) 607~617は滑石製。607~610は呪具と思われ、607は神像で高5.7幅3.5厚0.7cmを測る偏平なもの。側面に顔の正面を割り出している。608は全長6幅2高3.5cmを測る鶴頭状のもので三つの棱を削り出す。上位に径6mmの孔が貫通し紐ずれしている。右下位に径3深さ3mmの少孔が1対ある。右先端は凸状に削られている。609~610は陽根の模造品で609は全長3.9幅1.6~2cmで、610は全長4.8幅2cmを測る。ともに上端から1.5cm程下位に溝を巡らし以上を亀頭状に削る。611~613は石鍋片の転用品で611・612は石鍋の鉗をそのままつまみとして利用している。611は563の様な土製仏像の雄型で縦4.6横3.6cmを測る。内側に縦4.2横1.5深0.2cmの方形に彫り込みさらには3.2cmの像を陰刻で彫り込んでいる。未製品か失敗品と思われ粗彫りのみで像の細かな仕上げはなされていない。612は瓦質の火舎等の施文に用いられるスタンプと思われる。縦7横4.5cmを測る。内側に花鳥文を陽刻で彫り出している。外面右上には線刻で山形の文様が描かれる。鉗から体部にかけ紐通しの穿孔がなされる。613は未製品で縦4.8横2.4~2.7厚0.8cmを測る。内外両面に方形の区画線を彫り一部は内側の彫りにかかっている。土製品雄型か硃と思われる。614~616は容器で614は口径5.4器高1.9cmを測る。内外面とも削り後ゆるい研磨がなされる。615・616は双耳の小壺で615で全長5.6器高2.2cm、616は全長4.2器高1.8cmを測る。調整は614と同様。617は小型の石鍋で口径9器高5.3cm。内外面とも削り後ゆるく研磨される。外底は火熱を受け赤変しており実用に供されている。618は溶結凝灰岩製の板碑の塔部で淡灰褐色を呈する。残存幅で10cmを測る。正面中央と輪郭に沿って片切の線刻を施す。正面は粗研ぎ後横方向のゆるい研磨で仕上げる。619~621は石臼の下臼の受部で619は径32cm。黒灰色の玄武岩製で丁寧な研磨がなされる。620は径33cmの安山岩製で外面は横方向のハツリ内面は丁寧な研磨を施す。621は淡灰色の安山岩製で径37cm。外面は三段の横方向のハツリ後最上段のみ粗く研磨、内面は丁寧な研磨を施す。622~627は石鍋転用の石製品で、624以外は石鍋の鉗・把手をそのままつまみに用いている。622は長径7.6高3.2cm。下面は凸面に仕上げる。623は径5.2cmで同様に下面を凸面に仕上げる。624~626は方形のもので624は石鍋の鉗部を横から形取りして縦3.2横2.9cmを測る。下面は摩滅してい



Ph.12 石製品

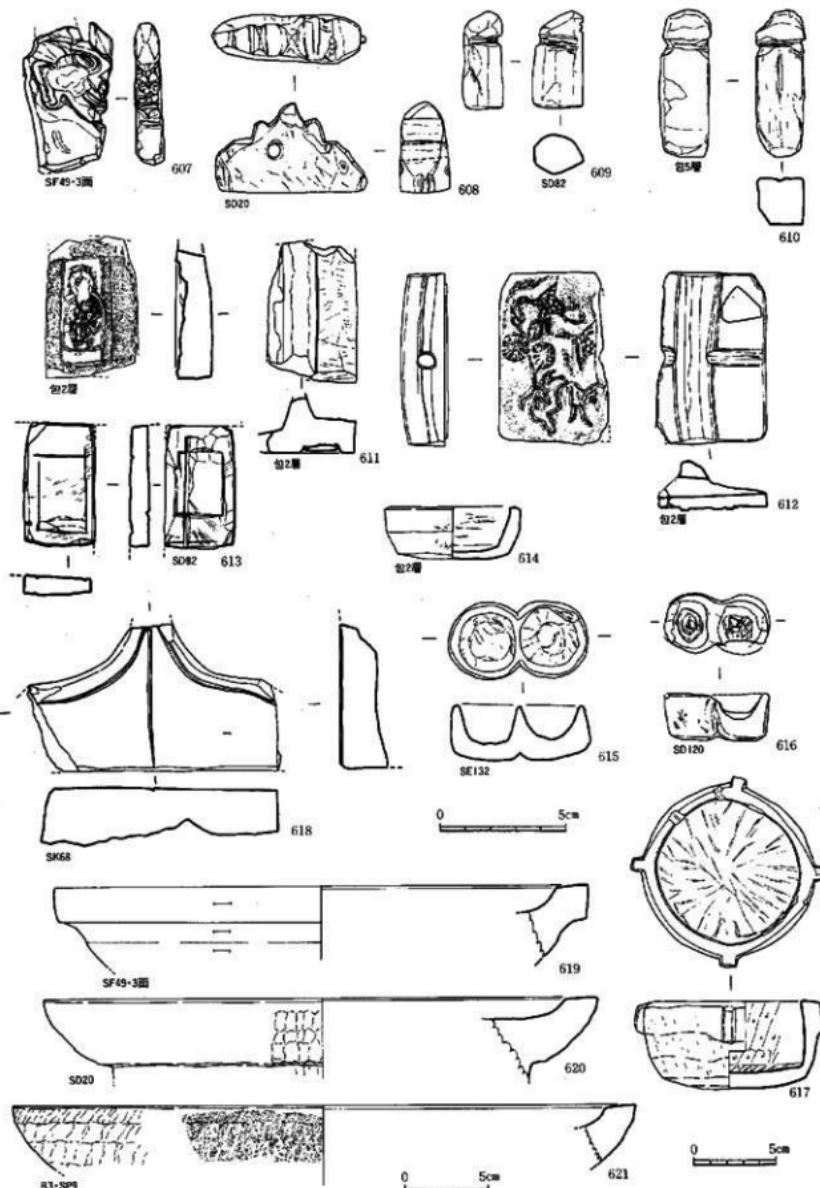


Fig.22 石製品 1 (1/2・1/3)



Fig.23 石製品 2 (1/4・1/6)

— 216 —

る。625は高3.6cmを測る。上辺が石鍋の口縁。つまり石鍋使用時の金輪が残る。下面は凸面状で擦痕・摩滅が目立つ。626は縦5.3高2.8cm。左側辺に石鍋の口縁を残す。下面是凸面で摩滅する。627は円形でつま

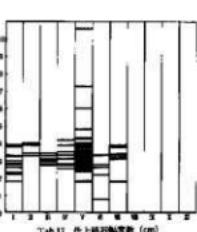
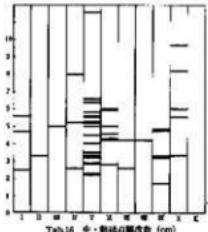


Tab.13 石器

	I	II	III	IV	V	VI	七	八	九	X	十一	十二	十三	十四	十五	%
遺物数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1.3
SD	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	22
SK	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	33
LW	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14
W	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	20
新規数	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	18.2
遺物種	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
種計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4
遺物少	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14.7
%	8.3	2.4	2.8	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	3.6	33

Tab.8 石器出土数

SD119	651	652	653
SD120	654	655	656
SD121	657	658	SD122-66
SD122	659	660	SD109
SD123	661		



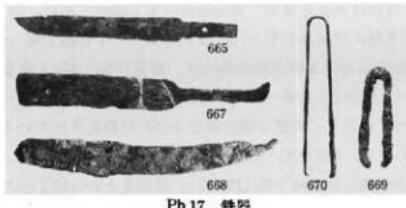
期	I	II	III	IV	V	VI	VII	IX	X	地	計(件)	%
SF49	7		16	19	1						41	12.8
SD	18	2	12	7	49	14	3	5	2		203	65.7
SK・SE	9	3	4	1	6	6	13	2	2		48	14.8
1型												
2型												
3型												
4型												
5型												
6型												
計											289	90.7
未												
総計											328	
遺物割合											328	
出土数											328	
遺物割合 %											100	
出土数 %											100	

Tab.18 破石出土数

石錐利用で両端を緊縛する有溝石錐。重量34g。643は管状石錐の半欠品で径2.8cm孔径8mm。直交方向に擦痕多数。644~646は札状の石錐。すべて石錐軸用品。644は重量115gで下端が摩滅する。645は重量201g。646は石錐の底部をそのまま用いたもので径11.6cm重量316g。647は分銅形で全長8cm重量184gで上位を亀頭状に削って一孔をもうけ此から縦に溝を巡らす。下端に叩打痕がある。648は円盤状で重量44g。649は径15mmの孔に溝を有するもので幅3.1厚2.1cmを測る。650は方形短冊形で全長6.4cm重量15gを測る。石錐は47点出土。道路面で50%居住面で50%と均衡している。IX期から数が増加しVI期でピークを迎える（Tab. 8）。滑石製品総体では製品・未製品を含め104点出土。同様に道路面居住面とも均衡している。IX期から量が増えVI期でピークを迎えるV期がこれに次ぐ。VI期の中ではSD109に集中し、5グリッドの5点を中心に南北のグリッド毎に3点、2点と減少しておりA~C-4~6あたりに工房が相対できるか（Tab. 6・9）。素材の石錐は総量で42.2kg出土。道路面が46.2%居住面が53.8%とこれが若干上回る。時期的にはX期から出現しV期が最多でIX期・VI期がこれに次ぐ（Tab. 10）。素材の作成には技法が確立している様で鋸引によって縦に切斷した後、横からの鋸引で方形短冊形の素材を組織的に取り出している（Ph. 14・15）。637~640・642等はこの素材を生かしている。651~661は硯。651~657・659・660は長方硯。平面・縦横断面全てを台形に形成しており、平面では海側より山側を縦横断面では下辺より上辺を2~4mm微妙に長くする。652は裏面に線刻文様を、655は両側面に文字を線刻し（Ph. 25）、656は海を二重に、657は横断底面を凹面に、659は山を二段に成形する。658は風字硯で、659は四葉硯である。石材は651・652・653・657・659が小豆色輝緑凝灰岩、655・658・



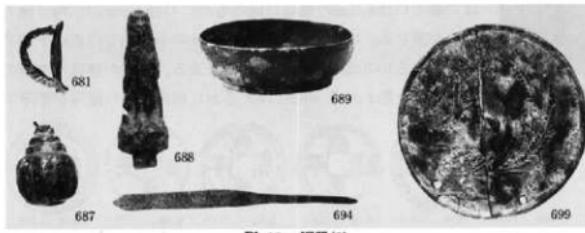
Fig. 24 金属器 (1/4 · 1/6)



Ph.17 鉄器



Ph.18 銅器(1)



Ph.19 銅器(2)

660は小豆色頁岩、
654・661は黒灰色頁岩、
656は灰色細粒砂岩である。総数は37
点で道路面で41.1%
居住面で58.9%で居
住面が優越している。
時期はIX期から出現
しV期が19点で他を

圧倒する。Tab.12は石硯幅の度数分布であるが狭小化の傾向が伺える。Ph.16は石球で総数219点出土。花崗岩製2点・安山岩製3点以外は砂岩製で大部分球形に叩打したものを粗く研いでいる。道路面で78%居住面で22%と圧倒的に道路部に集中する。時期的にはIX期から出現しV期・III期・I期に盛行する (Tab.13)。径は1.9~6.7cm重量は7~240gと大小の幅が大きく意的でまとまりはない (Tab.14)。時期別でも同様で (Tab.15)、専門工人による規格品とは言えない。瓦玉同様路上で行う子供の遊具と思われ、毬杖・投胡・手玉等が考えられる。Tab.16~18は砾石関係で、総数で330点出土。分布は道路・居住面とほぼ均衡している。IX期から見られV期を最多にI期VI期が続く。中・粗砾には凝灰質砂岩・砂岩が用いられ、仕上砥には凝灰質頁岩が用いられる。中・粗砾は幅が1.7~11.6cmとばらつきが激しいが仕上砥は幅2.4~4.3cm内に9割が集中する。頁岩質のため実数より多くなる傾向があるとは言え規格性が強く、長さも17.5~20.6cmとまとまっている。側面に鋸引跡を残すものが多く専門工人の存在が考えられる。

7. 金属器 (Fig.24・25) 662~670は鉄器。662・663は刀子。刀幅は0.9~1.3cm。664は包丁。刃渡15.7cm幅2cm。665・666は小刀。665は刃渡15.8cm幅2.6cm。目釘穴がある。666は刃渡20cm幅2.3cm。667は刀の未製品か、刀幅3.6cm。中茎が1.1×1.4cmの角柱状をなす。668も鎌の未製品か、外から内へ5~3mmと薄くなるが刃は形成されていない。669・670は鎌で5.7cm・10cmを測る。671~702は銅製品。671~673は布や皮等の装飾品と思われ中茎の孔や割りビンで固定する。671は径3.7cmの円形2段の鉢状。672は径1.3cmの円形の鉢頭の上面に縦い陽刻の花文を鏽出するもので長さ1.3cmの中茎を熔着する。673は径2.2cmの座金を方形の割りビンで留めるもので座金上面に彫金文様がある。ビンの頭には脚と並行する紐通しの孔がある。674~678は木製品の装飾品で、674は菊座の装飾品で型成形。径5.5cmを測る。表面に鍍金し、中央に方形の釘穴がある。675は小さな環状取手で円形のビン部分は折損する。676・677は鍍金で、676は偏平な鉢頭で径1.2cm。鍍金が残る。678は半球形の鉢頭で径1.1cmを測る。678は鍍入の妙意頭形の飾金具。679~681・682・683・685は刀装具で、679は小刀鞘の小尻金具。長3.1幅3.6厚1.7mmを測る。682・683・685は精鰐口金具で682は長径4.4cm、表面に黒漆を厚く塗布する。683

は幅2.7cm。685は刀子の鰐口金具で長径3.9cm。表面は黒漆を塗布し裏面端部は鋲で細かく刺む。681は紐通しの栗型で撻紐状の装飾を陰刻で施す。博多48次に同品がある。680は取手金具の半折品で幅1.4cm。横断面は凸面をなす。686・687は分銅で球形の体部に瓜割文様を鋳出す。重量104g・37gを測る。687は環も銅製、連鑄だった様で下端に方形のバリが残る。688~692は仏具で、688は仏像。全長4.7cm。下端に台座に固定する中茎がある。側面にバリが残り、表裏2個の鋳型を合わせ鋳造されている。冠帽を被り右手を下げている様で、観音像と思われる。689・691・692は銅鏡で、689は口径8器高2.5cm。口唇は小さな玉縁をなす。口縁下に鑿で漢字を刻むが意味不明(Ph.25)。底部を上から径2cmの棒で打ち抜いている。鏡裏具か。692は口径12器高1.9cm。691は六器で口径4.2cmの盤口口縁のものに口径3.9cmの三角口縁のものが重なる。690は口径2器高1.3cmの小形品で内底は平坦で外底はゆるい丸底をなし口が若干しまる。容器か棒状の木器のキャップと思われる。693は鍋と思われ屈曲した口縁端が肥厚す



Ph.20 元錢

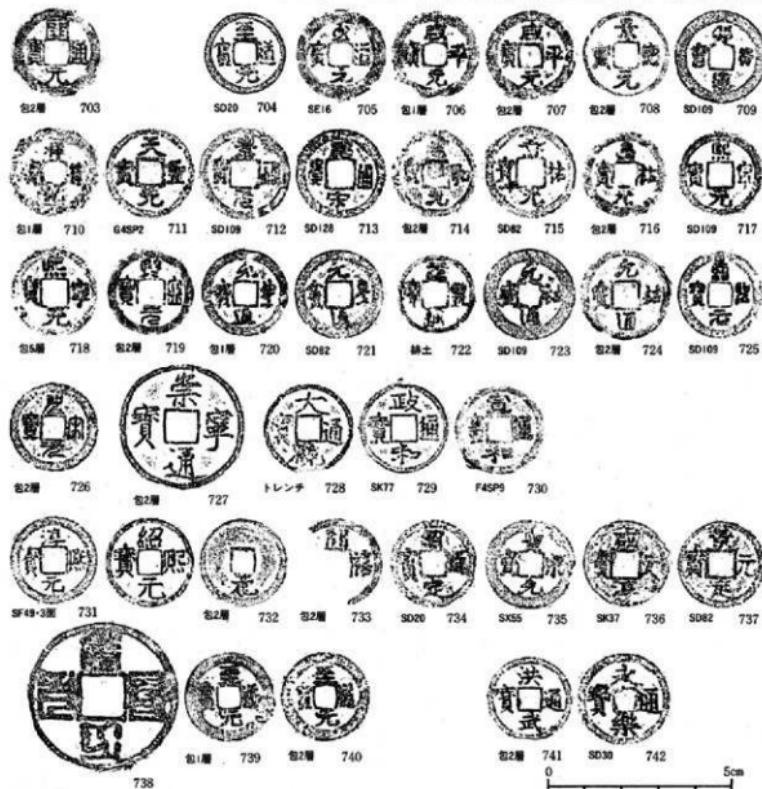
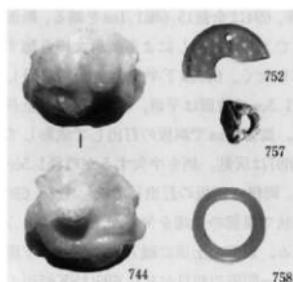


Fig.25 銅錢(3/4)

8. 玉類 (Fig.26) 743は琥珀製の玉で長径12mmを測る。赤黄色を呈する。744はガラス根付状装飾品で長径3.5cm。二匹の虎が体部をとりまく。虎縞文様は切子。下端は擦ガラス状で下面に冷却前に穿



Ph.21 ガラス製品

けた紐通しの孔がある。淡灰白色で半済、二次火熱のためひび割れる。745はガラス小玉で径6mm。透明な青灰色に白色が構造に螺旋に入る。746は石製の丸玉で径12mm。淡黄灰色で不

器種	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	備	件(A)	%
SK85	1		2	1							4	12.5	35.6
SD	3	2	11	2							12	37.5	40.2
SK・SD					1	4				6	18	55.6	
出土地											12	39.7	
1号													
2号													
3号													
4号													
5号													
地											27		
出土地	4	7	2	10	3	1	4						
%	6.8	14.8	14.8	37.7	14.8								

Tab.20 ガラス製品・未製品出土数

透明。747はガラス小玉で径6mm。深青色で透明。748はガラス丸玉で径19mm。深青色で透明。749は丸玉で黒石製。径10mm。暗乳灰

色で半透明。750はビーズ玉で径3mm。明青色の半透明で濃色部が螺旋に巡る。孔の端にバリが残る。751は管玉で長24mm。深緑色で透明の碧玉製。古墳時代か。752～754はSK85出土でガラス製。752は盤状で径30mm。型成形で径2mm程の穀粒を鋳出す。裏面と側面は研磨で擦ガラス状。乳灰色で半透明。753は平玉で径20mm。深青色で透明。754は小玉で径6mm。淡青灰で透明。755～759はガラス製。755は径5cm程の容器で肩部に沈線が巡る。暗青色で不透明。756は径30mm程の盤の縁を齒車状にノッチを入れ整形している。明青色で半透明。757は容器の取手。明青色で不透明。758は環で径24mm。内側が平面をなしバリが残る。灰白色で半透明。759はガラス棒で径4mm。暗青緑色で半透明。ガラスは絶数で37点検出。時期的にはV期が19点で圧倒し、該期のA～D-4・5グリッドに11点が集中する。

9. 木器 (Fig.27・28) 760～764は漆器椀・皿。全面に塗布した黒漆の地に朱漆で草花・鶴等を描く。760は高台径6.6cm。内面に桐か外面に鶴を描く。761は高台径7.2cm。見込に760と同じ描方で鶴を描く。高台内に「X」印を素地に刻む。762は高台径8cm。内外に萩を描く。763は口径11.2cmの皿で見込みに762と同じ描法の萩を描く。764は径1.5cmの注口部。他にスタンプによる文様を施すものもある。(造構編図版1)。765は土製仏像の雌型で長6.7・幅2.1cmの札に長2.4cmの仏像を粗彫りする未成品。766は舟形で長8.7cm。舳先と中央に穴がある。767は糸車の部品で長36.5cm。768は番号で長5.2cm。表面に墨書で「三文」裏面に⑦の焼印がある。769は不明木器。長13cmで薄板を削って成形。770は円盤で幅3cm。側面は丁寧に面取りする。771～774は箸で2対。20.8と19.7cmを測る。削り成形で多面をなし両端を細くする。775・776は台の脚で775は幅11cmの板状。776は幅5.5cmの面取りをした方柱状のもので丁寧な造作。柄の上端に木釘が残る。777・779・781・782は木串。777は長16.8cmで先端を焼く。779は長10cmで幅を狭く面取りする。781は長21.3cmで先端を薄く削る。782は長32.7cmで両端を細く削る。778は木栓で元を3・先端を2.2cmに削る。780は箆で長12.9cm。薄板の先端を削って薄く

し摩滅している。Fig.28は履物で、787は板草履、全長23cm。薄板の表裏に蘭草の痕跡が残る。他は下駄で連歯(783・788)と差歛(784・786・789～791)と折衷(785)のものがあり、連歛より差歛の高足駄が多い様である。側溝の汚泥を路面に広げる様な道路でありこの



Ph.22 漆器・木器

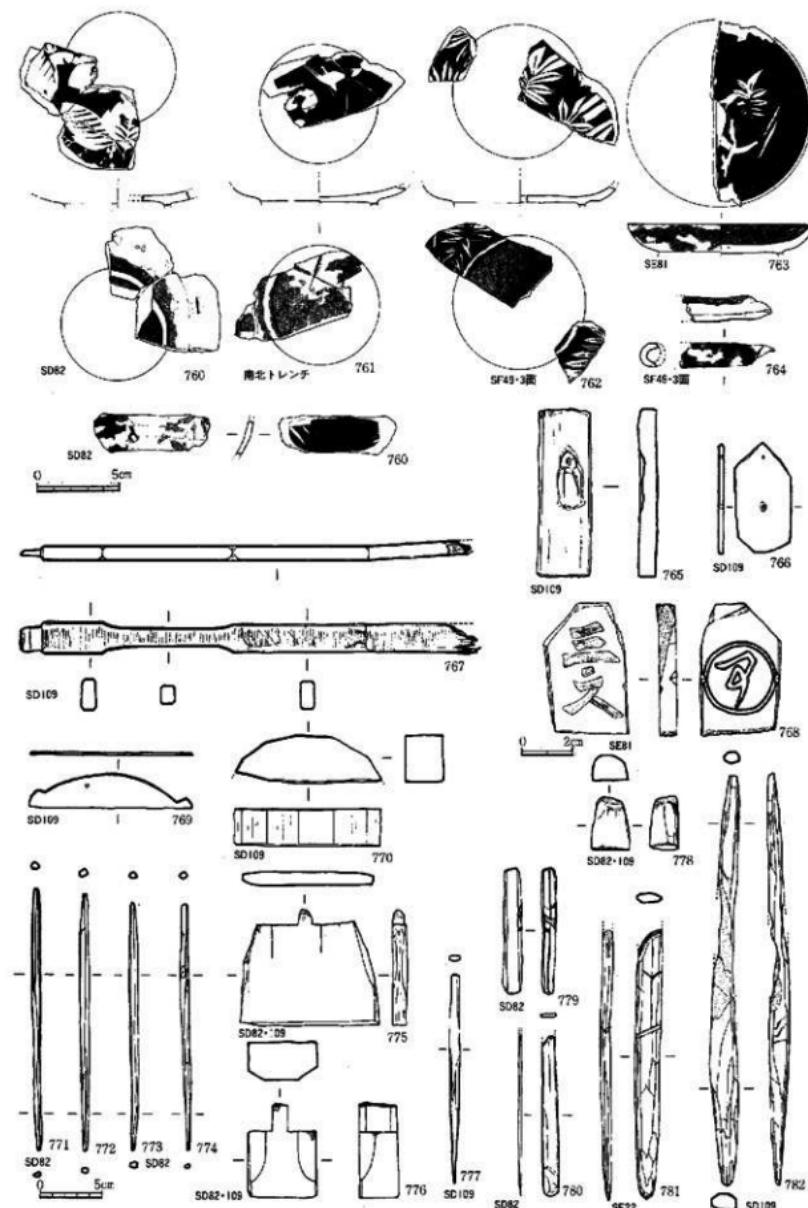


Fig.27 木器 1 (1/2・1/3・1/4)

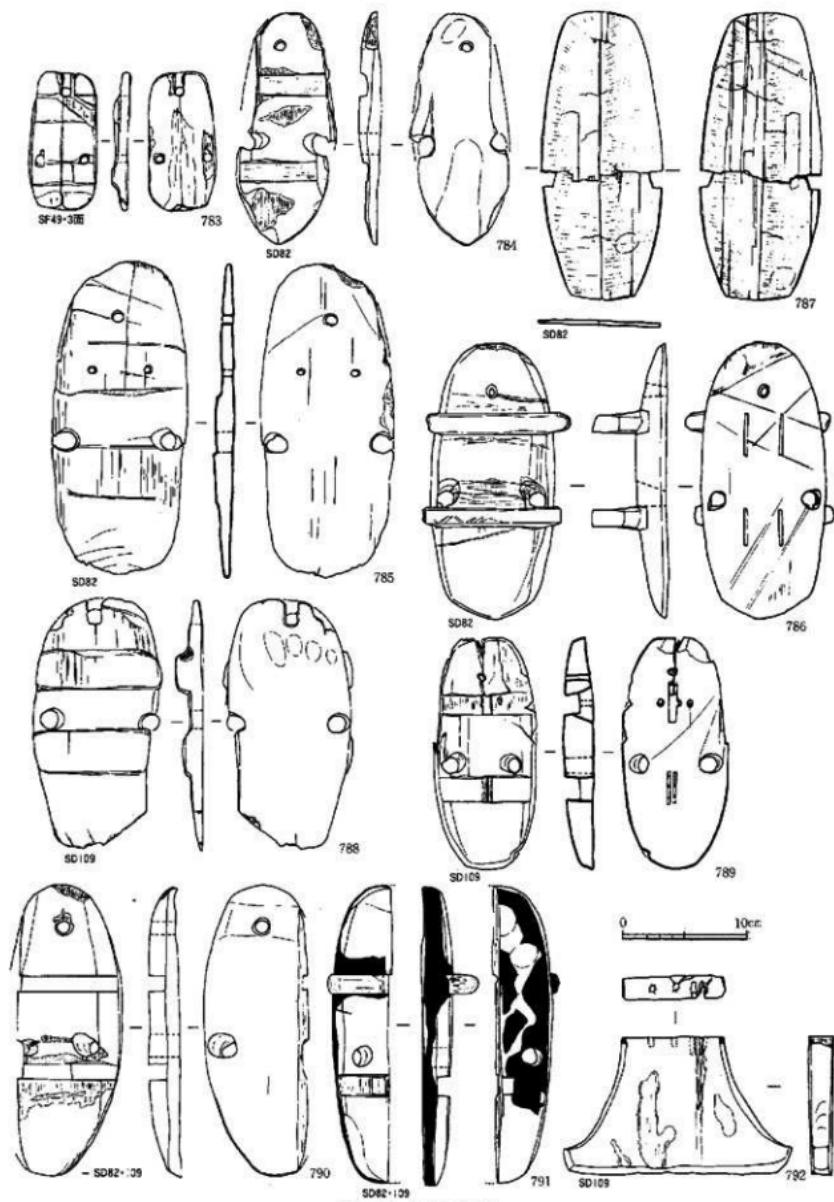


Fig.28 木器 2 (1/4)

事情を反映していると思われる。791は全面に黒漆を塗る。全長23.6cm。792はバチ形に開く差歎で齒幅18.2・高10.2・厚2cmを測る。上面に木釘穴が4つ有る。

10. 骨角器 (Fig.29) 793・794・799・802は骨製の網補修用の編針で、偏平で短い体部の先端を尖らるもの (793・794・801) と3~4mmのやや厚みのある長大なもの (799・800・802) がある。全て凸面側の中央に尖頭の基部から後端にぬける溝を1条刻んでいる。また794が体部両側を凹面に削り無孔である以外は後端部の溝内に糸通しの穴を一孔もうけており、これが全て摩耗で欠けている。表面は良く研磨される。793はSF49出土。全長10cm。794は2層出土で11.2cm。799は10.5cmでSF49・3面出土。800は9.4cmでSE57出土。801は12.5cmで2層出土。802は14.1cmで2層出土。796・798は此等に似るが、笄と思われる。796は全長12.6cm SE57出土。凸面側に3条の溝を刻む。穴はない。798は全長10.2cmで2層出土。後方に装飾的透かし穴を4孔、中に溝を2条刻む。803も笄か笄と思われ線刻の文様がある。795・797は網編針か笄かは不明。795は全長14.1cmでSD106出土。797は全長17cmでSD109出土。804は鹿角製の鍤と思われSF49・1面出土。全長14cm、重量9g。両端に一孔をもうける。805はSD56出土。骨製の笄か、片面に斜めに交差する溝を刻む。806はSD82出土。小形のヒゲ鯨の歯を茶杓状に削ったもので全長13cm。皿部の幅4.5mmを測る。807はSK18出土。鹿角製の耳搔で全長7.2cm皿幅5.5mmを測る。808は1層出土。茶入の鹿角製蓋で口径3.8cmを測る。輪轆引きによる成形。809は鹿角製の未製品で上部は輪轆での回転削り。上下端は鋸引きにより切断する。810・811は鹿角製の刀柄頭の装具で810はSD20出土。表面に黒漆を塗布する。裏面には鋸引痕か粗目の鐘痕が残る。全長2.9・幅1.5cmを測る。811はSE57出土。全長2.9・幅1.1

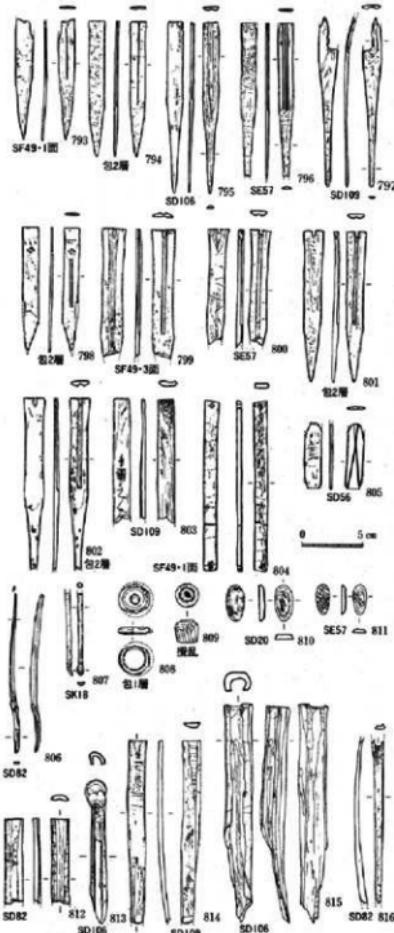
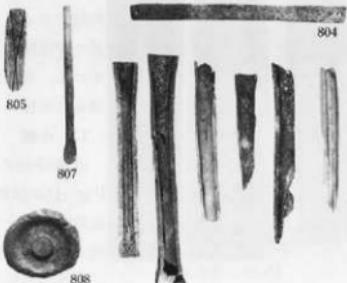
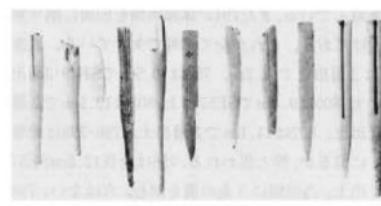


Fig.29 骨角器(1/4)



Ph.23 骨角器(1)

cmを測る。表面に鹿角の表皮を残し裏面に斜格子の線刻を入れる。812~815は此等骨製品の素材と、素材を切り取った歯骨で、縦方向の鋸引きによって骨の厚みの偏平な長方形の素材を切り取っている。812・814はこうした素材で、骨の龍側と端部に鋸引痕が残る。812はSD82出土。幅1.5cm。表面に削痕がある。814は縫針等の素材で端部と龍側に鋸引痕が残る。裏面は鋸引後縦に削りを施し先端部を削り出しにかかっている。全長15.1・幅1.4cmでSD109出土。813・815は素材を切り取った歯骨。813はSD106出土。全長11.8cmで骨頭を残し幅1.2cm厚5mm程の素材を切り取っている。815はSD106出土。骨頭部を鋸引で切断した後幅2cm・厚6mm程の素材を切り出している。表面に粗い削痕がある。全長18cm。816はSD82出土。小形の匙原の歯で先端が鍔状に開く。全長13.5・幅1cm。骨魔器と未製品は総数で41点検出。道路面で66%居住面で34%と道路側、特に溝に多い。時期はVII期に始まりV期前後に集中する。歯骨はコンテナ27箱程検出しているが加工痕を残すものは総体的に少ない。



Ph.24 骨角器(2)

種類	器種												21(LG)	%
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII		
遺物群	6	4	1						8	21	23.5	13.5	11	44.9
遺物群-SF49	2	3	1	4	3	2			14	24	25.6			1
遺物群-SD106	1		1						14	17.4	19.8			
遺物群-SD82	1		1									1		4.8
合計	11	8	3	5	3	2								100
器種														
遺物群-SF49														
遺物群-SD106														
遺物群-SD82														

Tab.21 各内器製品・未製品出土数

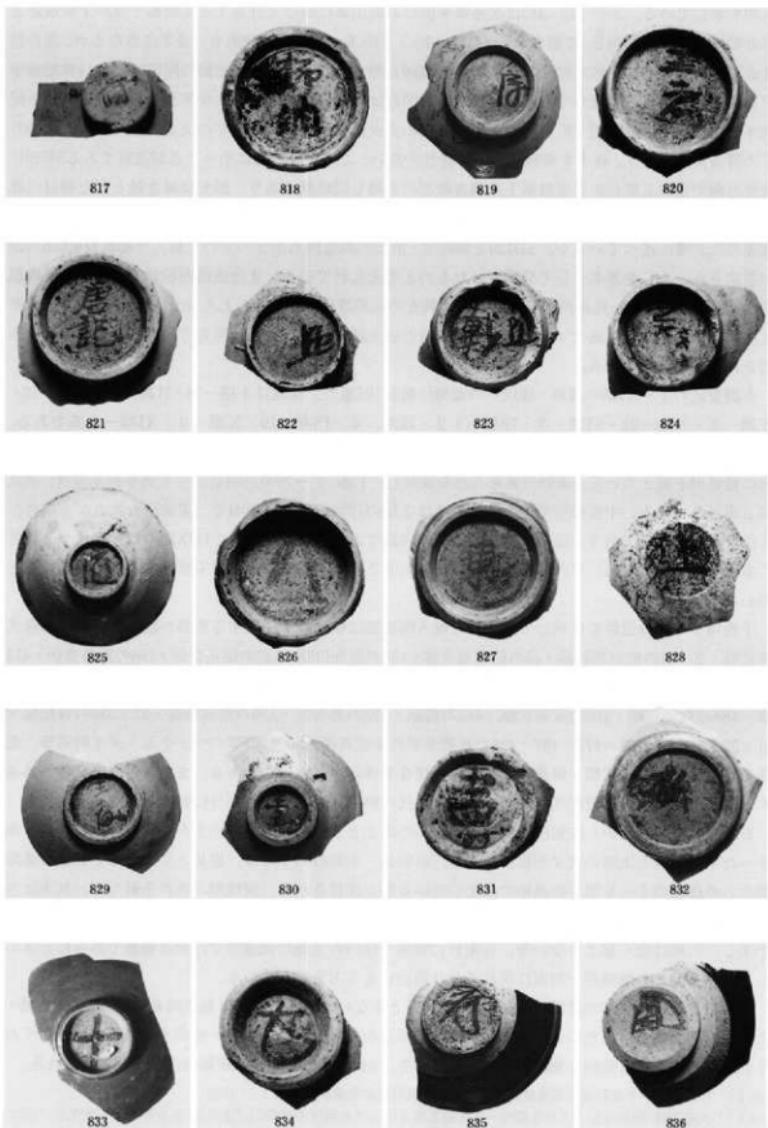
しやうの小かん」と読める。②は同じく縦書二行で一行目は「□□□□□小瓦」(部)、二行目は「□□□助(?)」と職官名らしきものが読みとれる。③は689の銅鏡の口縁下に整で刻した漢字で縦書に「普月王□上王能(?)」と読める。下二文字は人名か。Ph.26は墨書き陶磁器で817は須恵器の宝珠つまみに「硝」と818は白磁V類の碗の高台内に「柳綱」819は白磁碗に「房」820は白磁高台付皿II類に「王(花押)」821は白磁碗VI類に「唐記」822は白磁碗VI類に「(花押)」823は白磁碗VI類に「戴(花押)」824は同じく「吳(異)」825は白磁小碗に「洛」と、342と同じ文字を826は白磁碗VI類に花押か略号827は龍泉窯系碗に「東」828は白磁皿II類に「上」829は白磁高台付皿II類に「王(花押)」830は同じく「王(花押)」831は白磁壺に「王四(花押)」832は龍泉窯系碗I類に「松」833は略号で同じく「X」834は同安窯系碗に「大」835・836は天目碗に花押を高台内に書く。人名が多く「王」「柳」「戴」等、宋人と思われる人名が多い。御供所町周辺に多い「僧記」は一点もない。全体で101点検出しているが判読できるものは少ない。種別では白磁61点・青磁13点・天目碗4点・中国陶器7点・須恵器6点・土師器9点・瓦質土器1点となっている。尚今回の判読は市立博物館の林文理学芸係長・堀本一繁学芸員に御願いした。記して感謝申し上げる次第である。

12. 小結

道路SF49の開設はVII期の造構が埋められ更地となった時である。Fig. 11が該期の出土遺物である。白磁は口禿の壺・皿が主体を占め桓府磁の出土はない。青磁は龍泉窯系III類の細目の蓮弁文の小碗・無文の小碗・銅口縁で内面に陰刻の蓮弁文を施す小鉢等が主体を成し、IV類の出土はない。13世紀後半を主体として14世紀前半までの



Ph.25 金石文



Ph.26 黒書陶器

時期を示している。302・312・313は広島県東部から岡山県にかけて分布する土師器で草戸千軒遺跡土器分類の土師質土器椀B^(註1)に相当する。口径は10.1~10.6cmで草戸II期前半~後半に当たるが、高台部はまだナデ調整がなされており、II期前半の範囲と考えられる。よって道路の開設時期は14世紀前半が妥当と思われる。本報告でも述べたが道路の開設はVII期の遺構面の焼失を契機としている。13世紀後半~14世紀前半の時期で町の再建を要する程の大火は文永11(1274)年の文永の役・元応2(1320)年の博多炎上があり、後者を契機とした可能性が高い。この砂丘稜線に沿った基幹道路であるSF49に直交方向で交わる第40次築港線第1次調査検出の道路も同時期であり、砂丘稜線を軸とした街区の都市計画を一気に実施したものと思われる。基本となった軸線は12世紀中頃~後半の溝SD120がある。大庭康時氏が既に述べているが^(註2)、SD120と第62次・第45次調査地点出土のものを結んだ総延長400mの溝が想定され、これを基本として発展させたものと考えられている。また道路開設期で、本調査区の標高は3.1~3.5m、20m程南西の築港線第2次調査の同期遺構面がおむね3.3m、60m程南の築港線第1次調査の同期の道路面で4m前後、120m程西の40次調査で約1.8mと、垂直方向にもかなり地形に制約された都市計画である。

本調査区のI~XI期の道路・溝以外の遺構は総計103基で、構成はI期~16・II期~2・III期~12・IV期~3・V期~22・VI期~3・VII期~12・VIII期~6・IX期~19・X期~4・XI期~4基である。V期(21.4%)・IX期(18.4%)・I期(15.5%)の順で、V期の、道路開設から一世代後の14世紀中頃に最盛期を迎えている。遺物の量もこれを反映し、Tab. 1~20の11項目の中で最多が9項目、次点が2項目を占める。中世の中で第2のピークはI期の15世紀前半~中頃で、遺物量も次点が4項目、3位が3項目ある。第3の盛期は道路開設前のVII期である。全時期の中ではIX期の12世紀代が2番目に多く、仁平元(1151)年の博多人追補以前の宋人と後の平清盛による日宋貿易による繁栄の証拠と思われる。

中世博多の基幹道路を反映して出土した輸入陶磁器は他地点を圧倒する貴品が数多く、45の元様式青花瓶・2・31の磁州窯鉄絵・46の貼花竈文盤・128の百合口瓶・132の貼花香炉・266の龍飾香炉・414の天人像・435の水波双魚文碗・471の印花香炉・479・480・486の香炉・485・490・491の双耳不游環瓶・488の六棱花瓶・489の双耳花瓶・482の梅瓶・492の酒会瓶・136の珊瑚釉瓶・92・510の吉州窯天目・32・56・58・60・472・497・498の高麗李朝の象嵌青磁・30・507等のベトナム・タイ陶磁等、花瓶や香炉・茶器等、京都・鎌倉等で出土する様な奢侈品が目白押しである。また新安海底文物と共に通する陶磁が多く14・15世紀代の逸品である。元代の銅鏡3点の出土も注目に値する。

石製品・骨角製品からは製法・規格・未製品の出土と多数の中国錢の出土から貨幣経済の進展と相まった手工業者と工房の成立が推察される。石製品・土製品の中では、遊具として石球と瓦片が道路部からの总数の7~8割もの高率で出土している事が注目される。同時期の草戸千軒では、瓦玉は当該地が輸入陶磁が6割を占めることに対し土師質土器が6割を占め、また井戸や土壙から数十点集中出土し、石球は全く出土しない等、日宋元貿易・国内の文物の流通等で往来は頻繁であったと思われるが、当地との地域差が如実に現れており面白い在り方を示している。

9~11世紀代のX期の遺構は4基のみで3.9%と少ないが遺物としては越州窯系青磁・墨書き須恵器・土師器・円面鏡と官人色の強い遺物が目立つ。周辺からも帶金具・石帶・皇朝十二錢等が出土しており、鴻臚館の下級官衙的な施設が想定されている。540の獸形土製品は新羅焼の影響が考えられる。

(註1) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編「草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ」 1993

(註2) 大庭康時『聖福寺前一丁目2番地~中世博多における街区の研究(1)「法哈達」』2号 博多研究会 1993

(註3) 佐藤一郎『律令期の博多遺跡群』「法哈達」オ1号 博多研究会 1992

博多 47
—博多遺跡群第64次調査報告—

1995年（平成7年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大神一丁目8番1号
印刷 喜印刷株式会社
福岡市西区小糸四丁目5番42号